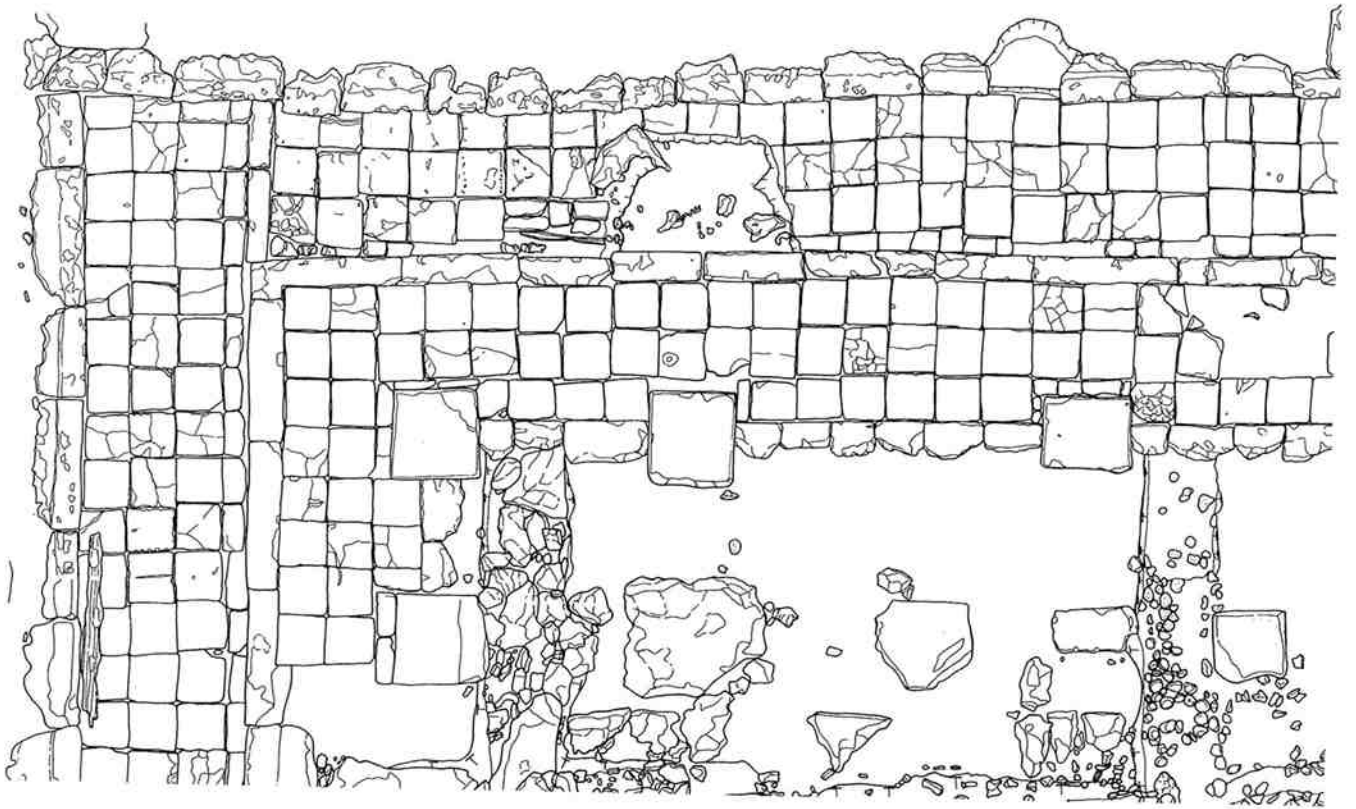


円覚寺跡

—遺構確認調査報告書—



龍淵殿基壇遺構北東部分 (1 : 40)

平成14(2002)年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター



丸覚寺跡周辺（国営沖縄記念公園事務所提供）



丸覚寺跡周辺（国営沖縄記念公園事務所提供）

巻首図版1 丸覚寺跡周辺（国営沖縄記念公園事務所提供）



その他の輸入陶磁器・表



その他の輸入陶磁器・裏



本土産陶磁器



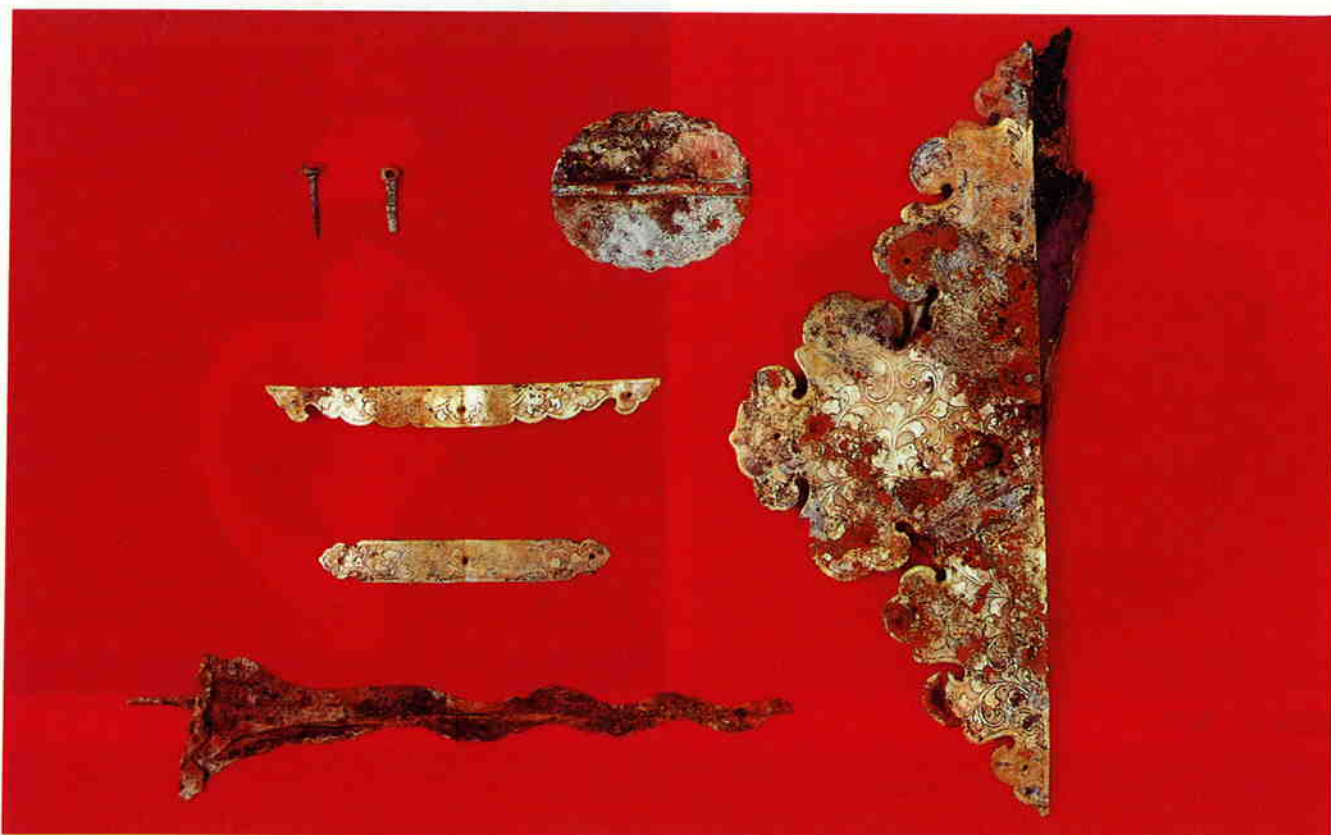
本土産色絵・沖縄産施釉陶器



沖縄産陶器



鬼瓦



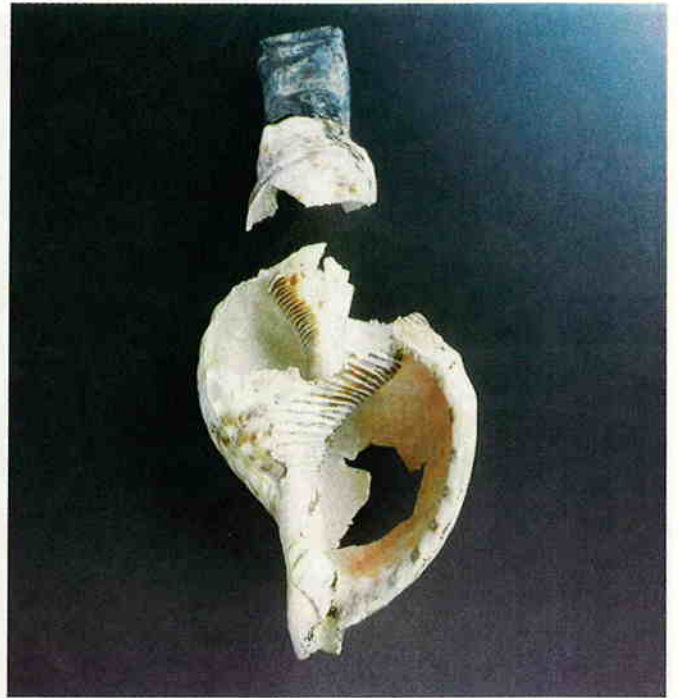
金属製品・表



金属製品・裏



金属製品（鑿子）



貝製品（法螺）



玉



木製品・漆製品

序

本報告書は平成9年度から13年度の5カ年間で実施した円覚寺跡の遺構確認調査の成果をまとめたものです。本発掘調査は平成9年度から11年度までは沖縄県教育委員会文化課が実施し、沖縄県立埋蔵文化財センターが開所したのに伴い、平成12年度からは当埋蔵文化財センターが継続して行い、報告書を刊行する運びとなりました。

本土復帰前から守礼門、園比屋武御嶽石門といった首里城周辺の整備事業は進められてきましたが、復帰後において実施された首里城並びに城郭等復元整備に伴って、より広い範囲での首里城周辺整備は進められております。このような公園整備の進行にともない、威容を誇った琉球王国の王城とその周辺が在りし日の姿を蘇らせつつあり、沖縄の観光名所のひとつとして多くの観光客が訪れるようになりました。

昭和43（1968）年には円覚寺の総門並びに放生池や放生橋が整備されましたが、境内の中心部については客土され旧琉球大学のグラウンドとして利用されていたこともあり未調査のままとなっております。

今回の遺構確認調査では、円覚寺の中心部をなしていた旧琉球大学のグラウンドの地下に残る遺構の確認が主たる目的でありました。発掘の結果『首里古地図』などの絵図資料や『球陽』や『使琉球録』に記載された円覚寺の姿とも整合できるほど良好な状態で建物遺構が検出でき、また、出土品も多岐にわたり、梵鐘や金細工などの寺院という特異な性格の遺跡であることを示すものや日用品類が得られ、旧円覚寺の姿を彷彿とさせるような成果を上げることができたと思います。

琉球王府の菩提寺であった円覚寺跡の発掘調査をまとめた本報告書が沖縄の歴史や首里城研究、琉球仏教史研究などの資料として活用されるとともに、文化財保護への理解を深めることにもつながれば幸いです。

末筆になりましたが、事業の開始から丁寧な指導を頂きました文化庁、また、現地調査においてご協力下さった首里城公園管理センター、国営沖縄記念公園事務所、発掘調査および資料整理の際にご指導、ご助言を賜りました諸先生方など、本事業を進めるにあたりご協力を賜りました関係各位に対し心から御礼申し上げます。

平成14年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所 長 知 念 勇

例 言

- 1、本書は平成9年度から平成13年度に実施した、円覚寺跡の遺構確認にかかる発掘調査の成果をまとめたものである。
- 2、調査は文化庁の補助事業として平成9年度から11年度までは沖縄県教育委員会文化課が、平成12年度と13年度は沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 3、資料整理作業は、平成9年度から11年度までは沖縄県教育委員会文化課が、平成12年度と13年度は沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 4、本書に使用した1/25000地形図は国土地理院発行の資料によった。
- 5、本書に表した高度値は海拔高である。
- 6、資料整理にあたり、下記の方々には各遺物の鑑定、または同定をお願いした。記して謝意を表したい。(五十音順)
 - 陶磁器
 - 大橋 康二氏 (佐賀県立九州陶磁文化館)
 - 金城 亀信氏 (沖縄県教育委員会文化課)
 - 渡辺 芳郎氏 (鹿児島大学)
 - 瓦
 - 池田 榮史氏 (琉球大学)
 - 上原 静氏 (沖縄国際大学)
 - 金属製品
 - 久保 智康氏 (京都国立博物館)
 - 石器
 - 神谷 厚昭氏 (真和志高等学校)
- 7、本書の編集は比嘉優子の協力を得て山本正昭が行った。
校正：山本正昭・比嘉優子・大城勝江・照屋利子
- 8、各章の執筆は下記のように分担した。

盛本 勲	第I章第1節、第III章
城間 肇	第III章
山本正昭	第I章第2節、第II章、第III章、第IV章、V章第1、3、4、5、7、15、23、24節、第VI章、附偏
比嘉優子	第V章第11、12、18、19、20、21、22、25節
安座間 充	第V章第2、6、13、14節
羽方 誠	第III章、第V章第8、9節
喜多亮輔	第V章第10節
森田直哉	第V章第16節
藤崎 京	第V章第17節
- 9、本書に掲載された写真は盛本勲、城間肇、山本正昭、大島誠、羽方誠、森田直哉、矢沢秀雄が、出土遺物は宮崎典子、光嶋香の撮影によるものである。
- 10、本書に掲載した円覚寺跡遺構確認調査に関する写真、実測図などの記録は全て沖縄県立埋蔵文化財センターにて保管してある。
- 11、発掘調査・資料整理などの調査体制については第I章の第2節に記した。

目次

卷首図版	
序	
例言	
報告書抄録	
第I章 調査に至る経緯	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	1
第II章 位置と環境	
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第III章 調査経過	7
第IV章 層序と遺構	
第1節 層序	13
第2節 遺構	17
第V章 出土遺物	
第1節 青磁	41
第2節 白磁	46
第3節 中国産染付	49
第4節 白地鉄絵	57
第5節 褐釉陶器	57
第6節 タイ産半練	61
第7節 その他の輸入陶磁器	61
第8節 本土産陶磁器	64
第9節 沖縄産施釉陶器	74
第10節 沖縄産無釉陶器	81
第11節 陶質土器	86
第12節 瓦質土器	88
第13節 土器	90
第14節 土製品	90
第15節 瓦	92
第16節 埴	97
第17節 円盤状製品	100
第18節 石器・石製品	101
第19節 玉	104
第20節 骨製品	105
第21節 貝製品	105
第22節 煙管	105
第23節 金属製品	107
第24節 銭貨	113
第25節 木製品・漆製品	116
第26節 貝類遺存体	119
第27節 節足・脊椎動物遺存体	123
第VI章 総括	125
附編 末吉幸太郎氏所蔵 円覚寺跡仏具資料について	203

挿 図 目 次

第1図	円覚寺の位置図 (1)	5
第2図	円覚寺の位置図 (2)	6
第3図	遺構全体図	9
第4図	調査範囲	11
第5図	下層遺構位置図	12
第6図	仏殿中央東西トレンチ南壁	14
第7図	仏殿中央南北トレンチ東壁	14
第8図	獅子窟基壇南面	15
第9図	獅子窟基壇西面	15
第10図	獅子窟石牆間畦北面	15
第11図	G-26グリット東面・南面	16
第12図	庭園地区東西トレンチ畦東面	16
第13図	庭園地区南北トレンチ西面	16
第14図	上：獅子窟東辺基壇・下：獅子窟北辺基壇	18
第15図	龍淵殿西辺基壇基部	21
第16図	庭園獅子窟間石牆	23
第17図	龍淵殿地区石列 (3)	25
第18図	庭園地区石列 (5・6・7) 石積み (1)	25
第19図	龍淵殿地区南側基壇確認トレンチ	27
第20図	龍淵殿地区方形石積み	29
第21図	庫裏平面図	31
第22図	井戸地区平面図	31
第23図	三門及び鐘樓西側溝平面図	31
第24図	鐘樓南側溝平面図	32
第25図	仏殿平面図	32
第26図	龍淵殿平面図	33
第27図	庭園・獅子窟平面図	34
第28図	左脇門石畳平面図	34
第29図	庫裏地区方形石組遺構石積み (2)	35
第30図	井戸地区石列 (9・10)	35
第31図	石積み (5) 溝 (1) 集積 (13) 龍淵殿地区石列 (4) 石積み (3)	35
第32図	遺構断面図 (1)	36
第33図	遺構断面図 (2)	37
第34図	石牆平面模式図	39
第35図	石牆立面図 (1)	39
第36図	石牆立面図 (2)	40
第37図	青磁 (1)	44
第38図	青磁 (2)	45
第39図	白磁	48
第40図	染付 (1)	53
第41図	染付 (2)	54
第42図	染付 (3)	55
第43図	染付 (4)	56
第44図	中国産白地鉄絵・中国産褐釉陶器	58
第45図	タイ産褐釉陶器	59
第46図	タイ産半練	61
第47図	その他の輸入陶磁器 (1)	61
第48図	その他の輸入陶磁器 (2)	63
第49図	本土産陶磁器 (1)	64
第50図	本土産陶磁器 (2)	70
第51図	本土産陶磁器 (3)	71
第52図	本土産陶磁器 (4)	72
第53図	本土産陶磁器 (5)	73
第54図	沖縄産施釉陶器	78

第55図	沖縄産無釉陶器 (1)	81
第56図	沖縄産無釉陶器 (2)	85
第57図	陶質土器	87
第58図	瓦質土器 (1)	88
第59図	瓦質土器 (2)	89
第60図	土器・土製品	91
第61図	瓦 (1)	94
第62図	瓦 (2)	95
第63図	瓦 (3)	96
第64図	埴	99
第65図	石器・石製品	103
第66図	玉・骨製品・貝製品・煙管	106
第67図	金属製品 (1)	111
第68図	金属製品 (2)	112
第69図	銭貨	115
第70図	木製品	117
第71図	地質図	127
第72図	首里城平面図	127
第73図	「首里城付近ノ図」首里古地図模写	127
第74図	円覚寺旧状想定図	129
第75図	円覚寺平面図	130

図 版 目 次

図版1	龍淵殿鬼瓦	91
図版2	円覚寺開山芥隱和尚大禪師位牌	102
図版3	円覚寺放生池 石橋親柱	102
図版4	円覚寺釣灯籠	108
図版5	崇元寺正廟 (本殿) 内部	110
図版6	表門・扉・尚侯爵邸	110
図版7	上：龍淵殿扉透彫 下：左・牡丹文透彫 右・羽目板椀 (牡丹鳳凰文) 部分	118
図版8	沖縄戦焼失直前の円覚寺周辺	133
図版9	上：発掘調査前 (南東から) 下：調査区全景 (東から)	134
図版10	遺構 (1)	135
図版11	遺構 (2)	136
図版12	遺構 (3)	137
図版13	遺構 (4)	138
図版14	遺構 (5)	139
図版15	遺構 (6)	140
図版16	各地区土層 (1)	141
図版17	各地区土層 (2)	142
図版18	遺構検出状況 (1)	143
図版19	遺構検出状況 (2)	144
図版20	遺構検出状況 (3)	145
図版21	遺構検出状況 (4)	146
図版22	遺構検出状況 (5)	147
図版23	遺構検出状況 (6)	148
図版24	遺構検出状況 (7)	149
図版25	遺構検出状況 (8)	150
図版26	遺構検出状況 (9)	151
図版27	遺構検出状況 (10)	152
図版28	遺構検出状況 (11)	153
図版29	遺構検出状況 (12)	154
図版30	遺構検出状況 (13)	155
図版31	遺構検出状況 (14)	156

図版32	遺構検出状況 (15)	157
図版33	遺構検出状況 (16)	158
図版34	遺構検出状況 (17)	159
図版35	青磁 (1)	160
図版36	青磁 (2)	161
図版37	白磁	162
図版38	染付 (1)	163
図版39	染付 (2)	164
図版40	染付 (3)	165
図版41	染付 (4)	166
図版42	染付 (5)	167
図版43	中国産白地鉄絵・中国産褐釉陶器	168
図版44	タイ産褐釉陶器・タイ産半練	169
図版45	その他の輸入陶磁器	170
図版46	本土産陶磁器 (1)	171
図版47	本土産陶磁器 (2)	172
図版48	本土産陶磁器 (3)	173
図版49	本土産陶磁器 (4)	174
図版50	沖縄産施釉陶器 (1)	175
図版51	沖縄産施釉陶器 (2)	176
図版52	沖縄産施釉陶器 (3)	177
図版53	沖縄産施釉陶器 (4)	178
図版54	沖縄産無釉陶器 (1)	179
図版55	沖縄産無釉陶器 (2)	180
図版56	沖縄産無釉陶器 (3)	181
図版57	陶質土器	182
図版58	瓦質土器	183
図版59	土器・土製品	184
図版60	瓦 (1)	185
図版61	瓦 (2)	186
図版62	瓦 (3)	187
図版63	埴	188
図版64	円盤状製品	189
図版65	硯・石器・石造製品	190
図版66	石製品 (礎石)	191
図版67	玉・骨製品・貝製品・煙管	192
図版68	金属製品 (1)	193
図版69	金属製品 (2)	194
図版70	金属製品 (3)	195
図版71	銭貨	196
図版72	木製品・漆製品	197
図版73	貝 (巻貝)	198
図版74	貝 (二枚貝)	199
図版75	骨 (1)	201
図版76	骨 (2)	202

表 目 次

第1表	遺構変遷表	30
第2表	遺構出土の遺物一覧	38
第3表	青磁観察一覧 (1)	41
第4表	青磁観察一覧 (2)	42
第5表	青磁観察一覧 (3)	43
第6表	白磁観察一覧 (中国産・ベトナム産)	47
第7表	中国産染付観察一覧 (1)	49
第8表	中国産染付観察一覧 (2)	50
第9表	中国産染付観察一覧 (3)	51

第10表	中国産染付観察一覧 (4)	52
第11表	中国産褐釉陶器観察一覧	57
第12表	タイ産褐釉陶器観察一覧	59
第13表	中国産褐釉陶器出土状況一覧	60
第14表	タイ産褐釉陶器出土状況一覧	60
第15表	その他の輸入陶磁器観察一覧	62
第16表	本土産陶磁器観察一覧 (白磁・染付)	65
第17表	本土産陶磁器観察一覧 (色絵・陶器)	66
第18表	本土産陶磁器観察一覧 (陶器・印判手)	67
第19表	本土産染付出土状況一覧	68
第20表	本土産染付印判手出土状況一覧 (1)	68
第21表	本土産染付印判手出土状況一覧 (2)	68
第22表	本土産染付印判手出土状況一覧 (3)	68
第23表	本土産染付印判手出土状況一覧 (4)	69
第24表	本土産クロム青磁染付出土状況一覧 (銅版・ ゴム版転写)	69
第25表	沖縄産施釉陶器観察一覧 (1)	74
第26表	沖縄産施釉陶器観察一覧 (2)	75
第27表	沖縄産施釉陶器観察一覧 (3)	76
第28表	沖縄産施釉陶器観察一覧 (4)	77
第29表	沖縄産施釉陶器出土状況一覧	79
第30表	沖縄産無釉陶器観察一覧 (1)	82
第31表	沖縄産無釉陶器観察一覧 (2)	83
第32表	沖縄産無釉陶器出土状況一覧	84
第33表	陶質土器出土状況一覧	86
第34表	瓦質土器出土状況一覧	88
第35表	土器観察一覧	90
第36表	軒丸瓦観察一覧	93
第37表	軒平瓦観察一覧	94
第38表	埴出土状況一覧	98
第39表	円盤状製品観察一覧	100
第40表	円盤状製品大きさ別出土状況	100
第41表	石器・石製品観察一覧	101
第42表	石器・石製品出土一覧	102
第43表	玉出土法量一覧	104
第44表	骨製品法量一覧	105
第45表	煙管法量一覧	105
第46表	釘出土状況一覧	110
第47表	銭貨法量一覧 (1)	113
第48表	銭貨法量一覧 (2)	114
第49表	木製品・漆製品観察一覧	116
第50表	貝類出土状況 (巻貝)	119
第51表	貝類出土状況 (二枚貝)	121
第52表	サカナ出土一覧	123
第53表	ニワトリ・トリ出土一覧	123
第54表	イヌ出土一覧	123
第55表	ネコ出土一覧	123
第56表	ヤギ出土一覧	123
第57表	ブタ出土一覧	123
第58表	イノシシ・ブタ出土一覧	123
第59表	ウマ出土一覧	124

附 編

図版1	末吉氏所蔵仏具資料	206
図版2	末吉氏所蔵仏具資料	207

報 告 書 抄 録

ふりがな	えんかくじあと							
書名	円覚寺跡							
副書名	遺構確認調査報告書							
巻次								
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第10集							
編著者名	山本正昭・比嘉優子・盛本勲・羽方 誠・森田直哉・安座間充・城間肇・藤崎京・喜多亮輔							
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町上原 193-7 TEL 098-835-8752							
発行年月日	平成14 (2002) 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。'。"	東経 。'。"	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
えんかくじあと 円覚寺跡	おきなわけん なほし 沖縄県那覇市 しゅりとうのくら 首里当蔵 2-1	那覇市 47201	『那覇市 歴史地図』 (1986) 207. 円覚寺	26度	127度	1997.4~ 2001.6	3,000㎡	史跡整備
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
円覚寺跡	寺院跡	グスク時代 く 近代		石牆 石敷き遺構 石畳 建物跡 庭園跡 溝		青磁 白磁 染付 本土産陶磁器 沖縄産無釉陶器 沖縄産施釉陶器 褐釉陶器 瓦質土器 陶質土器 土器 瓦 埴 円盤状製品 石造製品 玉類 貝製品 骨製品 銭貨 木製品 漆 金属製品		

第 I 章 調査に至る経緯

第 1 節 調査に至る経緯

国指定史跡円覚寺跡は琉球王統・第二尚氏の菩提寺として、弘治5・尚真16(1492)年に、尚真王が父：尚円王の霊を祀るために建立されたと伝えられる琉球における臨済宗の総本山であったと共に、最大の寺院であった。

その創建史や構造、伽藍配置等については、次章以後において詳述しているが、境内には龍淵殿をはじめ、仏殿、御照堂、獅子窟、鐘楼等の藪が聳え、その伽藍配置等をも含めた建物群の学術的な価値等から昭和8(1933)年には国宝(建造物)に指定され、国家的文化遺産となっていた。

しかし、去る沖縄戦で南接する首里城下に日本陸軍の沖縄総司令部壕がおかれたこともあって、首里城をはじめとした一帯は集中砲火を浴び、当該寺跡も境内を圍繞する石牆の一部を残し、建物等は焼失・灰燼に帰してしまい、国宝指定も解除となった。

さらには、この戦災に拍車をかけるように、戦後の昭和25(1950)年には首里城内を中心とした一帯に旧琉球大学が設置され、当該寺跡内には当初教官宿舍が、後に境内背後の小高い丘陵を削平し、埋め込んでグラウンドが建設されるなど、周辺地形の改変までもを含めて著しい景観の変貌を遂げてしまった。

琉球王国時代の歴史、文化を語るうえでシンボリック的存在にある首里城一帯の文化遺産の破壊や周辺地形の変貌ぶりに県民は心を痛め、旧琉球政府文化財保護委員会等が中心となり、その修復、復元に尽力し、昭和30~31(1955~56)年の園比屋武御嶽石門の復元を嚆矢に、守礼門、龍淵橋及び円鑑地、弁財天堂、天女橋等の修復及び復元整備が行われてきた。

この所謂戦災文化財の復元整備の延長上に、昭和47(1972)年の沖縄県の本土復帰直後から歓会門及び久慶門等の首里城跡の復元整備が着手され、昭和59(1984)年に一帯から旧琉球大学が移転完了するに伴って、内郭(4.2ha)、城郭外(14ha)を国営・県営都市公園整備事業として整備が進められ、今日に至っている。

しかし、当該寺跡に関しては、旧琉球大学のグラウンドとなっていたこともあって、昭和43(1968)年に総門、放生池及び放生橋(池に架かる橋)、さらには放生橋から三門に上がる石段等が整備されているのみで、その主たる部分は未整備の状態にある。

首里城跡をはじめ、周辺の文化遺産の整備が進行し、徐々にではあるが往時の歴史的景観を取り戻しつつあるなかで、これらとの景観的調和を図るうえからも、当該寺跡の主要部分の整備を望む県民の声が高まってきた。

県教育委員会(所管：文化課)としては、このような県民のニーズに答えるためにも、地下遺構の保存状態等の確認調査が必要であるとの判断から、平成9(1997)年度から同13(2002)年度までの5ヵ年事業として、国(文化庁)の補助を得て「円覚寺跡遺構確認調査」を実施することになった。

第 2 節 調査体制

この発掘調査は以下の体制で実施した。

事業責任者	安室 肇 (沖縄県教育委員会教育長、1997~98年度)
	翁長 良盛 (沖縄県教育委員会教育長、1999~2000年度)
	津嘉山朝祥 (沖縄県教育委員会教育長、2001年度)
事業 総括	大城 将保 (沖縄県教育委員会文化課課長、1997~98年度)
	當眞 嗣一 (沖縄県教育委員会文化課課長、1999~2001年度)
	知念 勇 (沖縄県立埋蔵文化財センター所長、2000~01年度)
	日越 国昭 (沖縄県教育委員会文化課課長補佐、1997年度)
	當眞 嗣一 (沖縄県教育委員会文化課課長補佐、1998年度)
	名嘉 政修 (沖縄県教育委員会文化課課長補佐、1999年度)
	千木良芳範 (沖縄県教育委員会文化課課長補佐、1999~2000年度)
	上原 静 (沖縄県教育委員会史跡整備係長、1997~98年度)

盛本 勲 (沖縄県教育委員会史跡整備係長、1999年度)
 " (" 記念物係長、2000年度)
 島袋 洋 (沖縄県立埋蔵文化財センター調査課長、2000～01年度)
事務 業務 島袋 正都 (沖縄県教育委員会文化課管理係主任、1997年度)
 横山 さゆり (沖縄県教育委員会文化課管理係主任、1999年度)
 知念 廣義 (沖縄県立埋蔵文化財センター副所長兼庶務課長、2000～01年度)
 城間 千賀 (沖縄県立埋蔵文化財センター庶務課主事、2000～01年度)
 上原 浩 (沖縄県立埋蔵文化財センター庶務課主事、2000～01年度)

調査及び資料整理指導 安里 進 (浦添市教育委員会文化課課長・考古学)
 池田 榮史 (琉球大学法文学部教授・考古学)
 上原 静 (沖縄国際大学文学部専任講師・考古学)
 大橋 康二 (佐賀県立九州陶磁文化館副館長・考古学)
 神谷 厚昭 (沖縄県立真和志高等学校教諭・地質学)
 久保 智康 (京都国立博物館主任研究官・金工学)
 金城 亀信 (沖縄県教育委員会文化課主任・考古学)
 渡辺 芳郎 (鹿児島大学人文学部助教授・考古学)

発掘担当 盛本 勲 (沖縄県教育委員会文化課史跡整備係主任、1997～1998年度)
 城間 肇 (沖縄県教育委員会文化課史跡整備係臨時任用職員、1999年度)
 山本 正昭 (沖縄県立埋蔵文化財センター臨時任用職員、2000年度)
 羽方 誠 (沖縄県立埋蔵文化財センター調査課専門員、2001年度)

発掘調査員 大島 誠 (沖縄県立埋蔵文化財センター調査課嘱託職員、2000年度)
 森田 直哉 (沖縄県立埋蔵文化財センター調査課臨時任用職員、2001年度)
 矢沢 秀雄 (沖縄県立埋蔵文化財センター調査課嘱託職員、2001年度)

資料 整理 山本 正昭 (沖縄県立埋蔵文化財センター臨時任用職員、2000年度)
 " (" 調査課嘱託職員、2001年度)

発掘調査作業員 (五十音順)

安次嶺政寿、安次富マサ子、上江洲春子、上間清美、大宜見より子、大城フサ子、大城洋子、太田吉光、嘉味田千枝子、喜舎場盛安、金城一哲、金城順子、幸喜 淳、幸地ヨシ子、小橋川幸子、呉屋良子、呉屋光子、島袋文子、玉城史子、玉城利江子、津波古美津江、照屋栄子、桃原佐恵美、仲間末子、中原ミツ子、永山ルミ子、中村フサ子、永吉弘子、比嘉清恵、比嘉 剛、比嘉洋子、宮城澄子、諸見里幸子、山内利江子

資料整理作業員 (五十音順)

1997年度 垣花 中、佐藤奈穂美、謝花優子、高崎柳子
 2000年度 上江洲大樹、喜屋武盛陽、桑江武士、當眞 彩、中松雪乃、宮里竹織、幸地真弓
 2001年度 伊集ゆきの、上原美穂子、岡田恵子、親泊晶子、照屋利子、仲池まゆみ

調査協力者 (五十音順)

石川逢仁、上里隆史、上原園子、大城勝江、大城宜英、大城慧、岡村綾子、桂辰哉、金城敬子、城間富吉、城間千鶴子、佐伯信之、田場直樹、友利映子、仲宗根三枝子、西銘章、比嘉なおみ、比嘉優子、外間瞳、真栄平房敬、屋嘉比朝勇、屋比久益貞、瀬戸哲也

第Ⅱ章 位置と環境

第1節 地理的環境

円覚寺跡は、那覇市街北東部の琉球石灰岩から形成される首里台地に位置している。首里台地は北方に標高100～200mの末吉山から虎頭山、弁が嶽に至る丘陵を頂き、南方に金城川が流れる凹地、さらには識名丘陵、東方は南風原町との境界を流れるナゲーラ川、西方は真嘉比川に囲まれ、他地域とは隔絶されている。このような自然の障壁に囲まれた首里台地の最高部には首里城が築かれ、円覚寺跡はその北側に隣接する谷地に立地している。円覚寺跡は首里にある寺院の中で最も首里城に隣接していることから、首里王府と政治的、儀礼的な関わりが密接にあったことをうかがい知ることができる。現在の地籍は那覇市首里当蔵2丁目1番地となっている。

戦後、周辺環境は大幅に改変されて現在に至るがかつての様子が近世期に描かれた「首里古地図（1700年代初）」（第73図）に見て取ることができる。円覚寺の東隣には「円覚寺松尾」と称する琉球松が植栽された小山と更に東側には「蓮小堀（りんぐむい）」と称する池が、南側に隣接する首里城との間には首里城歎会門と首里赤田を結ぶ「城の下（ぐすくのしちや）」と称される石畳道がかつて配置され、西側には円鑑池が、北西側には国学、孔子廟が隣接していた。さらに円覚寺の北東側一帯には廣徳寺、奥禅寺、天王寺といった寺院が集中して配置されていることから、近世期の円覚寺北東側はさながら寺町的な景観を呈していたものと考えられる。近代に入ると北側に沖繩師範学校、工業学校が設置されたものの、旧状は比較的良好に保っていたとされる。しかし、沖繩戦による破壊と戦後の琉球大学設置により円覚寺、首里城をはじめとする史跡が破壊され、そして周辺地域の都市化によって蓮小堀は埋め立てられ、北東部の寺院は住宅地に変貌した。現在は円鑑池、龍潭がある東側を除いては旧状はほぼ留めていない。

第2節 歴史的環境

円覚寺が立地する首里城城下の起源は定かではない。しかし首里城の過去における発掘調査から、14世紀には基壇建物が存在し、首里城の東側（現首里杜館）には14世紀後半頃の集落が見られることから（沖縄県教育委員会2000）、14世紀段階には首里城とそれに伴う城下集落が出現していたことが想定される。1429年の尚巴志による三山統一で初めて沖縄本島内に統一政権が樹立され、その中心地を首里とした。しかし政権内部が脆弱であることによってわずか30年弱で金丸（後の尚円：第二尚氏初代王）に政権は奪われてしまう。政権が安定するのは第二尚氏王統第三代尚真王が即位する15世紀後半以降のことであり、国内における内政改革並びに首里・那覇周辺の整備を積極的に行っていくようになるもこの頃である。

他方で、14世紀後半頃から日本本土の禅宗僧が明や朝鮮との通交を仲介するようになり、15世紀前半から中頃にかけて禅宗寺院の建立が相次いだ。中継貿易が琉球王国にとって大きな王府財源となっていたために、それを円滑に進めていくための禅宗僧の確保、それに伴う寺院建立は必然の成り行きであったといえる。15世紀後半に禅宗僧を外交担当とする対日貿易の体制も整備されていくと、琉球王府による仏教政策も質的充実が図られていった。と共にその禅宗僧の受け皿として天界寺や天王寺のような大規模寺院が造営され、更なる海外交易の拡充が行われていくようになる。このような状況下で円覚寺は1492年に竣工され、約三年という大事業の末に1494年、七堂伽藍が完備した禅宗寺院として完成した。

円覚寺伽藍群は『琉球国由来記』（1703年）によると広範囲に地ならしを行い、瓦を造って堂宇に葺いたとあり、建物の下部構造には礎石・基壇を採用するという当時としては画期的な土木技術を採用していた。因みに首里城正殿が瓦葺きになったのは1670年であり、円覚寺伽藍群は最新の建築技術をもって建造されたことがわかる。また、天界寺僧周雍が1497年に撰文した『円覚禅寺記碑』には課役を命じたわけでもなく貴賤老若が集まって創建作業に従事したという美辞麗句で綴られている。

円覚寺の開山住持は京都五山の別格南禅寺の住持であった芥隠上人とし山号を「天徳山」とした。『球陽』には仏殿、荒神堂、寢室、方丈、仏殿、法堂、三門、両廊及び僧坊、厨庫、浴室が創建当初の建物として記載され、沖繩戦に至るまで琉球王国内で最大規模を有する寺院として約450年間続いていくこととなる。創建当年には御照堂が建てられ、それを第二尚氏の宗廟とし、以降歴代王の位牌は円覚寺に祀られるようになる。1496年に鐘楼が、1498年に放生池及び放生橋が築造される。創建当初の様子に関しては『使琉球録』（1534年）に記載されて

いる。そこには①正殿（仏殿）の規模は5間、②正殿内部は仏像が1座安置され、左右には経典が数千巻納められている、③仏殿天井には板が張られそこには五彩の絵が描かれ、床には筵が敷かれている。④仏殿外には小さい池を掘り、怪石を飾っている、とある。それらは「廣大にして壯麗であり、王宮に垂ぐ」と明正使陳侃が報告している。この尚真王による円覚寺の整備を称えて1509年建立の「百浦添之欄干之銘文」の第一条には「仏を信じて像を造り、寺を建てて金を布き、仏閣、僧坊、経殿、鐘楼、甍を連ね棟を接し、輪奐美を兼む」と王徳のひとつとして記されている。なお、この円覚寺創建以降も玉陵（1501年）、円鑑池（1502年）、園比屋武御嶽石門（1519年）の造営、真珠道の整備（1522年）、首里城南側外郭拡張（1546年）と首里周辺の整備が断続的に行われていく。

その後、16世紀になると琉球王国による東アジア交易の衰退と共に国内の寺院が数多く廃されていくが、円覚寺は1571年に御照堂が加建、1588年には方丈、大殿、三門等が、1596年には法堂（仏殿？）が修復されていることから国王の菩提寺として王府の厚い庇護下にあったことが解る。また、首里における士族子弟の教育施設としても利用されていたことから王府経営の教育施設としても機能していた。

薩摩侵入時には焼失を免れ、近世に入っても王府から60石（1695年には100石に加増）の知行が与えられている。これは琉球王国内にある寺院の中では最も石高が高く、円覚寺創建以来から王府内で最も格式ある寺院として位置付けられている。

このような王府の庇護によって17世紀以降も建物の修復が繰り返される一方で1721年に大殿（戦前まであった龍淵殿に相当）が失火により焼失するという惨事に見舞われる。当時の住持覚翁上人が責を問われて八重山へ流刑という災難に遭うものの同年に大殿（龍淵殿）が再建される。その際、歴代国王の位牌配置を仏式に変更したり、仏像の置換え等、堂内部の改変を行っている。以降も1728年に獅子窟、御照堂が小堂に改築1744年には鐘楼、亭寮、照堂寮といった建物の移築、修復が行われていることから、近世を通して王府の篤い庇護下にあったことがこれらの建物の再建、修復から解る。

近代に入ると、琉球処分後の六年後の明治17（1884）年に王府管轄から尚氏の私寺に移管される。しかし尚氏に関わる王府儀礼そのものは沖縄戦直前まで執り行われていた。昭和8（1933）年には総門、放生池、三門、仏殿、鐘楼、獅子窟、龍淵殿が旧国宝に指定されるが、昭和20（1945）年の沖縄戦によって全ての建物が焼失した。戦後は昭和23（1948）年に開学した琉球大学の教員官舎が建てられ、基壇や石畳といった遺構が破壊若しくは地下に埋蔵された。昭和43（1968）年に旧琉球政府文化財保護委員会によって総門、左脇門の復元、放生池の修復が行われるものの、かつて仏殿、龍淵殿といった伽藍群が建てられていた場所は昭和40（1965）年頃に琉球大学のグラウンドとして再び造成される。

一方で昭和47（1972）年に放生橋と昭和53（1978）年に前鐘、中鐘、楼鐘が国指定重要文化財となり、木像白象及び趣意書、放生池石橋勾欄、総門が県指定有形文化財となっている。

昭和59（1984）年には琉球大学キャンパスが首里城及びその周辺から西原町字千原への移転が完了したのに伴って、円覚寺跡一帯は県営公園に位置付けられ、首里城を軸にした復元整備事業に付随するかたちで整備が本格的に始動している。

<参考文献>

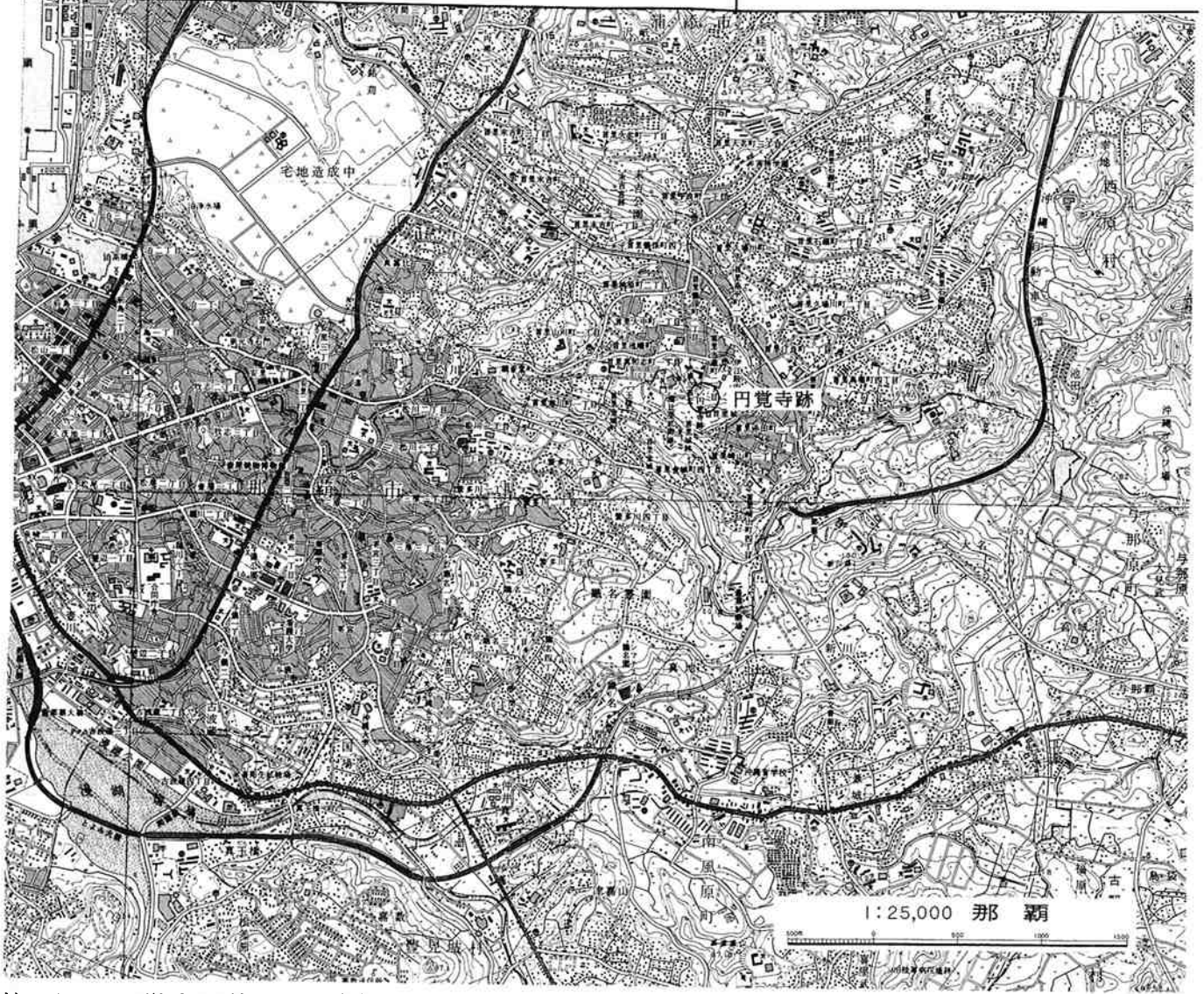
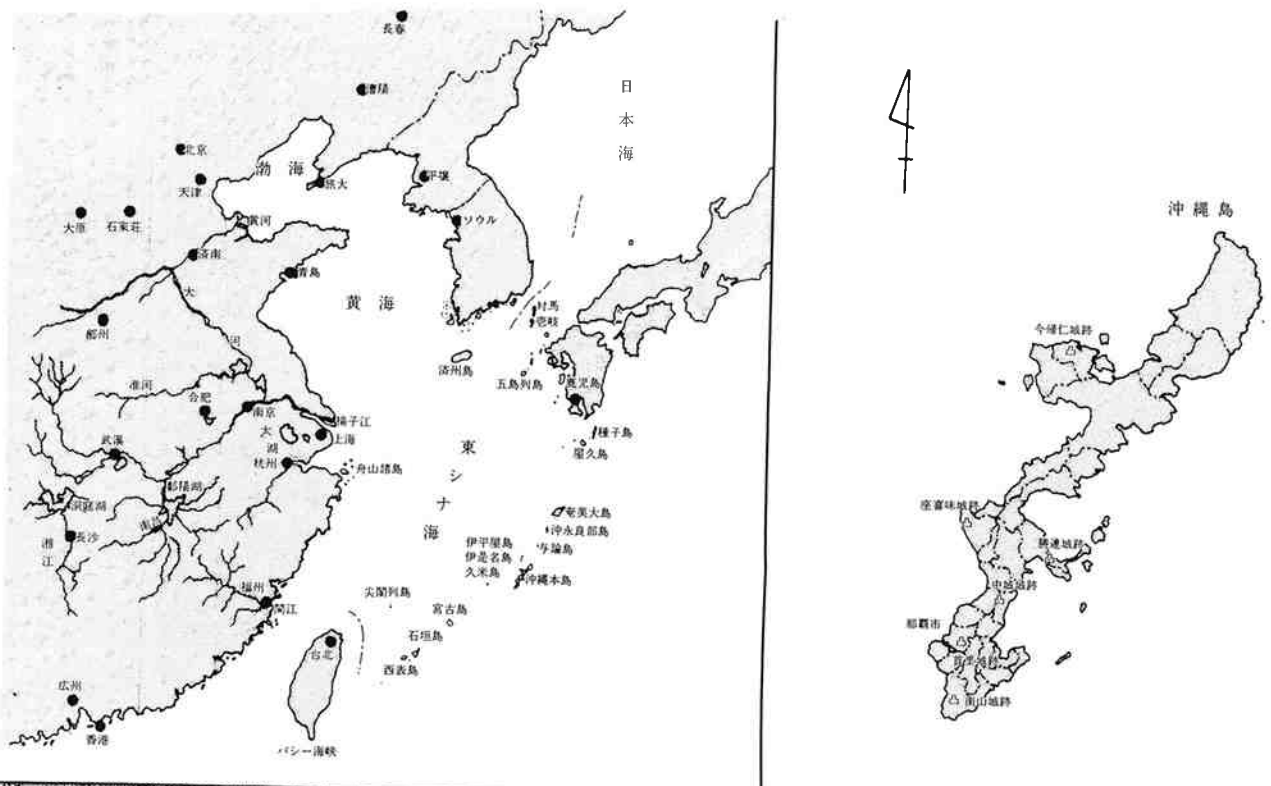
真栄平房昭「円覚寺」『角川日本地名大辞典47 沖縄』角川書店

当真嗣一、上原 静「首里城正殿の調査」『文化課紀要』第4号 沖縄県教育委員会 1987

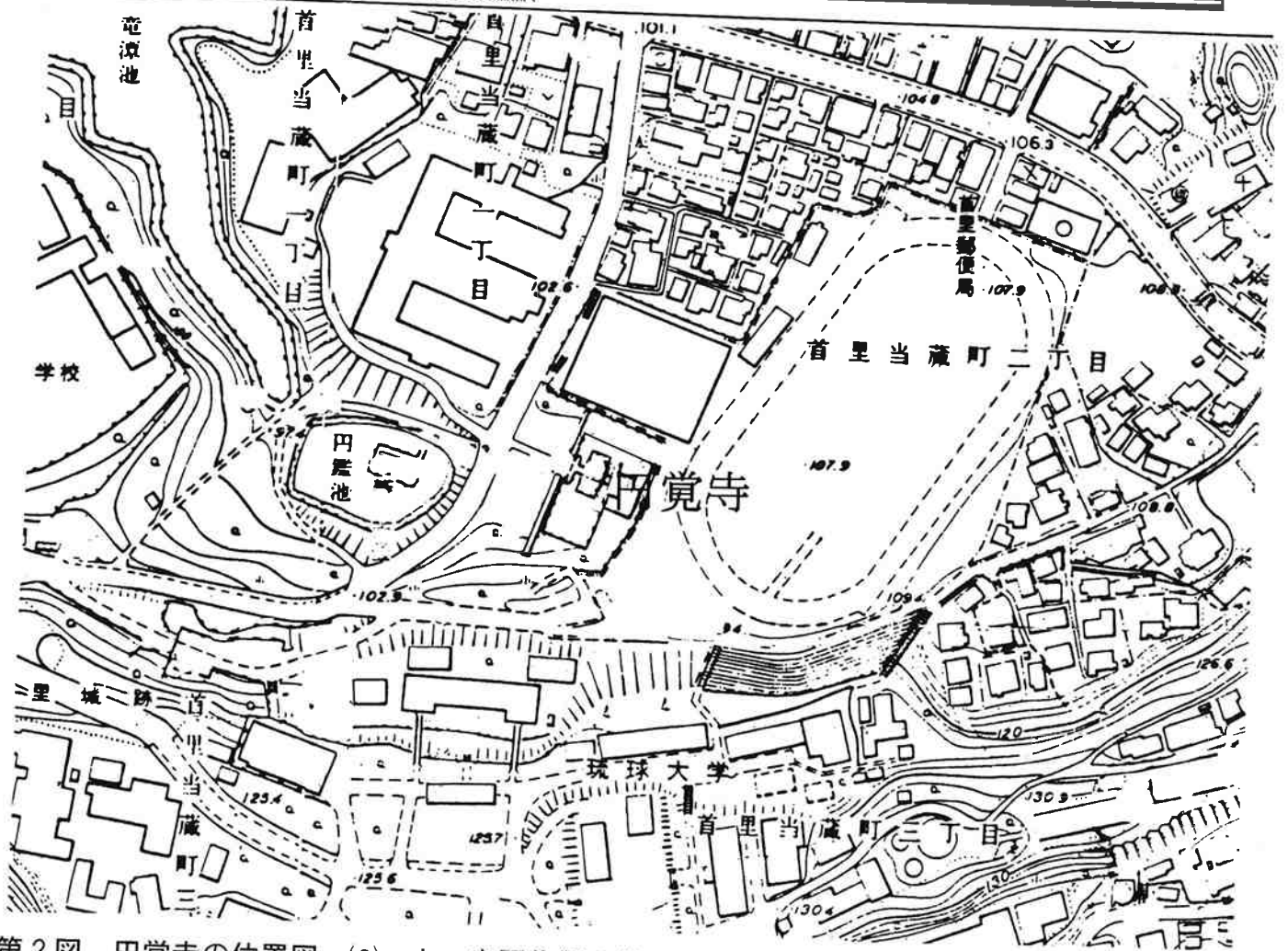
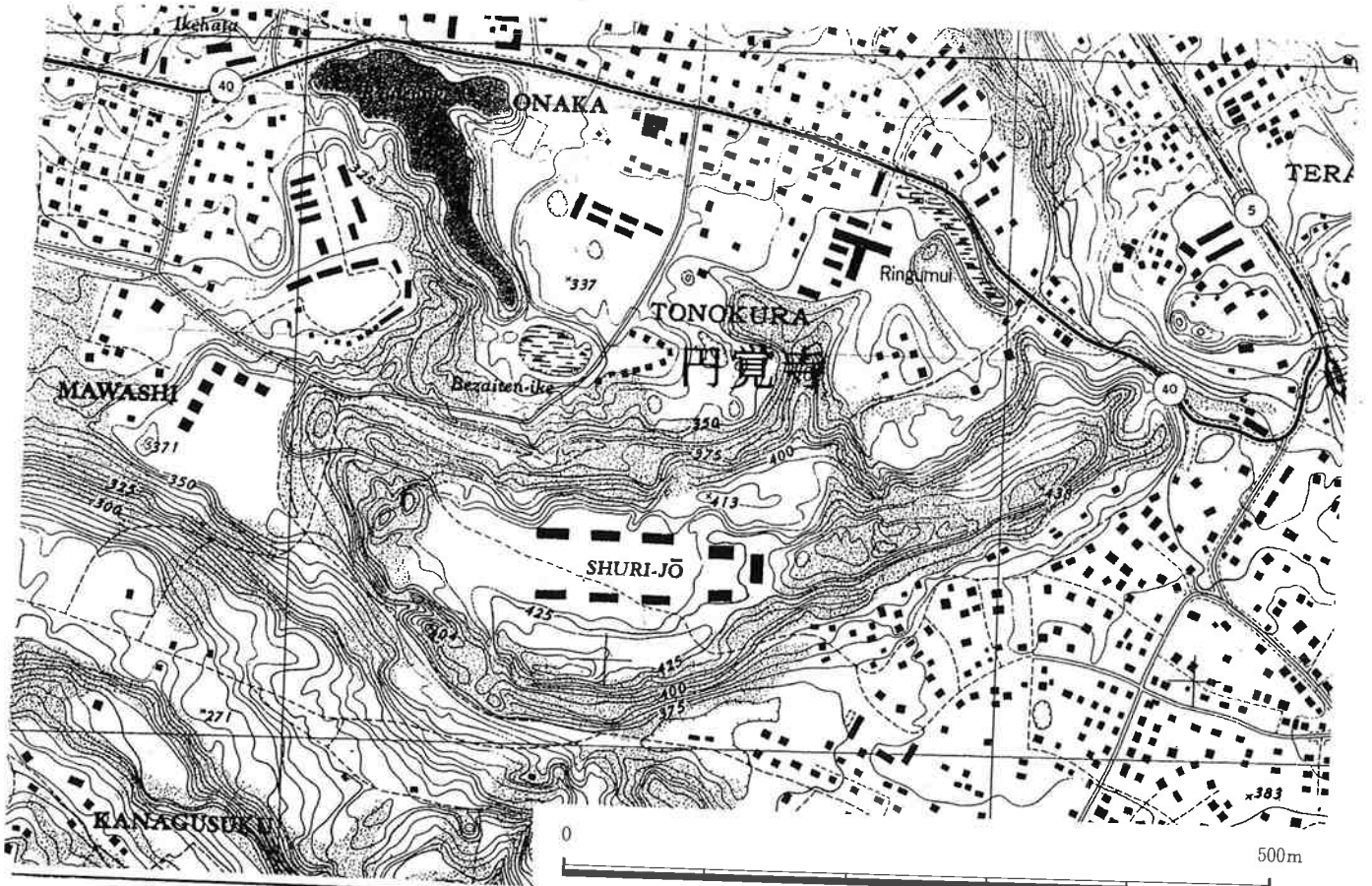
沖縄県教育委員会「旧円覚寺美術工芸関係資料調査報告書」『沖縄県文化財調査報告書』第140集 1999

那覇市教育委員会「天界寺跡」『那覇市文化財調査報告書』第44集 2000

知名定寛「古琉球王国と仏教」『南島史学』第56号 南島史学会 2000



第1図 円覚寺の位置図 (1)



第2図 円覚寺の位置図 (2) 上：米軍作製の首里周辺 (1945年頃)
 下：那覇市歴史地図より (1984年当時の状況)

第三章 調査経過

第I章 調査の経緯でも述べたように、当該史跡は戦災により焼失したうえ、戦後の旧琉球大学整備に伴った教員官舎及びグラウンド建設により破壊された石牆や遺構の保存状態や伽藍配置の確認等に主眼をおいて調査を実施した。

以下に、各年度ごとの調査概要を簡記する。

平成9年度

当該年度は調査初年度である。対象地域は、先述したように、旧琉球大学グラウンド跡地で雑草が繁茂していた荒蕪地となっていた。

対象地の東側は、沖縄県立芸術大学（以下、芸大）のグラウンドとしてすでに機能しており、その西側部分にあたっていることは判っていたものの、境界杭の埋設等も無かったことから、芸大グラウンド敷地と当該史跡の現地での明確なラインは判然としなかった。このようなことから、地籍図をもとに境界測量を実施し、史跡の指定範囲、すなわち調査対象範囲を確定することから実施した。その後、重機（バックホー）によって、旧琉球大学建設のために客土された埋土の除去作業を行った。対象面積全域に約2～3m程の深度で客土された盛土は膨大な土量となったため、単年度のみで除去することは不可能となり、次年度以降まで持ち越すことになった。当該盛土は、寺域の背後に在していた微粒砂岩の風化土壌から成る小高い丘（俗称、円覚寺松尾）を切り崩して凹地となっていた寺域に埋め込んで旧琉球大学グラウンド建設が行なわれたことが聞き取り調査などによって判明した。その際、大学側としては、昭和43（1968）年度に修復、復元された総門、放生池等をも埋め込んでテニスコート建設を計画していたようであるが、文化財保護を唱える関係者や一般市民などの保存を望む声に押され、三門と梵字炉あたりを繋ぐラインまでセットバックさせ、当該部分に擁壁を築いてグラウンド建設を行いたいさつがあるようである。重機（バックホー）による盛土の除去作業が進行していくなかで、表土下約1m前後の深度あたりから、境内を圍繞する石牆の天端が検出されてことより、昭和12（1937）年に田辺泰らによって作成された当該寺の平面図（『琉球建築』所収）を参照しながら、そのラインを追っていく作業を行って行った。その結果、寺域の奥壁にあたる南北に走る東側ラインと東西に走る北側ラインは比較的良好な状態で残存していることが判った。また、調査区のはほぼ中央部付近には旧琉球大学時の導水用の径60cmのコンクリート製のヒューム管が埋設されていることが判り、重機（バックホー）によって破碎して除去した。盛土中からは、赤色及び灰黒色の瓦片をはじめ、沖縄製陶器や中国製陶磁器等の遺物が見られたが、その多くが細片であった。

平成10年度

はじめに、前年度に未了であった南西部の仏殿西端から鐘楼あたりの盛土の除去作業を行い、旧琉球大学グラウンド擁壁を残し、それより東については終了した。結果、第4図に見るように、グラウンド建設前に設置されていた教員官舎やそれに附設した井戸や排水溝等が境内各所に配置され（トーン部分）、予期していた以上に保存状態が良好でないことが判った。とりわけ、御照堂については完全に破壊され、その痕跡すら確認できなかった。また、庫裏南西部や仏殿の北側から西側、さらには獅子窟南西部なども大きく破壊を受けていることが判った。その後、辛うじて残存している龍淵殿および庫裏、さらには仏殿、獅子窟などと、それらに附設した遺構の検出作業を行うが、その配置や平面構造などは、昭和12（1937）年に田辺泰らによって作成された当該寺の平面図（『琉球建築』所収）と概ね合致するものの、細部においては異なる部分も少なくない。

残存遺構の配置状況や各遺構の平面形状等のおおまかな把握が可能となった調査後半段階において、龍淵殿東端部分と庭園様遺構の北側の石牆沿いに、各々約1m幅のサブトレンチを設定し、下層遺構の確認調査を行った。結果、両者において下層遺構の存在が確認されたが、調査期間等の都合上、その性格等の把握については、次年度遺構の調査に委ねることになった。

平成11年

平成11年度は10月1日～12月28日の約3ヶ月の期間で調査を行った。調査の目的として円覚寺境内調査区の南側における遺構の確認、平成9、10年度に確認された遺構の記録、そして建立当初に相当する遺構の一部確認を行った。調査区南側においては戦前まで井戸があった一帯の遺構の確認を行った。結果、旧琉球大学教員官舎に伴う

建物のコンクリート基礎並びに三門地区の南側においても鐘楼基壇の北西隅部を検出した。建立当初に相当する遺構では戦前の円覚寺石牆ラインとは異なる旧石牆の根石、庭園地区から瓦を使用した溝、北側石牆に面を向けた石列を確認した。また他の遺構としては龍淵殿地区で集石遺構、獅子窟地区で東・北側で石敷き遺構を検出した。これらの遺構以外に龍淵殿基壇の造成状況を確認するため試掘孔を基壇北西隅あたりに設置した。

これらの遺構確認によって円覚寺は幾度かの改修が創建以来、行われていることが明確となり、それらの性格解明が次年度遺構の調査における課題として提示されるに至った。遺構の記録に関しては龍園殿地区、庫裏地区の遺構平面図を1/20スケールで仕上げた。

平成12年度

平成12年4月から沖縄県立埋蔵文化財センターが開所し、それに伴って円覚寺跡遺構確認調査を同センターが請け負うこととなった。調査期間は平成12年10月1日から11月30日までの約2ヶ月間で、調査の目的としては旧琉球大学グラウンドに伴って構築された円覚寺放生池とを画する擁壁の撤去とその下部に埋蔵されている遺構の確認、円覚寺跡調査区の南側における遺構の確認、そして昨年度において確認された遺構の記録、更に建立当初の時期に相当する遺構の一部確認を行った。

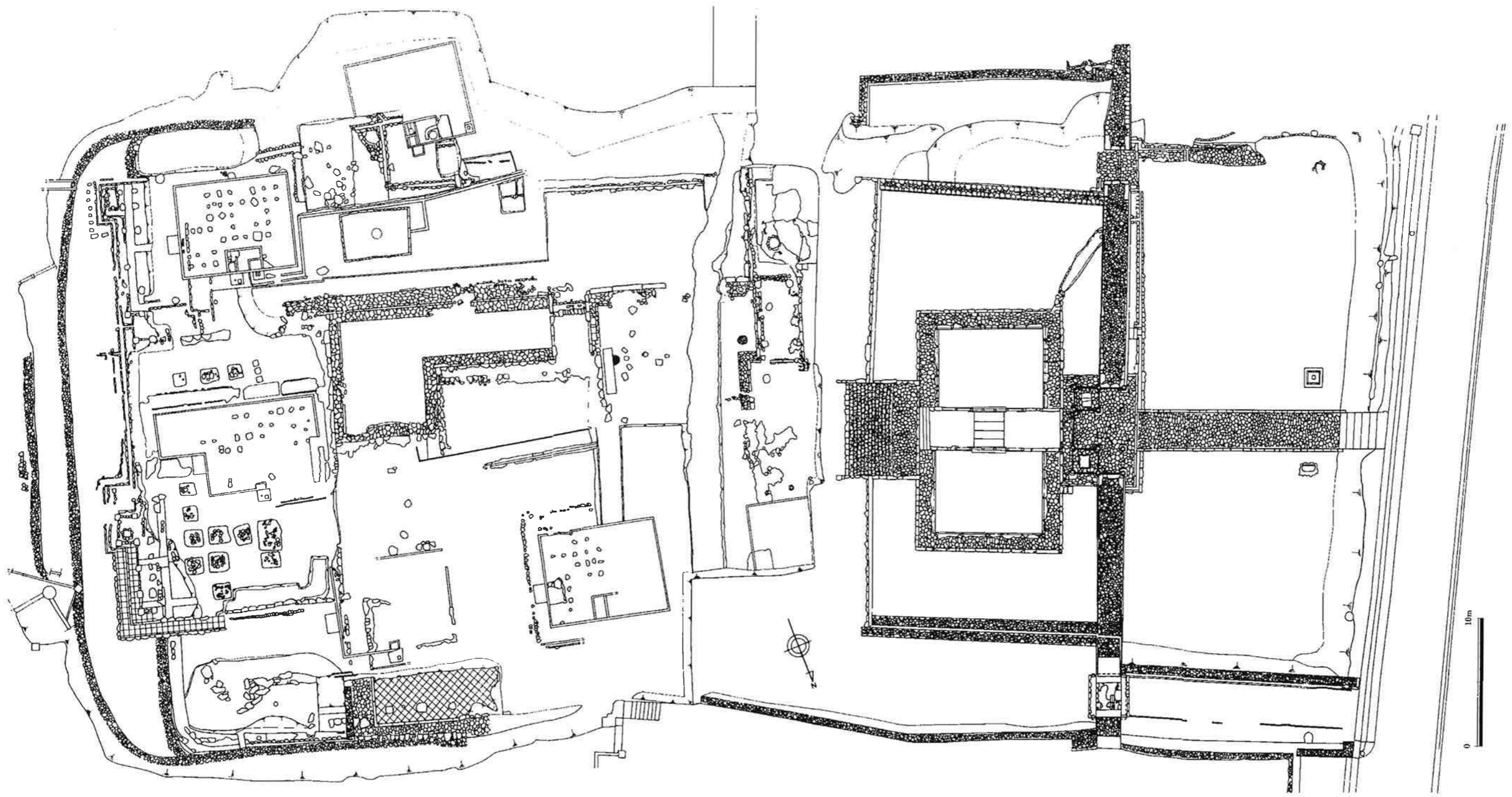
擁壁の撤去によって仏殿から鐘楼に繋がる石畳と鐘楼基壇とその側溝を確認し、戦前時まで残存していた遺構を確認することができた。他方、御照堂の遺構の確認も行ったが完全に戦後の旧琉球大学教員官舎による破壊を受けており、地山に至るまで全く遺構は残存していなかった。調査区南側においては戦前まで使用されていた井戸の石畳と側溝、左脇門から続く道を確認することができた。これらの遺構確認において戦前まで残存していた遺構の確認はほぼ終了し、調査の後半はそれよりも下層から確認される遺構の発掘を実施することにした。

下層から確認される遺構に関しては1721年に焼失する以前の龍淵殿基壇遺構を確認するためにトレンチを同基壇北側に1本、同南側に2本、同西側に1本設定した。その結果北側のトレンチから地山に近いレベルで2本の石列を確認することができた。また、鐘楼も1744年に移築されていることからそれ以前の状況を確認するために鐘楼西側に確認トレンチを1本設定した。この部分からも石積み、溝といった遺構が確認されたが、発掘範囲が限定されていたためにその全容、機能を明らかにすることはできなかった。

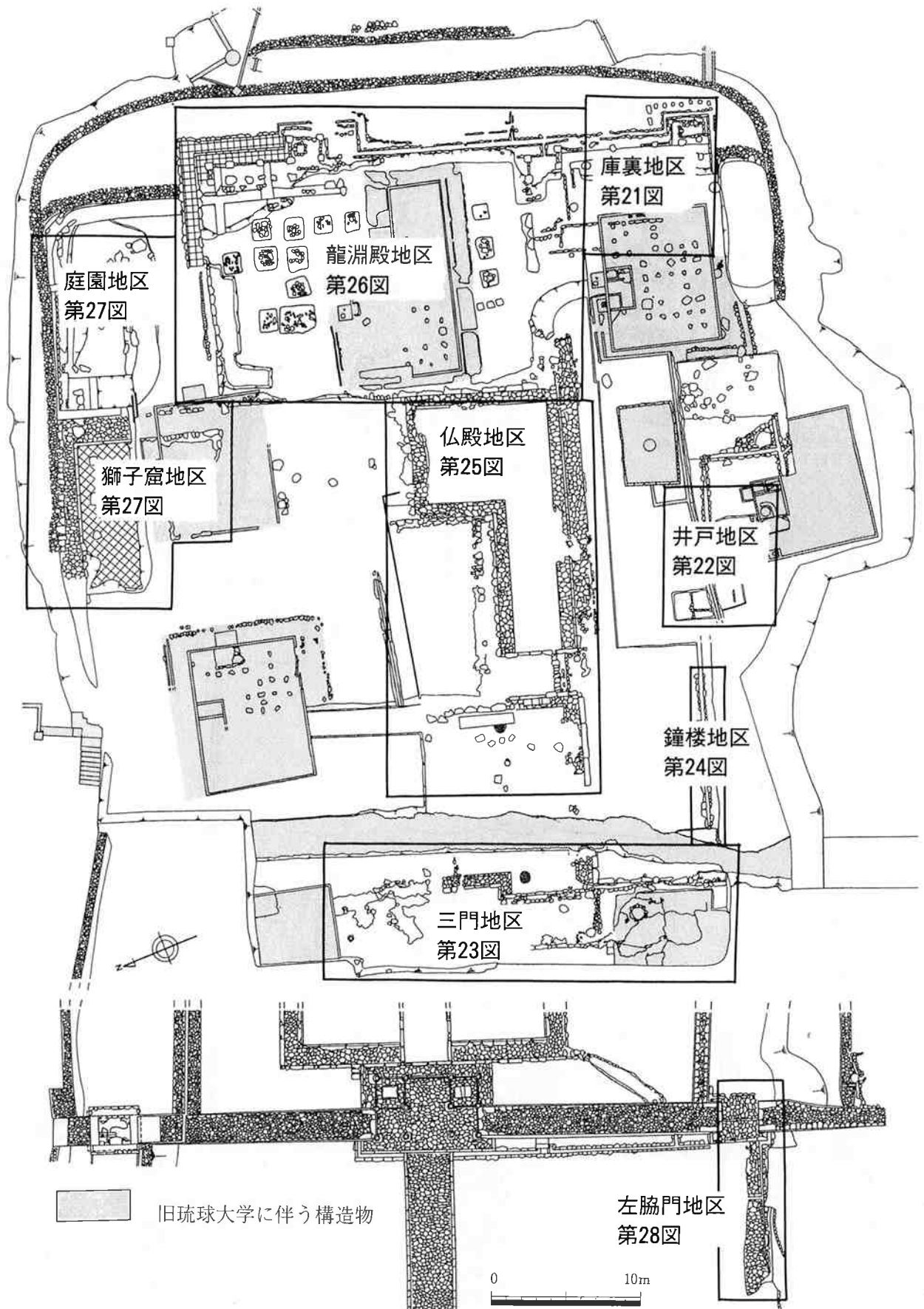
平成13年度

平成13年度は、6月1日から7月13日の約1ヶ月半の期間で調査を行った。左脇門の発掘調査と、過去4年間で発掘した遺構の実測作業・補足調査が主な目的であった。当年度の主な調査成果として庭園部分と龍淵殿北側部分の補足調査が挙げられる。庭園ではその中心部に南北にトレンチを入れた結果、改修が行われていることが確認された。龍淵殿北側においては前年度の調査をベースに遺構に伴う遺物の確認を行った。結果、戦前の龍淵殿の下層に更に古い時期に相当する龍淵殿の遺構が残存していることが確実となった。

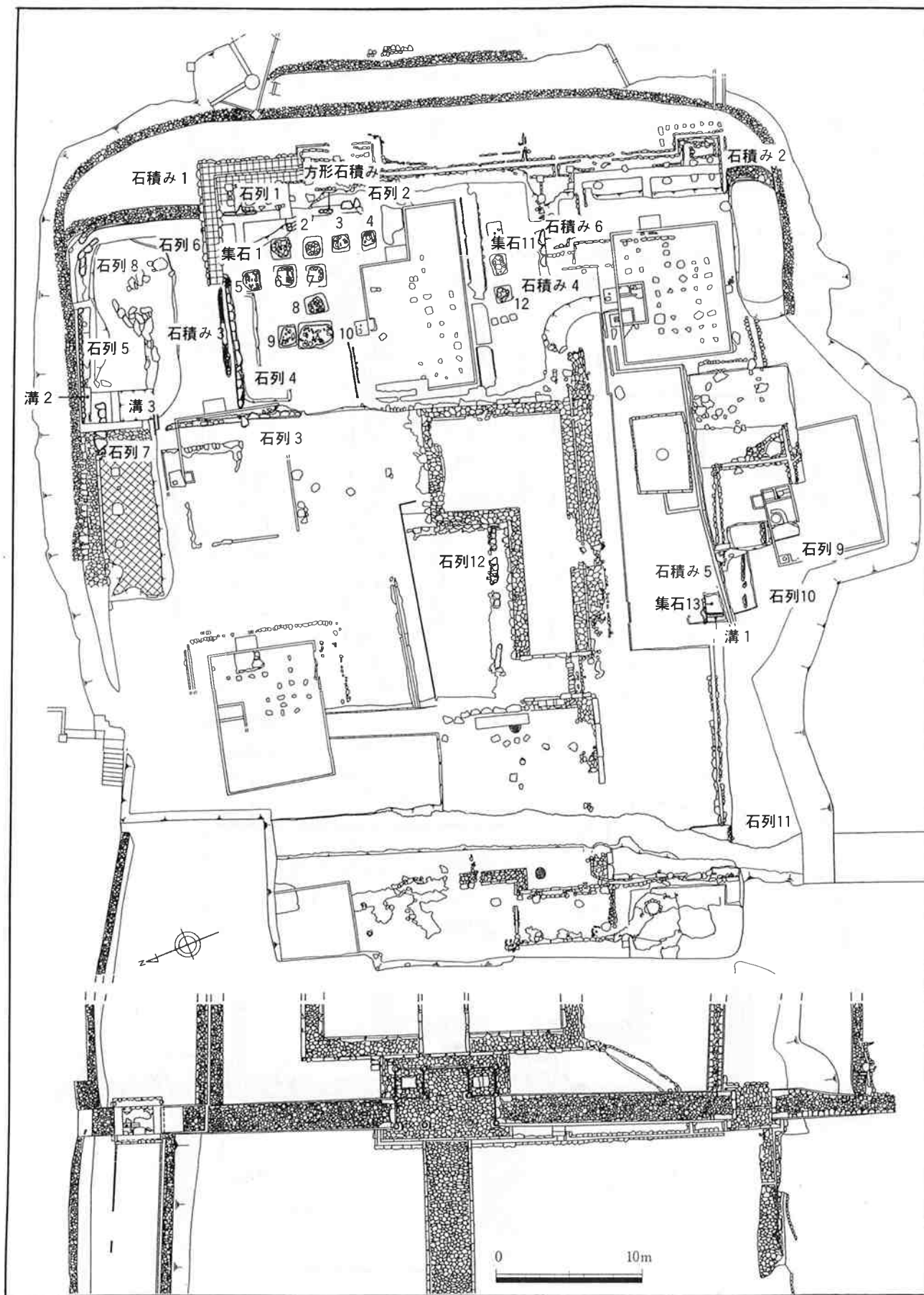
その他の補足調査として、井戸西側部分では、これまで検出してきた遺構よりもさらに下位から2本の石積みを検出し、その西側に位置する庫裏地区にあるトイレ状遺構および三門にある水甕の発掘も同時に行った。また龍淵殿再建、庫裏創建の際に取り壊されたと考えられる石牆の南端部分並びに左脇門の西側へ延びる石畳の確認発掘も実施した。最後に、過去4年間に検出した遺構の1/20スケールの平面図並びに各遺構の立面図を仕上げ、それにレベル高を図面に記入した。その後、遺構部分はブルーシートで完全に覆い作業を終了した。



第3図 遺構全体図



第4図 調査範囲



第5図 下層遺構位置図

第IV章 層序と遺構

第1節 層序

今回の発掘調査においては戦後の旧琉球大学教員官舎設置に伴う造成によって、円覚寺境内全域が広範な攪乱を受けていた。わずかに仏殿地区、獅子窟東側の石敷き部分と庭園地区、龍淵殿地区の石積み4周辺の遺構埋土が未攪乱であることが確認できた。また、獅子窟基壇の南半分と西辺が破壊されていたため、本建物基壇の造成状況の確認も行うことができた。それら各地区別に以下に記す。

仏殿地区

本地区の上面は戦後の造成によって削平され、僅かに基壇内に込められていた造成層が地山上面に残存していた。黄褐色の粘質土で仏殿基壇内全域に見られた(第6、7図)。本層からグスク土器、褐釉陶器が出土していることから本層は15、16世紀頃に相当するものと考えられる。

龍淵殿地区

本地区の南側、石積み4の全容を確認するため、南北方向のトレンチを東西に2箇所設定した(第28図トーン部分、第19図)。西側のトレンチ②においては地山まで7層確認することができた。まず第1層は現代遺物が混入する戦後の攪乱層で、第2層は赤瓦が混入する近世～戦前の層とされる。第3層は灰瓦が主体となり、赤色の塼が1点、赤瓦が見られなくなる近世段階に相当する。第4層は白磁と染付が出土していることから古琉球段階に相当すると思われる。尚、石積み4の裏込め石の内側に広がる第6層は龍淵殿基壇の造成層であり、龍淵殿基壇内においては全面的に見ることができる。遺物は本層上面から沖縄産陶器、中位から白磁が出土している。白磁の年代から15c後半～16c前半頃に相当することから、この時期に龍淵殿南側基壇が造成されたものと考えられる。東側のトレンチ①においては地山まで4層確認することができた。トレンチ②に見られる第3層と遺物が見られない第5層、灰瓦が出土する第7層が石積み4の南側で見られた。第7層は出土遺物から古琉球から近世初頭に相当するものと思われ、小礫を含む粗砂層で『琉球国志略』に記載される「蓬萊庭」との関係を示唆させる。石積み4の北側には造成層に相当する西側トレンチの第6層のみが見られた。

龍淵殿地区の南西側にも1箇所トレンチを設置した。その結果、龍淵殿西辺基壇の造成状況を確認することができた。西側トレンチ第6層が西辺基壇の上面から約1.5mの深さまで見られ、褐色瓦と白磁が各1点(第39図、12)出土した。白磁の年代から龍淵殿西辺基壇の造成年代は15世紀後半～16世紀前半頃に相当するものと考えられる。

獅子窟地区

本地区東側、東辺基壇と庭園と本地区を画する石牆間の堆積状況を確認した(第10図)。戦後の攪乱層を除去した結果、瓦と塼のみが出土した第1層、それと併せて近代銭が出土した第2層が確認された。両層とも出土遺物から近代に相当するものと考えられる。第3層は瓦、塼、褐釉陶器、銭貨、金属製品が出土しており、近世段階に相当するものと考えられる。本層ではウルが密に混入しており、当該時期に獅子窟の周囲にはウルが敷かれていたと考えられる。本層直下には石敷きが見られ、ウル敷き以前は石敷きであったことも確認された。石敷き下には第5層が見られた。締まりのある細砂層で先の石敷き及び東側を画する石牆が載る造成層であると考えられる。

獅子窟の基壇内造成状況を基壇の南側と西側損壊部分において確認することができた。羽目石の裏側には裏込め石が見られ、第8図の第10、11、12層が基壇造成層に相当する。

庭園地区

庭園中央部、庭園の東側を画する石牆の東側、そして石列5に沿っての東西トレンチを設定した。

庭園中央部は南北に横断するようにトレンチを設定し、堆積状況を確認した(第13図)。まず戦後の攪乱層を除去した直下に戦前の表土層と思われるサング小片を多量に含む第1層を確認した。枯山水庭園は配石と白砂で主に構成されることから、それに伴う白砂の代用としてのサング小片と考えることができる。本層では遺物は確認することはできなかった。第2層は薄く、この層においても遺物は確認できなかった。第3層では赤瓦、灰瓦が出土、第4層では塼と沖縄産陶器が出土している。よって第3、4層は近世段階における庭園の造成層として位置付けることができる。第5、6層からは赤瓦が見られなくなることから近世初頭若しくはそれ以前の段階の包含層と位置付けることができる。

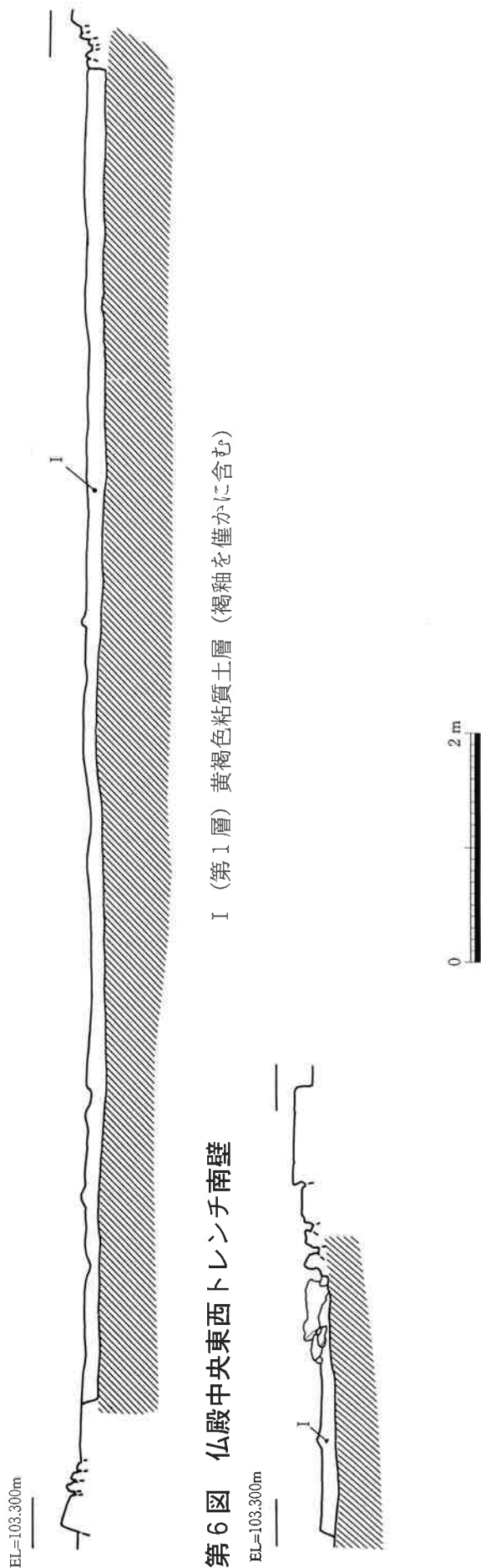
石牆の東側では地山まで5層、確認することができた(第11図)。まず戦前の表土層と思われるサンゴ小片を多量に含む第1層を確認した。庭園中央部の第1層に相当すると思われる。出土遺物としては瓦、埴が大半を占め、中でも赤瓦が最も多く出土した。第2層も第1層と同様の出土遺物の様相を呈しており、両層の時期差は余り見られないものと思われる。3層は薄い小礫混じりの層でこの面から瓦の凸面を向かい合わせにして2列に並べ、その内側に小石を詰める溝状の遺構を確認した。実用面を重視した溝ではなく繊細で意匠的な印象を受ける溝であることから、曲水や遣り水といった観賞用としての溝であった可能性が指摘できる。かつて小礫を敷き詰めた中に溝を巡らす庭園があったことを想定することができ⁷。第4層は先の溝遺構の造成層と考えられる。出土遺物は埴が最も多い。赤い埴が出土していることから近世段階の造成層と判断される。第5層は灰瓦が1点、出土している。庭園中央部の第6層に相当し、近世初頭若しくはそれ以前の段階の包含層と考えられる。

石列5に沿って設定した東西トレンチでは地山まで4層確認することができた(第12図)。まず戦後の攪乱層を除去した直下に赤瓦や陶質土器を含むことから近世段階の包含層、第1層を確認した。庭園中央部の第3層に相当する。次の第2層においても赤瓦が含まれていることから近世段階の包含層と思われる。石列5の埋土層で円覚寺北側の石牆際において素掘り溝状の落ち込みが見られた。庭園中央部の第4層に相当する。第3層は石列5の造成層で瓦、青磁が出土している。赤瓦が見られないことから近世初頭若しくは古琉球段階の包含層と考えられる。第4層は染付1点(第40図11)のみで、この遺物年代から円覚寺創建当初の時期に相当する遺物包含層である。石列5並びに円覚寺北側の石牆根石はこの包含層の上面に据えられている。

本層下部では常に水が沸き出る状況で図12で見られるように地山まで図化するに至らなかった。別地点においては本層より下は地山であることが確認できた。

その他の地区

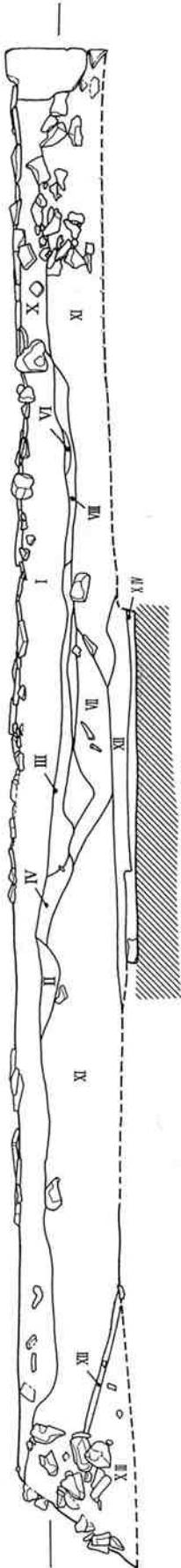
上記の地区以外では三門地区、庫裏地区、井戸地区、鐘楼地区における造成層の確認を行った。表2で見られるように前3者は出土遺物の状況から近世段階、後1者と鐘楼地区南側溝は近世以前の段階に構築されたものと考えられる。



第6図 仏殿中央東西トレンチ南壁

第7図 仏殿中央南北トレンチ東壁(土色については「標準土色帳」に基づき観察を行った。)

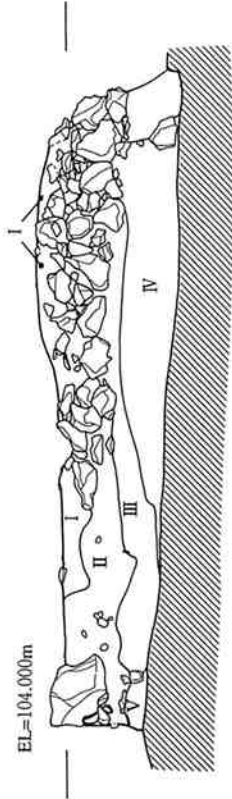
EL=104.000m



第8図 獅子窟基壇南面

- I (第1層) 黄橙色混ニール砂質土層 (攪乱層)
- II (第2層) 灰白色混炭砂質土層 (赤瓦混入)
- III (第3層) 灰白色混小礫砂質土層
- IV (第4層) 黄灰白色混ニール砂質土層 (ガラス混入)
- V (第5層) 黄灰白色混礫砂質土層 (赤瓦混入)
- VI (第6層) 灰白色混炭砂質土層 (II層より炭は少ない)
- VII (第7層) 黄白色混礫砂質土層 (石灰岩の風化)
- VIII (第8層) 灰白色混礫砂質土層 (礫多い)
- IX (第9層) 黄灰白色混ニール砂質土層 (赤瓦多量混入)
- X (第10層) 青灰色混ニール粘質土層 (獅子窟基壇造成層)
- XI (第11層) 黄褐色混ニール粘質土層 (獅子窟基壇造成層)
- XII (第12層) 黄褐色砂質土層 (帯状に薄く堆積)
- XIII (第13層) ニールビの破碎層
- XIV (第14層) 茶褐色混ニール粘質土層 (獅子窟基壇造成層)

EL=104.000m

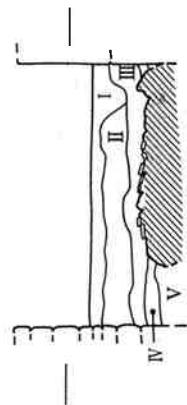


第9図 獅子窟基壇西面

- I (第1層) 茶褐色粘質土層 (攪乱層)
- II (第2層) 青灰色混ニール粘質土層 (獅子窟基壇南面X層に対応)
- III (第3層) 黄褐色混ニール粘質土層 (獅子窟基壇南面XI層に対応)
- IV (第4層) 茶褐色混ニール粘質土層 (獅子窟基壇南面XII層に対応)
- V (第5層) ニールビの破碎層 (獅子窟基壇南面XIII層に対応)



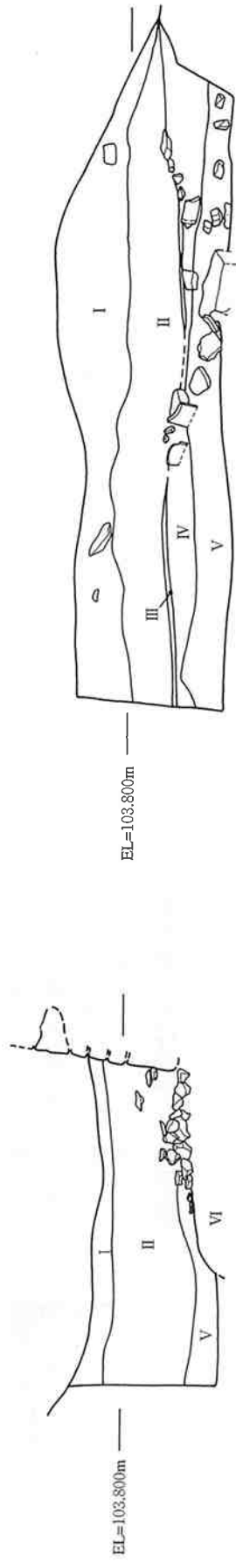
EL=104.000m



第10図 獅子窟石牆間畦北面

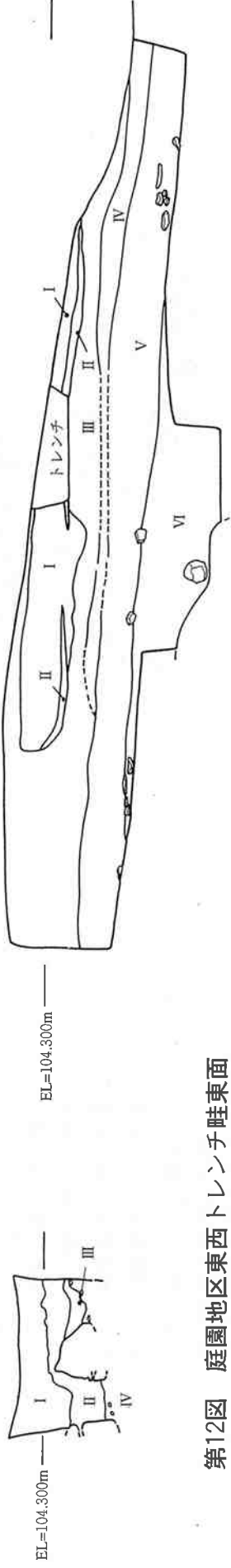
- I (第1層) 暗褐色粘質細砂層 (ウル含む)
- II (第2層) 暗黄褐色粘土層 (小礫、赤瓦を含む)
- III (第3層) 暗褐色粘土層 (ウルを大量に含む)
- IV (第4層) 暗褐色粘土層 (小礫を含む)
- V (第5層) 黄白色細砂層 (礫を含まず、遺物なし)

(本页の土色は「標準土色帳」に基づき観察を行った。)



第11図 G-26グリット東面・南面

- I [第1層] 茶褐色粘質土 (小礫多く含む、サンゴ片少し含む)
- II (第2層) 黄褐色粘質土 (赤褐色ブロック含む)
- III (第3層) 小礫層 (まばら)
- IV (第4層) 黄褐色粘質土 (赤褐色ブロック含む)
- V (第5層) 灰褐色粘土質 (クチャをブロック状に含む)
- VI (第6層) 地山



第12図 庭園地区東西トレンチ陸東面

- I (第1層) 黄褐色土細砂粘質土 (粘土、ニービ混入)
- II (第2層) 黄褐色粘土層 (ニービ芯多量に含む)
- III (第3層) 黄褐色粘土層 (混入物なし、灰瓦混入)
- IV (第4層) 灰褐色粘土層 灰瓦混入 (クチャをブロック状に含む)

第13図 庭園地区南北トレンチ西面

- I (第1層) 茶褐色砂質土 (小礫多く含むサンゴ片少し含む)
- II (第2層) 赤褐色粘質土
- III (第3層) 黄褐色粘質土 (粘土、ニービ混入)
- IV (第4層) 黄褐色粘質土 (クチャ、セン、礫混入)
- V (第5層) 暗褐色粘質土 (礫、瓦、セン、混入)
- VI (第6層) 灰褐色粘土層 (ブロック状のクチャ、5cm前後の小礫を含む)
- VII (第7層) クチャ

(本页の土色については「標準土色帳」に基づき観察を行った。)

第2節 遺構

円覚寺は第Ⅱ章第2節で触れたように各建物は古琉球、近世琉球にかけて改修や修復が繰り返し行われた。すなわち個々の建物や部分的な改修・修復は見られるものの円覚寺伽藍群の一斉改修を行ったということは文献上、伺い知ることができない。それを裏付けるように今回の調査では遺構の新旧が幾つも重複している場所もあれば、全く重複していない場所も見られた。よって円覚寺における全体的な画期で捉えるより部分的な画期で押さえていくことに重点をおいた方が妥当と判断して、まず戦前における古写真や田辺泰氏作成の『琉球建築』円覚寺平面圖（以下、平面圖、第75図）で読み取ることのできる遺構をここでは上層遺構とし、それ以外の下層から確認される遺構を下層遺構として便宜的に区別し、上層遺構は旧建物別に、下層遺構は個々の遺構別に報告することにした。尚、下層遺構とするものは同時性が有るものと無いものが混在する。

I 上層遺構

戦前まで残存していた各建物別もしくは施設別に検出遺構を報告していく。上層遺構における埋土は戦後の琉球大学教員官舎設置にかかる造成土が主で、ガラスや煉瓦、コンクリ片等といった現代遺物が大量に含まれていた。個別建物の概要については今回、検出された遺構並びに出土遺物に関わる記載のみにとどめた。尚、上屋構造や各建物の詳しい機能に関しては沖縄県教育委員会刊行の「旧円覚寺美術工芸関係資料調査報告書」「沖縄県文化財調査報告書」第140集 1999を参考にされたい。

御照堂

1494年に国王の位牌を祀る建物（宗廟）として「御照堂」は創建されたことが『球陽』に記載されている。この建物は後に獅子窟と呼ばれ、今日に言う御照堂はその後の1571年、「御照堂」の西隣に別棟を設置した時の建物に相当する。1728年に尚家の神位（位牌）を龍淵殿に移して以降、法堂僧の住居として戦前まで続いた。建物規模は5間×5間で単層、屋根は切妻造で本瓦葺。柱は角柱、前縁と両側に濡縁、室内は床板張り、畳敷きで長押が付されていた。

本建物がかつて存在していた場所から円覚寺にかかる遺構は全く検出されなかった。旧琉球大学教員官舎の基礎コンクリートが打ち据えられていることから、同建物構築時に御照堂の基礎は全て破壊を受けたものと考えられる。それを裏付けるように当該地区から大量の赤瓦、ガラスが確認され、コンクリート片も出土した。念のために地山近くまで掘り下げたが遺物包含層さえ確認することができなかった。このような旧琉球大学官舎に伴う攪乱は御照堂北側の石牆から獅子窟南・西辺基壇まで及んでいた。

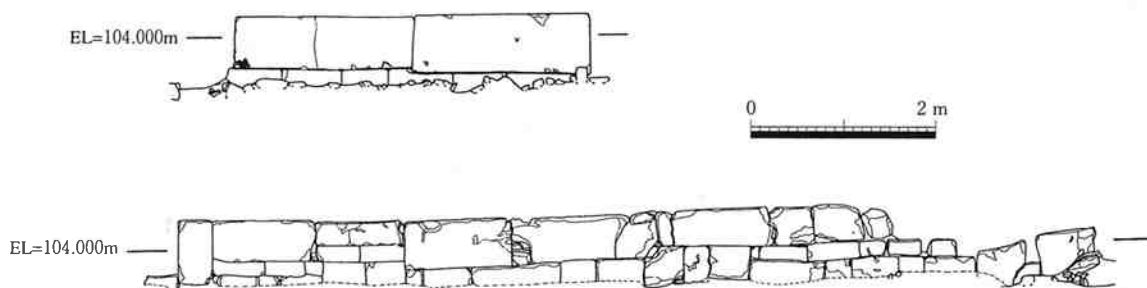
1719年来琉した徐葆光は『中山伝信録』（1721年）において1728年の改修以前の御照堂（下御照堂）の様子を記している。規模は3間で内部には3つの厨子があり、中央には尚真王、左には尚益王、右には尚純王の位牌が納められているとある。因みに平面圖では建物床面積103.6㎡、基壇床面積138.9㎡となっている。

獅子窟

1494年に「御照堂」と呼ばれる建物が大殿の北側に建てられたのが獅子窟の前身となる建物である。第二尚氏の宗廟として創建時から近世にかけて使用された。1728年に宗廟は龍淵殿に移され、改修を受けて「獅子窟」と改名された。建物規模は3間×3間で柱は総丸柱、床は塼敷き、内部は内陣と外陣に分かれ、内陣は須弥壇として仏像、芥隠上人像、歴代住持の位牌を安置していた。平面圖では建物床面積60.8㎡、基壇床面積113.4㎡となっている。

本建物がかつて存在していた場所から基壇、礎石、塼敷き、石敷き、石列が確認された。平面圖と場所並びに規模がほぼ一致すること、古写真にある遺構と整合できることからそれらは戦前まであった獅子窟の遺構にほぼ間違いない。基壇は北辺が残り良好で、基壇辺縁を石で立ち上げる石灰岩製の羽目石10枚、それを裏で支える裏込め石、羽目石を載せる根石、細粒砂岩製の礎石が3つ、塼も元位置を保った状態で検出された（第27図）。東面は南側が破壊を受けており、羽目石2枚が北側で元位置を保っている状態で確認された。西面は面を有した切石が2基確認された。おそらく獅子窟西側基壇の一部と考えられるが、根石が抜き取られているために移動させられている可能性が高い。これら羽目石の配置から建物正面の方向は南北が主軸で西に4°振ることがわかった。他に礎盤が2個、塼敷き上で検出されたが何れも移動させられており、元位置を保っていなかった。礎石から見た柱間隔は東西約2.6mと円覚寺の建物の中で最も広い。石材は中国福建省産の青石である可能性が考えられる。尚、基壇の構築状況に関しては前節で詳しく触れている。

石敷きは基壇北側と東側で確認された。東側は南半分が破壊を受けているものの、長さ約4.8m、幅約1.6mと



第14図 上：獅子窟東辺基壇 下：獅子窟北辺基壇

残存状況は良好であった。そのなかでも東西軸に列を成した南に面を有する切石が確認されたことは最も大きな成果であった。庭園北側で確認された南側に面を有する石列とはほぼ方向を同じくし、石材の大きさもそれほど変わらないことから旧石牆の北側部分の基礎と考えられる。この基礎となる石材は上面をほぼフラットに削られていることから石敷きの一部として元位置のまま再利用されていたと考えられる。また、北側石敷きも西側が破壊を受けているものの長さ約8.8m、幅0.8mの範囲に亘って良好に残存していた。ここでも切石で東西軸の石列が確認された。先の石列に比べて石材は小振りで、より丁寧に成形されている点と面が北側を向いている点で異なる。庭園北側で確認された北側に面を有する石列（石列7）とはほぼ方向を同じくし、石材の大きさと加工状況もほぼ一致することから、同一のものと考えられる。この石敷きは埋没した後にウル（珊瑚石灰岩を砕いた砂利）を石敷きが敷かれていた範囲に敷き詰めていたことが基壇東側の土層状況で確認することができた。前節で詳しく触れている。

基壇の南側は旧琉球大学教員官舎の基礎コンクリートが設置され、僅かに南東隅角部の基壇根石とその裏込め石が確認されるに過ぎない。基壇南西部分は全く石列が確認されなかったが、広範囲に瓦が集中して大量に出土した。これらに混じってガラス片も含まれていることから旧琉球大学教員官舎構築時に周辺から瓦礫を寄せたものと考えられる。

1719年来琉した徐葆光は『中山伝信録』（1721年）に、1728年の改修以前における獅子窟（上御照堂）の様子が記されている。規模は3間で内部には3つの厨子があり、中央には尚円王、左には尚質王、右には尚貞王の位牌が納められているとある。

仏殿

円覚寺の中心建物で1492年に創建され、1596年に改修を受けている。建物規模は5間×4間で床は塼敷き、柱は総丸柱、全面1間通りは吹き抜けで、内部は外回り1間が外陣で内側の3間×2間を内陣としていた。内陣には須弥壇を設け、釈迦、文殊、普賢の3像と後壁には金剛会が描かれ、普庵禅師の画像が懸けられていた。柱基礎は柱を受ける礎盤が上下、2段から構成され、上段は半円形で装飾が無く、下段は蓮弁の浮き彫りが施された礎盤であった。石材は中国福建省産の青石である可能性が考えられる。平面図では建物床面積127.7㎡、基壇床面積191.8㎡となっている。

本建物がかつて存在していた場所からは基壇根石とそれに伴う裏込め石、石段、石畳、石列、埋甕、溝、ウル敷きが確認された（第25図）。平面図と場所並びに規模がほぼ一致すること、古写真にある遺構と整合できることからそれらは戦前まであった仏殿の遺構にほぼ間違いない。

石列は石灰岩の石材を精加工したものと粗加工したものが見られた。何れも地山直上に設置されており、根石の控え部分には裏込め石と更に内側には粘質黄褐色土が見られた。精加工のされた石列に関しては東・西・南辺に面を有し、各石列の方向と各長さは戦前まであった仏殿の基壇根石の南側に対応する。基壇根石は東辺が約3.4m、西辺が約5.4m、南辺が約8.2m残存している。いずれも根石一段のみで、東辺と西辺の北側は戦後の破壊を受けている。戦前まで残存していた基壇の北辺は旧琉球大学教員官舎構築時に破壊されており全く痕跡を残さない。この根石の上部に長方形の羽目石が据えられていたことが古写真から判明でき、その内の一つが東側に倒れた状態で検出された。長さ2.3m、幅5.4m、厚さ30cmで裏側（裏込め石側）に当たる面の上部には塼を嵌めるための抉りが見られる。この抉りは南側端部近くで止められていることから、この羽目石は基壇南西隅部に設置されていたものと判る。北側端部近くには18cm四方の方形のくぼみが見られる。石灰岩製で風化による孔は見られず堅緻であることから重量建造物の基礎としては最適な石材であると言える。主に沖縄県内で見られる基壇遺

構は主に切石積みで立ち上げていくため、羽目石はおろかこのように巨大な石材を用いることはまず見られない。丁度中間部分で割れているものの、このような巨大な羽目石がほぼ完形で発掘されたのは沖縄県内では初めてである。粗加工の石列については次項で詳しく述べる。石列の方向から建物正面の方向は東西が主軸で北に5°振る。

上記の巨大な羽目石を支えていた石灰岩の裏込め石が僅かながら基壇根石の控え部分に接して残存している。東・西・南辺の基壇根石の裏に約40~60cmの幅で込められており、石の大きさはまちまちである。西側基壇根石の裏込め石内からグスク土器の小片が出土している(第60図2)。

石畳は仏殿と鐘樓を結ぶ浮道に沿って西側に幅64cm、長さ3.9m、基壇根石に沿って南北に幅80cmで長さ約8.6m、東西に約4.9m、それから南へ2.5mのところ段差を有した幅1.6mのものが東西に長さ約14.6mで検出された。いずれも大きさは様々で上面を平坦に加工した石灰岩を組み合わせて石畳を形成している。更に目地を目立たないようにするため目地の間に漆喰を埋め込む工夫が見られる。段差を有する南側の石畳は段差部分と縁に長方形の縁石で区画し、その中に石畳をはめ込んでいる。南側の石畳が約10cm高い。一部破壊を受けているものの全体的に残存状況は良好である。

ウル敷きは仏殿南側の石畳に囲まれたL字状の空間内と仏殿前庭部分(第25図の破線内)に見られた。平面図にはかつて仏殿の北側にも石畳に囲まれた逆L字状の対象の空間が見られることから、同様にその部分にもウルが敷き詰められたものと考えられ、仏殿の四周は玉砂利を全面的に敷き詰めていたと想定される。

溝は仏殿と鐘樓を結ぶ浮道と南側の石畳に接する部分に東西方向約2mの長さにわたって見られる。溝の両脇は切石で区切り、床面は素掘りである。溝の機能としては仏殿南東部の石畳に囲まれたウル敷き面に溜まった水を仏殿前庭部へ排水するための溝と考えられる。因みに戦前の古写真では暗渠となっている。

石段は仏殿と鐘樓を結ぶ浮道の西側に一段あって、立方体に加工した3枚の石灰岩から成っている。踏み面長120cm、蹴込み長33cmである。

埋甕はかつて防火用の水甕として仏殿基壇の全面両隅に1基ずつ設置されていた。うち南側にあった甕の胴部以下が元位置において確認された。胴上部は攪乱層から検出された(第25図・図版19-2)。

この埋甕から北側約2mの場所にかつて儀飾品(手水)が配置されていた。かつて三門と仏殿を結ぶ浮き道を挟んで、埋甕と同様に左右配置されていた。古写真によってそれは細粒砂岩製で円盤状に加工されたものを最下部に、そして角柱状に加工された石材をその上部に、そして丸白状に加工されたものを最上部に据える3つの加工石材から成っていた。その内の角柱状に加工された石材が仏殿正面前庭部から出土した。元位置からやや離れており、ほぼ完形で見つかった。上部の接続部には臍がつくり出され、彫刻などの文様は特に見られない。

徐葆光が著した『中山伝信録』(1721年)には中央に仏像が祀られ、左右は脇陣でそこには合祀した先王の神位が納められているとある。周煌が著した『琉球国志略』(1757年)には規模は7間で極めて高麗であったと記されている。

三 門

1492年に創建され、1588、1652、1697年と改修を受けている。建物規模は3間×2間で柱は総丸柱の重層建築、下層の床面は埦敷きで柱基礎は柱を受ける半円の装飾の無い礎盤が用いられていた。中国福建省産の青石の可能性が考えられる。平面図では建物床面積36.8㎡ 基壇床面積66㎡ 左右門廊の各建物床面積は18㎡となっている。

本建物がかつて存在していた場所からは礎石、石畳、石列、埋甕、集石が確認された(第23図)。平面図と場所並びに規模がほぼ一致すること、古写真にある遺構と整合できることからそれらは戦前まであった三門と南側門廊の遺構にはほぼ間違いのない。

礎石は南側門廊にあたる部分は残存状況が良好で細粒砂岩製の礎石3基が元位置、1基が戦後の攪乱によって移動されており、三門にあたる部分では礎石が1基のみ元位置を保っている状態で確認された。

石列は三門の西側を画するものと門廊の西側を画するものが確認された。前者の石列は東西約4m、後者の石列は南北に5.4mあり、東側、南側は石畳で画しその内には土を込め入れていたと思われる。石列の方向から建物正面の方向は東西が主軸で北に2°5′振る。

石畳は三門を画する東側の石列と南側の石列の一部に沿うのものと門廊の北東側を画するものが確認された。三門の石畳は幅68cmで逆L字状に折れ、南北4.6m、東西1.5mであり、門廊の方の石畳も逆L字状で幅は64cm、南北6.8m、東西に3m残存していた。

埋甕は仏殿のものと同様に防火用の水甕として三門基壇の南東、北東両隅に1基ずつ左右対称に設置されてい

た。うち、南東側にあった甕の胴部以下が元位置において確認された（図版18-3）。甕の詳しい形態等については第V章で触れていきたい。

三門北側並びに三門から仏殿を繋ぐ浮き道、北側門廊は旧琉球大学教員官舎構築時に破壊を受けており明確な遺構は確認できなかった。但し、三門の北東隅に当たる部分に集石が広く見られた。その広がりはかつてあった三門の東側と北側の石列並びに石畳の並びと対応することができるため、それらを据える基礎としての集石を想定することができる。一部、割れて小片となっている切石及び半円形の礎盤も混入している。これら切石を三門を面する石列の一部として指摘できるが攪乱によって元位置から移動しているため、その確証は薄い。

鐘楼

鐘楼は1492年に創建されたが円覚寺の北側外縁に設置されていた。その後の1744年に現在の場所に移築されたものが戦前まで残存していた。鐘楼移築以前にこの場所には亭寮、照堂寮が建っていたと云われている。鐘楼の建物規模は3間×2間で柱は総丸柱で内部には鐘が吊されていた。基壇の床は古写真から石畳であったと考えられ、基壇の床面積は広く、高さは低い。平面図では建物床面積35.7㎡ 基壇床面積94㎡となっている。

本建物がかつて存在していた場所からは基壇根石、溝、石畳が確認された（第23・24図）。平面図と場所並びに規模がほぼ一致すること、古写真にある遺構と整合できることからそれらは戦前まであった鐘楼の遺構にはほぼ相違ない。

基壇根石は北辺と西辺で確認された。何れも石灰岩製で北辺のものは琉球大学グランド造営に伴う石牆（以下、琉大石牆）によって一部破壊を受けて、東西に分断されている。東辺は東西に約1.9m残存し、西側は同方向で約4.5mが残存している。西辺は琉大石牆によって南西隅角部が破壊を受けている。南北は約4.8m残存しているが、南端は琉大石牆構築時に土圧を受けて西側に倒れている状況で検出された。古写真からは本来、この根石に長方形の石材を上段に据えて基壇を形成していた。戦後の攪乱によってその上段が削り取られると共に鐘楼の礎石も剥がされ取られた可能性が高い。

溝は石造りで全て石灰岩の切石が使われ、鐘楼の南側と西側に設置されている。琉大石牆によって南側と西側接続部は破壊を受けている。西側のものは南北に約3.7mが残存し、仏殿前庭部から続いていることにより仏殿前庭部に溜まった水を排水するための機能が考えられる。南側のものは東西に8.3m残存する。この溝は東側が破壊されているためにその性格は判然としてないが、方向的に井戸へ至る道の側溝と合致することから井戸から出る廃水を排水するための機能が考えられる。

石畳は北辺基壇根石に沿って検出された。琉大石牆によって途中、東西に分断されている。東側は幅1.1mで長さ約1.9m、東側は攪乱を各所に受けており残存状況は比較的良好ではなく、西側はわずかに約2.2m残存している。いずれも石材の大きさは様々で上面を平坦に加工した石灰岩を組み合わせる石畳を形成している。本来は仏殿から南側門廊へ至る石畳として機能していた。

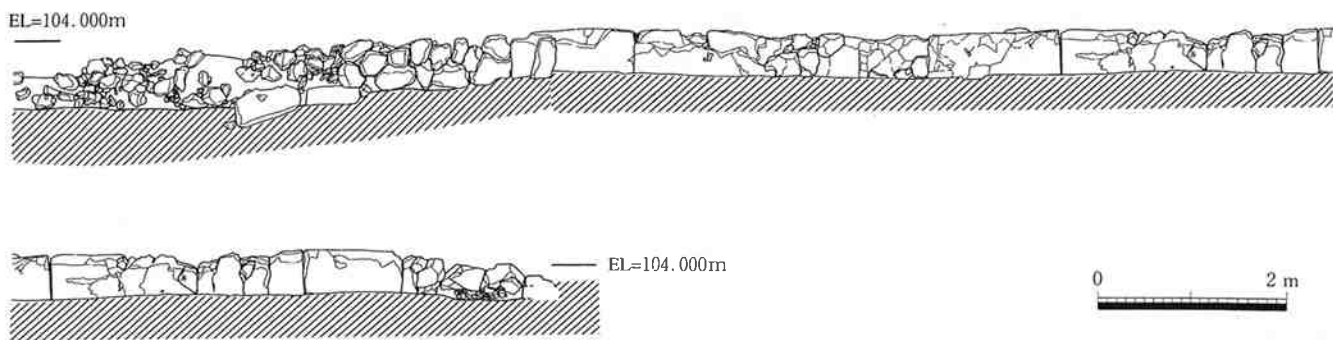
周煌が著した『琉球国志略』（1757年）には仏殿を挟んで北側に獅子窟、南側に僧寮があり、僧寮の南に鐘楼があったとする記載が見られる。

龍淵殿

龍淵殿は円覚寺の中でも最大の規模を有する木造建築である。創建当初、この場所に「大殿」と呼ばれる建物が建てられたが、1721年の失火により、全焼してしまう。同年に再建され「龍淵殿」と俗に呼ばれるようになる。「龍淵殿」とは本来、尚家の神位（位牌）を祀る部屋を指し、その南隣の部屋を方丈、北隣の部屋を客座と呼んでいた。建物規模は9間×6間で柱は角柱、北、北東側の基壇端には塼が敷かれていた。建物内は5部屋に分かれ、建物背後には東司を配置していた。平面図では建物床面積366.2㎡、基壇床面積474.3㎡となっている。

本建物がかつて存在していた場所からは基壇根石、礎石、溝、石敷き、塼敷き、方形石組遺構、集石、石列が確認された（第26図）。平面図と場所並びに規模がほぼ一致すること、古写真にある遺構と整合できることからそれらは戦前まであった龍淵殿の遺構であることはほぼ相違ない。かつての建物があつた中央ほぼ南寄り北西隅に旧琉球大学教員官舎が設置されていたため、基壇上部は破壊を受け、礎石も北東隅を残してほとんど取り外されていた。

龍淵殿は東辺の北半分、北辺、西辺において基壇を形成しており、東辺の南側は溝で画され、南辺はそのまま段差を有さず、庫裏と接続するという変則的な基壇であったことが検出された遺構のレベルとの関係、そして基壇根石各面における接続状況から想定された。基壇根石の残存状況としては東辺の北半分、北辺の東半分、西辺南半分が検出された。基壇を構成する面石は全て石灰岩の切石で、東辺の北半分、北辺、西辺南側は精加工され、



第15図 龍淵殿西辺基壇基部

特に東辺の北半分約6.4m、北面約5.3mは一枚石で立ち上げられた羽目石が確認された。西辺は古写真からかつて切石を上下2段に組んでおり、その下段が西辺南側で約8.5m検出された（第15図）。この西辺の南西隅はコーナーをつくらずに、鐘楼へ至る石畳で切れている。西辺北側は仏殿と龍淵殿を結ぶ浮道との接続部分で野面積みとなり、更に北側においては完全に破壊されている。この破壊を受けている部分において首里城の地下へと続く壕が確認された。おそらく、基壇の一部を破壊して造られているため、沖縄戦によって龍淵殿が焼失した直後に掘られた壕である可能性が指摘される。基壇の北西隅に当たる部分に基壇の根石と思われる石列が検出されたが、石材の大きさ並びに設置されているレベルから先の基壇とはやや異にする。詳細に関しては次項で触れたい。石列の方向から建物正面の方向は東西が主軸で北に5°振る。

礎石は北東部分と南東部分において細粒砂岩製で元位置を保ったものが15基、確認された。いずれも細粒砂岩の上面を面取りし、平面観も約50cm×45cmとほぼ正方形に近い形に成形している。礎石はそのまま直に据えており、特に下部造成を行ったような痕跡は見られなかった。礎石から見た柱間隔は東西不明、南北約2.2m、北辺の軒近くが約1.4m、東辺の北側の軒近くが約1.2m、東辺の南側の軒近くが約1.4mとなっている。

溝は南東部分の建物際に沿って配置されている石造りのものと、北東部分の建物際に沿って配置される、縁石が石造りで床が塼敷きのものと2種類、確認された。前者は東西約1.9m、南北約4.2m、残存している。途中でコの字状に折れる部分が見られ、古写真から龍淵殿背後の東司の輪郭を溝が縁取っていることが確認できる。途中、北に折れる部分で床が塼敷きの溝にかわり、南側に関しては庫裏の溝にそのまま南延していく。塼敷きの溝は西半分が破壊を受けているものの、東西約8.7m、南北約7.2mと比較的良好に残存していた。古写真では廃水は西側において龍淵殿と獅子窟を結ぶ回廊の下部を通り、獅子窟の西側へと至る。両者共に石灰岩の切石を用いている。また、コの字状に折れる溝の南東部においては赤瓦を石造りの溝から約30cm離れた場所に、縦列に立てて並べている状況が見られた。平面状では逆L字状に並べており先の石造りの溝に沿って配置されている。

塼敷きは基壇東辺の北半分と基壇北辺の建物際に沿って敷かれている。いずれも幅約76cmを切石の縁石で画し、その中に塼を敷く。基壇北辺の残存している溝は約2.1mと大半が破壊を受けているものの、基壇東辺に関しては約6.1mと比較的良好に残存していた。古写真では東辺は基壇東辺に沿って東司跡から北東隅まで、北辺は基壇北辺縁に沿って北東隅から北西隅辺りまで塼が敷かれている状況を看取することができる。

石敷きは東司跡の輪郭を縁取って配置されるものと東司の礎石間を結ぶ石敷きが確認された。両者ともに縁石で画した中に石を敷いている。

方形石組遺構は東側の東司跡から検出された。48cm四方を切石で囲み、床は切石を敷く。すべて石灰岩を用いており、遺構の方位は建物軸と一致する。当初、トイレ遺構と考えたが、古写真では汲み取り口がやや南側に当たることからその可能性は想定の外を出ない。礎石から見た柱間隔は東西が約1.4m、南北が約2.2mと1.3mとなっている。

龍淵殿と庫裏を結ぶ回廊の遺構も確認することができた。古写真では石畳と石段が見えるが、石段は全く残存しておらず、石畳と礎石を確認することができた。礎石から見た柱間隔は東西が約2m、南北が約1.3mとなっている。

集石は中央北寄りと南側の端近くで12箇所、確認された。先述した礎石を据える際の基礎部分と思われたが、

礎石は造成土上に直に据えられていることから、戦前までの龍淵殿より古い時期の遺構である可能性が高い。詳細は次項で触れていくことにする。

石列は龍淵殿と庫裏の接続部において東西軸に確認された。礎石が据えられているレベルからすると戦前までの龍淵殿より古い時期の遺構である可能性が高い。詳細は次項で触れていくことにする。

徐葆光が著した『中山伝信録』（1721年）所収の「圓覺寺右廡神主圖」には1721年に焼失する以前の龍淵殿内部の様子が記されている。中央には仏堂（仏像を納めた厨子）が、左右には兆が安置されている。1756年に来琉した周煌は『琉球国志略』（1757年）において中央に仏堂、左右に歴代国王の位牌を祀り、南側の部屋を方丈、北側の部屋を客座としていたとある。全ての部屋は蓆（畳？）が敷かれており、建物前面の欄間には動物の彫刻が見られ、この動物が建物を守護しているとする。余談ではあるがかつて方丈前に蓬萊庭と呼ばれる庭があったことが記されていることは興味深い。

庫裏

龍淵殿の南に接する建物で、住持が日常生活を営む場であった。禅宗寺院において庫裏は台所を意味している。円覚寺のものは簡素な造りで寄棟、本瓦葺であったと云われているが、明確な規模や建物構造についての記録はほとんど残っていない。古写真も他の建物と比べてかなり限られることから円覚寺の伽藍の中で最も不明な点が多い建物である。創建年代についても不明である。聞き取りによると井戸に近い建物南西部に玄関があったとしている。平面図では建物床面積323.8㎡、基壇床面積474.3㎡となっている。

本建物がかつて存在していた場所からは礎石、溝、石列、方形石組遺構が確認された（第21図）。平面図と場所並びに規模がほぼ一致することから、それらは戦前まで残存していた庫裏の遺構にほぼ相違ない。庫裏の西側にあたる部分は旧琉球大学教員官舎によって破壊を受けているため、遺構は残存しない。

礎石は細粒砂岩製で庫裏のものとして元位置を保ったものが13基、確認された。柱間隔は東西が約1.2m、南北が約2m、軒近くが約1.2mとなっており、石材の大きさは16cm四方前後とほぼ均一の大きさに加工されている。この礎石の中でも中央部に方形の窪みがあるものが見られる。その窪みは平面形から角柱が据えられていたものと考えられる。

これら以外に礎石と想定される遺構が南東隅部においてL字状に8基確認された。それらはほぼ等間隔に並び、上面が面取りされた細粒砂岩であることから庫裏の建物を支える礎石、若しくは附属する建物の礎石である可能性が挙げられる。

溝は東西に約4.4m、南北に約17.3m残存している。南北のものは直接、龍淵殿の溝と繋がり、そのまま龍淵殿の東司跡にぶつかる。南北の溝の方向は南北が主軸で西に5°振る。東西の溝の方向は東西が主軸で北に8°振る。

方形石組遺構は南東隅で確認された。東西南面は石灰岩の切石を積み、その面を漆喰で固め隠している（第29図）。北面のみは漆喰面が傾斜している。同様の遺構が天界寺跡でも見られ、トイレ遺構としている。本遺構もトイレ遺構としての可能性は極めて高い。礎石から見た柱間隔は東西約1.4m、南北約2mである。

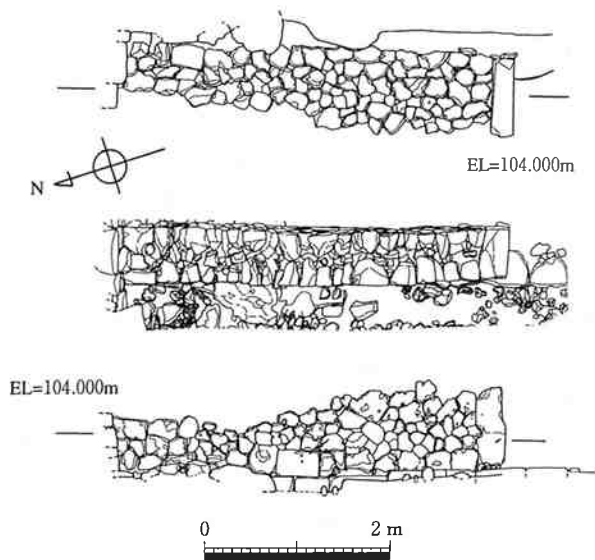
石列は北西側において石灰岩製の切石積みのものが検出された。不規則で且つ複雑に折れ曲がり、一部には溝状になっているものも見られた。庫裏から出る排水溝としての石列とも考えられるが、先の礎石のレベルから幾分、低い位置に設置されている。よって、庫裏とは無関係の遺構とも考えることができる。各石列の長さについては割愛する。

1756年に来琉した周煌は『琉球国志略』（1757年）において方丈の北に「香積厨」があったとする。その詳細については詳しく触れられていないがおそらく庫裏に相当する建物がこの辺りにあったと推測される。

井戸

庫裏と鐘楼の中間辺りに井戸が配置されていた。平面図では、西側半分が石敷き、東側半分が半円形の井戸枠から成る溜井のような井戸を描いている。聞き取りでは南側に石敷きが北側に隣接して2×1mの方形に切石で区切られた井戸枠があったとする。両者には整合性がないため厳密な形態については分からない。

井戸がかつて存在していた場所からは石敷き、溝、石列が確認された（第22図）。石敷きは西側部分が僅かに残存しており、かつてその南側には石造りの溝が南縁に沿って付設されていたのが確認された。東側は完全に破壊されており、石畳の一部、もしくは井戸枠の石材であった可能性のある切石が散乱していた。石敷きは石灰岩の切石を主に用いるが、中には直径約1mの歪な円形の細粒砂岩も用いられている。付属している溝は全て石灰岩を用いている。この溝は更に南側に分岐していることから城の下からの廃水がこの溝に流れ込んできたものと



第16図 庭園獅子窟間石牆

いて香積厨の側に「石冷泉」と呼ばれる井泉があったと記載している。おそらくその位置関係から今回、確認された井戸がこれに相当するものと思われる。

庭園

龍淵殿の北側にかつて広がっていた枯山水庭園。造園時期は不明であるが1719年に来琉した徐葆光は『中山伝信録』(1721年)に所収されている「圓覺寺右廡神主圖」に龍淵殿の北側に築山を象った中に「古松號神木」と、庭園を示唆するような記載をしている。少なくとも徐葆光が来琉した1719年以前に龍淵殿の北に接して庭園が存在していたと考えられる。1756年に来琉した周煌は『琉球国志略』(1757年)において「客座右の広庭」と記されており、当時の様子としては築山があり、かつて樹齢数百年の神木があったために古松嶺と呼ばれていると記載されている。今(1756年当時)は数本の小松並びに花木や奇石があちこちに配置されているともある。徐葆光の来琉時には神木の古松と記載されていたのが、周煌の頃には「今無」とあることから1719～56年の間に神木である古松は枯れてしまったものと推測される。戦前の状況については数葉の古写真のみからしか伺い知ることができない。それにはいくつかの細粒砂岩を使った立石と築山が配され、蘇鉄が各所に植栽されているのが分かる。

当該庭園があった場所から立石に使用されたと見られる細粒砂岩が20石と獅子窟との間を画する石牆が確認された(第27図)。石材は石灰質の細粒砂岩で沖縄産である可能性が高い。また県内では国頭地域や与那国島で採掘される石灰質ではない細粒砂岩も使用されており、遠隔地から運ばれてきた石材もあることがわかった。おそらく『琉球国志略』に記載される「奇石」はこれらに相当するものと考えられる。元位置を保っている石材は10石以上あることが古写真との比定で分かった。戦前までの旧土表面ではウルが全体的に薄く敷かれているのが確認されており、おそらく枯山水庭園では水として表現される白砂のかわりとしてウルを敷いたものと考えられる。因みに本地区の西側下層から全く性格を異にする遺構が確認された。これらの遺構に関しては次項で詳しく述べる。

石牆は南北に約3.6m、幅50cmのものが確認された(第35図)。平面図にも描かれており、上場は欠損しているが比較的良好に残存している。西面は、上部はあいかた積みで下部は切石積みとなり、根石部分は龍淵殿西側基壇の根石に続く。東面は全面、あいかた積みとなる。何れも地山から直に立ち上げている。面石の内側は全て裏込石を埋め込んでいる。

浮道

平面図には三門と仏殿、仏殿と龍淵殿、仏殿と御照堂、仏殿と鐘楼を各々結ぶ浮き道が記載されている。古写真においてもそれが確認でき、今回検出された遺構と整合できる部分も何か所か見られた。

仏殿と龍淵殿、仏殿と御照堂を結ぶ浮き道は旧琉球大学教員官舎設置の際に完全に破壊され、その痕跡を全く確認することができなかった。しかし仏殿と龍淵殿、仏殿と鐘楼とを結ぶ浮き道は破壊を受けているもののその一部を確認することができた。

考えることができる。

また、かつて井戸から左脇門へ至る参拝道があり、その道の側溝と思われる石造りの溝が一条、検出されている。切石で石灰岩を用いたもので、西側は破壊を受けているものの東西に約6.5mほど残存する。この溝の南側には締まりのある黄白色の細砂層が広がっていた。本層の上面レベルと溝における緑石上面のレベルとがほぼ一致することから、井戸から左脇門へ至る参拝道の床面である可能性が高い。この黄白色細砂層中とその下層から石列遺構が2基、検出された。ここで報告している井戸に関係する遺構との関係性が希薄なため、下層遺構として次項で報告する。

残念ながら戦後の旧琉球大学教員官舎による破壊が広い範囲に及んでいるために今回、検出された遺構のみでは井戸の全容を伺い知ることができない。今後において古写真等の新資料が発見されることに期待したい。

1756年に来琉した周煌は『琉球国志略』(1757年)にお

仏殿と龍淵殿を結ぶ浮き道はかつて、石畳と塼敷きから成っていた。かつては縁石で縁取った中に塼を敷き、それから一段低く、南北に接して石畳を敷いていた。そのうち、南隣にあった石畳が確認された。北側から土圧を受けたのかやや南寄りに崩れているものの旧状は把握できる程度に残存していた。

仏殿と鐘楼を結ぶ浮道は長方形に加工した石を両側面に4m並べ、先述したように南側は溝が東西に走り、北側は仏殿基壇根石でそれぞれ約2.6mの幅で画してつくられていた(第25図)。その画された内部に関しては破壊を受けているため、詳細は分からなかったものの、古写真から土を込め入れていたと思われる。因みに画された内部には沖縄産施釉陶器の香炉が逆さに埋め込まれていた。

禅宗寺院の伽藍配置は三門、仏殿、法堂、方丈といった主要建造物が一直線上に並ぶのが特徴であるが、その建物間を結ぶために回廊を設置する。円覚寺の場合、回廊は設置されていないが、伽藍の主軸を重視してか三門－仏殿－龍淵殿の間のみ、塼敷きの浮き道を配置する。主軸となり得ない浮き道には塼を敷かないことから、塼敷きに対する特別な意識を垣間見ることができる。

石 牆

石牆は『首里古地図』には東南北面に配置されており、平面圖においても同様の石牆が記されている。北側は右脇門まで続き、東面は円覚寺松尾を、南面は城の下をそれぞれ画していた。

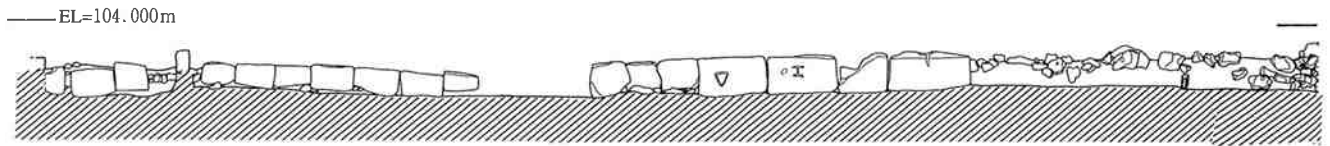
この石牆が今回の調査において良好な状態で残存していたことが確認された(第34、35図)。北側、南側ともに西側が旧琉球大学教員官舎設置の際に、北側は琉大グラウンドに伴う排水暗渠によって上場が破壊を受けていたが、残存高約4m、長さは北側約20m、東側約40m、南側約9mと当初の予想以上に残存していた。何れも石灰岩の切石を用いたあいかた積みで北側においては地山直上から立ち上げられていたことが確認された(図版27-5)。東側においては更に東側に長さ15mの石牆が確認され、2重構造となっていたことも確認された。平面圖には記されていないが『首里古地図』にはそれに比定される石牆が描かれている。平面圖を記した田辺泰氏の見落としか、当時すでに埋没していたのかは定かではないが、出土遺物を見る限りにおいては遺構埋土は戦後の攪乱層であった。一方で庭園史研究で知られる吉永義信氏の論考によると庭園背後の石牆も2重構造であり、この構造によって庭園との調和が図られているとある。氏が撮影した古写真にもその様子を伺うことができる。

また、北側石牆西側の破壊を受けている部分から時期不明の石積みが2基、確認された。時期差も考えられるが、沖縄では石積みを高く築く場合、面を有した石積みを裏込め石で前面を覆い、更に外側に面石を積み上げるという工法が見られる。裏込め石で覆われた石積みは外側のものと比べて、石材の加工が粗い場合が多い。北側の石牆に伴う石積みである可能性をここでは掲げておく。

左脇門

円覚寺の正面入口にあたる総門の南北に脇門が配置されていた。創建年代は不明であるが『首里古地図』ではすでに描かれている。沖縄戦によって破壊されたが、昭和43(1968)年に琉球政府文化財保護委員会によって右脇門が完全復元され、左脇門もアーチと屋根部分を除いて復元された。総門は正月などの特別な日や王族の参拝以外は普段から閉ざされ、一般参拝者は右脇門から入って参拝し、左脇門から出ていくという参拝ルートであった。

左脇門に伴う遺構としては円覚寺境内へ至る石畳と側溝が確認された。石畳は左脇門前から西に約2.8m残存している部分と左脇門下部のものに分けられる。前者は西側が漸次低くなるような傾斜をもった石畳で、途中で南北に溝が横切っている部分にまで設置される。幅に関しては一部、破壊を受けているためと調査区の関係で確認できなかった。この石畳には南側に側溝が走っており、約8.8mが残存していた。この溝は石造りで左脇門の石牆下部から、円覚寺境内からの廃水を排水している。これら石畳と側溝は西側において戦後の破壊を受けているため、どのような導線で円鑑池へ排水されるのかは不明である。南北に石畳を横切る溝より西側には石畳は見られずウル敷きとなる(第28図破線内)。後述する石積みや東西に走る溝の縁石と思われる切石がウル敷き上に散乱していた。聞き取りではかつてこの石畳を「ボウズミチ(坊主道)」と呼んでいたとされる。後者は敷居石が中央に設置され、東側は南北に走る溝で西側は切石の縁石で画し、その中に切石をはめ込んでいる。西側縁石の北に接して左脇門石牆下部から総門基壇まで続く、石造りの溝が設置されている。いずれの石畳も使用される石材の大きさは様々で上面を不整形に加工した石灰岩を組み合わせて石畳を形成している。左脇門前の石畳の南側にはコンクリを噛ませた野面の石積みが見られる。石の組み方が稚拙であることと、コンクリが使われていること、平面上の一貫性が見られないことから、戦後に設置された石積みである可能性が高い。この石積み周辺からはガラス、コンクリ片、鉄片、現在使用されている花活け用の瓶や小杯といった現代遺物が大量に出土して



第17図 龍淵殿地区石列(3)

いる。これらの周辺には現代の参拝者がつくったと思われる拝所がいくつか見られることから、戦後につくられ、しばらく使われた後に埋没してしまった拝所であると思われる。因みに聞き取りでは、左脇門から首里城久慶門一帯は琉球大学造成時に大幅な地形改変が行われている。

II 下層遺構

戦前まで残存していた建物以外でそれらの下部から検出された遺構を報告していく。部分的な発掘で確認されたものが大半であるため、各々の機能に関しては判然としない。よって、各遺構の種類別に報告していく。

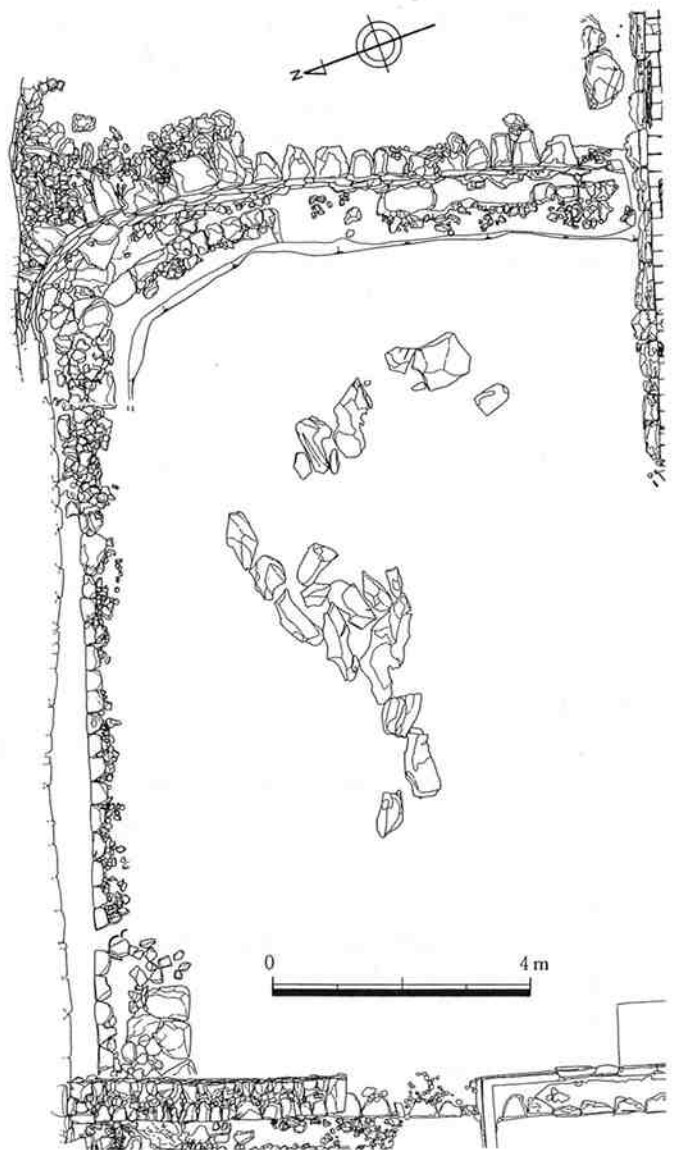
石列

石列1

龍淵殿の下層を南北方向に石列が点在しており、その内の最北端に位置する(第26図)。長さは約2.4mで石灰岩の切石が3個配置される。石積み1、2の根石並びに石列2とは石の大きさがほぼ同じである点、西面している点、そして延長方向が一致する点からそれらとは一連のものであると考えられる。龍淵殿北辺基壇の羽目石、溝によって石積み1と分断されている。石積み1の根石並びに石列2とほぼ大きさは同じである。

石列2

石列1と同様、龍淵殿下層を南北方向に西面する石列(第20、26図)。東司跡のほぼ西側に配置されており、長さ約3.3m、切石4個から成る。石列1と石材の大きさ、方向に関しては大差はないが、上面が平坦に加工されている点のみ、異なる。これは方形石組遺構が構築された際に床面として利用するために加工されたものと考えられる。石積み1、2の根石並びに石列1とは石材の大きさがほぼ同じである点、西側に面を有している点、そして延長方向が一致する点からそれらとは一連のものであると考えられる。なお、庫裏下層に西側に面を有した切石が1つ見られ、面の方向と石の大きさから石列1、2、石積み1と2が一連のものと考えられる。



第18図 庭園地区石列(5・6・7)石積み(1)

石列 3

龍淵殿西辺基壇の北側延長上で南北方向、西面する石列。長さ約8.3m、切石14個から成る。それらは地山直上に据えられ、控え部分には裏込め石が見られる。切石の面には陰刻で「口」「L」といった印が刻まれている(第17図・図版20-8、21-1～3)。龍淵殿西辺基壇と方向と切石面を同じくしていることから戦前までの龍淵殿西辺基壇の根石として利用されていたと考えられる。この石列の更に北側延長部分は庭園と獅子窟とを画する石牆の根石へと続く。

石列 4

龍淵殿北辺基壇の西側延長上で東西方向、北面する石列。長さ約8.8m、切石15個から成る(第31図)。それらは地山直上に据えられ、控え部分には裏込め石が見られる。

各切石の上面は平坦に加工されていることと、裏込め石の存在からある程度の高さにまで立ち上げられていたと想定される。西端は西側から圧を受けたためか割れている切石、並びに北側にやや石列の方向がずれているのが確認された。また、切石の面には陰刻で「口」「工」といった刻印が2個所で確認された。(図版21-4) 西側は琉球大学教員官舎の基礎により一部破壊を受けているが、全体として残存状況は良好である。

石列 5

庭園の北側、石牆の際に北面する石列が確認された(第18、27図)。この石列は庭園西側石牆下部を通り、獅子窟北側の石敷きの北縁となって獅子窟西側辺りまで続いている。長さ約26.2m、石灰岩の切石を用い、裏込め石も見られることからある程度の高さまで積まれていたと想定される。庭園西側で石積み1に沿って緩やかに南側へ方向を変える。また庭園西側辺りで一部、石列が切れる部分が見られる。そこから南東方向に平瓦を2列に並べた溝3が設置されている。

石列 6

庭園の南東側、龍淵殿北側の埦敷きの溝の下部から南北方向で東面する石列が確認された(第18図)。石灰岩製の切石を用いており、石列5の東側方向に繋がる可能性が指摘できることから、石積み1に沿う溝の縁石であったと考えられる。4個の切石が配置され、長さは約1.1mである。因みにこの辺りは円覚寺の中でも地下水が特に湧き出る部分である。

石列 7

庭園の南西側から庭園西側石牆下部を通り獅子窟基壇まで続く石列である(第18、27)。東西方向で南面し、地山直上に据えられている。石灰岩製の比較的大きい切石を用いており、長さは約3.5m続く。面の加工は粗い。

石列 8

庭園の北東側、東西方向で南面する石列。比較的大きい石灰岩の切石、2つから成る(第18図)。石列7と同様に面の加工が粗いこと、方向は同じくしていることから同一の石列であった可能性が挙げられる。東側は石列5によって切られている。

石列 9

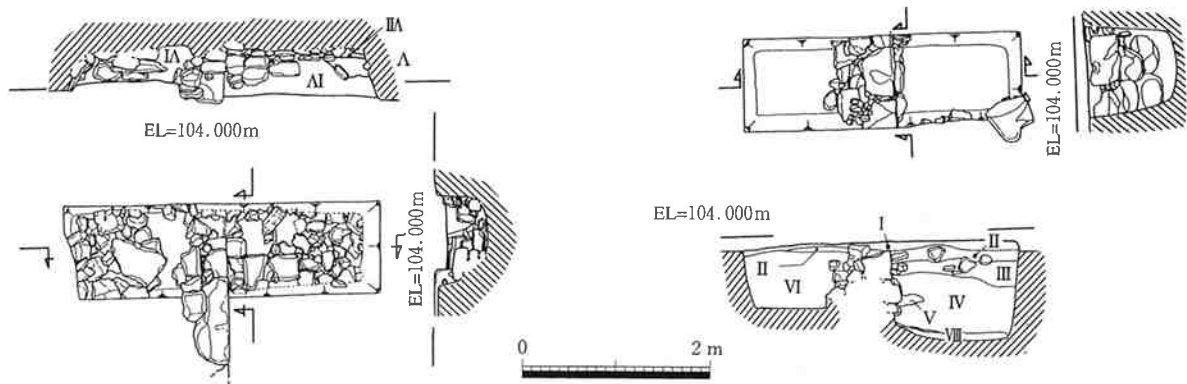
井戸の西側、左脇門へ続く参拝道の床面を形成する黄白色細砂層の下にニービの塊のみで形成される層が見られ、その下部から東西方向で南面する石積みが見られた(第30図)。トレンチ掘りのため全容を把握することはできなかったが、約1.5m検出した。石灰岩製の切石を用いているが、裏込め石が見られないためそれ程高く積み上げられていなかったと思われる。

石列10

井戸の西側、左脇門へ続く参拝道の床面を形成する黄白色細砂層の上面から検出された(第30図)。途中で切れる部分も見られるが約4mにわたって確認された。石列9と同様に東西方向で南面し、石灰岩製の切石を用いる。裏込め石が見られないためそれ程高く積み上げられていなかったと思われる。途中で切れる部分も見られるが長さ約4.6m、確認された。

石列11

鐘樓の南側を画する溝の西側で南面する石列(第24図)。石灰岩製の比較的小さな切石を用い、裏込め石は見られない。西側は旧琉球大学石牆で破壊され、東側は鐘樓南側の溝の下部へ延びていく。上層遺構との関係で長さ約0.9mのみ確認することができた。井戸から延びる参拝道の北側側溝と同軸上であり、その関係が指摘される。



- I (第1層) 茶褐色粘質土
- II (第2層) 暗灰色粘質土 (2 cm前後の炭と砂を多く含む)
- III (第3層) 暗褐色粘質土 (30cm前後の石灰岩礫を多く含む)
- IV (第4層) 黄褐色粘質土 (5 cm前後のクチャを少し含む)
- V (第5層) 暗褐色粘質土 (2 cm前後の炭を少し含む)
- VI (第6層) 明茶褐色粘土層 (クチャ、ブロック、スミが混入)
- VII (第7層) 明橙色粗砂層 (小礫を多く含む)
- VIII (第8層) 灰色粘土 (クチャ硬く締まる)

第19図 龍淵殿地区南側基壇確認トレンチ (土色については「標準土色帳」に基づいて観察を行った。)

石列12

仏殿基壇南辺の裏込め石部分、東西方向で南面する石列 (第25図)。仏殿基壇南辺の根石に伴う裏込め内から検出された。石灰岩製で粗加工の切石、13個から成る。仏殿基壇南辺の根石と同軸で、東側は仏殿基壇東辺の根石で切られ、西側は仏殿と鐘樓を結ぶ浮道辺りまで残存する。長さは約9.2mで途中3箇所切れている部分がある。

石積み

石積み1

庭園の東側を画する石積み (第18図)。円覚寺境内の北側を画する石牆から緩やかに南へ方向を変えながら途中で分岐し、龍淵殿北側の塼敷きの溝によって切られるまでの長さ約5.5mが確認された。石灰岩製の切石を用いたあいかた積みで裏込め石も確認された。根石は地山直上に比較的大きな切石を据えている。北側石牆接続部近くで天端部分が残存していたため、根石からの高さは約2mであったことが確認された。積み方を観察すると幾度か組み直された形跡が見られ、特に北端において緩やかに弧を描きながら北西方向へ突出している部分が最も注目される。その延長軸と切石の大きさから推測するに石列7、8と繋がっていた可能性が高い。また、南端においては石列1、2、石積み2の北端部分と同軸上であることと、石材の大きさがほぼ共通すること、裏込め石が見られることからこれらが一連の遺構として繋がっていた可能性が高い。古写真を見る限りではこの石積みは昭和初期には埋没し、築山が築かれていたことが確認できる (吉永1968)。

石積み2

庫裏の南側にある石積み (第29図)。円覚寺境内の南側を画する石牆から緩やかに北へ方向を変えながら分岐し、庫裏南側の溝によって切られるまでの長さ約3.5mが確認された。残存最高部は約1mあり、石灰岩製の切石を用い、あいかた積みで裏込め石も確認された。

地山の上に砂利層が堆積しその上部に比較的大きな根石を据えている。また、裏込め石は地山直上から込められている。先述したように石積み1、石列1、2と一連の遺構である可能性が高い。

石積み3

石列4と方向を同じくしその北側に設置されている石積み (第31図)。石灰岩製の切石を用い、あいかた積みで長さ約6.2m、確認された。最も高い部分で約0.4m、東側は龍淵殿北側の塼敷きの溝の下部へ続いていき、西側は旧琉球大学教員官舎設置による攪乱によって破壊されていた。裏込め石も確認され、控え部分から石列4の面まで密に入っていた。石列4からの出土遺物と比べて時期的に新しくなることから石列4の後補として構築されたものと考えられる。

遺構埋土からは赤瓦、ガラス片が少ないながらも出土しているという点とこの部分の龍淵殿上層遺構が破壊を

受けている状況から戦後暫くの間、地表面に本遺構が露出していたものと考えられる。

石積み4

龍淵殿と庫裏との境目に東西方向で南面する石積み。龍淵殿の基壇南辺を確認するために試掘坑を2本トレンチ①、②入れた結果、確認された(第19、26図トーン部分)。この石積みは上場が欠損しており、切石で控え部分の裏込め石が見られるがあまり多くは込められていない。この石列の東側延長方向に龍淵殿の礎石があり、戦前の龍淵殿遺構レベルから比べても下部にあたる。また、東側延長方向にある礎石の下部に石列は見られないことからこの石列を一度埋めて、その上に礎石を据えたと考えられる。建物の基壇と考えることもできる。

石積み5

鐘楼南東側の東西方向に延びる石積み(第30図)。南面し、上場は欠損している。調査区の関係でその範囲と根石部分を確認することはできなかったが、確認された高さは1.9mで上からあいかた積み、切石積み、あいかた積みの順で組まれていることが確認された。このことから少なくともこの石積みは2回、積み直しが行われたと言える。最上部のあいかた積み、中位の切石積みの面は整合されるが最下部のあいかた積みの面とそれらは検出された東端において南の方向にややズレが見られる。裏込め石も調査区外北側へと続き、その厚みから非常に高い石積みであったとする可能性も挙げられる。鐘楼の南側を画する溝と同軸上であることからその関係性が示唆される。

石積み6

石積み4に取り付く石積み(第19図)。南北方向に西側に面を有する切石を3つ並べており、内側には裏込め石も見られる。最も南側に配置される切石は南側にも面を有していることから、この部分から方向を西側に変えて切石を配置していたものと思われる。龍淵殿南辺のほぼ中央部に位置していることと併せて考えると、階段や踏み石的機能を有した遺構であると想定することができる。

集石

集石1～12

集石は12基確認された(第26図)。大きさが区々の石灰石をもちいており、ほぼ等間隔に配置される。かつて龍淵殿があった場所の東側に位置する琉球大学教員官舎の基礎を挟んで北側に10基、南側に2基確認された。何れも龍淵殿の範囲内で各々の位置は平面圖に描かれた龍淵殿の柱位置とほぼ一致する。龍淵殿の基壇西辺辺りは破壊を受けており、確認することはできなかった。当初、龍淵殿の根石の基礎部分と想定されたが北西部に残存する根石下部にそのような集石が見られないことから、戦前まであった龍淵殿より古い時期の遺構と考えられる。礎石の基礎部分と想定されるが確たる論拠はない。

集石13

石積み4の南側、溝1の東側からこぶし大の石灰石が密に見られた(第30図)。溝1構築時の床面であったと考えられるニービの塊のみで形成される層の更に下層で確認された。石積み4から見ると最下部のあいかた積みを埋め込むように石灰石が集積されているようにみえる。調査区の関係で全容を確認することはできなかったため、その機能に関しては不明である。なお、円覚寺境内のほぼ全域において地山はクチャ層であり、水捌けはあまり良好ではない。境内に諸所に溜まった水は境外へ排水されるように溝が各所に配置されていることがそれを物語るが、この集石周辺は水捌けが良好で、調査中この周辺が冠水したことは一度も無かった。今回の調査では調査区と調査日数の関係で更に下部の遺構を確認することができなかった。おそらくこのような水捌け状況から当該地区周辺では相当下部まで遺構が埋蔵されているものと思われる。

溝

溝1

石積み4の面と直交する石造りの溝(第30図)。調査区の関係で全容を確認することはできなかったが南北方向に長さ約1m確認することができた。溝の床は石材を用いない点、また西側の縁石はあいかたに積まれており、東側の縁石とはレベルが異なる点が特徴的であると言える。東側縁石の控え部分には裏込め石は用いず、ニービの塊のみで形成される層が広がる。西側縁石の控え部分には裏込め石を用いているため、本格的な石積みであった可能性が指摘できる。南側に広がる井戸の西側、左脇門へ続く参拝道の床面を形成する黄白色細砂層の下層へ延びていく。

溝2

庭園西側において石列5に取り付く溝(第18図)。素掘りで幅は約20cm、北西-南東方向で、平瓦の凸面を向

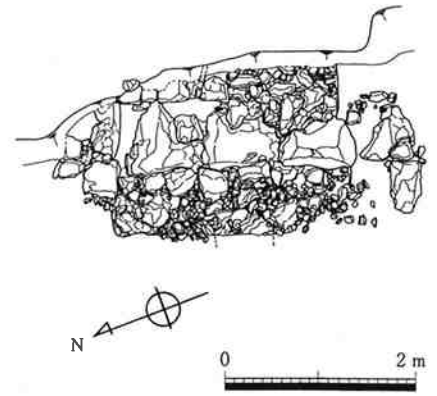
かい合わせて溝の縁をつくる。おそらく庭園の中心部近くまで延びると思われるが上層遺構との関係でわずか長さ30cmを検出したに過ぎなかった。実用的な溝ではなく鑑賞に耐え得る意匠的な溝である。

溝3

庭園西側の石牆近くで確認された。溝2と同様、素掘りの溝で平瓦の凸面を向かい合わせて溝の縁をつくる。但し、床面に黒色の丸石を敷き、東から西へと傾斜を有する点で異なる。西側石牆トレンチ第2層下面、第3層上面に位置する。幅は約10cmで北東-南西方向、上層遺構との関係で長さ30cmを検出したに過ぎなかった。この溝も実用的な溝ではなく鑑賞に耐え得る意匠的な溝である。

方形石積み

龍淵殿東司跡の西側に位置するコの字状の方形石積み(第20図)。東西北側に面を有し、石灰岩の切石をあいかたに組み、石列2の上面を平坦に成形して床を形成する。東西北面の石積みには裏込め石が見られ、上場を欠損するものの残存高は約40cmある。南側は戦後に破壊を受け、その南限は分からなかった。東面は約2.3m、西面は途中で一部切れるが約1.9m残存していた。本来、平面形は長形状であったことが想定される。この圍繞された内部に木炭と火を受けた明朝系瓦が大量に出土した。おそらく1721年に焼失した龍淵殿の部材と瓦を一括して廃棄した場所でもあり、同年に龍淵殿再建の際にこの方形石積みも共に埋蔵されたと考えることができる。なお、この方形石積み遺構の床面からは地下水が大量に湧き出た。



第20図 龍淵殿地区方形石積み

小括

今回の調査における最大の成果としては、平面圖や古写真に見られる戦前まで残存していた遺構の残存状況を全域において把握することができた点にある。旧琉球大学教員官舎によって境内の北西一帯と龍淵殿の中心部、井戸一帯が、琉大グラウンドに伴う石牆により三門と仏殿との間が破壊を受けていた。それ以外は厳密な建物規模や配置を伺い知り得る程に、残存状況は良好であった。

これらの成果から平面圖と検出された遺構との間に若干の相違が見られた。それを箇条書きにして以下にまとめる。

1. 平面圖では総門、三門、仏殿、龍淵殿が東西軸に一直線上に並ぶが、総門、三門の軸線に対して龍淵殿、仏殿の軸が北へ $2^{\circ}5'$ 振っている。
 2. 東側の石牆は平面圖においては一重であるが、更に東側において石牆が検出された。北側から南側を結ぶ一連の石牆とは全く接することなく、東側約3mの控えを有して配置される。『首里古地図』においてはこの石牆は描かれている。
 3. 平面圖では左脇門から井戸へ至る参拜道が井戸手前で南側に緩く折れるが、検出された遺構から、右脇門から井戸までほぼ直線上に参拜道は結んでいる。
 4. 平面圖では龍淵殿の全ての柱間が均等に描かれているが、検出された礎石の位置から外側1間はやや狭小であることが確認された。
- 2に関しては戦前時には埋没していた可能性も指摘できるので今後の聞き取りなどによる検証の必要があるが、1、3、4については田辺泰が意図する平面圖の精度が見て取ることができる。柱の正確な位置や、伽藍配置軸の若干の振れ、そして主要建物以外の記載は簡略的に描かれているといった特徴が見られる。田辺は他に崇元寺、末吉宮の建物図面や建物配置図を描いていることからこのような視点でそれらの図面を見ていく必要がある。また、平面圖では庫裏は建物輪郭のみで柱配置に関しては省略されている。今回の調査において礎石が確認されたことによってある程度の柱配置が明確となった。また庫裏の南東隅は張り出しが見られることが確認され、その部分がかつてトイレであったことが遺構の状況から確認された。

下層遺構においては上層遺構が戦後の造成等によって破壊された部分でのみの確認を行ったが、調査面積の関係でそれらの全容を把握できた遺構は少なかった。しかし、円覚寺の各所において石列、石積み、集石、方形石積み、溝といった多様な遺構が検出されたことによって、幾度かの建物の建て替え若しくは建物変遷があったことが確認された。以下、簡単に概要を付す。

庭園から獅子窟にかけては遺構の切り合いから少なくとも3回の遺構変遷が見られた。第1期として石列7、

8が配置される時期。そして石積み1の北端において緩やかに弧を描きながら突出している部分が一連の遺構となる。石列7、8の各石材が比較的大きいことと裏込め石が見られることから、これらの延長上にすりつく石積み1のような石牆であったことが指摘できる。この石積み1は石列1、2を經由して石積み4へ、といった一連の石牆であったと思われる。第2期として石積み1はそのまま残り、石牆が北側に拡張していく時期。石列5が東西に走り、東端で石積み1に沿って南に方向を変える。石列5の西端は獅子窟の西端まで残存する。おそらく円覚寺境内の北側を画するような遺構であったと想定される。石列5に取り付く溝2や庭園西側で確認された溝3の形態から、おそらく曲水を配置する池泉鑑賞式のような庭園があった可能性が指摘できる。第3期としては戦前の古写真に見られるような立石を各所に配した枯山水庭園が見られる時期。石積み4や庭園側の石列5は埋没し、獅子窟側の石列5は獅子窟に伴う石敷きとして利用される。獅子窟と庭園を画する石牆がつけられ、獅子窟の基壇並びに石敷きもこの頃に築造されるものと考えられる。

龍淵殿においては3回の遺構変遷が遺構の切り合いから確認された。第1期として石積み1、石列1、2、石積み4を結ぶ石牆が配置される時期。第2期として龍淵殿北辺基壇の下層において確認された石列4と石積み3が、南側の庫裏との境辺りの石積み4、6が配置される時期。各遺構の上面が上層遺構によって破壊されていることから文献史料で伺える1721年に焼失した大殿の遺構である可能性が高い。龍淵殿の下層遺構を全面検出していないが、東西南北面において基壇を形成する建物であったと考えられる。また、東司跡西側の木炭や瓦といった遺物が一括して埋蔵されていた方形石積みも出土した瓦からこの時期の遺構に比定することができる。第3期としては大殿が焼失した同年に再建された龍淵殿に伴う基壇遺構が設置された時期である。

仏殿においては2回の変遷が遺構の切り合いから確認された。第1期として石列12が配置される時期。仏殿は1588年に改修を受けており、その際に基壇の南辺を南側に拡張、若しくは移動する以前の基壇根石が石列12に比定されるものと思われる。第2期としては1588年から沖繩戦によって焼失するまでの仏殿である。

聞き取り調査によると鐘楼の西側と庫裏の間にはかつて畑があった。この周辺から石積み5、集石13、溝1が確認された。少なくともこの地区は2回の遺構変遷があったものと考えられる。第1期として先の石積み5、集石13、溝1が設置される時期。これらの全容に関しては把握できないため、一括として現段階では取り扱わざるを得ない。1756年来琉した周焯はこの場所に僧寮が配置されていたとし、おそらくそれに関係する遺構と思われる。戦前の古写真並びに平面図には僧寮は見られず、その場所は板塀で北側を区画した内側に畑らしき畝が見られるのみである。よって僧寮がいつ頃に取り壊されたかは文献資料においては明らかではない。尚、この場所が畑として利用されていた時期を第2期とする。

三門周辺においては下層遺構を全く確認することはできなかった。参考までに庭園・獅子窟周辺を庭園・獅子窟地区、龍淵殿周辺を龍淵殿地区、仏殿周辺を仏殿地区、畑周辺を畑地区と仮称し、それぞれ地区から検出した下層遺構の動態を表1にまとめてみた。

<参考文献>

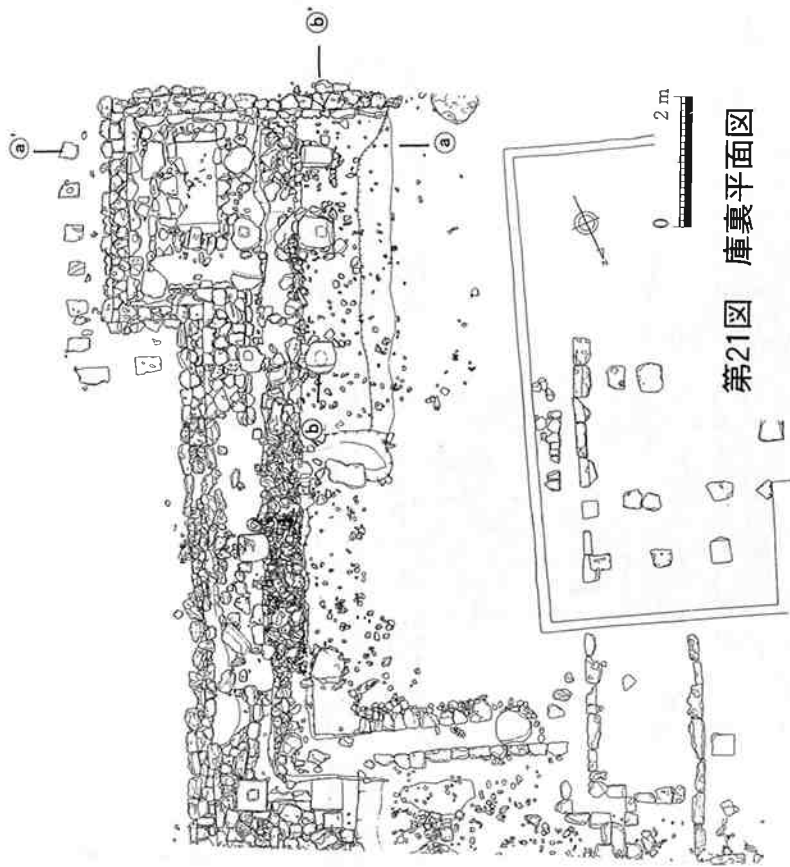
吉永義信「琉球庭園」『日本文化としての庭園』誠文堂新光社 1968

古塚達夫『名勝「識名園」の創設』上巻 ひるぎ社 2000

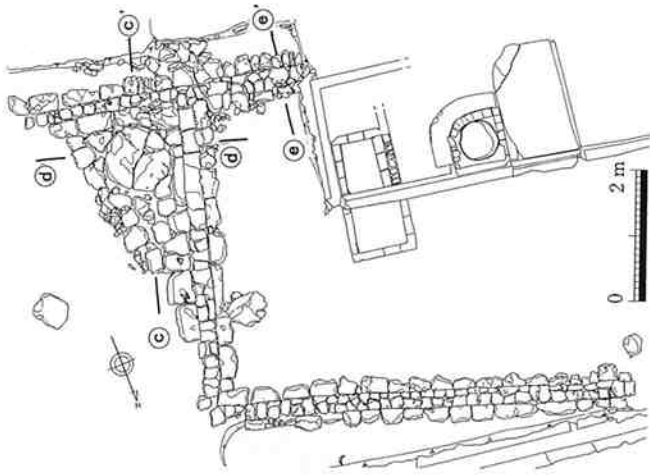
田辺 泰『琉球建築』座右宝刊行会 1936

第1表 遺構変遷表

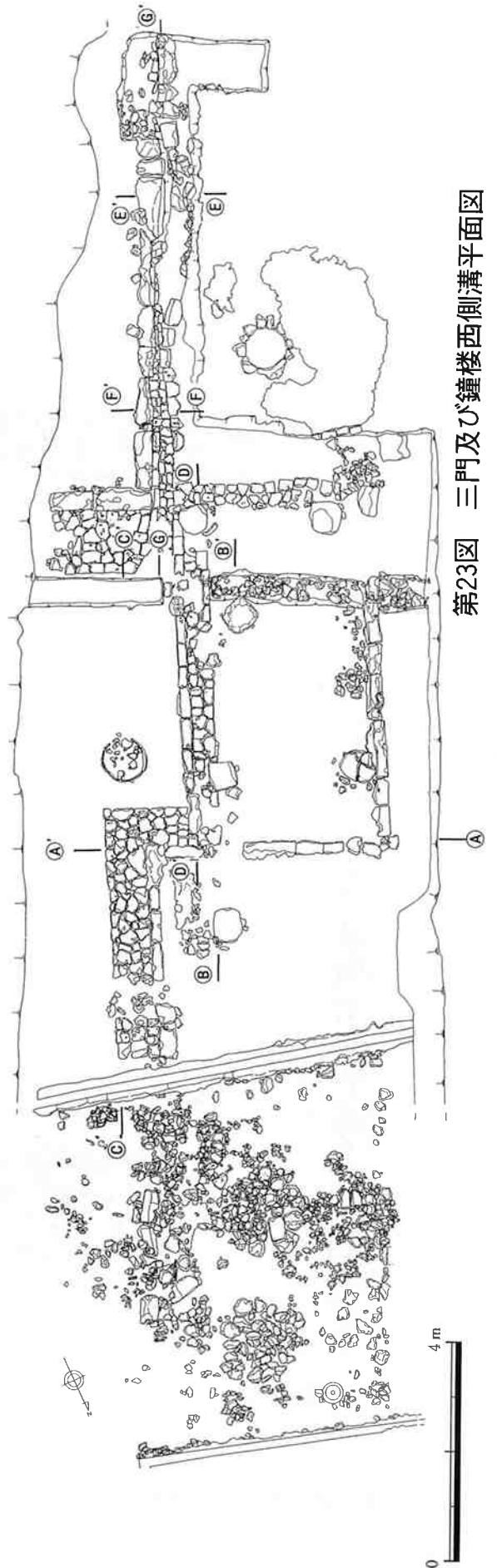
	龍淵殿地区			庭園・獅子窟地区			仏殿地区		畑地区(僧寮跡)	
	第1期	第2期	第3期	第1期	第2期	第3期	第1期	第2期	第1期	第2期
創建時(1492)										
仏殿改修時(1588)										
三門、大殿改修時(1596)										
徐葆光来琉時(1719)										
龍淵殿焼失、再建時(1721)										
上、下御照堂改修時(1728)										
鐘楼移築時(1744)										
周焯来琉時(1756)										
沖繩戦焼失時(1945)										



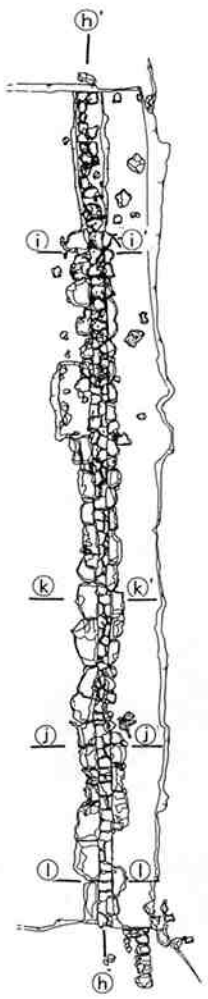
第21図 庫裏平面図



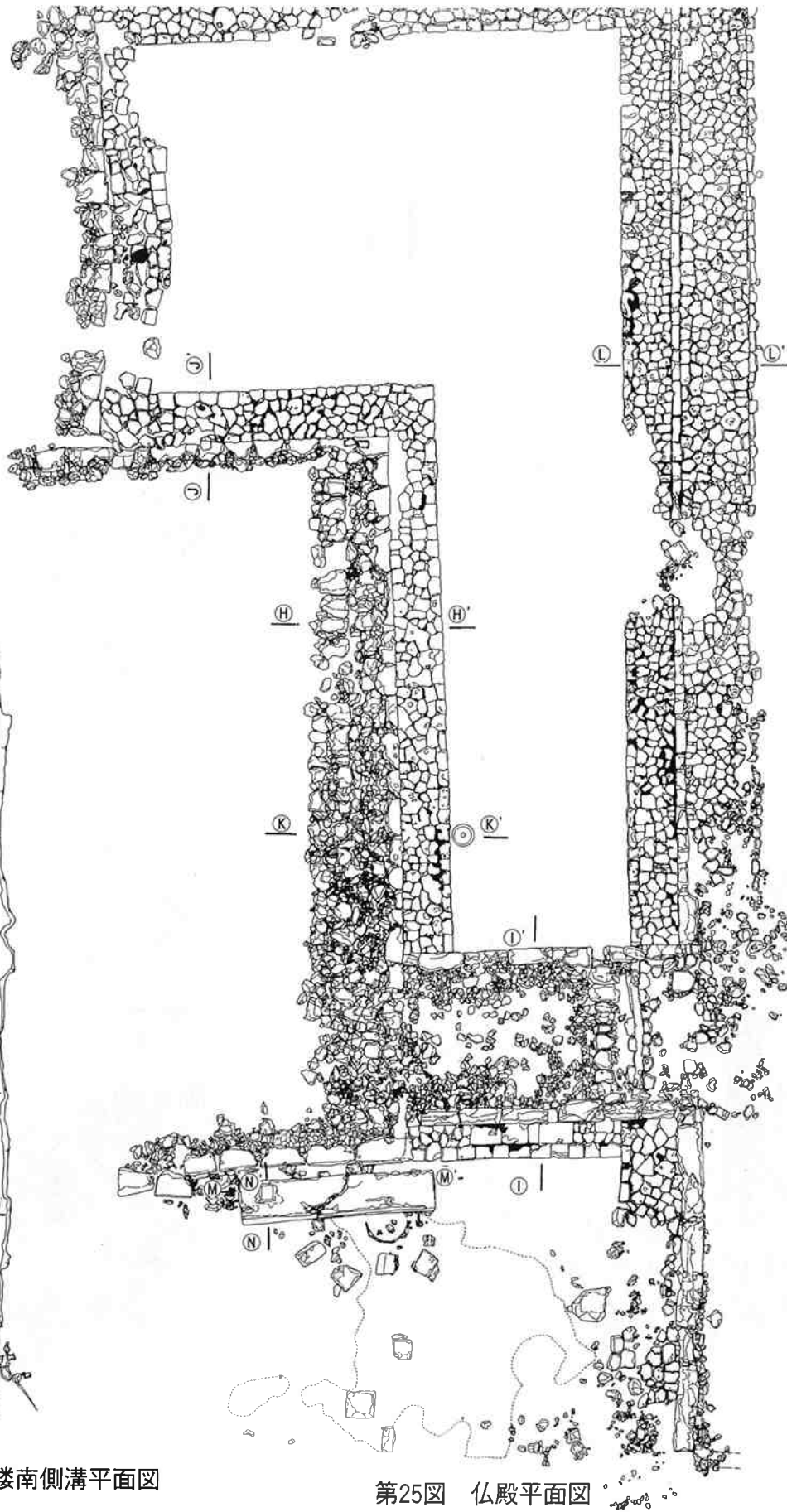
第22図 井戸地区平面図



第23図 三門及び鐘楼西側溝平面図

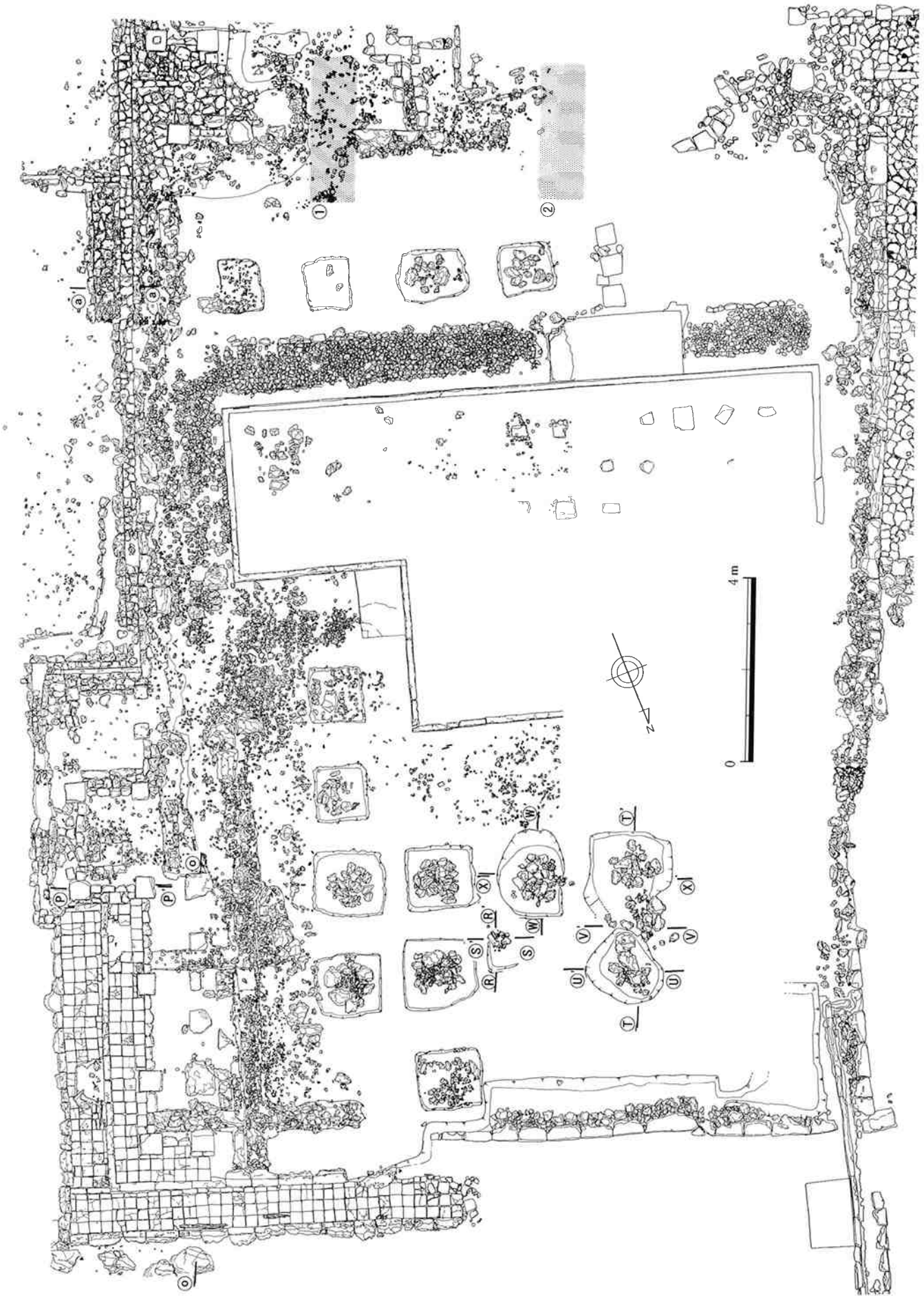


第24圖 鐘樓南側溝平面圖

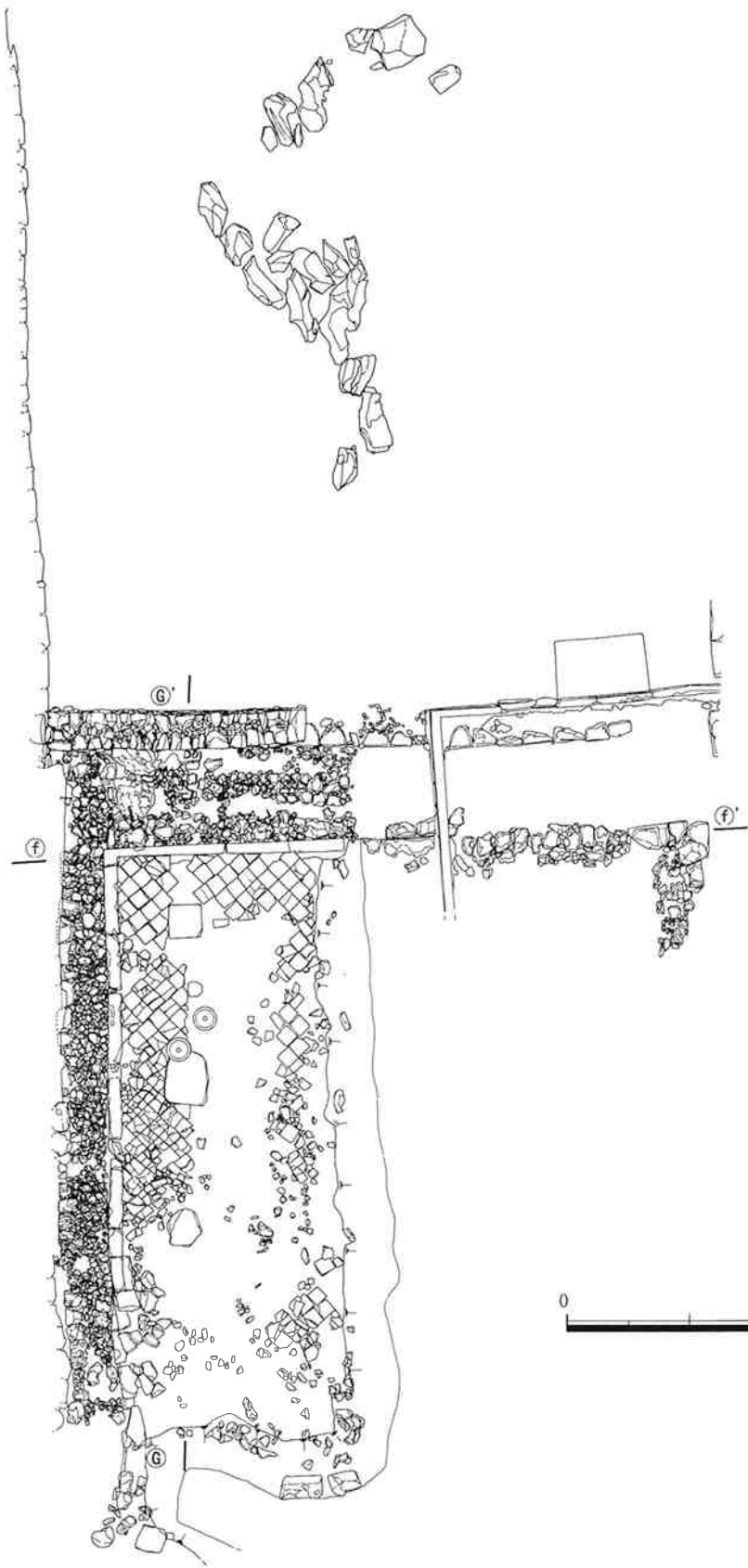


第25圖 仏殿平面圖

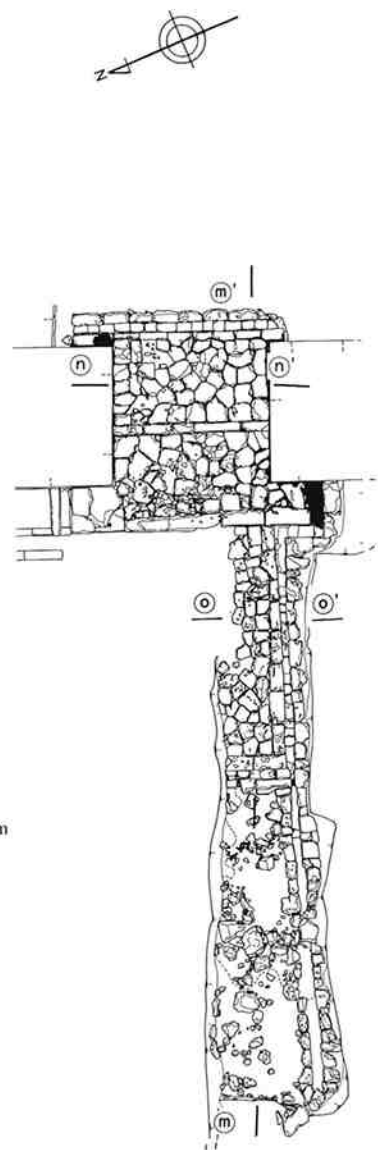




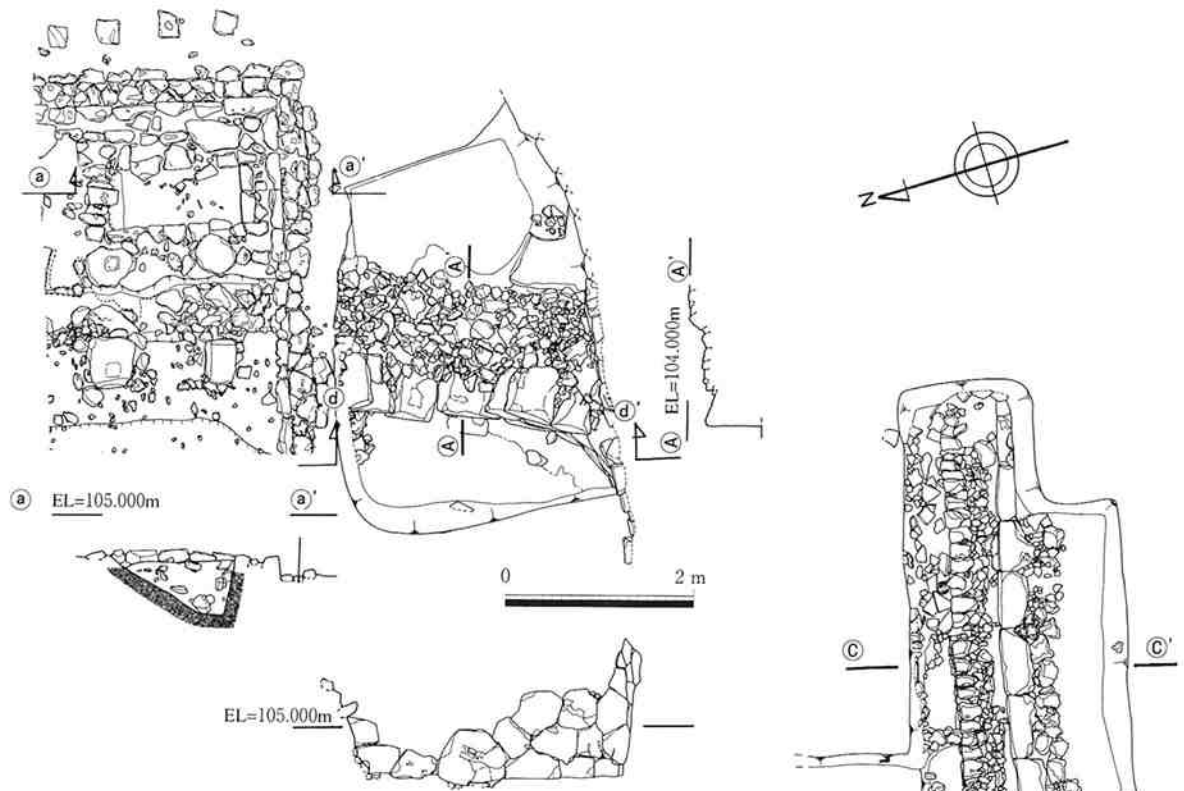
第26図 龍淵殿平面図



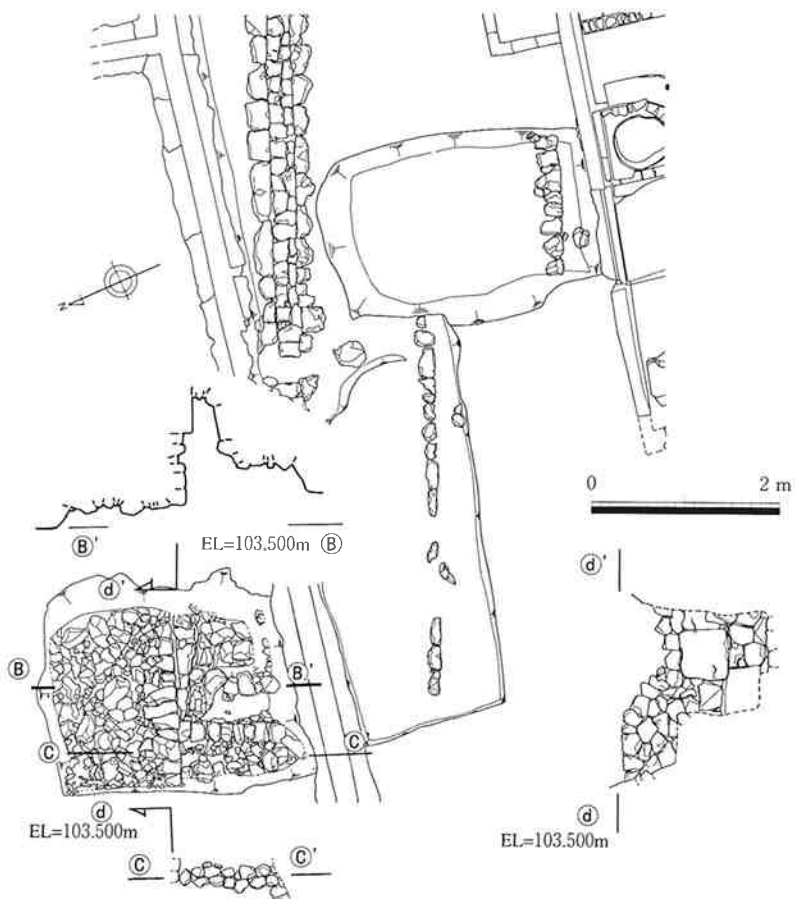
第27図 庭園、獅子窟平面図



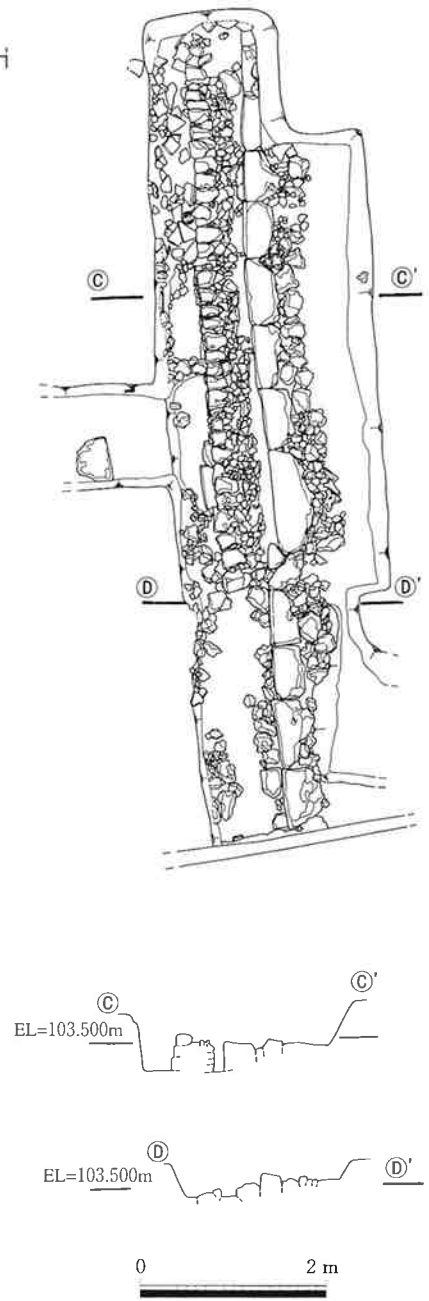
第28図 左脇門石畳平面図



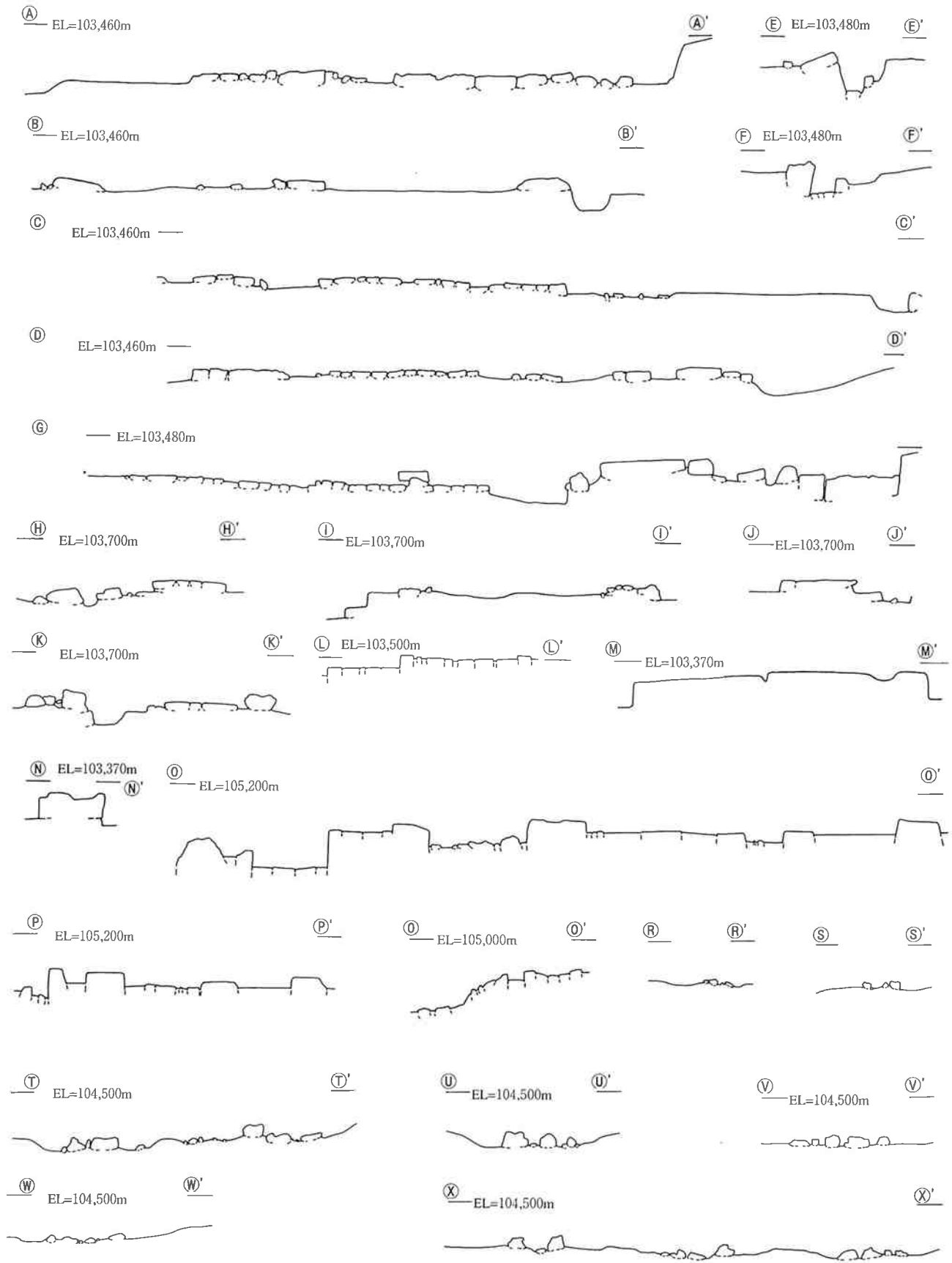
第29図 庫裏地区方形石組遺構石積み(2)



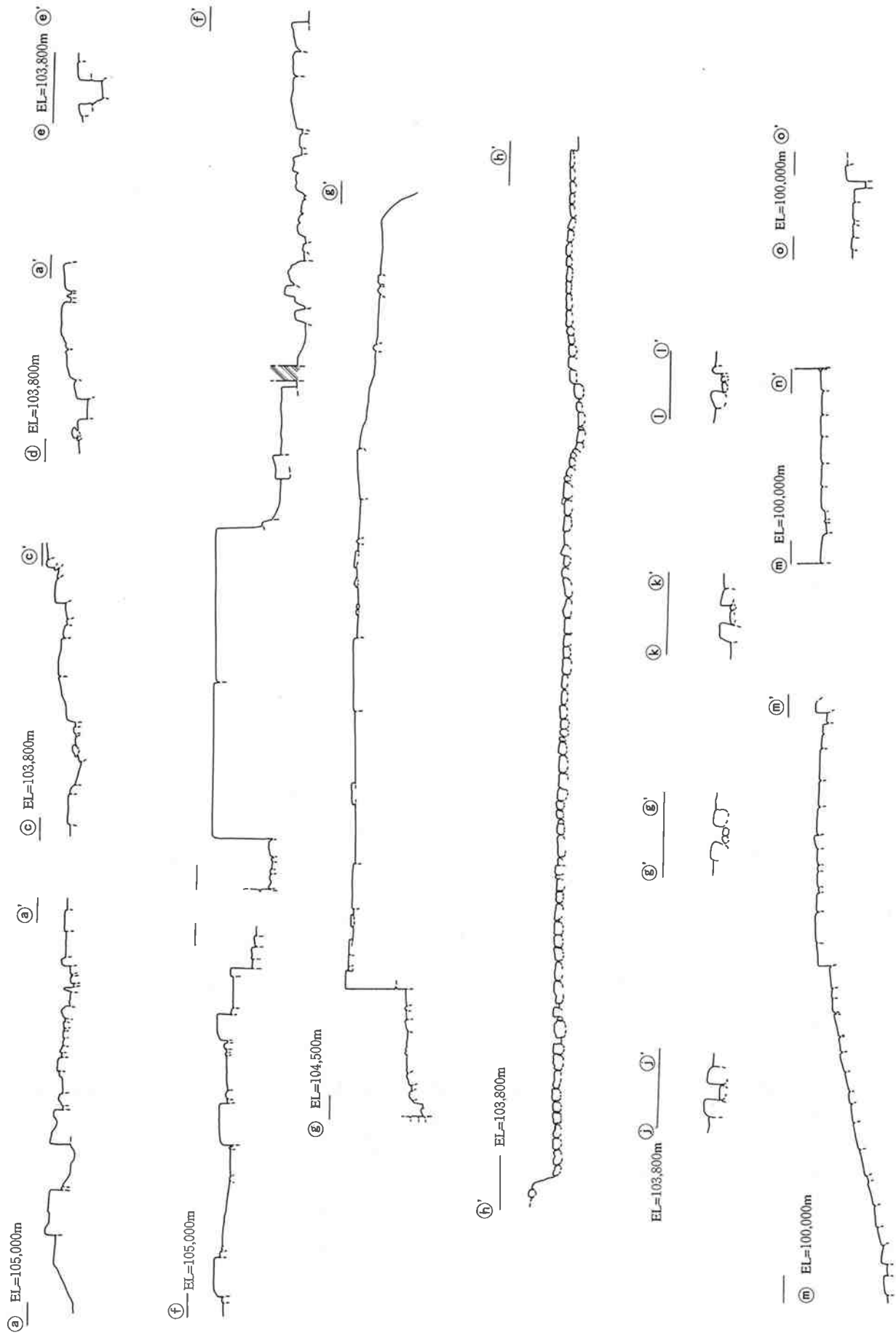
第30図 井戸地区石列(9・10)石積み(5)溝(1)集石(13)



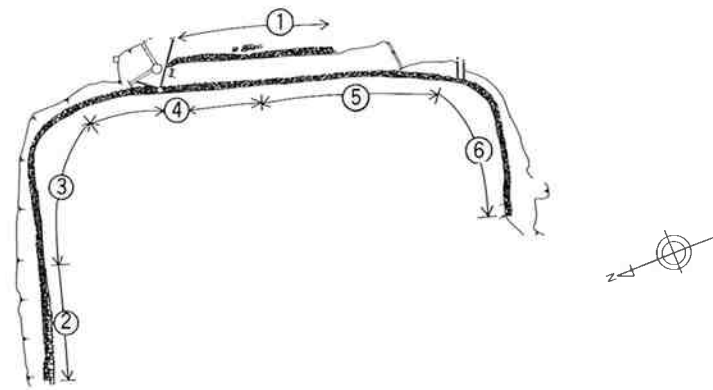
第31図 龍淵殿地区石列(4)石積み(3)



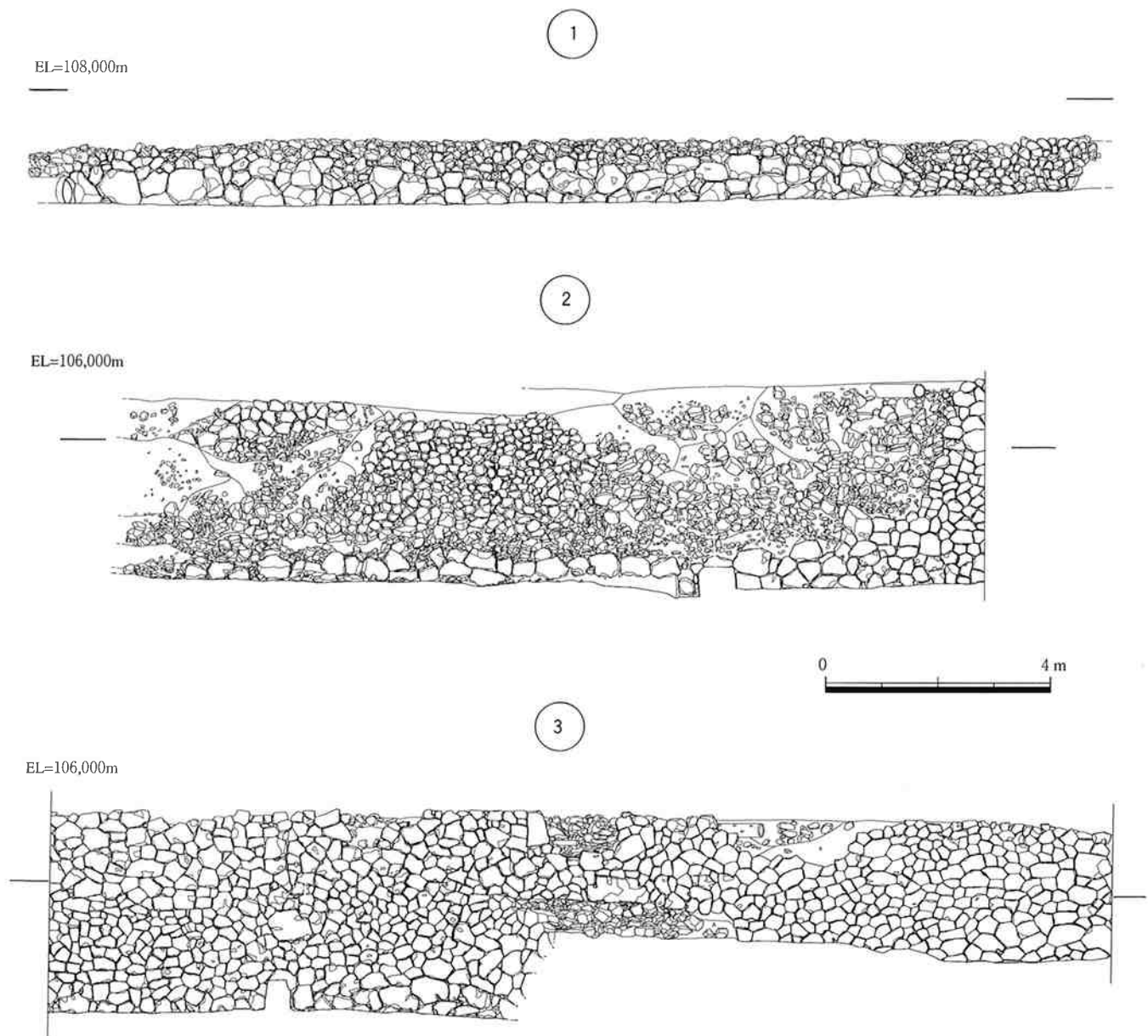
第32図 遺構断面図(1)



第33图 遺構断面図(2)



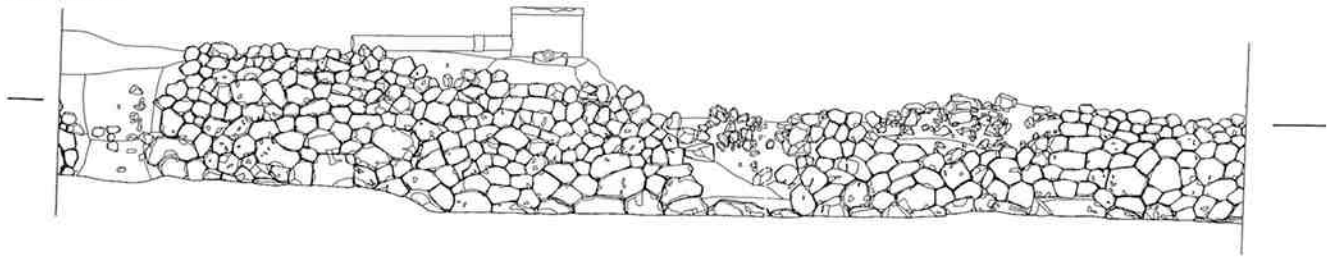
第34図 石牆平面模式図（番号は、平面図の位置を示す）



第35図 石牆立面図 (1)

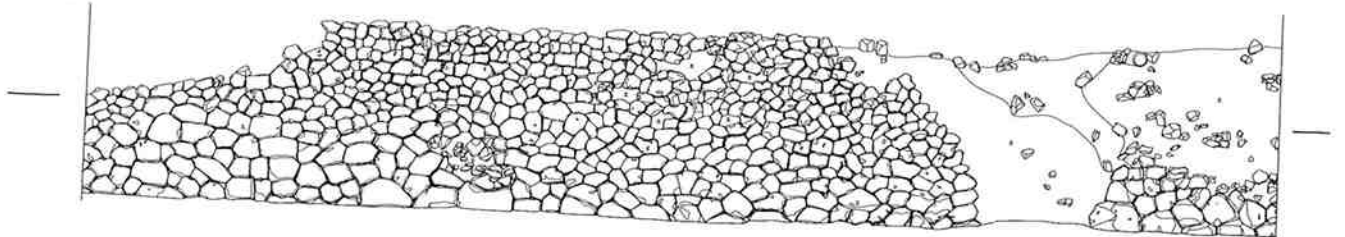
4

EL=106,000m



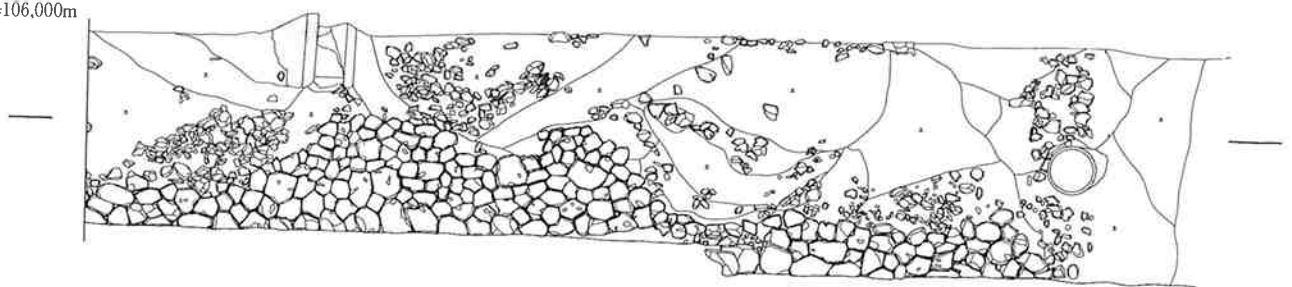
5

EL=106,000m



6

EL=106,000m



第36図 石牆立面図 (2)

第V章 出土遺物

今回の調査では青磁、白磁、中国産染付、褐釉陶器、本土産陶磁器といった輸入陶磁器をはじめ、土器、沖縄産施釉・無釉陶器、瓦、磚、玉、石造製品、骨製品、貝製品、銭貨、金属製品、木製品、貝類、骨類といった多種多様な遺物が得られている。全体の7割近くが瓦であり、1割が磚、1割が陶磁器類で占められた。特に祭祀や仏教に関わる遺物に関しては注目されるものが多く見られた。中でも金属製品はインドネシアのクリスに類似する蛇行剣や、禅宗系寺院の仏具として使用される鑿子、伏鉦、花瓶、厨子に伴うとされる彫金された飾り金具等が得られた。他にも鬼瓦や香炉など寺院遺跡を特徴付ける多種多様な遺物を多く得ることができた。しかし一方で、沖縄戦並びに戦後の攪乱によって遺構に伴う遺物はごく僅かであった。城の下や首里城から流れ込んだ遺物もあるものと思われ、全て円覚寺と関係するものとは限らない。以下、種別に概要を簡記する。

第1節 青磁

青磁は碗、皿、盤、香炉、瓶、杯、鉢、酒会壺、水注、蓋などが出土した。攪乱層からの出土が多く、遺構に伴うと思われるものは30点得られ、うち8点図化した。産地は景德鎮、龍泉窯のものが見られた。

碗 : 口縁部、胴部、底部を22点、図化した。口縁部は直口口縁が7点と主体を占め、外反口縁が1点のみであった。底部は畳付が丸くおさまるもの、外面が面取りされるもの、水平に切られるもの、そして底径が小さくなるものに大別できる。文様は「蓮弁文」「草花文」「菊花文」「弦文」「雷文」「人物画」が見られる。

皿 : 口縁部、胴部、底部を9点、図化した。口縁部は直口口縁と外反口縁があり、共に2点得ることができた。直口口縁は菊花形皿、外反口縁は薄手のものと輪花皿と特徴的なものが見られる。底部は腰折皿と思われるものが1点見られる。文様は「魚文」「蓮弁文」「櫛描文」「花文」が見られる。

盤 : 口縁部を4点、底部を1点図化した。口縁部は全て鏝縁口縁で鏝端部を撮り上げたものが2点、稜花状になるもの、直口口縁で口唇部は玉縁状となるものが各々1点、得られた。文様は蓮弁文と草文が見られ、蓮弁文は櫛描と篋描のものに細分することができる。

香炉 : 口縁部、底部を4点図化した。口縁部は胴部が直に立ち上がり内側へ「L」字状に折れる。底部はベタ底のものと足付きのものがある。これらには文様は見られないが胴部資料のみ篋描き線が見られる。

瓶 : 口縁部、頸部、胴部、底部を7点、図化した。口縁部は頸部が直に立ち上がり口縁部近くでラッパ状に外反する。底部は外底部の抉りが浅い高台を有する。頸部、胴部には「牡丹唐草文」が見られるものが2点得られた。

杯 : べっ甲口の杯が1点得られた。同様のものが今帰仁城志慶真門郭から出土している。

酒会壺 : 胴部が2点得られたが小片のため、瓶である可能性も挙げられる。文様は「草文」「蓮弁文」が見られる。

水注 : 注口部が1点得られた。注ぎ口に近い部分から外反状となる

蓋 : 1点得られた。文様は見られない。

第3表 青磁観察一覧 (1)

単位: cm

挿図番号 図版番号	器種	口 径		胎 土	釉 薬	文 様	貫 入 ・ 釉 調	出 土 地 点
		器 高	底 径					
第37図 図版35 1	無文外 反 碗	18.0	—	淡灰白色の微粒子 気泡と黒色粒子が僅かに 見られる	内外面共にやや厚く施釉。 口唇部は丸くおさめる	なし	貫入は見られない 明緑色	井戸地区攪乱層
第37図 図版35 2	直口碗	12.2	—	淡灰白色の微粒子 白色粒子が見られる	内外面共に施釉	外面に細刻線蓮弁文 内 面には篋描の文様が見ら れる	細かい貫入が内外面共に 見られる 深緑色	御照堂地区攪乱層
第37図 図版35 3	直口碗	14.3	—	淡灰白色の微粒子	内外面共にやや厚く施釉	外面に細刻線蓮弁文 内 面には陰刻線が一条見ら れる	貫入は見られない 明緑色の失透釉	表採
第37図 図版35 4	直口碗	10.8	—	淡黄白色のやや粗い微粒 子	内外面共に施釉	外面に細刻線蓮弁文が見 られるが弁の剣先が不明 瞭	内外面に細かい貫入が見 られる 黄緑色の失透釉	獅子窟地区攪乱層

第4表 青磁観察一覧 (2)

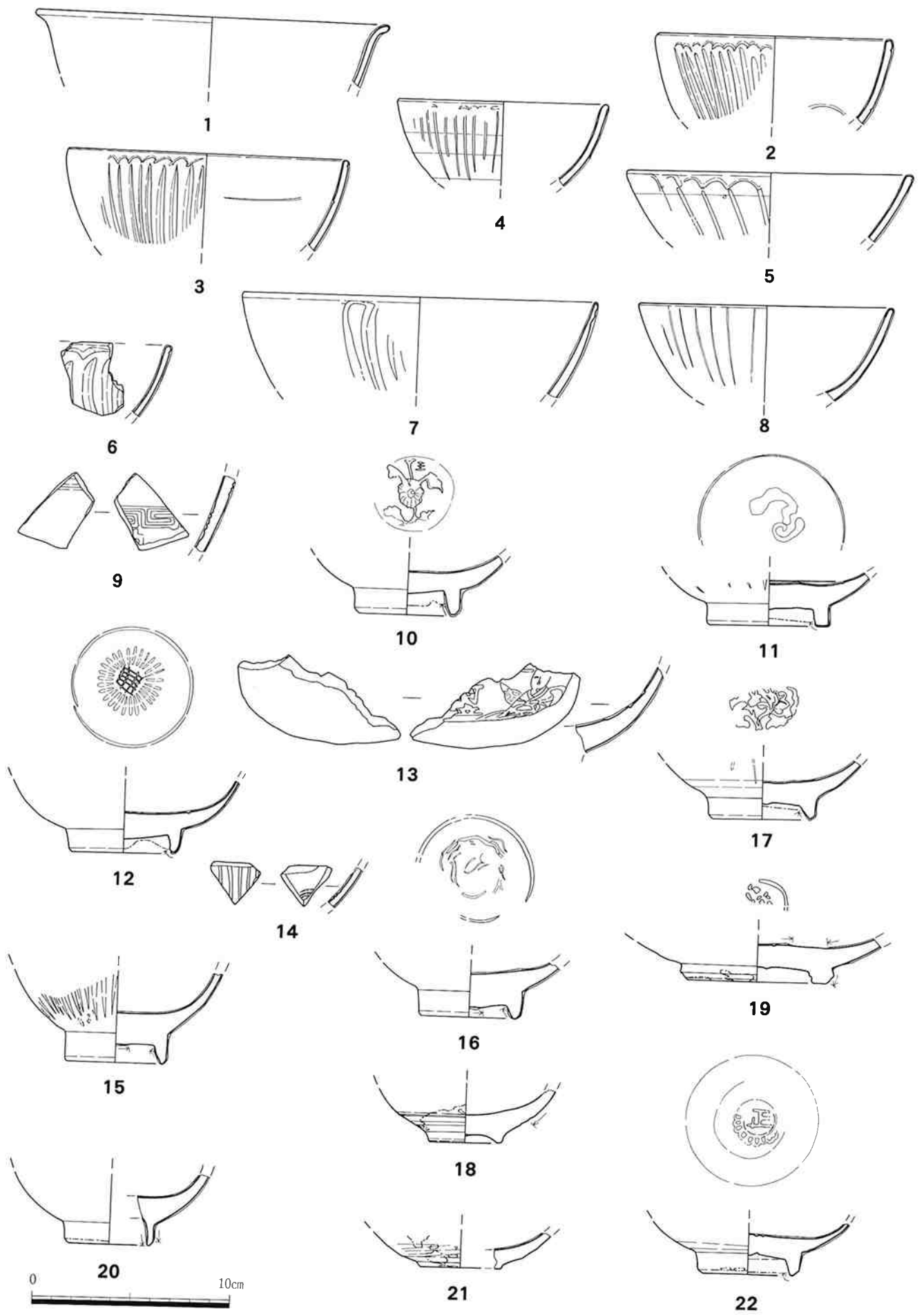
単位: cm

挿図番号 図版番号	器種	口径		胎土	釉薬	文様	貫入・釉調	出土地点
		器高	底径					
第37図 図版35	5	直口碗	14.6	灰白色で微粒子、一部淡赤橙色の斑が見られる	内外面共に施釉される	外面に幅広の篋描き蓮弁文が見られる。	貫入は見られない 淡い緑色で失透釉	御照堂地区攪乱層
			—	気泡が僅かに見られる				
第37図 図版35	6	直口碗	—	灰色と橙色が斑に見られ、粒子はやや粗い	内外面共に薄く施釉される	外面に幅広で篋描の蓮弁文	貫入は見られない 深緑色で失透釉	獅子窟地区攪乱層
			—	白色粒子が見られる				
第37図 図版35	7	直口碗	17.6	淡灰白色で微粒子	内外面共にやや厚く施釉される	外面は鎬を有した蓮弁文が見られる	貫入は見られない 青緑色で失透釉	表採
			—	黒色粒子が見られる				
第37図 図版35	8	直口碗	13.0	灰色と灰白色が斑に見られ、微粒子	内外面共に施釉される	外面は幅広の篋描蓮弁文の剣先は少略化される	貫入は見られない 淡緑色で失透釉 釉に白色の混入物があり白の斑状となる	龍淵殿地区石列4 裏込め
			—	白色粒子が見られる				
第37図 図版35	9	碗胴部	—	淡灰白色の微粒子	内外面共に施釉される	外面には弦文と内面には雷文帯	細かい貫入が見られる 黄色がかった青緑色でやや透明がかかる	龍淵殿地区攪乱層
			—	白・黒色粒子が僅かに見られる				
第37図 図版35	10	碗底部	—	灰白色の微粒子	内外面共に薄く施釉。畳付まで施釉され外底部は露胎。	内底部に圏線と中央に火弁	やや粗い貫入が内外面共に見られる 透明度のある青緑色で、畳付には溶着物が付着	西側石積みトレンチ2層
			—	白・黒色粒子が僅かに見られる				
第37図 図版35	11	碗底部	5.4	淡黄白色の微粒子	内外面共に薄く施釉。畳付まで施釉され外底部は露胎。	外面に蓮弁文の下部が見られ、内底部には草文	貫入は見られない 淡い黄緑色	庭園地区攪乱層
			—	—				
第37図 図版35	12	碗底部	6.2	灰白色の微粒子	内外面共に薄く施釉。畳付まで施釉され外底部は露胎。	内底部に菊花文と圏線が見られる。	細かい貫入が内外面共に見られる 深緑色	表採
			—	白色粒子が僅かに見られる				
第37図 図版35	13	碗胴部	5.6	淡灰白色の微粒子	内外面共に施釉	外面に界線と内面に人物画が見られる	細かい貫入が内外面共に見られる 透明度のある深緑色	庭園地区攪乱層
			—	白色粒子が見られる				
第37図 図版35	14	碗胴部	—	淡灰白色で微粒子	内外面共にやや厚く施釉される	外面に蓮弁文と内面に斜位の櫛描文	貫入は見られない 淡緑色でやや透明がかかる	鐘楼地区攪乱層
			—	黒色粒子が僅かに見られる				
第37図 図版35	15	碗底部	—	黄灰白色で微粒子	内外面共に施釉されるが、器表は凹凸を呈し、露胎も見られる	外面に細刻線蓮弁文が見られる	内外面に細かい貫入が見られる 明緑色の失透釉	鐘楼地区攪乱層
			—	気泡と黒色粒子が僅かに見られる				
第37図 図版35	16	碗底部	5.2	灰白色で微粒子	内外面共に施釉されるが、器表は凹凸を呈し、露胎も見られる	内底部に界線と中央に不明瞭ではあるが文様が見られる	内外面に細かい貫入が見られる やや黄色がかった緑色の失透釉	庫裏地区攪乱層
			—	—				
第37図 図版35	17	碗底部	5.1	灰白色で微粒子	内外面共に施釉される 内底部は露胎	外面に蓮弁文の下部と思われる沈線が見られる。 内底部に菊の草花文	貫入は見られない 青緑色で釉はやや透明がかかる	龍淵殿地区石積み3埋土層 図版20-7
			—	灰白色で微粒子、一部灰白色の斑が見られる				
第37図 図版35	18	碗底部	5.4	気泡が僅かに見られる	内外面共に薄く施釉胴下部から外底部にかけて露胎	なし	細かい貫入が見られる 灰緑色	仏殿地区攪乱層
			—	外面は橙色、内面は灰白色 白色粒子が僅かに見られる				
第37図 図版35	19	碗底部	3.7	黄灰白色で微粒子	内外面共に施釉 内底面は蛇の目状に釉剥ぎされ高台下部から外底部にかけて露胎	なし	細かい貫入が見られる 深緑色の失透釉 器形から広東系と思われる	御照堂地区攪乱層
			—	気泡が僅かに見られる				
第37図 図版35	20	碗底部	7.7	灰白色で微粒子	内外面共に薄く施釉	型取りの無文碗	細かい貫入が見られる オリープ黄色で透明釉	獅子窟地区攪乱層
			—	気泡が僅かに見られる				
第37図 図版35	21	碗底部	4.6	赤褐色で粒子はやや粗い	内外面共に施釉される 外面は胴下部以下は露胎	なし	細かい貫入が見られる 深緑色で失透釉	表採
			—	白・黒色粒子が見られる				
第37図 図版35	22	碗底部	4.2	淡黄白色の微粒子	内外面共に施釉される 外面は畳付まで施釉、外底面は露胎	内底部に丸に「正」の字が見られる	細かい貫入が見られる 青緑色でやや透明がかかる	東西トレンチ第4層
			—	気泡が僅かに見られる				
第37図 図版36	23	外反皿	11.5	灰色で微粒子	内外面共に薄く施釉	輪花皿で口縁部近くに2重の櫛描線を弧状に組み合わせさせた文様が見られる	やや粗い貫入が見られる やや透明度のある深緑色	鐘楼地区攪乱層
			—	白・黒色粒子と気泡が僅かに見られる				
第38図 図版36	24	外反皿	17.3	淡灰白色で微粒子	内外面共に薄く施釉 高台下部から畳付まで露胎	内面に陽刻文	貫入は見られない 明緑色でやや透明がかかる 窯は景德鎮か	石積み4確認トレンチ第2層
			—	黒色粒子、気泡が僅かに見られる				
第38図 図版36	25	直口皿	8.4	淡灰白色で微粒子	内外面共に施釉	無文	細かい貫入が見られる 青緑色で失透釉	井戸地区攪乱層
			—	気泡が僅かに見られる				
第38図 図版36	26	直口皿	8.2	淡灰白色で微粒子	内外面共に施釉	菊花形皿で型成形である 外面には沈線が見られる	粗い貫入が見られる 青緑色でやや透明がかかる	庭園地区攪乱層
			—	気泡と黒色粒子が僅かに見られる				
第38図 図版36	27	皿底部	12.8	淡灰白色、黒色粒子と気泡が僅かに見られる	内外面共に施釉 外底部のみ露胎	外面の胴部、高台部の接続部と高台下部に沈線が見られる 内底部に花文と圏線	貫入は見られない 青緑色で釉はやや透明がかかる	仏殿地区攪乱層
			—	—				
第38図 図版36	28	皿底部	7.6	灰色で微粒子	内外面共に施釉 高台下部から内底部にかけて露胎	内底部に魚文、外面に蓮弁文の下部が見られる	貫入は見られない 深緑色で失透釉	庭園地区攪乱層
			—	白・黒色粒子が僅かに見られる				
第38図 図版36	28	皿底部	6.0	—	—	—	—	—
			—	—				

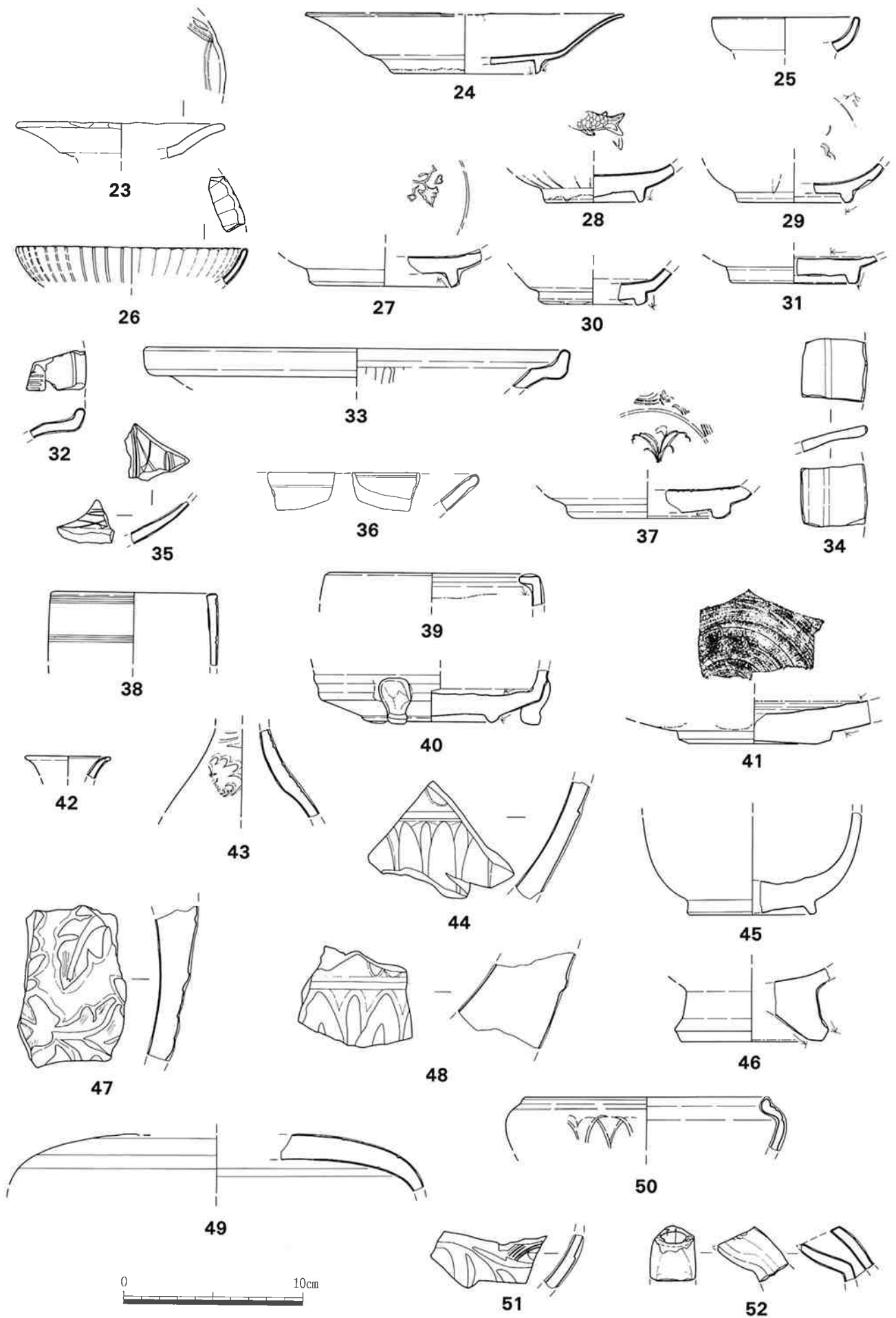
第5表 青磁観察一覧 (3)

単位: cm

挿図番号 図版番号	器種	口径		胎土	釉薬	文様	貫入・釉調	出土地点
		器高	底径					
第38図 図版36	29 皿底部	—	—	灰白色で微粒子 白・黒色粒子と気泡が僅かに見られる	内外面共に施釉 畳付から外底部にかけて露胎	外面胴部に蓮弁文の下部が、内面胴部に草文の一部	貫入は見られない 青緑色でやや透明がかかる	御照堂地区攪乱層
—		6.6						
—		6.0						
第38図 図版36	30 皿底部	—	—	橙色で微粒子 白色粒子と気泡が僅かに見られる	内外面共に薄く施釉 畳付から外底部にかけて露胎	なし	貫入は見られない 深緑色で失透釉	三門地区攪乱層
—		6.0						
—		6.0						
第38図 図版36	31 皿底部	—	—	淡橙色で微粒子 黒色粒子が僅かに見られる	内外面共に薄く施釉 内底部は釉剥ぎされ、外面は畳付から外底部まで露胎	内底面に陽圏線	貫入は見られない 黄色がかった青緑色で失透釉	三門地区攪乱層
—		7.2						
—		7.2						
第38図 図版36	32 鈔縁盤	—	—	灰白色で微粒子 黒色粒子が僅かに見られる	内外面共に施釉	内面に複数本単位の櫛描蓮弁文が見られる	粗い貫入が見られる 青緑色で失透釉	御照堂地区攪乱層
—		—						
—		—						
第38図 図版36	33 鈔縁盤	23.6	—	淡灰白色の微粒子 気泡が見られる	内外面共に施釉される	内面に丸籠描の蓮弁文 外面胴部に界線	貫入は見られない 青緑色で失透釉	庭園地区東西トレンチ第I層
—		—						
—		—						
第38図 図版36	34 鈔縁盤	—	—	黄灰白色の微粒子 黒色粒子が見られる	内外面共に薄く施釉される	口縁部は稜花状となる 内面に一条の圏線 外面に界線	粗い貫入が見られる オリーブ色の透明釉	三門地区攪乱層
—		—						
—		—						
第38図 図版36	35 盤胴部	—	—	白色の微粒子 黒色粒子が僅かに見られる	内外面共に施釉される	内面に籠描の文様が見られる	貫入は見られない 薄い淡緑色でやや透明がかかる	左脇門地区攪乱層
—		—						
—		—						
第38図 図版36	36 玉縁盤	—	—	灰白色で微粒子 気泡が僅かに見られる	内外面共に厚く施釉される 口縁部は薄く施釉	内外面共、口縁直下に界線が一条見られる	貫入は見られない 深緑色でやや透明がかかる	鐘楼地区攪乱層
—		—						
—		—						
第38図 図版36	37 盤底部	—	—	灰白色で微粒子 気泡と黒色粒子が僅かに見られる	内外面共に薄く施釉 外底部は釉剥ぎされる	内底面に圏線と草文、内面胴部に櫛描文が見られる	粗い貫入が見られる 青緑色の透明釉	庭園地区南北トレンチ第III層
—		9.0						
—		9.0						
第38図 図版36	38 香炉 口縁部	9.2	—	淡灰白色の微粒子 黒色粒子が多く見られる	内外面共に施釉される 内面は薄く、外面はやや厚い	外面胴部と口縁下部に2本単位の沈線が見られる	貫入は見られない 薄い淡緑色で透明釉	龍淵殿地区攪乱層
—		—						
—		—						
第38図 図版36	39 香炉 口縁部	11.8	—	白色で微粒子 黒色粒子が見られる	内外面共に施釉される 内面胴下部は露胎 口縁部近くの屈曲部と口唇部の釉は薄くなる	なし	貫入は見られない 淡緑色の失透釉	井戸地区攪乱層
—		—						
—		—						
第38図 図版36	40 香炉 底部	—	—	灰白色で微粒子 内底部は浅黄色 気泡と黒色粒子が見られる	内外面共に施釉される 内底部と外面は畳付から外底部にかけて露胎	なし	貫入は見られない 胴下部に界線が見られる	庭園地区攪乱層
—		7.6						
—		7.6						
第38図 図版36	41 香炉 底部	—	—	灰色で微粒子 一部、浅黄色の斑が見られる	外面に薄く施釉される	なし	貫入は見られない 黄色がかった青緑色で失透釉	表採
—		8.4						
—		8.4						
第38図 図版36	42 瓶 口縁部	4.6	—	淡灰白色で微粒子 黒色粒子が僅かに見られる	内外面共に施釉される 口唇部は薄く施釉される	内外面共、口縁直下に界線が一条見られる	貫入は見られない 深緑色で透明釉	御照堂地区攪乱層
—		—						
—		—						
第38図 図版36	43 瓶頸部	—	—	淡灰白色で微粒子 気泡が僅かに見られる	内外面共に施釉される	外面頸部に片切彫りの牡丹唐草文か	細かい貫入が見られる 深緑色で透明釉	西側石積みトレンチ第2層
—		—						
—		—						
第38図 図版36	44 瓶胴部	9.2	—	淡灰白色の微粒子 黒色粒子が僅かに見られる	内外面共に厚く施釉される	外面に片切彫りの蓮弁文と横位の凸線	貫入は見られない 青緑色で失透釉	表採
—		—						
—		—						
第38図 図版36	47 酒会壺 または 瓶胴部	—	—	黄灰白色で微粒子 気泡が僅かに見られる	内外面共に施釉される	外面に刻花文	細かい貫入が見られる 青緑色で失透釉	表採
—		—						
—		—						
第38図 図版36	48 酒会壺 または 瓶胴部	—	—	内面近くは橙色、外面は淡灰白色で微粒子 気泡が僅かに見られる	内外面共に施釉される	外面に蓮弁文と横位の凸線	細かい貫入が見られる 青緑色でやや透明がかかる	表採
—		—						
—		—						
第38図 図版36	45 瓶底部	—	—	淡灰白色で微粒子 気泡が僅かに見られる	内外面共に薄く施釉される	なし	外面に粗い貫入が見られる 淡緑色でやや透明がかかる	龍淵殿地区攪乱層
—		6.9						
—		6.9						
第38図 図版36	46 瓶 底部	—	—	淡灰白色の微粒子 気泡が見られる	内外面共に施釉される 畳付のみ露胎	なし	粗い貫入が見られる 淡緑色の透明釉	鐘楼地区攪乱層
—		7.6						
—		7.6						
第38図 図版36	49 蓋	—	—	灰白色の微粒子 気泡と黒色粒子が僅かに見られる	内外面共に施釉 中心部近くは内外面共に露胎となる	外面に沈線が一条見られる	細かい貫入が見られる 淡緑色でやや透明がかかる	表採
—		—						
—		—						
第38図 図版36	50 べっ甲 口杯	13.0	—	淡灰白色で微粒子 気泡が見られる	内外面共に厚く施釉 口唇部は薄く施釉される	外面胴部に籠描の蓮弁文	粗い貫入が見られる。青緑色でやや透明がかかる	西側石積みトレンチ2層
—		—						
—		—						
第38図 図版36	51 鉢胴部	—	—	淡灰白色の微粒子 黒色粒子が見られる	内外面共に厚く施釉される	外面に陽刻の牡丹唐草文か	貫入は見られない 青緑色でやや透明がかかる 龍泉窯	井戸地区攪乱層
—		—						
—		—						
第38図 図版36	52 水注 注口部	—	—	淡灰白色の微粒子 黒色粒子が見られる	内外面共に薄く施釉される	なし	粗い貫入が見られる 淡緑色の透明釉	井戸地区攪乱層
—		—						
—		—						



第37图 青磁 (1) 碗



第38图 青磁 (2) 皿・盤・香炉・瓶・壺・杯・鉢・水注

第2節 白磁

中国産・ベトナム産白磁は総数209点検出されている。確認された器種は碗、皿、小杯、袋物（瓶）の4種で、15世紀後葉～17世紀頃に位置づけられる資料が主勢にある。出土数量の器種別内訳をみると皿59点が最も多く、碗31点が続く。以下、特徴的な資料を図示し、器種別に簡記する。

碗（第39図・図版36-1～10）

口縁部から高台まで残存部位から全形が窺える程の資料は殆ど見られない。口縁部及び高台部の形態を観察時の分類骨子とし、下記のように類別を試みた。

碗口縁部は、Ⅰ類「外反口縁グループ」（同図1、2、4）とⅡ類「直口口縁グループ」（同図3、5、6）の二者に群別が可能で、前者は口禿陽刻文碗と無文端反碗、後者Ⅱ類は無文直口碗がある。1は、ベトナム産と類推されるもので、微弱な外反口縁の唇部施釉を掻き取り口禿とする。器内面中位には沈線2条を巡らせて界線とし、その下位に花柄状の陽刻文を施す。類例として湧田古窯跡(I)で青海波文を陽刻した口禿碗が報告されている^(註1)。所属時期は13世紀頃と類推される。

2は景德鎮窯産とみられる口折れ状を呈した無文端反碗である。4も中国産の端反口縁碗である。

Ⅱ類の直口口縁碗はいずれも中国産である。3は、微弱に内彎を呈す薄手直口碗だが、唇部外縁に釉溜まりをもつ特徴から景德鎮窯産と類推されるものである。6もやや小振りだが形態・施釉等で同図3と共通する。5は器肉がかなり薄手の直口碗だが、唇部内縁は丸みを帯び、外縁は鋭角になる。

同図7～10は碗器種の底部資料で、高台部形態及び施釉範囲から分類が可能かと思われる。高台の形状では断面方柱状を呈するもの（Ⅲa類：7、8）と畳付外端を斜位に削り出すもの（Ⅲb類：9、10）がある。施釉の観点では、外面の腰部以下のみ無釉にするもの（7）、内底面施釉も輪状に掻く「蛇の目釉剥ぎ」が施されるもの（8、9）、内底及び腰部以下が無釉のもの（10）が認められる。

7は底部形態や釉調等から玉縁口縁碗かピロースタイプ^(註2)と呼ばれる内彎口縁碗の可能性もある。回転篋削り痕が認められ、畳付部周縁に砂粒熔着が見られる。8～10も轆轤成形碗で、腰部以下に回転篋削り痕が容易に観察できる。うち10は高台径が他資料に比べ小さく、高台周縁は中途まで敲打剥離が認められる。内底中央には「瑞」の刻字がある。

皿（同図・同図版11～28）

今回得られた皿器種を俯瞰すると、内外施釉で接地部付近を露胎させたものが主勢にある。

11、12は挟り高台（切高台）の無文直口皿で、内底には重ね焼きの際の目跡が畳付と同間隔に残る。該資料は森田勉氏分類^(註3)のD群（15世紀後葉）に該当し、首里城跡^(註4)や天界寺跡^(註5)、湧田古窯跡でも類例が報告されている。13、14は内外底露胎の小皿である。17は腰部内底が腰折れ状を呈する。15～23は膨らむ腰部から明瞭な稜を伴わずに外彎する外反口縁皿で、概ね高台の畳付部が内傾気味になる。畳付部のみ露胎させることから、森田氏分類^(註3)のE群b類（16世紀代）に該当する。口縁部断面観から、舌状を呈す口縁部先端が下向きとなるもの（ⅢⅠ類：15、16）と腰部からある程度の器壁厚を保ちつつ、やや上向きに外反するもの（ⅢⅡ類：18～20）の二者が認められる。21～23は底部資料である。24、25、27は菊花を象った型成形の輪花皿（菊皿）で、27には幅広の鏝縁状口縁が伴う。26の体部は菊花を象るものではないが、唇部が輪花状を呈する。

小杯（同図・同図版29）

景德鎮窯産と目される型成形の小杯が得られている（29）。器形は微弱な膨らみを持ちながら、ほぼ垂直方向にスマートに立ち上がり、外底が碁笥底状に窪む。

瓶（同図・同図版30）

30は瓶器種の頸部破片で、器体胴部及び口縁部との境部に明確な稜を形成する。

<註文献>

註1. 沖縄県教育委員会「湧田古窯跡(I)『沖縄県文化財調査報告書』第111集 1993

註2. 金武正紀「沖縄における12・13世紀の中国陶磁器」『沖縄県立博物館紀要』第15号 沖縄県立博物館 1989

註3. 森田勉「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』第2号 貿易陶磁学会 1982

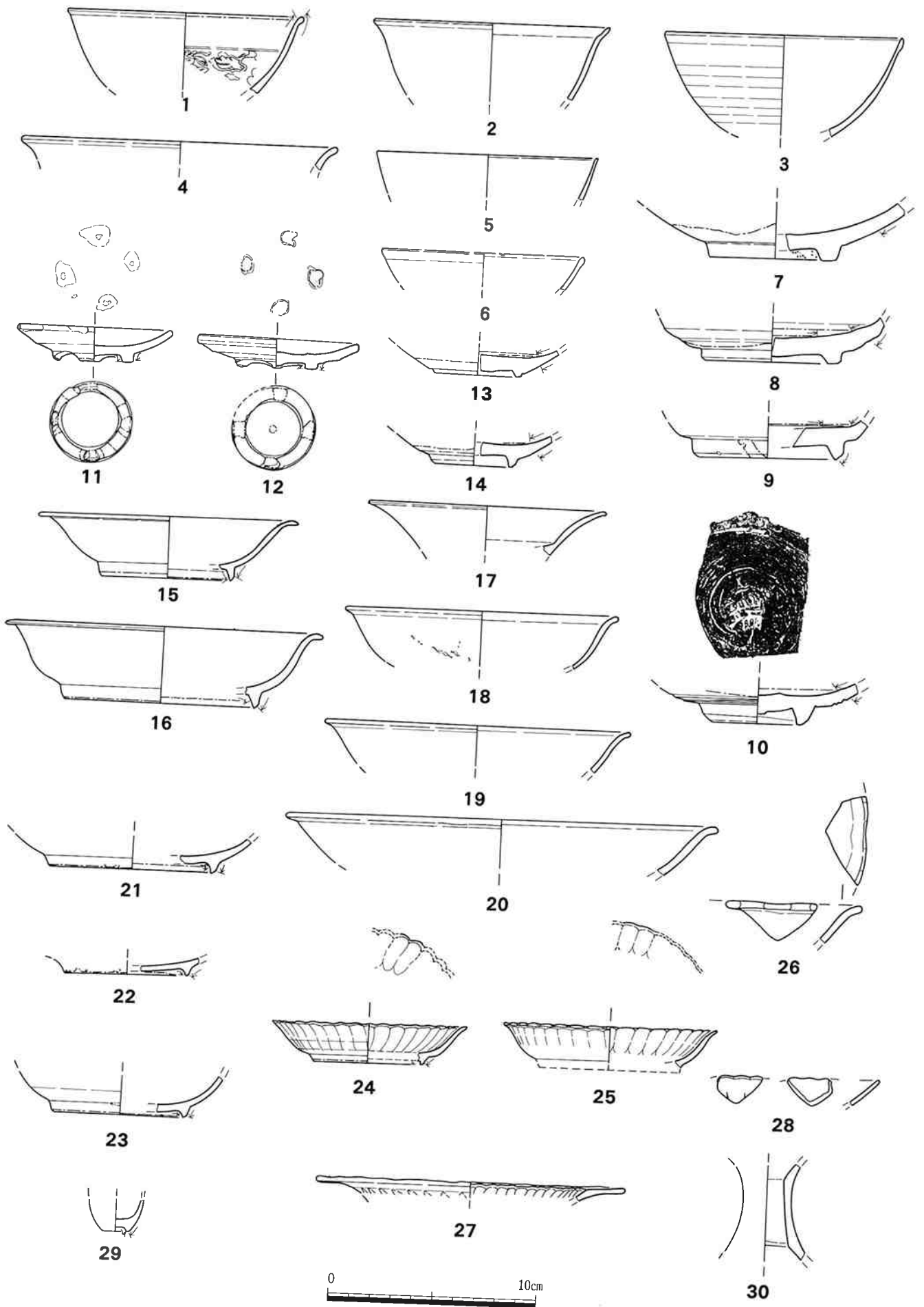
註4. 沖縄県教育委員会「首里城跡管理用道路地区発掘調査報告書」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第1集 2001

註5. 沖縄県教育委員会「天界寺跡(I)『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第2集 2001

第6表 白磁観察一覧（中国産・ベトナム産）

単位：cm

挿図番号 図版番号	器種・種類	残部 存位	口径 器高 底径	素地	釉薬	文様	貫入・釉調	備考等	出土地点
第39図 図版37 1	碗／Ⅰ類・口 禿陽刻文碗	口縁～ 胴下部	11.4 — —	灰白色の細粒子で緻密。	口唇部上面の釉を掻き取る。	器内面中位に沈線2条 巡らし、界線以下に花柄 状の陽刻文を施す。	貫入は見られず。	ベトナム産の蓋然 性高い。湧田古窯 跡にも類似。	御照堂地区 攪乱層
第39図 図版37 2	碗／Ⅰ類・無 文端反碗	口縁部	11.6 — —	淡灰白色の微粒子で 緻密。	内外面に薄く施釉。	文様なし。	貫入見られず。	景德鎮窯産。 16C末～17C前半	井戸地区 攪乱層
第39図 図版37 3	碗／Ⅱ類・無 文直口口縁碗	口縁～ 胴下部	11.6 — —	灰白色の細粒子で緻 密。微小な黒色粒を 僅量含む	内外面施釉。口縁端 外側に釉溜まり。	文様なし。	貫入見られず。	景德鎮窯産。 16C後半～17C初 頭。	龍淵殿地区 石積み第4層認 トレンチ第4層
第39図 図版37 4	碗／Ⅰ類・無 文端反碗	口縁～ 胴上部	15.4 — —	灰黄色の細粒子で緻 密。微小な黒色粒を 若干含む。	灰オリーブ色に近い 失透釉を内外面施釉。	文様なし。	貫入見られず。		基壇南側
第39図 図版37 5	碗／Ⅱ類・無 文直口口縁碗	口縁～ 胴上部	10.8 — —	白色細粒子で緻密。 微小な黒色粒をごく 僅量含む。	失透性の白色釉を内 外面に薄く施釉。	文様なし。	貫入見られず。		井戸地区 攪乱層
第39図 図版37 6	碗／Ⅱ類・無 文直口口縁碗	口縁～ 胴下部	9.9 — —	白色細粒子で緻密。 微小な黒色粒をごく 僅量含む。	失透性の淡灰白釉を内外 面施釉。口縁端外側に釉溜 まり見られる（同図3と同様）。	文様なし。	器内面口唇付近及 び外面に僅かに貫 入見られる。	景德鎮窯産の可能性。 16C後半～17C初頭。	龍淵殿地区 石積み4層認 トレンチ第4層
第39図 図版37 7	碗底部／Ⅲ a 類	胴下部 ～高台	— 6.0	灰白色の細粒子で比較的緻 密（若干気泡痕見られる）。 微小な黒色粒を僅量含む。	器体下部～外底面を 露胎。	文様なし。	内外とも貫入あり。	ピロースクタイプ 碗の蓋然性高い。	龍淵殿地区 攪乱層
第39図 図版37 8	碗底部／Ⅲ a 類	胴下部 ～高台	— 6.4	淡黄灰色の細粒子で 全体にやや緻密。僅 かに気泡痕あり。	オリーブ黄色に近い釉を器 外面は高台脇付近まで施釉。 内底は輪状に掻き取る。	文様なし。	貫入見られず。		庭園地区 攪乱層
第39図 図版37 9	碗底部／Ⅲ b 類	胴下部 ～高台	— 7.3	白色細粒子で全体に 緻密。微小な黒色粒 を含む。	器外面は畳付部外側まで やや厚めに施釉。内底施 釉は輪状に掻き取る。	文様なし。	内外面ともやや粗 めの貫入あり。		表採
第39図 図版37 10	碗底部／Ⅲ b 類	胴下部 ～高台	— 4.3	淡黄白色粒子で比較的緻密 （気泡痕が僅かに見られる）。 微小な黒色粒も若干含む。	内外とも腰部まで施 釉（内外底を露胎）。	内底中央に「端」の 刻字。			龍淵殿地区 石積み4層認 トレンチ第2層
第39図 図版37 11	小型皿 （切り高台）	口縁～ 畳付	7.5 2.6 4.9	灰白色の細粒子で緻密。 黒色粒も若干含む。	全面施釉の後、畳付 部の先端のみ釉掻き 取る。	文様なし。	貫入見られず。		御照堂地区 攪乱層
第39図 図版37 12	小型皿 （切り高台）	口縁～ 畳付	7.9 1.4 4.0	淡灰白色の細粒子で 緻密。微小な黒色粒 を僅量含む。	全面に薄く施釉後、 畳付部の先端のみ釉 掻き取る。	文様なし。	器外面に部分的に 貫入あり。		龍淵殿地区 西辺基壇造 成層内
第39図 図版37 13	小型皿底部	高台	— 4.2	淡灰白色の細粒子で 緻密。微小な黒色粒 も若干見られる。	失透性の灰白色釉を内外 面とも器体下部まで薄く 施釉。（内外底を露胎）。	文様なし。	内外面とも僅かな がら細かい貫入あり。		井戸地区 攪乱層
第39図 図版37 14	小型皿底部	高台	— 4.2	灰白色細粒子で緻密。 微小な黒色粒をごく 僅量含む。	同図13同様、灰白色の失透 釉を内外面とも器体下部 まで施釉（内外底露胎）。	文様なし。	内外面とも貫入あ り。		表採
第39図 図版37 15	皿／Ⅰ類・無 文外反口縁皿 （舌状+下向き）	口縁～ 畳付	12.6 3.1 6.5	淡灰白色の細粒子で 緻密。微小な黒色粒 をごく僅量含む。	灰白色を帯びた失透釉を内外 面施釉。高台の畳付周辺は露胎。	文様なし。	貫入見られず。		獅子窟地区 攪乱層
第39図 図版37 16	皿／Ⅰ類・無 文外反口縁皿 （舌状+下向き）	口縁～ 畳付	15.4 3.8 9.2	白色細粒子で緻密。 微小な黒色粒をごく 僅量含む。	灰白色を帯びた失透釉を内外 面にやや厚く施釉するが、 高台の畳付周辺は露胎。	文様なし。	貫入見られず。		庭園地区東 西トレンチ 第1層
第39図 図版37 17	皿／Ⅰ類・無 文外反口縁皿 （舌状+下向き）	口縁～ 胴下部	11.6 — —	淡灰白色細粒子で緻 密。微小な黒色粒を 僅量含む。	白色の失透釉を内外 面にやや厚めに施釉。	文様なし。	貫入見られず。		表採
第39図 図版37 18	皿／Ⅱ類・無 文外反口縁皿 （やや上向き）	口縁部	13.2 — —	淡灰白色細粒子で緻 密。	白色の失透釉を内外 面にやや厚めに施釉。	文様なし。	貫入見られず。 器外面に砂着あ り。		表採
第39図 図版37 19	皿／Ⅱ類・無 文外反口縁皿 （やや上向き）	口縁部	14.8 — —	灰白色細粒子で緻密。	淡灰白色の失透釉を 内外面施釉。	文様なし。	貫入見られず。		表採
第39図 図版37 20	皿／Ⅱ類・無 文外反口縁皿 （やや上向き）	口縁部	20.9 — —	淡灰白色の細粒子で 緻密。微小な黒色粒 もごく僅量含む。	淡灰白色の失透釉を 内外面施釉。	文様なし。	貫入見られず。		庫裏地区攪乱層 庫裏地区造成層
第39図 図版37 21	皿底部／無文 外反口縁皿	胴下部 ～外底	— 8.1	淡灰白色の細粒子で 緻密。微小な黒色粒 を若干含む。	淡灰色帯びた失透釉を 全面施釉の後、畳付部 先端のみ釉掻き取る。	文様なし。	貫入見られず。		庫裏地区 第5トレンチ
第39図 図版37 22	皿底部／無文 外反口縁皿	外底	— 6.1	淡灰白色の細粒子で 緻密だが、気泡痕も 微小な黒色粒を僅量含む。	淡灰色帯びた失透釉を 全面施釉後、畳付部先 端のみ釉掻き取る。	文様なし。	僅かながら細かい 貫入見られる。		仏殿地区 攪乱層
第39図 図版37 23	皿底部／無文 外反口縁皿	胴下部 ～外底	— 6.5	白色細粒子で緻密。 微小な黒色粒をごく 僅量含む。	失透性帯びた白色釉を 内外面施釉後、畳付部 先端のみ釉掻き取る。	文様なし。	貫入見られず。		表採
第39図 図版37 24	皿／菊皿	口縁～ 畳付	9.4 2.0 5.4	白色細粒子で緻密。	失透性の灰白色釉を 内外面施釉。（外底 の接地部周辺を露胎）	文様なし。器自体 を菊花状に型成形。	貫入見られず。	景德鎮窯産	仏殿地区 攪乱層
第39図 図版37 25	皿／菊皿	口縁～ 胴下部	10.3 2.1 6.7	淡灰白色の細粒子で 緻密。	灰白色釉を内外面施 釉。	文様なし。同図24 と同様、菊花を象つ た型成形。	貫入見られず。	景德鎮窯産	御照堂地区 攪乱層
第39図 図版37 26	皿／陵花皿	口縁部	— — —	淡灰白色の細粒子で 緻密だが、気泡痕も 若干認められる。	淡灰色帯びた失透釉を 内外面に施釉。	文様なし。	貫入見られず。	景德鎮窯産	御照堂地区 攪乱層
第39図 図版37 27	皿／菊皿 （鈔縁口縁皿）	口縁部	15.0 — —	白色細粒子で緻密。 微小な黒色粒をごく 僅量含む。	内外面に比較的厚め に施釉。	文様なし。体部は菊 花を象った型成形。	貫入見られず。		御照堂地区 攪乱層
第39図 図版37 28	皿	口縁部	— — —	白色細粒子で緻密。	白色釉を内外面施釉。	文様なし。口唇部 が輪花状を呈する。			鐘樓地区 攪乱層
第39図 図版37 29	小杯	胴下部 ～外底	— 1.2	灰白色の細粒子で緻 密。微小な黒色粒を ごく僅量含む。	灰白釉を全面施釉後、 外底接地面を釉掻き 取り。	文様なし。	貫入見られず。	景德鎮窯産の可能 性。	井戸地区 攪乱層
第39図 図版37 30	瓶	頸部	— — —	灰白色の細粒子。部分 的に気泡痕目立つ。微 小な黒色粒も僅量含む。	やや青白色帯びた失 透釉を内外面に施釉。	文様なし。	貫入は見られず。		井戸地区 攪乱層



第39图 白磁 碗·皿·小杯·瓶

第3節 中国産染付

染付は碗、皿、鉢、盤、杯、瓶、蓋、合子、香炉などが出土した。産地別では景德鎮、福建・広東系の量が多い。攪乱層からの出土が多く、遺構に伴うものと思われるものは25点得られ、うち12点図化した。

碗：主に全形が伺えるものと文様が特徴的なものを45点、図化した。

碗については外反口縁と直口口縁とに大別できる。更に口径から11cm以上の大振りのもので10cm以下の小振りのものに細分することができる。

文様については「アラベスク文」「四方禪文」「亀甲繫文」「波濤文」「芭蕉文」「渦巻文」「菊唐草文」「仙芝祝寿文」「十字花文」「草花文」「列点文」「丸文」「梅に篤文」「コンニャク印判文」がある。これらは主に外面胴部と内底部に配されている。

皿：主に全形が伺えるものと文様が特徴的なものを28点、図化した。皿については外反口縁と直口口縁とに大別できる。直口口縁は碁笥底で文様については「花鳥文」「寿字文」「梵字文」「宝相華唐草文」「波濤文」「芭蕉文」がある。外反口縁は薄手のものと厚手のものに細分される。文様については「宝相華唐草文」「十字花文」「ジクザグ文」「渦巻文」がある。また内底部に丸文を描く菱形皿も1点、出土している。

鉢：口縁部、胴部、底部の3点を図化した。口縁部は「唐草文」「雲文」、胴部は「人物像」、底部は抽象画が見られる。

盤：底部を1点図化した。厚手で高台は低く畳付は水平。外面に雲文と牡丹唐草文、内底部に蓮池図を描く。呉須の発色は良好で、深い藍色となる。

杯：主に全形が伺えるものを8点、図化した。杯については口径5cm以上、底径4cm以上の大振りなものと5cm未満、底径4cm未満の小振りなものに大別できる。大振りなものは厚手と薄手に細分され、小振りなものは外反口縁、直口口縁、碁笥底がある。文様については「団龍」「唐草文」「菊花文」「馬文」が見られる。

瓶：口縁部を1点図化した。長頸の瓶で界線が口唇部近くに見られる。

蓋：1点図化した。竜文の爪と思われる八つ手状の文様と雲文が見られる。内面には轆轤成形痕が見られる。

合子：蓋と身、各1点ずつ図化した。いずれも平面観は円形で蓋は全形を伺うことができ、上部に草文を描き、身は底部のみで底部近くに界線を描く。身に関しては底部の内削りは浅く、胴部は直に立ち上がる。

香炉：主に全形が伺えるものを1点、図化した。やや厚手で口縁部は内彎し、底部はベタ底で足が付く。外面胴部に草花文を描く。

第7表 中国産染付観察一覧 (1)

単位：cm

挿図番号 図版番号	器種	直口碗 器高 底径	胎土	釉薬	文様	貫入	出土地点
第40図 図版38	1 外反碗	18 — —	淡灰白色で微粒子、黒色粒子を多量に含み、気泡が僅かに見られる	内外面に薄く施釉される高台下部のみ露胎	内外面胴部に蓮花、草が描かれ、内底部に草花文	内外面に細かい貫入が見られる	仏殿地区、龍淵殿地区攪乱層
第40図 図版38	2 直口碗	11.8 — —	淡白色で微粒子	内外面に薄く施釉	胴部に蓮華文内外面の、口縁下部に界線	貫入は見られない	右脇門地区、庭園地区攪乱層
第40図 図版38	3 直口碗	13.9 — —	淡白色で微粒子	内外面に薄く施釉	外面に波濤文と芭蕉文、内面は界線	貫入は見られない	表探
第40図 図版38	4 直口碗	10.8 — —	白色で微粒子	内外面に薄く施釉	外面に渦巻文と界線、内面は界線	貫入は見られない	御照堂地区攪乱層
第40図 図版38	5 直口碗	14.5 — —	灰白色で微粒子	内外面に薄く施釉、呉須の発色がやや鈍い	外面は界線で画した中に2条の横位列点文を描く内面は界線	貫入は見られない	獅子窟地区攪乱層
第40図 図版38	6 直口碗	18 — —	白色で微粒子、黒色粒子が若干含まれる	内外面に薄く施釉、呉須が明瞭	外面は菊唐草文と界線、内面は界線	貫入は見られない	鐘楼地区攪乱層
第40図 図版38	7 外反碗	11.8 — —	淡灰白色で微粒子	内外面に薄く施釉、呉須は黒ずむ	外面は仙芝祝寿文と界線、内面は界線と内底面に團線	貫入は見られない	井戸地区攪乱層
第40図 図版38	8 外反碗	13.9 — —	灰白色の微粒子	内外面にやや厚く施釉	口縁外面に亀甲繫ぎ文、胴部に花文？内面口縁下部に界線	貫入は見られない	御照堂攪乱層
第40図 図版38	9 底部	10.8 — —	白色で微粒子、黒色粒子が若干含まれる	内外面に薄く施釉	外面に陰刻で青海波文、内面に帯文	貫入は見られない	龍淵殿地区石積み3裏込め石内
第40図 図版38	10 底部	14.5 — —	白色で微粒子	内外面に薄く施釉	外面に梅花と篤が描かれる	貫入は見られない	獅子窟地区攪乱層
第40図 図版38	11 直口碗	14.5 — —	白色で微粒子	内外面にやや薄く施釉され、畳付のみ露胎	外面胴部、内底面に梅樹文と界線	貫入は見られない	庭園地区東西トレンチ第2層

第8表 中国産染付観察一覧 (2)

単位: cm

挿図番号 図版番号	器種	直口碗		胎土	釉薬	文様	貫入	出土地点
		器高	底径					
第40図 図版38	12 底部	—	—	白色で微粒子、黒色粒子が若干含まれる	内外面に薄く施釉	外面にアラベスク文様と界線、内底面は圏線	貫入は見られない	龍淵殿地区攪乱層
		—	—					
		—	—					
第40図 図版38	13 底部	—	—	灰白色で粒子はやや粗い	内外面に薄く施釉	内底面に十字花文と圏線、外面腰折部に界線	貫入は見られない	御照堂地区攪乱層
		—	—					
		6.3	—					
第40図 図版38	14 底部	—	—	淡灰白色で微粒子	内外面に薄く施釉、畳付は露胎	内底部に人物饗頭、がま仙人、高台部と胴部との接線部に界線 外底面に圏線と「萬福成同」の銘款	貫入は見られない	龍淵殿地区攪乱層
		—	—					
		3.9	—					
第40図 図版38	15 底部	—	—	淡灰白色で気泡がわずかに見られる	内外面に薄く施釉、高台途中から畳付にかけて露胎	外面に界線、内底面に簡略化された捻じ花と圏線	貫入は見られない	庭園地区東西トレンチ第4層
		—	—					
		4.2	—					
第40図 図版38	16 底部	—	—	淡白色で微粒子	内外面に薄く施釉、畳付は露胎	外面腰部には蓮弁、内底面に草花文と圏線	貫入は見られない	表採
		—	—					
		4.4	—					
第40図 図版38	17 底部	—	—	淡黄白色で微粒子、気泡が若干見られる	内外面に薄く施釉、畳付および高台内側下部は露胎	外面に唐草文、波濤文、界線があり、内底面には十字花文と界線	貫入は見られない	御照堂、獅子窟地区攪乱層
		—	—					
		4.6	—					
第40図 図版38	18 底部	—	—	白色で微粒子、黒色粒子が若干含まれる	内外面に薄く施釉	外面にアラベスク文様と界線、内底面は圏線	貫入は見られない	龍淵殿地区攪乱層
		—	—					
		—	—					
第40図 図版38	19 外反碗	9	—	淡灰白色で微粒子、黒色粒子が若干含まれる	内外面に薄く施釉、畳付は露胎、呉須はやや滲む	外面に牡丹唐草文と界線、内面口縁部に花文帯と界線	貫入は見られない	表採
		4.6	—					
		4.2	—					
第40図 図版38	20 外反碗	10	—	淡白色で微粒子、黒色粒子が若干含まれる	内外面に薄く施釉	外面に唐草文、内面に界線	貫入は見られない	表採
		—	—					
		—	—					
第40図 図版38	21 底部	—	—	白色で微粒子、黒色粒子が若干含まれる	内外面に薄く施釉	内底面に十字花文と圏線	粗い貫入が見られる	仏殿地区攪乱層
		—	—					
		4.8	—					
第40図 図版38	22 底部	—	—	淡灰白色で微粒子、気泡がわずかに見られる	内外面に薄く施釉、畳付は露胎	外面腰部に簡略化した蓮弁、高台部に界線、内底面に菊花文と圏線	貫入は見られない	龍淵殿地区攪乱層
		—	—					
		4	—					
第40図 図版38	23 底部	—	—	淡灰白色で微粒子、黒色粒子が若干含まれる	内外面に薄く施釉	外面に蓮華唐草と高台部に界線	貫入は見られない	井戸地区攪乱層
		—	—					
		4.8	—					
第41図 図版39	1 直口碗	—	—	淡灰白色の微粒子、黒色粒子が含まれる	内外面に薄く施釉	外面に丸文	貫入は見られない	表採
		—	—					
		—	—					
第41図 図版39	2 外反碗	13	—	白色の微粒子	内外面に薄く施釉	外面に唐草文と界線、内面に界線	貫入は見られない	御照堂地区攪乱層
		—	—					
		—	—					
第41図 図版39	3 直口碗	13.2	—	淡灰白色の微粒子、黒色粒子が含まれる	内外面に薄く施釉	外面に葉文と界線、内面に界線	貫入は見られない	御照堂地区攪乱層
		—	—					
		—	—					
第41図 図版39	4 外反碗	12.3	—	灰白色の微粒子	内外面共にやや厚く施釉	外面口縁下部に界線と帯状の寿花文、内面は界線	貫入は見られない	庭園地区攪乱層
		—	—					
		—	—					
第41図 図版39	5 外反碗	12.4	—	淡灰白色の微粒子、黒色粒子が含まれる	内外面に薄く施釉	外面は草花文と界線、内面は界線	貫入は見られない	仏殿地区攪乱層
		—	—					
		—	—					
第41図 図版39	6 外反碗	11.6	—	灰白色でやや粒子が粗い、黒色粒子が含まれる	内外面に薄く施釉、腰折部から高台内にかけて露胎	外面に筆書き文様、界線、内面には界線	貫入は見られない	御照堂地区攪乱層
		4.75	—					
		5.8	—					
第41図 図版39	7 外反碗	14.6	—	黄白色で微粒子、気泡がかなり見られる	内外面に薄く施釉	外面に蓮池図と思われる草花文と界線、内面口縁下部に界線	細かい貫入が見られる	仏殿地区攪乱層
		—	—					
		—	—					
第41図 図版39	8 直口碗	12.4	—	灰白色でやや粒子が粗い、黒色粒子が含まれる、気泡が見られる	内外面に薄く施釉	外面にコンニャク印判が見られる。	口縁部近くに細かな貫入が見られる	表採
		—	—					
		—	—					
第41図 図版39	9 外反碗	13	—	淡灰白色で微粒子、気泡がわずかに見られる	内外面に薄く施釉	外面に菊文	細かい貫入が見られる	仏殿地区攪乱層
		—	—					
		—	—					
第41図 図版39	10 底部	—	—	白色で微粒子	内外面に薄く施釉、畳付および高台内側下部は露胎	外面と内底部に葦と花文と圏線、外底面には四角文銘と界線	貫入は見られない	御照堂地区攪乱層
		—	—					
		5.4	—					
第41図 図版39	11 底部	—	—	灰白色でやや粒子が粗い、黒色粒子が含まれる	内外面に薄く施釉、畳付は露胎	外面に唐草文と界線、外底部には解読不明の銘款、内底部には銘が見られる	貫入は見られない	井戸地区攪乱層
		—	—					
		3.9	—					
第41図 図版39	12 底部	—	—	灰白色でやや粒子が粗い、黒色粒子が含まれる	内外面に薄く施釉、畳付は露胎	外面に草文と界線	貫入は見られない	獅子窟地区基壇・石牆間第3層
		—	—					
		4.6	—					
第41図 図版39	13 底部	—	—	淡灰白色の微粒子、黒色粒子が含まれる	内外面に薄く施釉、畳付は露胎	外面腰折部に界線と簡略化された蓮弁文	貫入は見られない	御照堂地区攪乱層
		—	—					
		5.9	—					
第41図 図版39	14 底部	—	—	淡灰白色で微粒子、黒色粒子を含む、気泡がわずかに見られる	内外面に薄く施釉、内底面は蛇の目釉薬剥ぎされ、高台下部から畳付まで露胎となる	外面に丸文	やや粗い貫入が見られる	表採
		—	—					
		7	—					
第41図 図版39	15 直口碗	12.2	—	白色で微粒子	内外面に薄く施釉、口唇部は鉄釉	外面は草文と界線	貫入は見られない	獅子窟地区攪乱層
		—	—					
		—	—					

第9表 中国産染付観察一覧 (3)

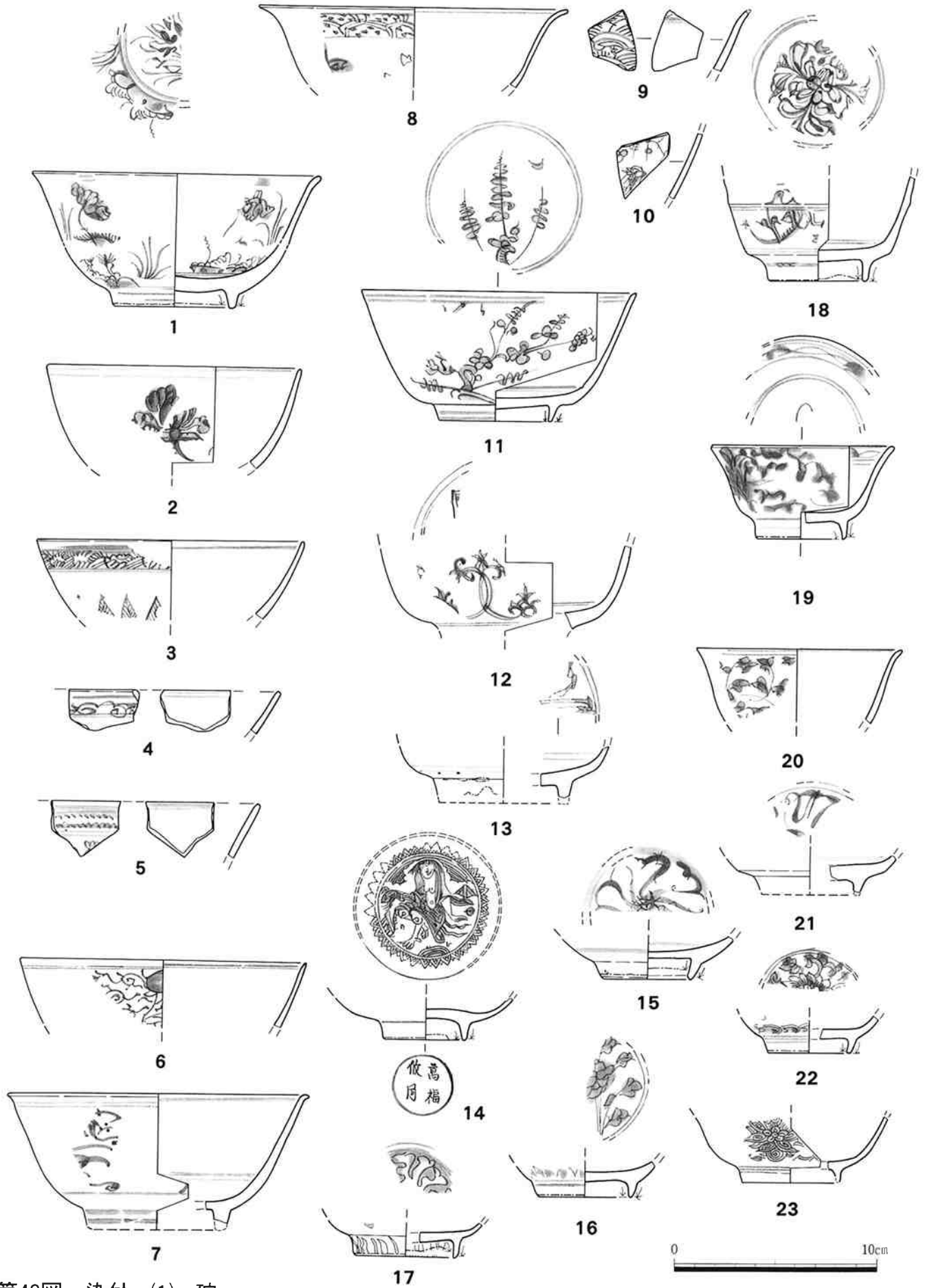
単位: cm

挿図番号 図版番号	器種	直口碗	胎土	釉薬	文様	貫入	出土地点	
		器高 底径						
第41図 図版39	16	外反碗	8.9	淡黄白色で微粒子	内外面に共に薄く施釉される	外面胴部に寿字文と口縁部直下に界線	貫入は見られない	龍淵殿地区攪乱層
			—					
			—					
第41図 図版39	18	外反碗	8.2	白色で微粒子	内外面に共に薄く施釉される	外面胴部に界線、雷文、雲文	貫入は見られない	龍淵殿地区攪乱層
			—					
			—					
第41図 図版39	17	外反碗	8.8	淡白色で微粒子、黒色粒子が若干含まれる	内外面に薄く施釉、呉須は濃い藍色	外面に口縁下部帯状の渦巻きを連ねた文様と界線	貫入は見られない	御照堂地区攪乱層
			—					
			—					
第41図 図版39	19	外反碗	9.2	淡灰白色で微粒子、気泡が若干見られる	内外面に薄く施釉、呉須は濃い藍色	内外面に共に仙芝祝寿文、口唇部は呉須で着色される	貫入は見られない	庫裏地区造成土層
			—					
			—					
第41図 図版39	20	外反碗	10	淡灰白色で微粒子	内外面に薄く施釉	外面に横位の渦巻文と列点文、界線、腰折部に簡略化された芭蕉文、内面は界線	貫入は見られない	龍淵殿地区攪乱層
			—					
			—					
第41図 図版39	21	外反碗	8.2	白色で微粒子	内外面に薄く施釉、呉須は濃い藍色	外面に簡略化された雷文、雲文、界線	貫入は見られない	龍淵殿地区攪乱層
			—					
			—					
第41図 図版39	22	外反碗	8.6	白色で微粒子	内外面に薄く施釉、畳付けのみ露胎	内底部中央に渦巻文、内外面の胴部に仙芝祝寿文	貫入は見られない	龍淵殿地区石積み3裏込め内
			8.6					
			3.2					
第42図 図版40	1	碁底皿	8.4	灰白色で微粒子	内外面に薄く施釉	外面に波瀾文と芭蕉文、内面は界線、口唇部は呉須が施される	貫入は見られない	庫裏地区攪乱層
			—					
			—					
第42図 図版40	2	直口皿	10.6	淡灰白色で微粒子	内外面に薄く施釉	外面に唐草文か、内面に圏線、界線	貫入は見られない	井戸地区攪乱層
			—					
			—					
第42図 図版40	3	碁底皿	10.4	薄橙色で微粒子	内外面に薄く施釉、高台部の釉は掻き取られる	外面に波瀾文、芭蕉文、界線、内面に草花文と圏線	細かい貫入が見られる	鐘楼地区攪乱層
			—					
			3.4					
第42図 図版40	4	直口皿	10.2	淡灰白色で微粒子	内外面に薄く施釉	外面に界線、内面口縁下部に四方禪文と圏線	貫入は見られない	鐘楼地区攪乱層
			—					
			—					
第42図 図版40	5	碁底皿	—	灰白色で微粒子、黒色粒子を含む	内外面に薄く施釉、高台部の釉は掻き取られ、砂粒が多量に付着する	内底部に梵字文と圏線、外面には界線	貫入は見られない	井戸地区攪乱層
			2.6					
			—					
第42図 図版40	6	碁底皿	—	淡灰白色で微粒子	内外面に薄く施釉、高台部の釉は掻き取られ、砂粒が付着する	内底部に花鳥文	貫入は見られない	龍淵殿地区攪乱層
			2.6					
			—					
第42図 図版40	7	碁底皿	—	灰白色で微粒子	内外面に薄く施釉、高台部の釉は掻き取られ、砂粒が付着する	内底部に草花文と圏線	粗い貫入が見られる	表採
			3					
			—					
第42図 図版40	8	碁底皿	—	淡黄白色で微粒子、黒色粒子を含む	内外面に薄く施釉、高台部の釉は掻き取られる	内底部に寿字文と界線	貫入は見られない	表採
			3.4					
			—					
第42図 図版40	9	碁底皿	—	淡灰白色で微粒子	内外面に薄く施釉、高台部の釉は掻き取られ、砂粒が付着する	内底部に花文と圏線	貫入は見られない	鐘楼地区南側溝内
			4.2					
			—					
第42図 図版40	10	外反皿	—	白色で微粒子	内外面に薄く施釉	内外面に共に芙蓉手	貫入は見られない	獅子窟地区攪乱層
			—					
			—					
第42図 図版40	11	外反皿	10.6	灰白色で微粒子、黒色粒子を若干含む	内外面に薄く施釉	外面に界線と宝相華唐草文か、内面は圏線と十字花文か	細かい貫入が見られる	御照堂地区攪乱層
			—					
			—					
第42図 図版40	12	外反皿	10.4	淡灰白色で微粒子	内外面に薄く施釉	外面に界線と宝相華唐草文か、内面は圏線	貫入は見られない	表採
			—					
			—					
第42図 図版40	13	底部	—	淡灰白色で微粒子、気泡がわずかに見られる	内外面に薄く施釉、高台下部から畳付にかけて露胎	内底部に十字花文、外面腰折部に界線	貫入は見られない	左脇門地区表採
			4.2					
			—					
第42図 図版40	14	底部	—	淡灰白色で微粒子	内外面に薄く施釉	外面に芙蓉手、内底部に丸文と宝文を組み合わせる	貫入は見られない	表採
			6					
			—					
第42図 図版40	15	底部	—	淡灰白色で微粒子	内外面に薄く施釉、底部に砂粒が付着	内底部には十字花文	貫入は見られない	仏殿地区攪乱層
			6					
			—					
第42図 図版40	16	底部	—	淡灰白色で微粒子	内外面に薄く施釉、外面高台下部から畳付、外底面側高台部分にかけて露胎	内底部に草文、外底面に銘款	貫入は見られない	表採
			6.8					
			—					
第42図 図版40	17	底部	—	淡灰白色で微粒子、僅かに気泡が見られる	内外面に薄く施釉、高台部の釉は掻き取られ、砂粒が付着する	内底部に玉取獅子文、外面は界線と草文	貫入は見られない	庫裏地区造成土層
			7.6					
			—					
第42図 図版40	18	底部	—	淡青白色で微粒子	内外面に薄く施釉、高台下部から畳付にかけて露胎	内底部に草花文、外底面には線描きの模様がみられる	貫入は見られない	表採
			7					
			—					
第42図 図版40	19	外反皿	14.6	淡灰白色でやや粒子は粗い	内外面に薄く施釉、畳付けは露胎	内外面に共に草文と界線が見られる	粗い貫入が見られる	表採
			7.9					
			3					

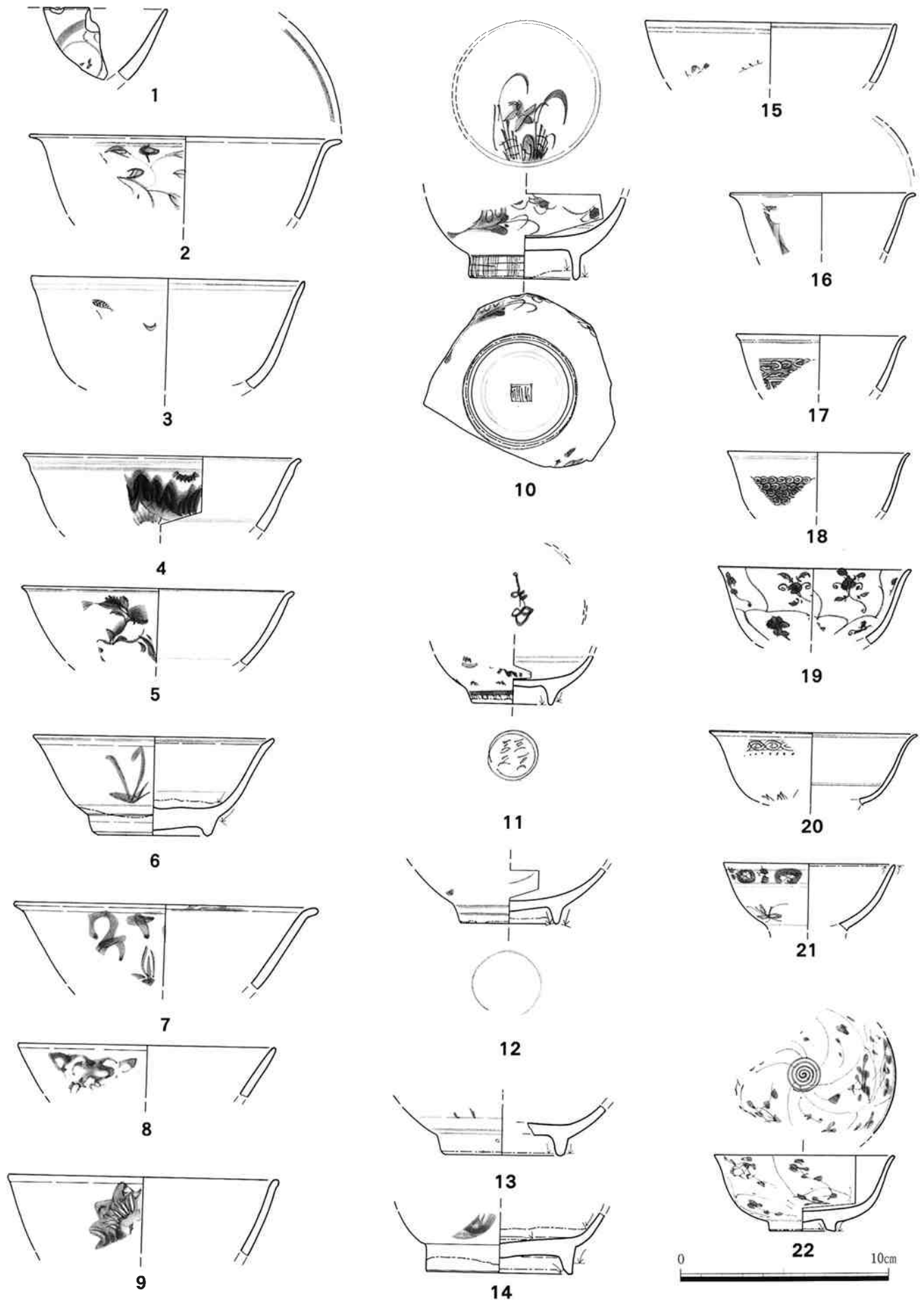
第10表 中国産染付観察一覧 (4)

単位: cm

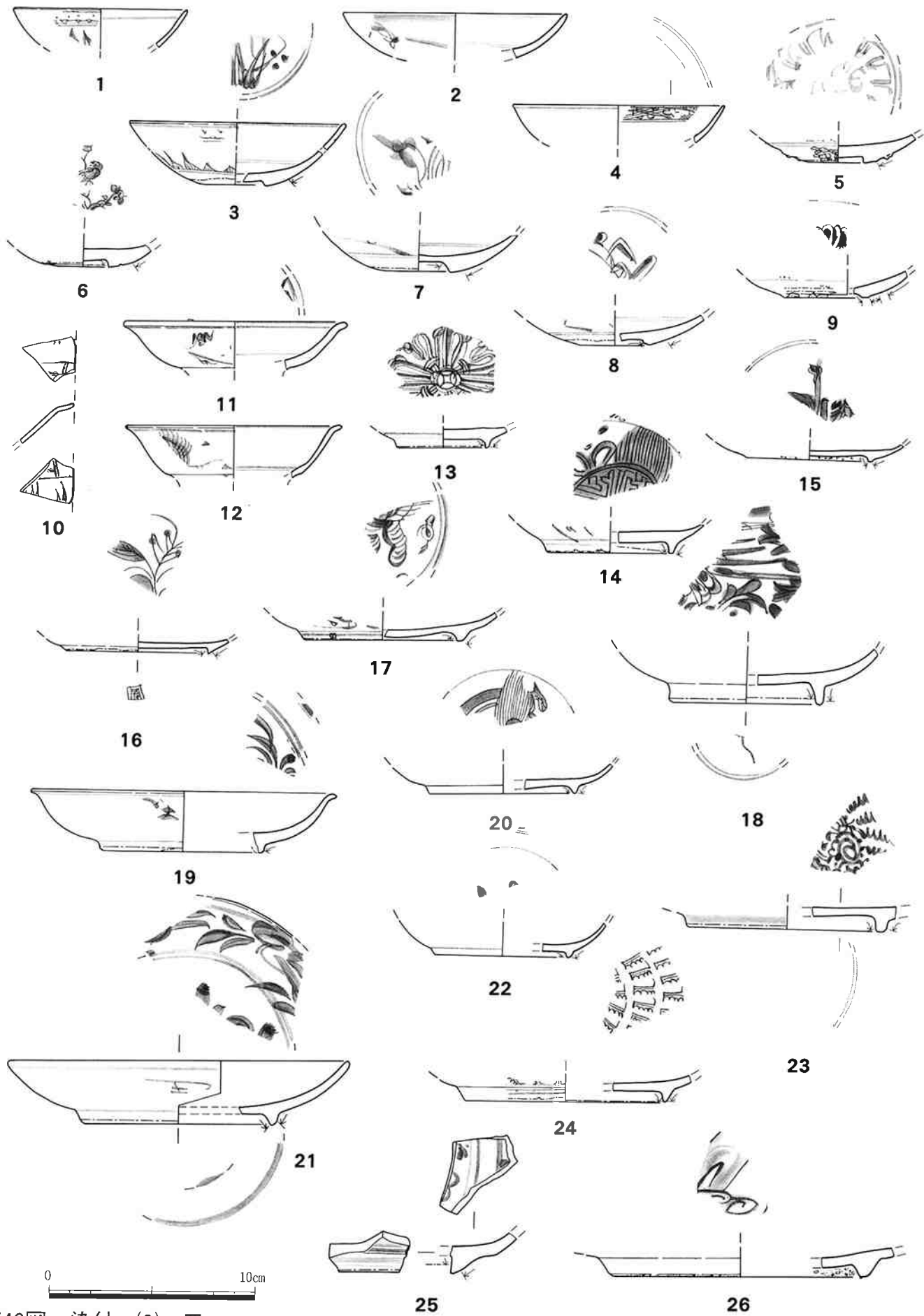
挿図番号 図版番号	器種	直口碗 器高 底径	胎土	釉薬	文様	貫入	出土地点
第42図 図版41	20 底部	— — 7	淡白色で微粒子、気泡がわずかに見られる	内外面に薄く施釉、畳付は露胎	内底部に団龍、外面高台部に界線	貫入は見られない	仏殿地区攪乱層
第42図 図版41	21 直口皿	16.2 3.2 9	灰白色で微粒子、黒色粒子を含む	内外面に薄く施釉、畳付は露胎	外面に筆描き文様、内面に草花文と界線	貫入は見られない	庫裏地区トイレ状遺構内
第42図 図版41	22 底部	— — 6.4	淡灰白色で微粒子	内外面に薄く施釉、高台下部から畳付にかけて露胎	内底部に圏線と十字花文か、外面高台上部に界線	貫入は見られない	龍淵殿地区攪乱層
第42図 図版41	23 底部	— — 9.2	白色で微粒子	畳付も施釉される、畳付けから外底部にかけて多量の砂粒が付着する	内底面にジグザグ文と渦巻文を組み合わせた文様、外面高台部に界線、外底部に圏線	貫入は見られない	龍淵殿地区攪乱層
第42図 図版41	24 底部	— — 9.4	白色で微粒子	内外面に薄く施釉、畳付は露胎	内外面共に梵字文、外面高台部に界線	貫入は見られない	仏殿地区攪乱層
第42図 図版41	25 底部	— — —	灰白色で微粒子、黒色粒子を含む	内外面に薄く施釉、高台下部から畳付にかけて露胎	内底部に十字花文、外面腰折部に界線	貫入は見られない	御照堂地区攪乱層
第42図 図版41	26 底部	— — 12.4	灰白色で微粒子	畳付も施釉される、畳付けから外底部にかけて多量の砂粒が付着する	内底部に十字花文	外面高台上部にわずかに見られる	御照堂地区攪乱層
第43図 図版42	1 底部	— — 6.3	淡青白色で微粒子	内外面に薄く施釉、高台下部から畳付にかけて露胎	外底面に菊花文か	貫入は見られない	龍淵殿地区攪乱層
第43図 図版42	2 菱形皿	— — —	灰白色で微粒子	内外面に薄く施釉、畳付は露胎	内底部に丸文	貫入は見られない	庫裏地区トイレ状遺構内
第43図 図版42	3 盤底部	— — —	灰白色で微粒子、黒色粒子を含む	畳付けから外底面にかけて露胎、呉須は唐草文が濃藍色	外面に牡丹唐草文と界線、内底部に蓮池図	貫入は見られない	表採
第43図 図版42	4 鉢口縁部	— — —	淡灰白色で微粒子、黒色粒子を含む	内外面共にやや厚めの釉が施される	両面に2条の界線、そして雲文、唐草文が見られる	貫入は見られない	表採
第43図 図版42	5 鉢胴部	— — —	淡黄白色で微粒子、気泡が僅かに見られる	内外面共に薄く施釉される	外面に人物像	貫入は見られない	龍淵殿地区攪乱層
第43図 図版42	6 鉢底部	— — 13.6	淡青白色で微粒子、黒色粒子を含む	内外面に薄く施釉、畳付けのみ露胎	内底部に山水画と思われる文様が見られる	貫入は見られない	井戸地区攪乱層
第43図 図版42	8 杯	7.6 4.2 4.7	淡黄白色で微粒子	内外面に薄く施釉、畳付けのみ露胎	外面胴部に枝と草の文様、内底面に渦巻き文	内外面に粗い貫入が見られる	鐘樓地区攪乱層
第43図 図版42	12 杯	4.7 2.95 1.9	淡灰白色で微粒子、黒色粒子を含む	内外面に薄く施釉高台部途中から外底面にかけて露胎	外面胴部に唐草文と界線、内面に圏線と内底面に「一」	貫入は見られない	井戸地区攪乱層
第43図 図版42	9 杯	6.4 — —	淡灰白色で微粒子、黒色粒子を含む	内外面に薄く施釉	外面胴部に団龍と界線	貫入は見られない	龍淵殿地区石積み4確認トレンチ第4層
第43図 図版42	7 杯	— — 3.4	淡灰白色で微粒子、黒色粒子を含む	内外面に薄く施釉、畳付けのみ露胎	外面胴部に草文と馬文	貫入は見られない	井戸地区攪乱層
第43図 図版42	13 杯	4 2.7 1.8	淡黄白色で微粒子	全面、薄く施釉される	外面胴部に半円の菊花文と界線が見られる	貫入は見られない	左脇門地区攪乱層
第43図 図版42	14 杯	3.6 2.1 1.8	白色で微粒子	全面、薄く施釉される	外面胴部に蔓と斑点状の草文が全面に見られる	貫入は見られない	井戸地区攪乱層
第43図 図版42	10 杯	— — 2.1	淡灰白色で微粒子、黒色粒子を含む	内外面に薄く施釉畳付けから外底面にかけて露胎	外底部に銘款、高台部に界線、胴部にも文様が見られる	貫入は見られない	井戸地区攪乱層
第43図 図版42	11 杯	— — 2.2	淡黄白色で微粒子	内外面に薄く施釉、畳付けのみ露胎	底部近くに2条の圏線	貫入は見られない	三門基壇造成層
第43図 図版42	15 香炉	7.2 — 6	淡灰白色で微粒子、黒色粒子を含む	外面底部近くから内面口縁直下まで施釉	外面口縁直下と底部近くを2条の界線で面しその間に草花文	貫入は見られない	御照堂地区攪乱層
第43図 図版42	16 合子蓋	5 — —	淡灰白色で微粒子、黒色粒子を含む	外面のみ薄く施釉される	上面に草文が見られる	貫入は見られない	龍淵殿地区攪乱層
第43図 図版42	17 合子底部	— — 5.4	淡灰白色で微粒子、黒色粒子を含む	内外面に薄く施釉、外底部は更に薄く施釉	外面に3条の界線が見られる	内外面に粗い貫入が見られる	表採
第43図 図版42	18 長頸瓶	7.4 — —	淡灰白色で微粒子、黒色粒子を含む	内外面共に薄く施釉される	口縁部に3条の界線が見られる	貫入は見られない	井戸地区攪乱層
第43図 図版42	19 瓶	— — —	淡灰白色で微粒子、黒色粒子を含む	内外面共にやや厚めの釉が施される	龍の爪と思われる模様と雲文が見られる	貫入は見られない	三門地区攪乱層
第43図 図版42	20 器不明	— — 6.8	灰白色で微粒子、黒色粒子を多量に含む	内外面に薄く施釉、畳付けのみ露胎	底部	胴部と高台部の接続部に界線	表採



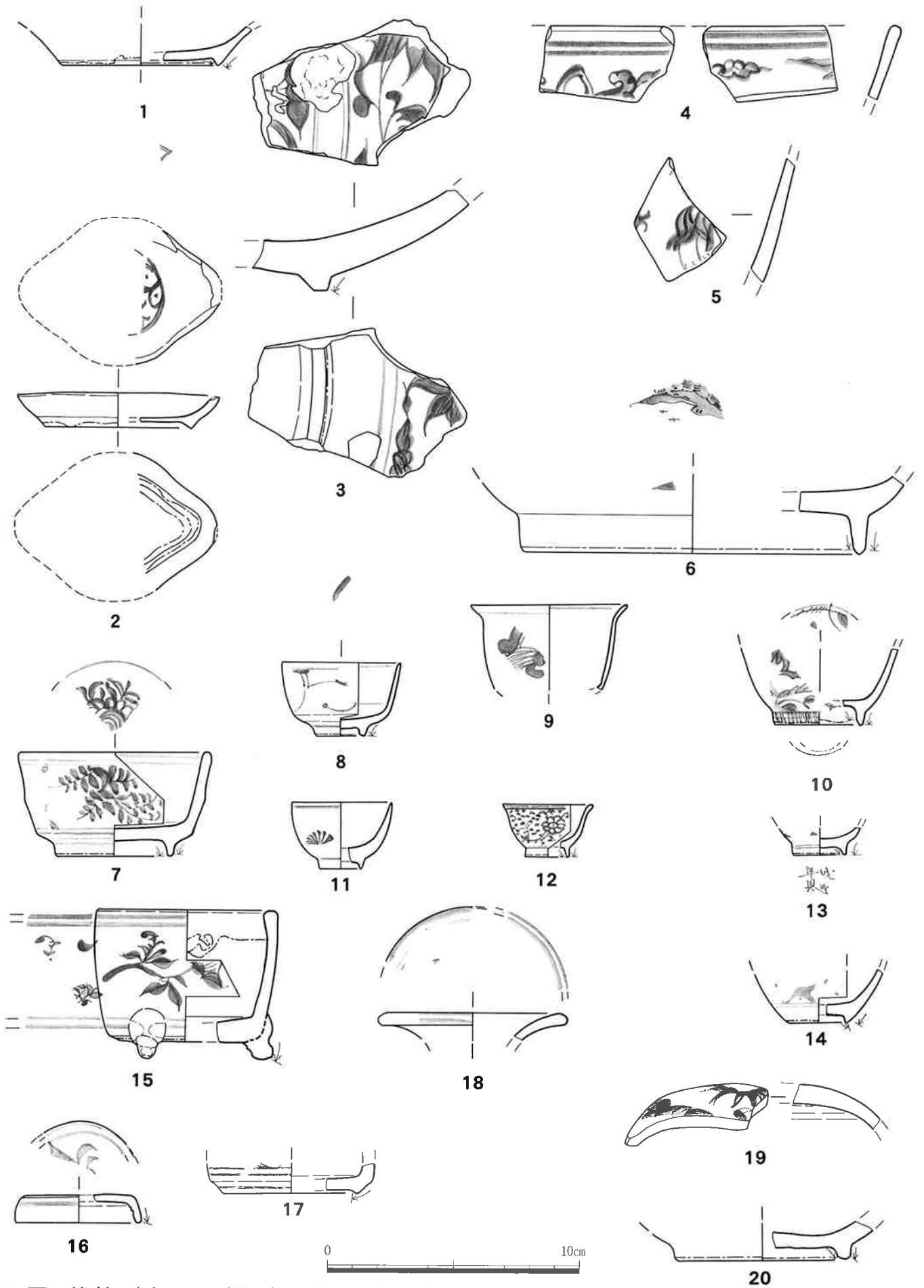
第40图 染付 (1) 碗



第41图 染付 (2) 碗



第42図 染付 (3) 皿



第43図 染付 (4) 皿・盤・鉢・杯・香炉・合子・瓶

第4節 白地鉄絵

第44図・図版43-1の1点のみの出土である。壺などの大型製品の胴部と考えられる。表面は薄く白化粧した上に鉄釉で絵を施す。小片のため全体の文様は何うことができないが、勢いよく描いた筆致で構成されるものと考えられる。裏面は鉄釉を全体的に薄く施しており、赤褐色を呈する。素地は赤褐色の微粒子で白色の粗粒子と石英?が多く混入する。鐘楼地区攪乱層。

第5節 中国産・タイ産褐釉陶器

中国産褐釉陶器は総計292点出土している。器種は主に壺が大半を占め、少数ではあるが蓋、鉢、摺鉢が見られる。壺は口縁部、頸部の形態から3つに分類することができた。個々の特徴については表11に呈示した。

壺 : I類:口縁部の断牆面形が「フ」の字状を呈する。口唇部は露胎となる、頸部は長く、胴部はナデ肩となる。(第44図・図版43-2、7)

II類:口縁部の断面形が「ク」の字状を呈する。(第44図・同図版10)

III類:口縁部の断面形が略方形を呈する。(第44図・同図版8、9、11、12)

蓋 : 1点のみ出土している。端部は丸みを帯び、身を受けるための突起が見られる。端部のみ釉が施され、外面は灰褐色、内面は青灰色となっている。

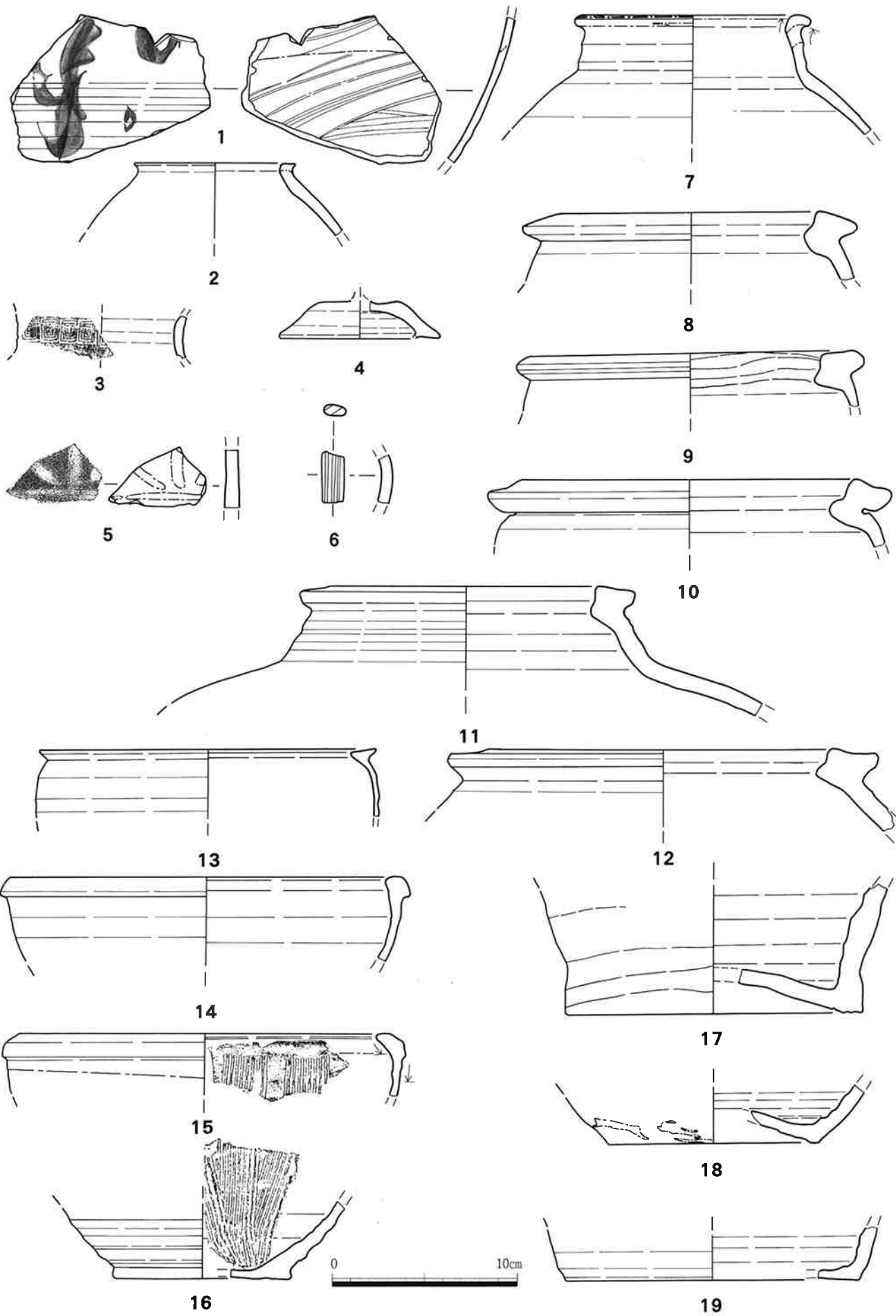
鉢 :口縁部の断面形が三角形のものと同方形を呈するものが見られる。前者は器壁が約3mmと薄く、内面は露胎である。後者の器壁は約5mmとやや厚く、内外面共に施釉される。

摺鉢:摺鉢は口縁部と底部資料の2点が得られた。口縁部は肥厚し、内彎する。裏面の摺り目は幅1mmの先端が丸みを帯びる櫛を9本単位として施す。

第11表 中国産褐釉陶器観察一覧

単位: cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	口径 器高 底径	形態	施釉・釉色	器面調整	素地	出土地点
第44図 図版43 2	壺	口	8.7	壺の中でも小型のものである、胴上部はナデ肩となる	茶褐色、内外面共に薄く施釉	内面はヨコ撫で	赤褐色の微粒子、白・赤色の粗粒子を含む	三門地区攪乱層
第44図 図版43 3	壺か	胴	—	壺の頸部辺りと思われる、縦長の雷文が帯状に、密に施される	黒褐色、内外面共に薄く施釉	内面に横位の成形痕が見られる	灰褐色の微粒子、白色の粗粒子を含む	庫裏地区攪乱層
第44図 図版43 4	蓋	端部	8.8	端部は丸みを有し、身を受ける突起、摺みと思われる隆起が見られる	端部に僅かに黒褐色の釉が見られる	外面に横位の筋削り、内面に撫で成形痕が見られる	褐灰色の微粒子、白色粗粒子を含む	庭園地区攪乱層
第44図 図版43 5	不明	胴	—	表面に釉を掻き取って縦、横、斜位の直線で構成される文様が見られる	にぶい黄褐色、内外面に薄く施釉	—	黄褐色、灰白色の微粒子、白・黒色の粗粒子を含む	三門地区基壇内攪乱層
第44図 図版43 6	把手	—	—	断面形は楕円形状となる、外側には露胎部分に沈線を通し、釉の濃さによって3本の縦線を帯び彩色が見られる	オリーブ褐色、内外面共に薄く施釉	—	暗褐色の微粒子、僅かに白色微粒子を含む	庫裏地区攪乱層
第44図 図版43 7	壺	口~ 胴	13	頸部は長く、胴上部はナデ肩となる	暗褐色、内外面共に薄く施釉	頸部は横位の撫で成形痕が明瞭に見られる	橙色の微粒子、黒・暗茶色の粗粒子が僅かに見られる	龍淵殿地区攪乱層
第44図 図版43 8	壺	口	18.2	口縁部の断面形は歪な方形状となり、内面口縁が僅かに突出している	釉はかなり剥落する、内外面共に薄く施釉	胴部はヨコ撫で	やや粗い灰白色の微粒子、白色粗粒子、石英?が僅かに見られる	庭園地区西側石籬トレンチ第2層
第44図 図版43 9	壺	口	18.8	口縁部の断面形は歪な方形状となり、内面口縁が僅かに突出している	釉はかなり剥落する、黒褐色、内外面共に薄く施釉	内面口縁直下は撫でが歪に変形する	灰白色の微粒子、白・黒の微粒子が僅かに見られる	御照堂地区攪乱層
第44図 図版43 10	壺	口	21.8	内面口縁が大きく突出し、蓋受け状の段を有する	釉はかなり剥落する、オリーブ褐色で内外面共に薄く施釉	内外面ともにヨコ撫で	灰褐色の微粒子、白・黒粗粒子や気泡が僅かに見られる	龍淵殿地区攪乱層
第44図 図版43 11	壺	口~ 胴	18.3	頸部は緩やかに立ち上がり、胴上部は怒り肩となる	表裏面は共に火を受けた痕跡が見られる。明褐色で内外面共やや厚く施釉される	頸部から胴部にかけてヨコ撫で成形痕が明瞭に見られる	橙色、灰白色の微粒子、白・黒粗粒子並びに気泡が見られる	仏殿地区基壇造成層
第44図 図版43 12	壺	口	23.2	口縁部は内彎する、内面口縁が大きく突出し、蓋受け状の段を有する	表裏面は共に火を受けた痕跡が見られる。オリーブ褐色で内外面共に薄く施釉される	胴部はにヨコ撫で、口唇部に摺り痕が見られる	灰白色の微粒子、白色粗・微粒子や気泡が多く見られる	表採
第44図 図版43 13	鉢	口~ 胴	18.2	口縁部の断面形は三角形状となり、内彎する、胴部は急に立ち上がる	—	外面はヨコ撫で、内面は筋削り成形痕が見られる	灰白色の微粒子、白色粗粒子が多く、黒色粒子は僅かに見られる	龍淵殿地区石積み3埋土層
第44図 図版43 14	鉢	口~ 胴	22.2	口縁部の断面形は方形状となり、内彎する	黒褐色で内外面共に薄く施釉される。裏面に釉垂れあり	胴部はにヨコ撫で、口唇部に異物が容着する	黄灰・灰白色の微粒子、黒色粗粒子が僅かに見られる	獅子窟地区攪乱層
第44図 図版43 15	摺鉢	口~ 胴	21.8	口縁部は肥厚し、内彎する	オリーブ褐色で口縁部のみ施釉、釉の厚みは斑がある	9本単位の櫛目が裏面に施される	灰褐色の微粒子、白色粗粒子が僅かに見られる	御照堂地区攪乱層
第44図 図版43 16	摺鉢	胴~ 底	9.6	ベタ底で緩やかに胴部は立ち上がる	—	9本単位の櫛目が裏面に施される、胴部はヨコ撫で	にぶい褐・灰白色の微粒子、白色粗粒子が僅かに見られる	御照堂地区攪乱層
第44図 図版43 17	壺	底	17.8	底部は上げ底状となり、胴部は急に立ち上がる	内外面共に薄く施釉されるがかなり剥落し、旧状は伺えない	胴部はヨコ撫で、内底面は二次的に火を受けている、底面端部に目跡あり	灰白色の微粒子、大粒の白色粗粒子が僅かに見られる気泡が多く見られる	表採
第44図 図版43 18	壺	底	11.2	底部は上げ底状となり、胴部は緩やかに立ち上がる	にぶい赤褐色で外面胴部にのみ施釉される、	内面胴部にヨコ撫で、外底面に圧痕	淡褐色の微粒子、大小の色粒子が見られる	龍淵殿地区攪乱層
第44図 図版43 19	壺	底	15.6	ベタ底で胴部は急に立ち上がる	—	胴部はヨコ撫で、内底面に回転成形痕が見られる	青灰色の粗粒子、白・黒色の微粒子が多く見られる	龍淵殿地区攪乱層



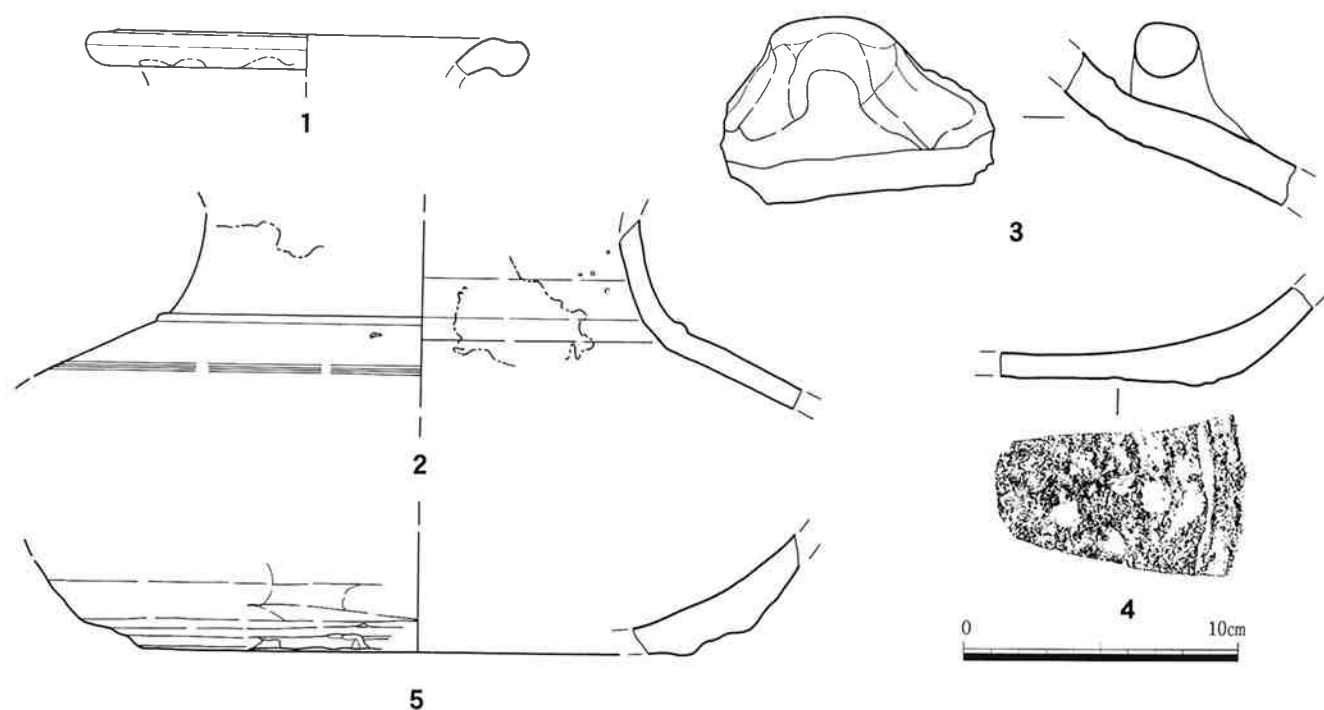
第44图 中国産白地鉄絵・中国産褐釉陶器

タイ産褐釉陶器は総計51点出土している。そのほとんどが小片で器種を判別することができる資料においては全て壺であった。残存度の良好な口縁部、頸部、底部、把手をそれぞれ図化した。共通する特徴として内外面共に薄く施釉され、素地は暗～灰白色、赤・白・黒色の砂粒を含む。個々の特徴については表12に呈示した。

第12表 タイ産褐釉陶器観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	器種	部位	口径	形態	施釉・釉色	器面調整	素地	出土地点
			器高					
第45図 図版44 1	壺	口	16.2	口縁部がラップ状に開くもので、上端部をわずかに撮み上げて鈔縁状につくりあげている	黒褐色、内外面共に薄く施釉、口唇部と外面口縁下部は更に薄く施釉する	外面に横位の成形痕が見られる、砂粒が僅かに溶着している	灰白色のやや粗い粒子で赤・黒の砂粒が見られる、気泡も僅かに見られる	庫裏地区 攪乱層
			—					
			—					
第45図 図版44 2	壺	頸～ 胴	—	頸部は急に立ち上がり、胴上部はナデ肩となる。頸部と胴部の境に横位の凸線が見られる。	暗オリーブ褐色、外面のみに薄く施釉する	内面頸部にはヨコ撫で、内面胴部には篋削りの成形痕が見られる	灰白色の微粒子、赤・黒色の砂粒、白色の微粒子が見られる	表探
			—					
			—					
第45図 図版44 3	壺	把手	—	ブリッジ状の把手で、やや上向きにつくられたものようである。頸部と胴部の境にあたる部分が残存しており、外面には横位の凸線が見られる。	胴部は黒褐色であるが頸部に近づくにつれ、釉厚が薄くなり釉色も白味を帯びてくる、把手の裏面と内面は露胎となる	把手は丁寧に胴部に張り付けている内面胴部には篋削りの成形痕が見られる	褐灰色の微粒子、赤・黒色の砂粒、白色の微粒子が見られる	御照堂地区 攪乱層
			—					
			—					
第45図 図版44 4	壺	底	—	底面が立ち上がり部分よりも器壁を薄く仕上げている。外底面からの立ち上がり部分は明瞭なヨコ撫でが一条めぐる	暗赤色、内面のみ施釉される、外面は露胎でにぶい赤褐色を呈する	外底面には凹凸が見られ、内底面は轆轤成形痕、外面胴下部はヨコ撫でが見られる	灰色の微粒子、白色砂粒が大量に見られる	仏殿地区 基壇造成層
			—					
			—					
第45図 図版44 5	壺	底	—	底面から広がりながら胴部へ移行する、底面と立ち上がり部分との境は明瞭な段を有している	施釉は見られないことから底部近くは露胎であったと考えられる、器表面は暗赤色	外底面には凹凸が見られ、胴下部にはヨコ撫でが見られる	灰色の微粒子、白色砂粒が大量に赤色砂粒、黒色微粒子が僅かに見られる、気泡も僅かに見られる	御照堂地区 攪乱層
			—					
			20.4					



第45図 タイ産褐釉陶器

第13表 中国産褐釉陶器出土状況一覧

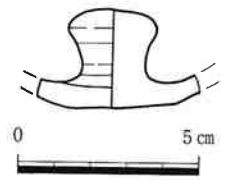
器種	出土地区		御照堂地区	獅子窟地区	仏殿地区	三門地区	鐘楼地区	龍淵殿地区	庫裏地区	井戸地区	庭園地区	左脇門地区	表採	合計
	大	口縁部	1		1			1			1		1	5
壺	中	口縁部						1						1
	小	口縁部										1		1
		胴部							1					1
	壺サイズ不明		口縁部		1	1			1		1			
		胴部	35	17	21	25	31	35	3	26	6	8	38	245
		外耳付胴部	3	1	1		3	2	1	1			7	19
		底部	3	1		1		2					3	10
鉢	口縁部		1							1			2	
播鉢	口縁部	1												1
	底部	1												1
蓋	縁部									1			1	
器種不明	取っ手									1				1
計			44	21	24	26	34	42	5	29	9	9	49	292

第14表 タイ産褐釉陶器出土状況一覧

器種	出土地区	井戸地区	御照堂地区	仏殿地区	三門地区	庭園地区	獅子窟地区	龍淵殿地区	地区不明	計
	器種									
壺	口縁部	3								3
	胴部	6	13	8	8	2	4	2	2	45
	耳		1							1
	底部		1	1						2
計		9	15	9	8	2	4	2	2	51

第6節 タイ産半練

タイ産半練で明確に器種が窺えるものは第46図・図版43-6に示す、落とし蓋の撮み部分の破片資料1点のみである。今回の報告資料中に身は認められず、蓋についても蓋甲～端部の全形が窺える資料は確認されなかった。全体は蓋下面が膨らみ端部へ至る形状と類推され、撮みは宝珠を呈した尖頭ではなく、やや扁平で丸みを持った、金武正紀氏の形態分類でいう「饅頭形」^(註1)にあたるものである。撮みの側部及び蓋下面に擦痕、撮みの根元周辺には指頭痕らしきものもみられる。器面色調は内外とも明橙色で素地中央が灰黒色のサンドウィッチ状を呈し、精選された砂質胎土に黒色粒・茶褐色粒が混入している。御照堂地区攪乱層出土。



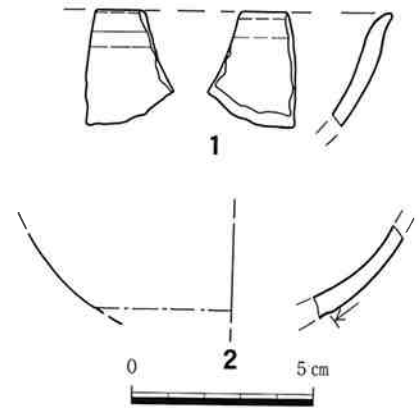
第46図 タイ産半練

<註文献>

註1. 金武正紀 「沖縄出土のタイ・ベトナム陶磁」『貿易陶磁研究』第11号 日本貿易陶磁研究会 1991年

第7節 その他の輸入陶磁器

第1節から第6節まで報告した以外での輸入陶磁器としては青磁染付、鉄絵、鉄釉、鉄釉染付、色絵、瑠璃釉、翡翠釉、翡翠釉鉄絵、紫釉、宜興窯、天目が得られた。何れも出土量が僅少なため本節では一括して以下に報告する。



第47図 その他の輸入陶磁器 (1)天目

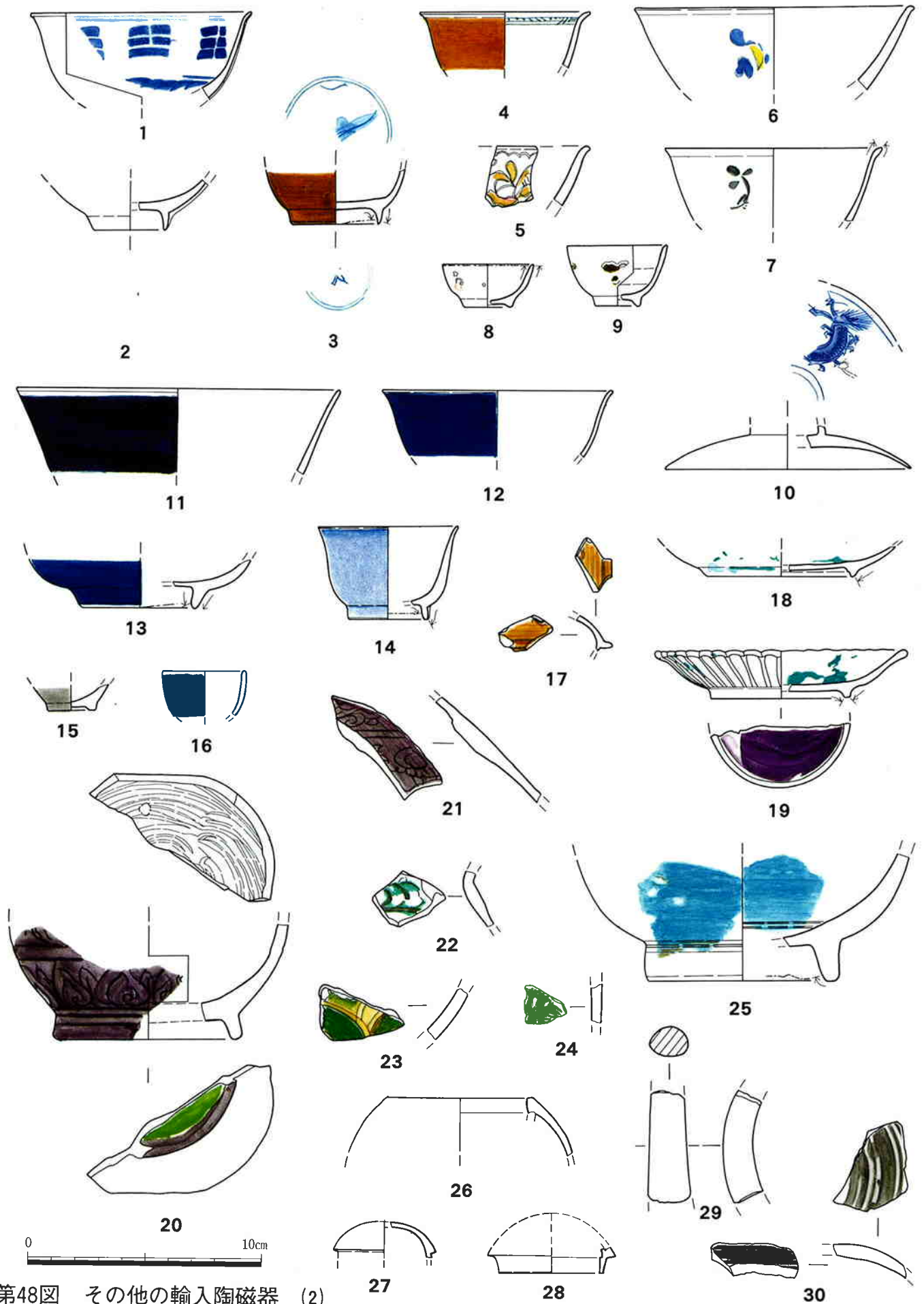
1. 青磁染付 (第48図・図版45-1～2) : 青磁染付は5点得られ、うち全形が伺えるもの2点図化した。1は内面に八卦文を呉須により施す外反碗で2は外底部に文様が施される碗底部である。詳細は観察表に示した。
2. 鉄釉染付 (第48図・図版45-3～4) : 鉄釉染付は6点得られ、うち全形が伺えるもの2点図化した。3は内・外底部に文様が見られる杯底部で高台は高く作る。4は全形が伺える直口の杯で高台はハの字状に開く。
3. 色絵 (第48図・図版45-5～9) : 色絵は15点得られ、うち全形が伺えるもの5点図化した。器種は碗と杯があり、碗は器壁が薄いものと厚いものとに、杯は外反と直口口縁とに大別される。
4. 色絵染付 (第48図・図版45-10) : 色絵染付は1点のみが得られた。10は蓋で端部から摘みにかけての部分である。外面は呉須で龍の文様を描き、既に色は剥落しているが龍の頭部に着色痕が見られる。
5. 瑠璃釉 (第48図・図版45-11～16) : 色絵は7点得られ、うち全形が伺えるもの6点図化した。器種は碗と杯があり、両器種ともに外反、直口口縁が見られた。
6. 鉄釉 (第48図・図版45-17) : 鉄釉は1点のみが得られた。器種は鏝付きの蓋で蓋甲下部より上部に文様が見られる。
7. 翡翠釉 (第48図・図版45-18～19、25) : 翡翠釉は4点得られ、うち全形が伺えるもの3点図化した。器種は皿と鉢がある。皿は18が無文で、19は外面は菊の花弁をモチーフとし、それに対応するように口縁、外面器壁は波状を呈している。鉢は25が高台は厚く高いつくりで、「ハ」の字状に開く。
8. 紫釉 (第48図・図版45-20～21) : 紫釉は2点得られ、図化した。20は長頸瓶若しくは小壺の底部と思われ、21は小片であるため断言はできないが、20と同様、長頸瓶小壺の胴部と考えられる。
9. 翡翠釉鉄絵 (第48図・図版45-22) : 翡翠釉鉄絵は1点のみが得られた。小片であるため器種は不明。「く」の字状に屈曲する。
10. 三彩 (第48図・図版45-23～24) : 三彩は2点得られ、うち全形が伺えるもの2点図化した。23、24共に小片のため器種は不明。
11. 宜興窯 (第48図・図版45-26～29) : 宜興窯は4点得られ、うち全形が伺えるもの、特徴的なものを4点図化した。器種は急須、蓋と把手の一部が得られた。急須、蓋は何れも器壁が薄い。
12. 鉄絵 (第48図・図版45-30) : 鉄絵は1点のみが得られた。小片のため器種は不明。
13. 天目 (第47図1、2・図版45-31～32) : 天目は11点得られ、2点図化した。1は口縁部で吸い口部分の釉調は褐色を呈し、胴上部は黒褐色となる。釉層は薄く、胎土は密で灰白色、白・黒色粒子を含む。2は胴下部で

丸味を有しながら口縁部へ移行する。釉層はやや厚めである。

第15表 その他の輸入陶磁器観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	種類	器種	部位	口径 器高 底径	胎土	釉薬	文様	貫入・釉調	出土地点
第48図 図版45 1	青磁染付	小碗	口	9.6 — —	白色の微粒子 黒色の微粒子が見られる	内面に薄く、外面にやや厚く施釉	内面に八卦過分を呉須により施す 内底面にも文様が見られるが確認できず	貫入は見られない 外面は青緑色、内面は青みがかった白色の透明釉がかかる	龍潭院地区 攪乱層
第48図 図版45 2	青磁染付	小碗	底	— 3.1 —	— 紫色の微粒子が見られる	内面に薄く、外面に厚く施釉	文様は見られない	貫入は見られない 外面は青緑色、内面は白色の透明釉がかかる	三門地区基壇 内攪乱層
第48図 図版45 3	鉄箱染付	杯	底	— 4 —	白色の微粒子 黒色粒子が僅かに見られる	内外面共に薄く施釉	内底部に簡略化された山水画と團縁 外底部に中央に寿文と團縁	外底部と内底部に僅かに貫入が見られる。 外面は褐色、内面は白色の透明釉	龍潭院地区 集石遺構埋土層
第48図 図版45 4	鉄箱染付	杯	口	7.3 — —	灰白色の微粒子 黒色粒子が僅かに見られる	内外面共に薄く施釉	内面口縁部直下に簡略化された四方博文と界線	貫入は見られない 外面は褐色、内面は白色の透明釉	表採
第48図 図版45 5	色絵	碗	口	— — —	明青白色の微粒子 白・黒色粒子が僅かに見られる	内外面共に施釉	外面胴部に赤褐色で花卉状の文様を絵付け 色のほとんどが剥落している	貫入は見られない 釉調は内外面共に薄い青白色でやや透明がかかる	獅子窟地区 攪乱層
第48図 図版45 6	色絵	碗	口	12.2 — —	灰白色の微粒子 黒色粒子が見られる	内外面共にやや厚く施釉	外面胴部に淡黄色、明青色で花卉状と草状の文様を絵付け	貫入は見られない 釉調は内外面共に薄い青白色でやや透明がかかる	三門地区 攪乱層
第48図 図版45 7	色絵	碗	口	9.4 — —	灰白色の微粒子 黒色粒子が僅かに見られる	内外面共に施釉	外面胴部に深青色で花卉と草状の文様を絵付け	貫入は見られない	三門基壇 内攪乱層
第48図 図版45 8	色絵	杯	口～底	3.9 1.85 2	淡灰白色の微粒子 白・黒色粒子、気泡が見られる	内外面共に施釉 口唇部は露胎 底部一部に砂粒が溶着する	外面胴部に文様が見られるが、色が剥落しているため不明瞭	貫入は見られない	井戸地区 攪乱層
第48図 図版45 9	色絵	杯	口～底	4.4 2.65 1.9	淡灰白色の微粒子 黒色粒子が見られる	内外面共に薄く施釉 盤付に砂粒が溶着する	外面胴部に黄褐色で「一」の下に「一」状の文様	貫入は見られない	表採
第48図 図版45 10	色絵染付	蓋	把手～ 蓋部	10.6 — —	白色の微粒子	内外面共に薄く施釉	外面に線描で龍が描かれ、龍の頭部を着色した底縁が花卉の形状で囲える	貫入は見られない	三門基壇 造成層
第48図 図版45 11	瑠璃釉	碗	口～胴	14 — —	淡灰白色の微粒子 黒色の素粒子を僅かに見られる	内外面共に薄く施釉	なし	貫入は見られない 外面に瑠璃釉	御照堂地区 攪乱層
第48図 図版45 12	瑠璃釉	碗	口～胴	10 — —	淡灰白色の微粒子 黒色の微粒子を僅かに見られる	内外面共に薄く施釉	なし	貫入は見られない 外面に瑠璃釉	東夷地区 造成層
第48図 図版45 13	瑠璃釉	碗	底	— 5 —	淡灰白色の微粒子 黒色の微粒子を僅かに見られる	内外面共に薄く施釉 高台下部のみ露胎 内底部に小石が溶着する	なし	貫入は見られない 外面に瑠璃釉	御照堂地区 攪乱層
第48図 図版45 14	瑠璃釉	杯	口～底	6 4.1 3.4	淡灰白色でやや粗い粒子 黒色の微粒子を僅かに見られる	内外面共に薄く施釉 高台下部のみ露胎	なし	貫入は見られない 外面に白色の微粒子が混入した瑠璃釉	獅子窟地区 攪乱層
第48図 図版45 15	瑠璃釉	杯	底	— — 2	淡灰白色の微粒子 黒色の微粒子を僅かに見られる	内外面共に高台部も含めて全体的に薄く施釉	なし	貫入は見られない 外面に白色の微粒子が混入した瑠璃釉	表採
第48図 図版45 16	瑠璃釉	杯	口	3.6 — —	淡灰白色の微粒子 白・黒色の微粒子を僅かに見られる	内外面共に薄く施釉	なし	貫入は見られない 外面に瑠璃釉が施されるが濃淡の斑が見られる	表採
第48図 図版45 17	鉄釉	蓋	蓋部	— — —	淡灰白色で微粒子	内外面共に薄く施釉	外面には、鈔部分に横線で陰刻線が、そして頂部近くに文様が僅かに見られる	貫入は見られない 外面に鉄釉、内面は透明釉	箕橋地区 攪乱層
第48図 図版45 18	翡翠釉	皿	底	— 6.4 —	淡青白色の微粒子 黒色粒子と気泡が僅かに見られる	内外面共に薄く施釉 高台下部から外底部にかけて露胎	なし	細かい貫入が見られる	井戸地区 攪乱層
第48図 図版45 19	翡翠釉	皿	口～底	10.9 2.1 6	黄白色でやや粗い粒子 黒色粒子が多く見られる	内外面共に薄く施釉されるが大部分が剥落している。高台下部のみ露胎	外面に菊の花弁をイメージしたような文様とそれに対応するように口縁部は波状	細かい貫入が見られる 外底部は紫釉	龍潭院地区 石積み3埋土層
第48図 図版45 20	紫釉	瓶又は小壺	胴～底	— 7.8 —	灰白色で微粒子 白・黒色粒子が僅かに見られる	外面は薄く施釉、内面は紫に着色する程度に施釉	外面に高台部に2条の界線、胴下部には如意頭文が見られる	貫入は見られない 外面に紫釉 外底部には薄く緑釉や施される景徳鎮	御照堂地区 攪乱層
第48図 図版45 21	紫釉	瓶又は小壺	頸～胴	— — —	灰白色で微粒子 白・黒色粒子が僅かに見られる	外面のみ薄く施釉 内面は着色する程度に施釉 一部露胎となる	頸部と胴部との境に2条の界線 頸部には唐草文、胴部には簡略化された牡丹唐草文	貫入は見られない 外面に紫釉	御照堂地区 攪乱層
第48図 図版45 22	翡翠釉	不明	胴	— — —	淡黄白色で微粒子 赤色粒子が見られる	内外面共に薄く施釉	外面に深緑色で横位の直線と縦位の弧状の線を描く	細かい貫入が見られる 外面に翡翠釉、内面は鉄釉	龍潭院地区 攪乱層
第48図 図版45 23	三彩	不明	胴	— — —	黄白色でやや粗い粒子 黒色粒子が僅かに見られる	内外面共に薄く施釉	外面に2本単位の陰刻線が弧状に描きそれを繋ぎ合わせる文様が見られる	貫入は見られない 内面は緑釉のみ 外面は緑釉と黄釉が見られる	龍潭院地区 攪乱層
第48図 図版45 24	三彩	不明	胴	— — —	暗い黄白色でやや粗い粒子	外面のみ薄く施釉 内面は露胎	外面に描ききざの葉状の文様が見られる	貫入は見られない 外面に緑釉	箕橋地区 攪乱層
第48図 図版45 25	翡翠釉	壺	底部	— 8 —	灰白色、橙色、黄白色と斑がみられ、やや粗い粒子 気泡が見られる	内外面共に薄く施釉 高台下部から外底部にかけて露胎 外面器表に砂粒が溶着	内底部に團縁が2条見られる	細かい貫入が見られる	表採
第48図 図版45 26	宜興窯	急須	口縁部	6.3 — —	茶褐色で微粒子 白・黒色粒子が見られる	なし	なし	なし	仏殿地区 攪乱層
第48図 図版45 27	宜興窯	蓋		4.4 — —	暗赤褐色 白色粒子を僅かに見られる	外面に泥釉で器肌は滑らかである	なし	なし	表採
第48図 図版45 28	宜興窯	蓋	端部	5.4 — 4.4	暗茶褐色で微粒子 白色粒子が僅かに見られる	外面に泥釉で器肌は滑らかである	なし	なし	箕橋地区 攪乱層
第48図 図版45 29	宜興窯	不明	把手	— — —	暗茶褐色で微粒子 白色粒子が見られる	外面に泥釉で器肌は滑らかである	なし	なし	庭園地区 南北トレンチⅢ層
第48図 図版45 30	鉄絵	蓋		— — —	灰色で粗粒子 大粒の白・黒粒子が多く見られる	外面のみ薄く施釉	外面に横位の直線が6本見られる 何れも幅は一定ではなく、途中で切れるものもある	細かい貫入が見られる	表採
第47図 図版45 31	天目		口縁部	— — —	灰色でやや粗い 白・黒色粒子が見られる	内外面共に薄く褐色の釉が施される	なし	なし	井戸地区 攪乱層
第47図 図版45 32	天目		胴部	— — —	灰色でやや粗い 白・黒色粒子が見られる 内面露胎部は黄褐色	内外面共にやや厚く黒褐色の釉が施される	なし	なし	井戸地区 攪乱層



第48図 その他の輸入陶磁器 (2)

第8節 本土産陶磁器

白磁 (第49図1～6・図版46-1～6)

今回は6点を図示した。1～3は瀬戸・美濃系と考えられる皿・杯で、5も瀬戸・美濃焼の可能性のある瓶である。4は肥前系の多角杯で、17世紀後半に製作されたものである。6は薩摩産の瓶で、18から19世紀のものである。薩摩の「ひらさ窯」産の可能性もある。

染付 (第50図1～20、第51図・図版46-7～26、図版47-1)

今回は21点を図示した。どれも半分以下しか残っていない破片資料である。器種でいうと碗が最も多く、口径10cmを境に大小に大別できる。そして口縁部が直線的なもの、外湾するもの、内湾するものに細別できる。

時期別にみると、18世紀中頃以降のものが大半を占めるが、第50図16の瓶のように17世紀前半頃のものもある。

産地別でいうと肥前系のものが多い。

色絵 (第52図1～6・図版47-2～7)

今回は6点を図示した。碗が最も多く、大きさ・器形ともバラエティに富む。

陶器 (第52図7～12・第53図1～20・図版47-8～13・図版48-1～20)

今回は26点を図示した。薩摩産と考えられるものに、第53図3、4(白薩摩)の碗と19の壺がある。同図15の壺については関西系の可能性がある。第52図7の碗は薩摩産の錦手、12の蓋は関西系と考えられる。

印判手 (図版49-1～24)

今回は24点の写真を掲載した。碗が最も多く、他に皿・香炉がある。産地については、肥前系砥部産(1、2、3、5、7、8、9、13、16、19)瀬戸・美濃系と考えられる資料が多い。胴部外面に福壽文・鶴文・草花文があり、地文に小点を充填していることが特徴で、類例も多い(首里城^(註1)、天界寺^(註2)など)。

残り具合の良い6の碗については、外面の施文順序を推定することが出来る。まず文様には、縦方向に3箇所目の切れ目があるので、3回に分けて文様を施したことがわかる。また切れ目をはさんで、左右の文様同士の重なり具合から、(高台側から見て)時計まわりに施されたと考えられる。

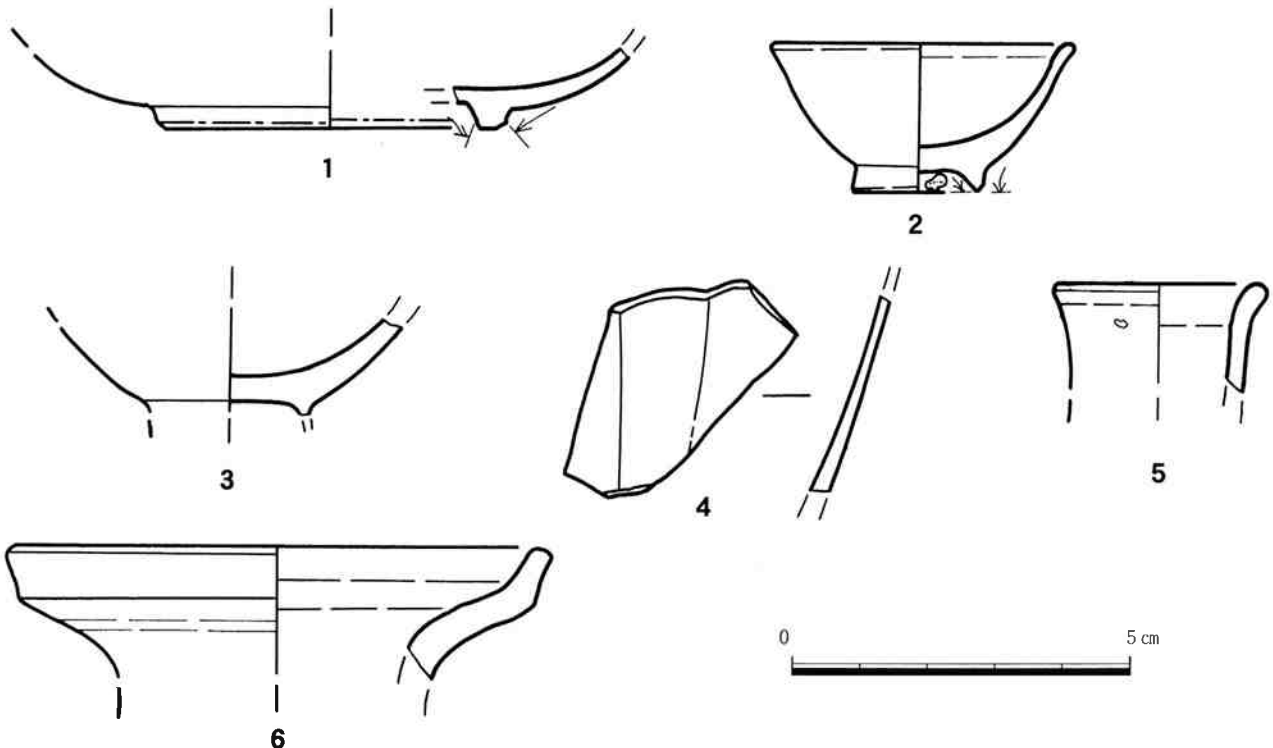
<註文献>

(註1) 沖縄県教育委員会「首里城跡—管理用道路地区発掘調査報告書—」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第1集 2000

(註2) 沖縄県教育委員会「天界寺跡 (I)」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第2集 2001

<参考文献>

下地安広「沖縄の遺跡から出土する近代磁器—浦添の遺跡を中心に—」『南島考古』No.14 沖縄考古学会 1994



第49図 本土産陶磁器 (1)

第16表 本土産陶磁器観察一覧（白磁・染付）

単位：cm

種類	挿番	図号	器種	口径	底径	器高	出土地点	観察事項
白磁	第49図 図版46	1	皿	—	5.2	—	三門地区攪乱層	黒色細粒をやや多く含む。貫入はない。畳付は露胎。
	第49図 図版46	2	杯	4.5	1.9	2.2	表採	畳付以外は施釉。貫入はない。
	第49図 図版46	3	杯	—	—	—	三門地区基壇内攪乱層	貫入はない。
	第49図 図版46	4	杯	—	—	—	表採	貫入はない。
	第49図 図版46	5	瓶	3.1	—	—	左脇門地区攪乱層	貫入はない。
	第49図 図版46	6	瓶	8	—	—	獅子窟地区攪乱層	黒色細粒を含み貫入はない。「ひらさ窯」産か。
染付	第50図 図版46	1 7	碗	11.3	—	—	仏殿地区攪乱層	口縁部内面の釉葉がやや厚い。
	第50図 図版46	2 8	碗	11.2	4.4	5.9	龍淵殿地区攪乱層	外面に鶴文。畳付は露胎。
	第50図 図版46	3 9	碗	8.9	—	—	仏殿地区攪乱層	内・外面に貫入。
	第50図 図版46	4 10	碗	7.3	—	—	龍淵殿地区攪乱層	外面にコンニャク印版による文様。
	第50図 図版46	5 11	碗	11.4	5.8	7.1	表採	口縁外面に2本の沈線。口縁内面は露胎。細かな貫入がある。
	第50図 図版46	6 12	碗	—	—	—	庭園地区攪乱層	外面に花文。口唇は露胎。
	第50図 図版46	7 13	碗	8.4	—	—	龍淵殿地区攪乱層	口唇部に口紅。
	第50図 図版46	8 14	碗	—	3.5	—	鐘楼地区攪乱層	畳付は露胎。高台と胴部の境付近に3本の圈線。
	第50図 図版46	9 15	碗	—	3.9	—	仏殿地区攪乱層	畳付は露胎。高台内に銘。外面に花文。内・外面に貫入あり。色は暗い。
	第50図 図版46	10 16	皿	—	11.8	—	鐘楼地区攪乱層	畳付に砂目跡。見込みに山水文。
	第50図 図版46	11 17	皿	—	7.2	—	左脇門地区攪乱層	見込みは蛇の目釉剥ぎ。発色悪く、薄く暗い青色。
	第50図 図版46	12 18	皿	—	—	—	庫裏地区攪乱層	外面に唐草文。
	第50図 図版46	13 19	皿	—	—	—	御照堂地区攪乱層	口唇部に口紅。
	第50図 図版46	14 20	杯	—	3.6	—	龍淵殿地区攪乱層	畳付は露胎。
	第50図 図版46	15 21	香炉	—	10.8	—	龍淵殿地区攪乱層	底部外面と内面は露胎。外面の蓮弁文は型紙刷か。
	第50図 図版46	16 22	瓶	—	—	—	龍淵殿地区攪乱層	頸部内面に、成形時の細かい沈線。胴内面は露胎。
	第50図 図版46	17 23	瓶	—	5.7	—	庭園地区攪乱層	外面に蛸唐草文、蓮弁文。胴部外面は一部露胎。
	第50図 図版46	18 24	瓶	—	—	—	庫裏地区攪乱層	内面は一部露胎。内・外面に細かい貫入。
	第50図 図版46	19 25	蓋	—	—	—	仏殿地区攪乱層	口縁部内面は露胎。
	第50図 図版46	20 26	蓋	—	—	—	庫裏地区攪乱層	内面かえり部は露胎。
第51図 図版47	1	鉢	38.0	16.6	27.9 29.3	井戸地区攪乱層	外面に竹笹文、口縁部内面に花文、見込に草文。	

第17表 本土産陶磁器観察一覧（色絵・陶器）

単位：cm

種類	挿番	図号	器種	口径	底径	器高	出土地点	観察事項
色 絵	第52図 図版47	1 2	杯	—	2.8	—	御照堂地区攪乱層	吹掛もしくは振掛による絵付。豊付は露胎。
	第52図 図版47	2 3	杯	—	2.5	—	庫裏地区攪乱層	豊付は露胎。
	第52図 図版47	3 4	杯	—	—	—	仏殿西攪乱層	内・外面に細かな貫入。
	第52図 図版47	4 5	香炉	9.9	8.2	6.7	龍淵殿地区攪乱層	見込に厚さ1mm以下の白色砂質附着物。高台内中心部に貫入。
	第52図 図版47	5 6	香炉	—	—	—	表採	赤色の文様部分は剥離している。
	第52図 図版47	6 7	瓶	10.0	—	—	表採	口唇部は露胎。頸部内面に布目跡。
	第52図 図版47	6 7	瓶	—	—	—	表採	内面全てに布目跡。内面下位に3本の沈線。
陶 器	第52図 図版47	7 8	小碗	9.7	3.9	4.3	井戸地区攪乱層	内・外面に細かな貫入。薩摩産の錦手。
	第52図 図版47	8 9	皿	—	4.4	—	龍淵殿地区攪乱層	乳白色の素地。内・外面に細かな貫入。
	第52図 図版47	9 10	皿	—	5.2	—	龍淵殿地区攪乱層	豊付は露胎。内・外面に細かな貫入。
	第52図 図版47	10 11	皿	—	4.8	—	獅子窟地区攪乱層	陶器に近い素地。内・外面に細かな貫入。
	第52図 図版47	11 12	蓋	—	—	—	井戸地区攪乱層	茶色の素地に、黄色の圏線。
	第52図 図版47	12 13	蓋	6.5	—	1.3	龍淵殿地区攪乱層	関西系。
	第53図 図版48	1	碗	11.9	—	—	仏殿地区攪乱層	素地：乳白色。釉：こげ茶色。外面は一部露胎。
	第53図 図版48	2	碗	11.8	—	—	龍淵殿地区攪乱層	素地：乳白色。釉：黒褐色。瀬戸・美濃焼。
	第53図 図版48	3	碗	—	4.2	—	鐘楼地区攪乱層	素地：乳白色で、黒色細粒を含む。釉：内面は透明、外面は黒褐色釉。高台は露胎。薩摩産。
	第53図 図版48	4	碗	—	—	—	鐘楼地区攪乱層	素地：乳白色。釉：白色。白薩摩。
	第53図 図版48	5	碗	—	4.0	—	庫裏地区攪乱層	素地：乳白色で、黒色細粒が目立つ。釉：内面には透明釉、外面には黒褐色釉。
	第53図 図版48	6	皿	—	—	—	井戸地区攪乱層	素地：灰白色。釉：暗い水色。胴下半分は露胎。
	第53図 図版48	7	皿	—	—	—	井戸地区攪乱層	素地：乳白色。釉：内外面に透明釉。貫入：内外面にある。
	第53図 図版48	8	鍋	16.4	—	—	仏殿地区攪乱層	素地：灰白色。釉：内外面に透明釉。貫入：内外面に細かくある。
	第53図 図版48	9	鍋（蓋）	16.2	—	—	石積み4確認トレンチ第2層	素地：乳白色で、黒色細粒が目立つ。釉：こげ茶色。貫入：内外面にある。
第53図 図版48	10	鍋（蓋）	13.0	—	—	井戸地区攪乱層	素地：乳白色。釉：暗い黄緑色。貫入：内外面にある。	
第53図 図版48	11	鍋	—	—	—	仏殿地区攪乱層	素地：灰色。釉：内面は透明釉。貫入：内面にある。外面は露胎。	
第53図 図版48	12	挿鉢	—	—	—	井戸地区攪乱層	素地：外部は橙色、内部は灰色。白色・黒色細粒を含む。備前焼き。	
第53図 図版48	13	挿鉢	—	13.2	—	庭園地区攪乱層	素地：外部は赤紫色、内部は明灰色。白色砂粒をやや多く含む。	
第53図 図版48	14	挿鉢	—	—	—	龍淵殿地区攪乱層	素地：明灰色。無釉で、器面は赤紫色。内面にカキ目。	
第53図 図版48	15	仏花器	34.5	16.7	35.6	龍淵殿地区攪乱層	無釉で、器面は明るい茶色。	

第18表 本土産陶磁器観察一覧（陶器・印判手）

単位：cm

種類	挿番	図号	器種	口径	底径	器高	出土地点	観察事項
陶器	第53図 図版48	16	仏花器	—	7.0	—	庫裏地区造成層	素地：暗い紫色で、白色細粒をわずかに含む。 釉：外面はこげ茶色で内面は露胎。関西系。
	第53図 図版48	17	瓶	—	—	—	左脇門攪乱層	素地：暗い茶色。無釉で、器面はこげ茶色。内面では脚部との接合面が明瞭。
	第53図 図版48	18	壺	—	—	—	表採	素地：レンガ色～赤紫色で、白色細粒が目立つ。釉：内面は緑灰色（砂をちりばめた感じ）で、外面は黒緑色。口縁部平坦面は露胎。薩摩産か。
	第53図 図版48	19	壺	17.0	—	—	表採	素地：レンガ色、うす紫色。釉：口縁平坦部以外に緑灰色。口縁平坦部に3×2cmの目跡。
印判手	第53図 図版48	20	鉢	33.8	—	—	庭園地区南北トレンチ第3層	素地：外部は灰色、内部は朱色。内面には指押しえ痕が明瞭。
	図版49	1	碗	13.8	5.1	5.5	表採	見込に5個のハリ支え跡。外面に花文、松竹文。
	図版49	2	碗	13.9	4.6	5.5	井戸地区攪乱層	外面に鶴文、松竹文。1に似る。
	図版49	3	碗	13.4	—	—	獅子窟地区攪乱層	口縁部内面に松竹文。文様構成は1に似る。
	図版49	4	碗	14.8	—	—	表採	内・外面に花文。
	図版49	5	碗	—	—	—	左脇門地区攪乱層	内面の文様は、発色が悪くぼやける。
	図版49	6	碗	14.0	—	—	表採	内・外面に竹文。
	図版49	7	碗	—	—	—	表採	外面に「壽」と「福？」の文様。9に似る。
	図版49	8	碗	—	—	—	表採	口縁部内面に花文帯。
	図版49	9	碗	—	4.9	—	表採	見込は蛇の目釉剥ぎ。「福」「壽」の文様。
	図版49	10	碗	—	—	—	表採	素地に黒色細粒が目立つ。
	図版49	11	碗	—	—	—	表採	色が濃く、文様がつぶれ気味。
	図版49	12	碗	10.6	—	—	獅子窟地区攪乱層	見込は蛇の目釉剥ぎ。素地に黒色細粒が目立つ。
	図版49	13	碗	10.0	—	—	表採	外面に桜花文、青海波文、蓮弁文。
	図版49	14	皿	9.8	5.4	1.9	表採	畳付は露胎。
	図版49	15	皿	12.9	—	—	獅子窟地区攪乱層	花卉形口縁。外面に唐草文。色が少しにじむ。
	図版49	16	皿	13.4	8.5	3.2	表採	花卉形口縁。蛇の目凹形高台。見込ハリ支え跡。
	図版49	17	皿	15.4	8.3	4.1	表採	花卉形口縁。色が少しくすむ。外面に唐草文。
	図版49	18	皿	—	8.0	—	表採	
	図版49	19	鉢	15.4	6.2	5.6	仏殿地区攪乱層	素地は黄白色。畳付は露胎。内外面に鳳凰文。
	図版49	20	香炉	9.9	—	—	表採	内面は露胎。外面に花文と青海波文。
	図版49	21	香炉	11.0	—	—	御照堂地区攪乱層	内面は露胎。外面に花文と青海波文。
	図版49	22	香炉	10.9	10.3	8.1	表採	内面と外底部は露胎。外面の盾形枠内に花文等。
	図版49	23	蓋	8.8	4.0	2.7	表採	見込は蛇の目釉剥ぎ。畳付は露胎。外面に菊花文、青海波文。
図版49	24	皿	11.0	6.0	2.1	表採	銅版摺。	

第19表 本土産染付出土状況一覽

器種	出土地区													表採	合計
	御照堂地区	獅子窟地区	仏地区	殿地区	三地	門区	鐘楼地区	龍淵殿地区	庫裏地区	井戸地区	庭園地区	左脇門地区	地区不明		
碗	口縁～底部							1					1	1	3
	口縁部	1		2			2	4				1	1	4	15
	胴部		1					2				1	1		5
	底部			2									2		4
小碗	口縁部	1						1				1	1		4
	胴部							3							3
	底部	1					1			3			2		7
杯	底部								1					1	2
皿	口縁部	2						2	3	1			1	1	10
	胴部								1	1			1		3
	底部				1	2	1				1				5
鉢	口縁～底部									1					1
香炉	底部						1								1
瓶	胴部						1	1							2
	底部						1								1
袋物	胴部		1	2			2	3		2		1			11
	耳部												1		1
蓋	縁部			1						1					2
器種不明	口縁部	1								1					2
	胴部		1	1	1	2	2	3	9	1			1		21
	底部								1				1		2
合計	6	3	8	2	9	22	8	21	1	5	13	7	105		

第20表 本土産染付印判手出土状況一覽 (1) 型紙摺

器種	出土地区													表採	合計
	御照堂地区	獅子窟地区	仏地区	殿地区	三地	門区	鐘楼地区	龍淵殿地区	庫裏地区	井戸地区	左脇門地区	地区不明			
碗	口縁部	3	8			1			1	2	1	22	2	40	
	胴部	3				1	2		1	2		4	3	16	
	底部					1		2				3	2	8	
	完形											6		6	
小碗	口縁部							1	1		1	4		6	
皿	口縁部		1					1	1		1	5		9	
	胴部									1		1		2	
	底部	1									2	1		4	
	完形					1						2		3	
蓋	縁部											1		1	
	底部											1		1	
香炉	口縁～底部											1		1	
	口縁部	1										2		3	
鉢	口縁～底部			1										1	
	胴部														
	底部														
器種不明	胴部						1		2		2			5	
合計	8	9	1	4	2	4	4	4	7	5	54	8	106		

第21表 本土産染付印判手出土状況一覽 (2) 銅版摺

器種	出土地区													表採	合計
	御照堂地区	獅子窟地区	三地	門区	鐘楼地区	龍淵殿地区	庫裏地区	井戸地区	左脇門地区	地区不明					
皿	口縁～底部											2		2	

第22表 本土産染付印判手出土状況一覽 (3) 銅版転写

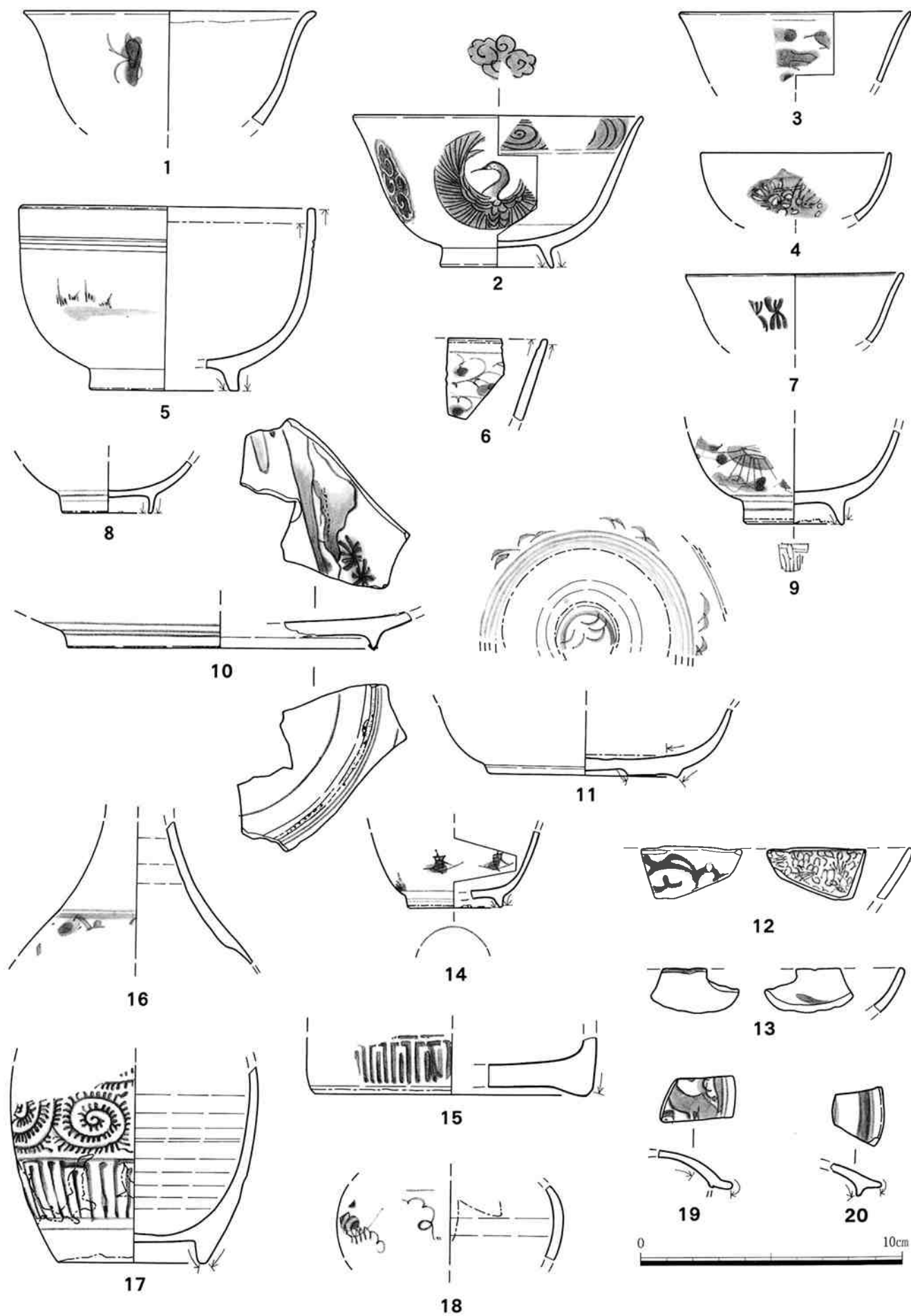
器種	出土地区													表採	合計
	御照堂地区	獅子窟地区	仏地区	殿地区	三地	門区	鐘楼地区	龍淵殿地区	庫裏地区	井戸地区	左脇門地区	地区不明			
碗	口縁～底部											2		2	
	口縁部							2				9	1	12	
	胴部							1			1	1		3	
	底部		1			1						1		3	
小碗	口縁～底部		2				1			1		3	1	8	
	口縁部	1	1				2	1		1		4	1	11	
	胴部						2		1		1	2		6	
杯	底部					2		1				2		5	
	底部							1				1		2	
皿	口縁～底部	1	3					2	1			7	1	15	
	口縁部	2					1		1			1		5	
	胴部	1												1	
	底部	5		1						1	1			8	
蓋	縁部～撮部											1		1	
器種不明	胴部	2				1					1	2		6	
	底部		1											1	
合計	12	8	1	4	5	7	5	2	5	36	4	89			

第23表 本土産染付印判手出土状況一覧 (4) ゴム版転写

器種	出土地区	御照堂地区								表探	合計
		御照堂地区	獅子窟地区	仏殿地区	三門地区	鐘楼地区	井戸地区	左脇門地区	地区不明		
小碗	口縁～底部		1		1						2
	口縁部	1			2	1		2			6
	胴部	1		1					1		3
	底部			1			1	2			5
皿	口縁～底部	2							4		6
	胴部								1	1	2
	底部	1				1			2		4
蓋	縁部						1				1
器種不明	胴部	1							1	1	3
合計		6	1	2	3	2	2	4	10	2	32

第24表 本土産クロム青磁染付出土状況一覧 (銅版、ゴム版転写)

器種	出土地区	龍淵殿地区				合計
		龍淵殿地区	井戸地区	左脇門地区	地区不明	
小碗	口縁部			2		2
	胴部		1			1
皿	口縁～底部				1	1
	口縁部				2	2
	胴部				1	1
	底部				3	3
器種不明	胴部	1				1
合計		1	1	2	7	11



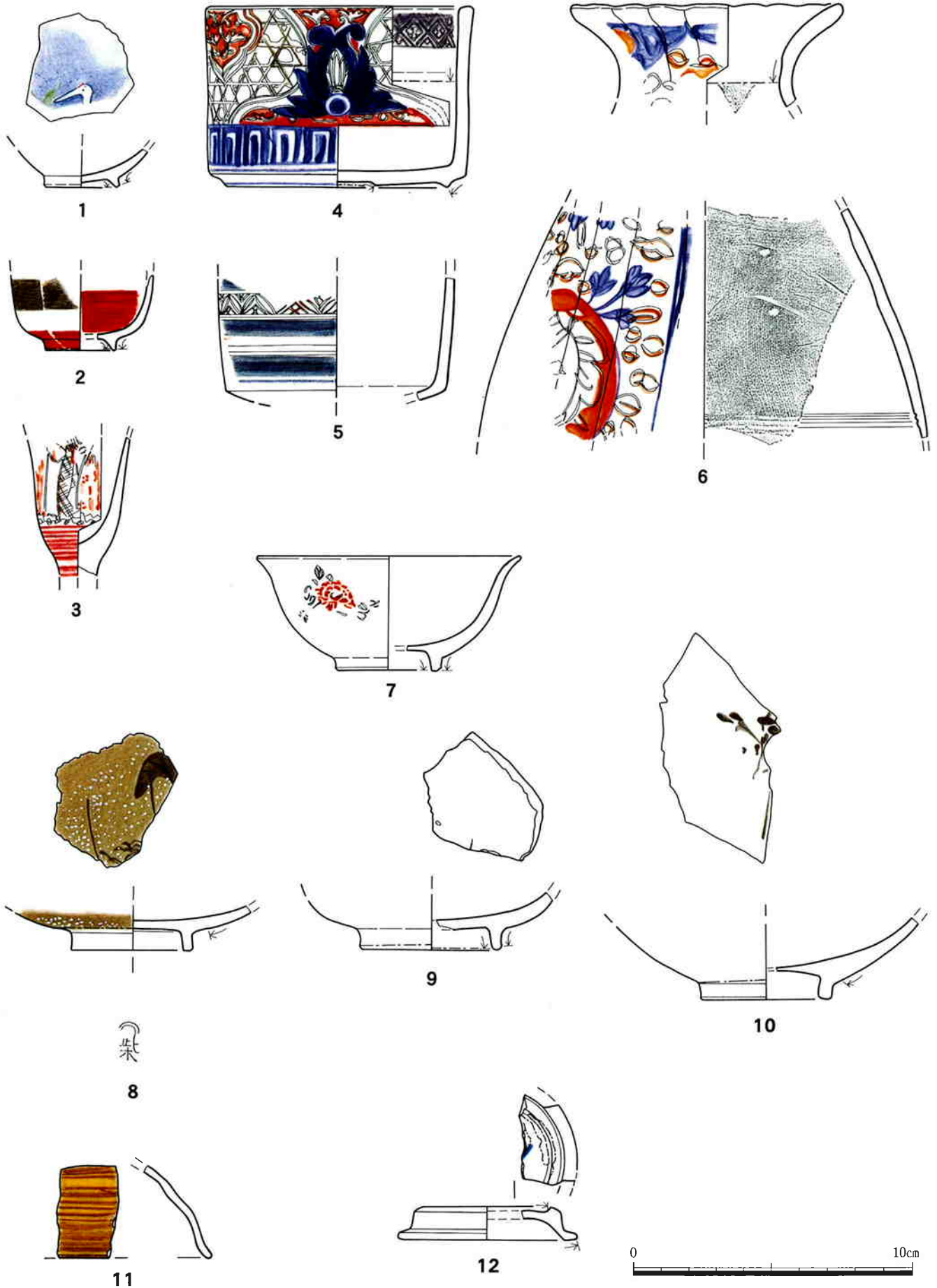
第50图 本土産陶磁器 (2)



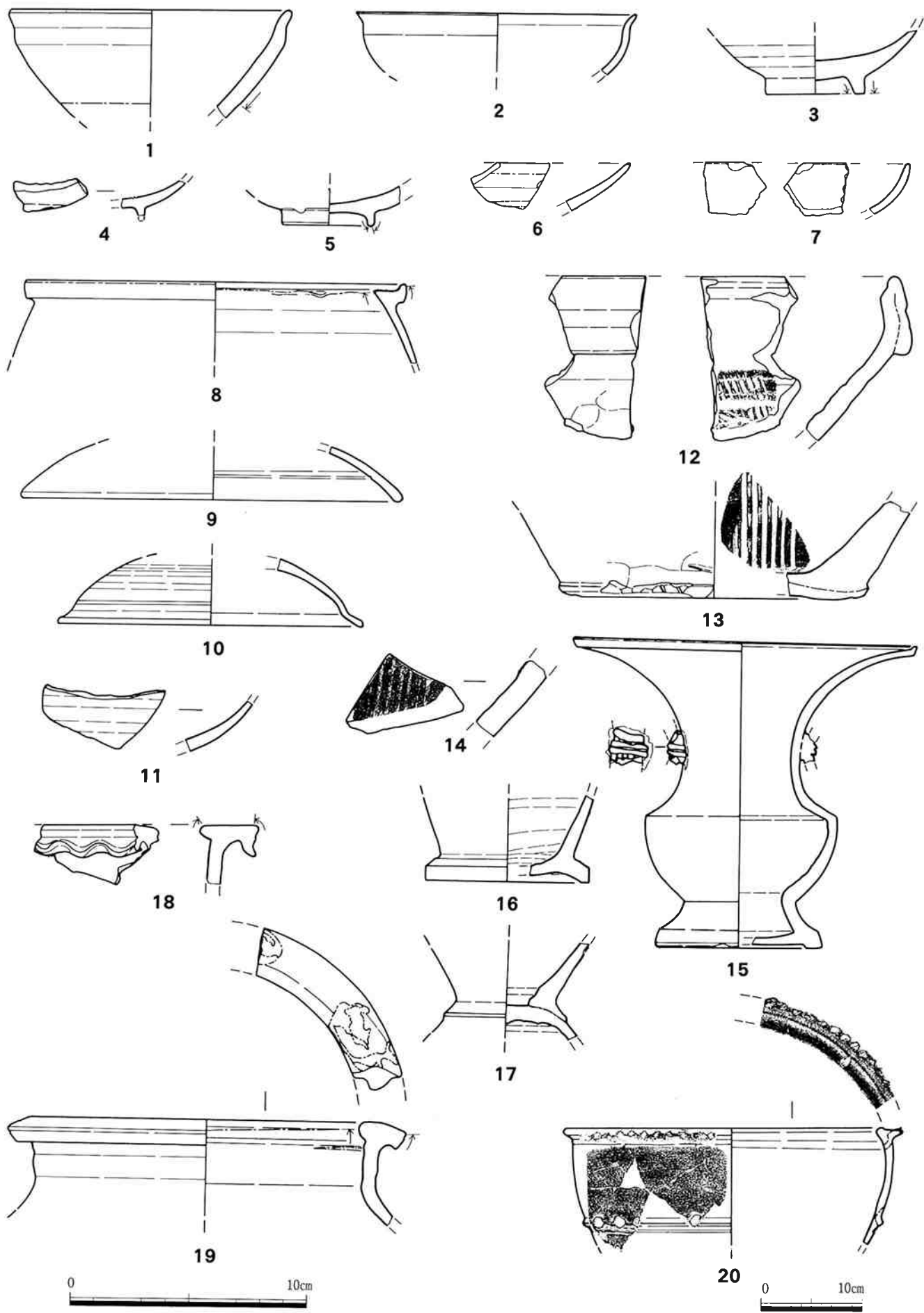
バンテン・ラマ遺跡出土の染付唐獅子牡丹文植木鉢
(佐賀県立九州陶磁文化館『海を渡った肥前のやきもの展』1990)



第51図 本土産陶磁器 (3)



第52図 本土産陶磁器 (4)

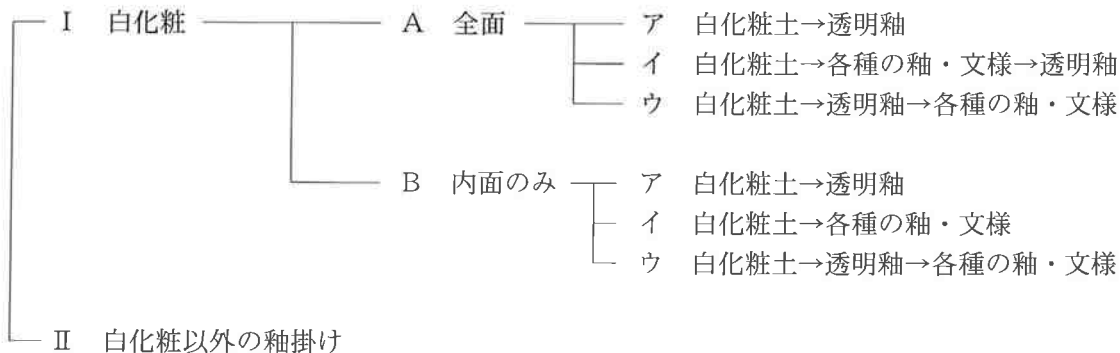


第53図 本土産陶磁器 (5)

第9節 沖縄産施釉陶器

今回は79点について写真を掲載し、そのうち10点を図化した。碗が最も多く、鉢・皿・鍋・急須・瓶・香炉・火取・壺などがある。

碗・皿・鉢に関しては、釉薬と施釉方法などによって以下のように分類することが出来る。なお今回は白化粧を中心に考えた。



碗・皿については、白化粧を施すものがやや多く、とくに碗は全面に施すものがほとんどである。鉢については、白化粧を施さないものが多い。

袋物・火取・香炉にも白化粧がみられる。図版51、20の袋物の場合は、内面は露胎で、外面は白化粧である。また図版52、3の火取は、内外面に白化粧土を掛け、外面のみに透明釉を掛けている。

第25表 沖縄産施釉陶器観察一覧 (1)

単位：cm

挿図番号	器種	口径	底径	器高	出土地点・分類	観察事項
図版50 1	碗	15.2	6.2	6.3	裏庫地区攪乱層・II	素地：灰色で、気泡が多い。釉：暗黄緑釉。内外面とも胴部中位以下は露胎。
図版50 2	碗	—	6.8	—	表採・II	釉：内外面とも透明釉で、露胎部との境に黒褐色釉の圏線。貫入：内外面にある。
図版50 3	碗	13.8	6.2	6.2	表採・IAア	素地：灰黄色。釉：内外面とも白化粧。見込は蛇の目釉剥ぎで、畳付は露胎。内面は点状(5mm前後)に釉が膨れ、口縁部のそれは、はじけて素地が見える。
図版50 4	碗	13.5	6.1	6.0	龍淵殿地区攪乱層・II	素地：灰色。釉：深緑色の笹文の上に透明釉。貫入：内外面にある。内面は蛇の目釉剥ぎ。
図版50 5	碗	12.9	5.4	5.9	龍淵殿地区攪乱層・IAイ	素地：肌色。釉：白化粧土のち緑青色の笹文・呉須による圏線のち透明釉。内面は蛇の目釉はぎ。
図版50 6	碗	12.8	—	—	御照堂地区攪乱層・IAウ	素地：黄橙色。釉：白化粧のち呉須珠文のち茶褐色文様。口縁部外面に釉薬掻き取りによる圏線。
図版50 7	碗	—	6.6	—	獅子窟地区攪乱層・IAイ	素地：白灰色、肌色。黒色細粒を含む。釉：内面は白化粧のち蛇の目釉剥ぎ。外面は呉須文様を白化粧で挟み込む。畳付は露胎。
図版50 8	碗	16.0	7.0	7.8	獅子窟地区攪乱層・II	釉：全面に暗緑黄色釉をかける。貫入：内外面にある。内面は蛇の目釉剥ぎ。
第54図 図版50 9	角鉢	11.0	5.8	6.1	龍淵殿地区攪乱層・II	釉：内面は透明釉のち黄・緑色の上絵。外面は縦方向の線刻文(呉須を塗る)。
図版50 10	碗	—	—	—	井戸地区攪乱層・IAウ	素地：白灰色。釉：内外面に白化粧のち外面に赤・緑・黄色の文様。
図版50 11	碗	—	—	—	仏殿地区攪乱層・IAウ	素地：肌色。釉：白化粧のち赤茶・青銅色の上絵。貫入：内外面に細かく走る。
図版50 12	碗	—	—	—	仏殿地区攪乱層・IAウ	素地：乳白色。釉：内外面に白化粧のち外面に赤・緑色の文様。貫入：内外面にある。
図版50 13	小碗	8.6	—	—	仏殿地区攪乱層・IAイ	素地：乳白色～橙色。釉：白化粧。外面は白化粧にはさみこまれて呉須文様。貫入：内外面に細かくある。

第26表 沖縄産施釉陶器観察一覧 (2)

単位: cm

挿図番号	器種	口径	底径	器高	出土地点・分類	観察事項
図版50 14	小碗	—	3.7	—	獅子窟攪乱層・I Aア	素地: 肌色。釉: 内外面に白化粧。貫入: 内外面にある。
図版50 15	小碗	9.6	—	—	表採・II	素地: 肌色。釉: 前面に透明釉。外面に呉須文様。貫入: 内外面に細かくある。
図版50 16	小碗	9.6	4.1	4.8	井戸地区攪乱層・II	素地: 白黄色で黒色細粒を少し含む。釉: 外面に黒褐色釉。口縁部内面に暗黄緑色釉、内面全体に透明釉。貫入: 内面にある。見込は蛇の目釉剥ぎ。高台は露胎。
図版50 17	小碗	—	—	4.9	井戸地区攪乱層・II	素地: 黄褐色。釉: まず外面に茶色釉、次に内面に暗黄緑色の釉。見込は蛇の目釉剥ぎ。貫入: 内面のみ。
図版50 18	小碗	—	—	—	井戸地区攪乱層・I Bウ	素地: 黄橙色。釉: 内面に白化粧。貫入: 内面にある。外面は露胎(茶色)だが、点状(2mm程度)の黒褐色釉がかかる。
図版50 19	小碗	—	—	—	井戸地区攪乱層・I Bア	素地: 明橙色。釉: 内面は白化粧。貫入: 内面にある。見込は蛇の目釉剥ぎ。
図版50 20	小碗	9.4	4.1	4.7	表採・II	素地: 暗黄灰色で気泡が少しある。釉: 高台以外に暗黄緑色の釉。まばらに黒色付着物あり。
図版50 21	小碗	—	—	—	井戸地区攪乱層・I Aア	素地: 肌色。釉: 内外面に白化粧。貫入: 内外面にある。外面は多角形の面取りがある。
図版50 22	小碗	—	3.8	4.6	仏殿地区攪乱層・II	素地: 赤紫色で、黒色細粒を含む。釉: 内面に暗黄緑色釉。外面は露胎で、白色釉で文様(漢字か)。高台と胴部の境には粗いケズリ痕。
第54図 5 図版50 23	小碗	—	3.0	—	三門地区基壇内攪乱層・I Aア	素地: 肌色。釉: 全面に白化粧。貫入: 内外面に細かくある。外面は多角形の面取り。
図版50 24	坏	3.2	1.6	1.9	三門地区攪乱層・II	素地: 白色。釉: 透明釉。貫入: 内外面にある。高台は露胎。
図版51 1	皿	—	10.2	—	仏殿地区攪乱層・I Aイ	素地: 灰黄色。釉: 呉須文様を挟み込んで白化粧。見込は蛇の目釉剥ぎ。貫入: なし。
図版51 2	皿	18.6	7.6	5.9	仏殿地区攪乱層・I Aイ	素地: 黄灰色で、黒色細粒・気泡がある。釉: 呉須文様を挟み込んで白化粧。見込は蛇の目釉剥ぎ。口縁部内面、見込に呉須文様。貫入: 内外面にある。
図版51 3	皿	—	—	—	御照堂地区攪乱層・I Bイ(?)	素地: 黄橙色。釉: 内面は線刻文様部に黒褐色釉を塗り、次に白化粧土を塗る。外面は茶色釉のち白色釉。
図版51 4	皿	—	—	—	井戸地区攪乱層・I Bア	素地: 黄橙色～橙色。釉: 内面に白化粧、口縁部外面に緑褐色釉。露胎部は茶色である。
図版51 5	皿	12.4	6.0	4.7	仏殿地区攪乱層・I Aイ	素地: 灰黄色で気泡が多い。釉: 呉須を挟み込んで白化粧。貫入: 内外面にある。
第54図 2 図版51 6	皿	7.6	—	—	庭園地区攪乱層・II	素地: 灰色。釉: 内面に透明釉。口唇部～外面は露胎。
第54図 3 図版51 7	皿	—	4.2	—	庭園地区攪乱層・II	素地: 灰白色。釉: 内面に透明釉、外面は露胎。貫入: 内面に細かくある。見込は蛇の目釉剥ぎ。
図版51 8	皿	8.5	4.1	1.7	御照堂地区攪乱層・II	素地: 白灰色。釉: 内面に透明釉、口唇部～外面は露胎。貫入: 内面にある。
第54図 4 図版51 9	皿	—	6.6	—	龍淵殿地区攪乱層・II	素地: 赤紫色、灰色。釉: 内面に黒褐色釉。貫入: なし。
図版51 10	鉢	19.6	8.0	9.3	仏殿地区攪乱層・I Bイ	素地: 白灰色、黄橙色で黒色細粒を含む。釉: 内面に白化粧土を塗った後、外面に暗黄緑色釉を塗り、内面に呉須・暗黄緑色の珠文。
図版51 11	鉢	23.0	—	—	仏殿地区攪乱層・II	素地: 明灰色で黒色細粒を含む。釉: 内外面とも胴部～口縁部まで褐色釉。貫入: 内外面にある。

第27表 沖縄産施釉陶器観察一覧 (3)

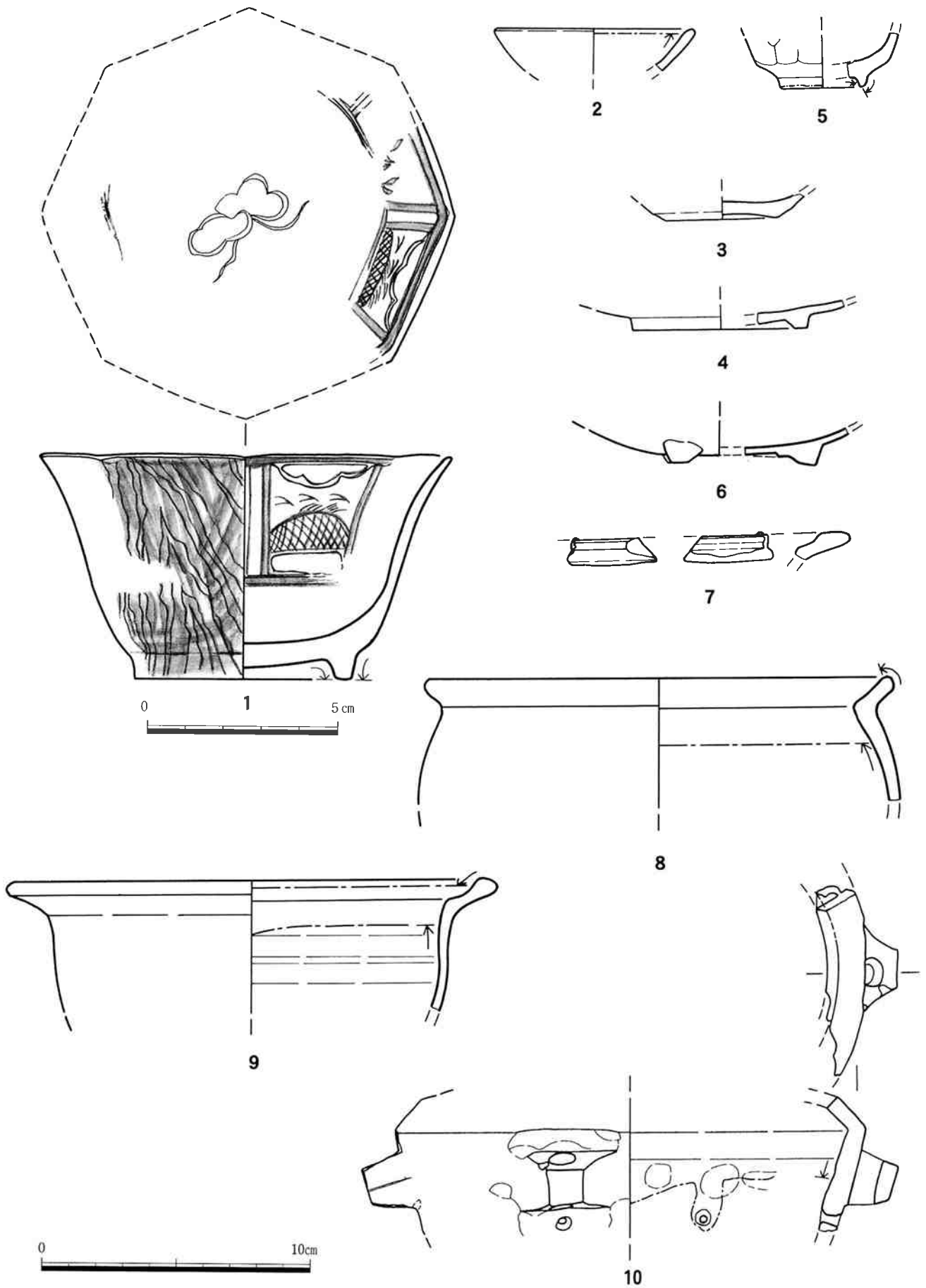
単位: cm

挿図番号	器種	口径	底径	器高	出土地点・分類	観察事項
図版51 13	鉢	—	9.1	—	表採・II	素地: 白黄色。釉: 内面に暗黄緑色釉、外面に黒褐色釉。貫入: 内外面にある。高台は露胎で、漆喰が多く付着する。高台の一箇所に焼成後の穿孔(径4mm)。
図版51 12	鉢	—	—	—	龍淵殿地区攪乱層・II	14と同様である。14とは接合しないが同一個体か。
図版51 14	鉢	—	11.5	—	龍淵殿地区攪乱層・II	素地: 黄灰色で気泡が多い。釉: 内外面に白色の象嵌後、暗黄緑色の釉。貫入: 内外面にある。高台は露胎。
図版52 1	急須	10.0	—	—	龍淵殿地区攪乱層	素地: 明灰色。釉: 胴部内面に暗黄緑色釉を掛けるが、口縁部付近は黒褐色。外面に黒褐色釉。口唇部~口縁部内面は露胎。
図版52 2	急須	—	—	—	仏殿地区攪乱層	素地: 灰~黄橙色。釉: 全面に黒褐色釉 貫入: なし。断面かまぼこ状(幅4.1cm厚さ1.5cm)の取手。
図版52 3	急須	—	—	—	仏殿地区攪乱層	2と同様である。
図版52 4	急須	—	—	—	御照堂地区攪乱層	素地: 肌色。釉: 内外面に呉須・黒褐色釉を挟み込んで白化粧。貫入: 内外面にある。
第54図 図版52 5	急須	—	4.4	—	庫裏地区攪乱層	素地: 黄灰色。釉: 内面は透明釉、外面は露胎。貫入: 内面にある。
図版52 6	急須	—	—	—	庫裏地区攪乱層	素地: 白灰色。釉: 全体に透明釉、内面一部露胎。貫入: あり。上面に一つの穴(径3mm)。
図版52 7	蓋	12.1	9.1	—	表採	釉: 外面に緑黒色。貫入: 外面にある。内面は露胎。
図版52 8	蓋	6.3	5	2.8	表採	素地: 肌色。釉: かえり部以外に暗褐色釉(光沢はなくザラザラする)。
図版52 9	水滴	—	—	—	井戸地区攪乱層	素地: 白灰色。釉: 外面に茶色、内面は露胎。貫入: 外面にある。
図版52 10	水滴	—	—	—	御照堂地区攪乱層	素地: 赤紫色。釉: 外面に茶色釉、内面は露胎。貫入: なし。内面に白灰色の付着物。外面に所々黄色の釉が付着。
図版52 11	酒注	—	7.2	—	表採	釉: 白化粧土のち茶褐色・暗黄緑色釉。貫入: あり。高台の断面形は三角形。
図版52 12	酒注	—	—	—	龍淵殿地区攪乱層	素地: 明灰色。釉: 外面(底部以外)に暗黄緑色。外面に線刻文、シーサー形の取手。
図版52 13	袋物	—	—	—	御照堂地区攪乱層	素地: 外部は橙色、内部は黄灰色。釉: 外面は白地に茶褐色・赤橙色釉のマーブル文様。内面は露胎。貫入: なし。
図版52 14	瓶	7.8	—	—	獅子窟地区攪乱層	素地: 肌色。釉: 緑褐色釉を挟み込んで白化粧。貫入: 内外面にある。口縁平坦部は露胎。
図版52 15	瓶	—	—	—	仏殿西地区攪乱層	素地: 肌色。釉: 内面に褐色釉を掛けたのち、口縁部内面~外面に暗緑釉(頸部外面は暗い水色)。貫入: 内外面にある。
図版52 16	瓶	—	6.6	—	表採	素地: 肌色。釉: 口縁部内面~胴部外面に暗黄緑色釉。貫入: なし。
図版52 17	花生	—	10.0	—	龍淵殿下層遺構	素地: 黒灰色。釉: 外面に(畳付以外)呉須文様のち黄灰色釉。内面に暗緑色釉。貫入: なし。
図版52 18	瓶	—	4.9	—	獅子窟地区攪乱層	素地: 明灰色。釉: 底部外面と内面は露胎。胴部外面に灰色釉。貫入: 外面にある。
図版52 19	瓶	—	9.0	—	左脇門地区攪乱層	素地: 乳白色。釉: 内面と高台は露胎。外面に黒褐色釉。貫入: 外面にある。

第28表 沖縄産施釉陶器観察一覧 (4)

単位: cm

挿図番号	器種	口径	底径	器高	出土地点・分類	観察事項
図版52 20	袋物	—	6.4	—	井戸地区攪乱層	素地: 灰黄色。釉: 内面と高台外面は露胎。外面に白化粧。貫入: 外面にある。
図版52 21	壺	—	—	—	龍淵殿地区攪乱層	素地: 黄灰色で、黒色細粒と気泡がある。釉: 内面と底部外面~突帯は茶色釉。他は露胎。突帯より上には刺突文、内面には成形時の凸凹が明瞭。突帯は貼り付けである。
図版53 1	香炉	12.0	—	—	井戸地区石敷埋土	素地: 黄灰色。釉: 口縁部内面~外面くびれ部まで暗緑色釉。他は露胎。貫入: 施釉部にある。
図版53 2	火取	—	—	—	左脇門地区攪乱層	素地: 肌色。釉: 外面に黒褐色釉。貫入: 外面にある。
図版53 3	火取	—	6.6	—	御照堂地区攪乱層	素地: 黄肌色、肌色で黒色細粒を含む。釉: 内外面に白化粧土のち胴部外面に透明釉。貫入: 外面にある畳付には2~5mmの間隔で直線の圧痕。
図版53 4	火取	—	9.4	—	井戸地区攪乱層	素地: 肌色、黄灰色。釉: 外面は呉須・緑釉を挟み込んで白化粧。内面は白化粧土のち透明釉。底部外面は露胎。貫入: 内外面にある。
図版53 5	火炉	16.0	—	—	庫裏地区攪乱層	素地: 赤紫色。釉: 内外面に暗緑色と白色釉。貫入: なし。
図版53 6	香炉	15.4	—	9.5	仏殿地区攪乱層	釉: 内外面の底部中心部以外の部分に暗茶色釉をかけたのち、口縁部~外面脚部にくすんだ黄緑色釉。見込みに砂が付着。図版19-1
図版53 7	香炉	19.2	—	—	井戸地区攪乱層	素地: 黄灰色。釉: 外面に象嵌後、透明釉。受け部は露胎。貫入: 内外面にある。
図版53 8	香炉	15.0	—	—	龍淵殿地区攪乱層	素地: 明灰色。釉: 口縁部~外面に黄緑色釉。貫入: 内外面にある。内面は露胎。頸部に貼付突帯がある。
図版53 9	香炉	—	—	—	龍淵殿地区攪乱層	素地: 白黄色で、黒色細粒を含む。釉: 外面~口縁平坦部黒褐色釉。貫入: 施釉部にある。
図版53 10	香炉	—	—	—	龍淵殿地区攪乱層	9・11・13とは接合しないが同一個体か。
図版53 11	香炉	—	—	—	龍淵殿地区攪乱層	素地: 灰黄色。釉: 内面は透明釉、外面は茶褐色釉。外面の釉が厚くかかる部分は水色に変色。
図版53 12	香炉	21.8	—	15.3	龍淵殿地区攪乱層	素地: 黄灰色。釉: 暗黄緑色釉のち外面に黒褐色釉のち口縁受け部に白化粧土。底部外面露胎部に「光緒年制衣琉球國壺屋高江洲良口」の銘と押印。外面には2匹の貼り付け龍文。底部に3本の脚。
図版53 13	香炉	—	—	—	龍淵殿地区攪乱層	素地: 白灰色で、黒色細粒・気泡がある。釉: 内面に透明釉、外面に茶褐色釉。外面には貼付花文。
図版53 14	蓋	18.6	—	—	龍淵殿地区攪乱層	素地: 明灰色。釉: 内面に緑灰色釉、外面に暗黄緑色釉のち緑青色釉。15と同じ窓がある。
図版53 15	蓋	22.3	—	3.0	龍淵殿地区攪乱層	素地: 肌色。釉: 内面にランダムな透明釉、外面に茶褐色釉。8個の透かし窓。
第54図 10 図版53 16	火炉	—	—	—	獅子窟地区基壇石牆間第3層	素地: 外部は灰色、内部は赤紫色で白色細粒を含む。釉: 外面~内面胴部上位に黒褐色釉。有孔把手直下の器壁に、径5mmの貫通孔。
図版53 17	鉢	20.9	12.4	10.2	井戸地区攪乱層	釉: 口縁部~高台脇に暗青緑色の釉。胴部に3本の突線、底部に直径2cmほどの孔。
第54図 8 図版53 18	鍋	17.4	—	—	庫裏地区攪乱層	素地: 灰色で、気泡がある。釉: 外面に褐色釉、胴部内面に褐色釉。貫入: 外面にある。
第54図 9 図版53 19	鍋	18.2	—	—	庫裏地区攪乱層	素地: 灰色で、白色細粒を含む。釉: 口唇部~外面に褐色釉、胴部内面に茶色釉。
第54図 7 図版53 20	鍋	—	—	—	鐘楼地区攪乱層	素地: 黄灰色、黄橙色。釉: 口縁部平坦面~外面に暗黄緑色釉。



第54図 沖縄産施釉陶器

第10節 沖縄産無釉陶器

沖縄産の釉薬を施さない陶器で「アラヤチ」とも称される。器種としては皿、碗、香炉、火炉、急須、鉢、搦鉢、蓋、甕、壺、瓶が挙げられるが、その中で皿、鉢、搦鉢が大半を占めている。

皿：図版54-5～13で器形より次の様に分類する事ができる。

I 類…口縁部に2条の線刻が施されており、高台が見られる。(第56図1・図版54-7)

II 類…表面は文様が無く、ベタ底になっている。(図版54-10～13)

この内、II類は灯明皿として使用されていた可能性がある。特に13では口縁部から底部にかけて白く変色し、12でも内面に同様の変色が見られる。これは蠟燭の熱によるものであると推測する。また、10には窯印と思われる「ダ」の記号が(一部欠損)、11には「も」の記号がそれぞれ確認できる。これらの他、帆に巴紋が書かれた爬竜船を陽刻した大皿もあり、円覚寺が琉球王家と密接な関わりを持っていた事が伺える。(図版54-14)

碗：図版54-2～4で、その内2は他の物に比べ器表面が粗く、碗の深さも深い。また底部には一部欠損しているものの窯印と思われる「入」の記号を確認する事ができる。

香炉、火炉：図版54-15～18が香炉、火炉又は「火入れ」と呼ばれる資料である。今回の調査では全体を把握できる資料を得る事ができなかったが、15のように頸部に獣面を取りつけ、胴部には唐草模様が描かれた資料が確認された。また、16は残存している脚の底が平らではない事、器形全体の大きさが一般的な香炉と比べて小さい事から香炉又は火炉の一部と思われる。

急須：今回の調査では全体を把握できる資料を得る事ができなかった。(図版54-19)

鉢：図版55-2～8までが鉢であるが、口縁部の形態から次の様に分類する事ができる。

I 類a…口縁部に窪みが見られる。口唇部が四角形で僅かに斜め上に向いている。

口唇上面に1条の線刻が施される。(図2)

I 類b…口縁部に窪みが見られる。口唇部が丸みを帯びている。(図4)

II類a…口縁部に窪みが無く、逆L字に外反。口唇上面に1条の線刻が施されている。(図3、6)

II類b…口縁部に窪みが無く、逆L字に外反。口唇部に縄目状の模様が見られる。(図7)

II類c…口縁部に窪みが無く、II類a、bと比べ口縁部が緩やかに外反。口唇部に2条の線刻が見られる。(図5)

搦鉢：第56図6～10図版55-9～15で、主に逆「ハ」の字型と思われる資料が多い。又、15は高台を持つ搦鉢であり例を見ない資料である。口縁部は逆L字型の物(9、11、14)と「く」の字型で窪みのある物(10)とに分けられる。

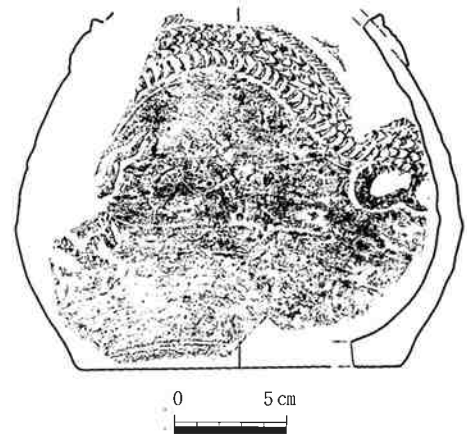
蓋：蓋は図版55-16の一点のみで、器形から甕の蓋と思われる。器表面に蓮と牡丹の模様が陽刻されている。

甕：第56図14、15図版56-7、9、10、11の4点が甕の資料である。9、10は厚手で比較的大型の物であったと思われ、それに対し図5、7は比較的薄手であったと推測される。又、7には口唇上面、口唇部、胴部上方に縄目状の模様が確認できる。図15は口径が80cm以上の比較的大型の甕で口唇部と突帯の間に円盤を貼り付けて文様を施す。戦前の古写真から三門南側にすえられた水甕である事が確認され、今回の調査では底部が埋設当時のまま動いていない事が判明した。口径82.8cm、内器高81.6cm、内底径32.4cm。

壺：図版56-4、6が壺である。4は器形全体を把握するには不十分であるが小壺の口縁部と推測できる。6は大型の壺で頸部に窯印と思われる「ダ」の記号が確認でき、底部には漆喰が塗られている。

瓶：第56図11・図版56-1～3全体を把握する資料は得られなかったが、2は口縁部、3は底部と思われる。

器種不明：第55図・図版54-1は瓶、又は壺に属する可能性が高い。この資料で特徴的なのは、器表面に龍が陽刻されており、更に赤い顔料らしきものが塗られている事である。これは陽刻された龍を際立たせる



第55図 沖縄産無釉陶器 (1)

ためではないかと思われるが、この例は沖縄産の無釉陶器では非常に珍しい。

図版55-1は鉢形口縁資料である。

<参考文献>

佐賀県立九州陶磁器文化館『沖縄のやきもの』1998

諸見民芸館『写真集 琉球の古陶』1982

照屋 善義『沖縄の陶器技術と科学』2000

沖縄県教育委員会「湧田古窯跡 (II)」『沖縄県文化財調査報告書』第121集 1995

沖縄県立埋蔵文化財センター「天界寺跡 (I)」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第2集 2001

第30表 沖縄産無釉陶磁器遺物観察一覧 (1)

単位: cm

挿図番号 図版番号	器種	分類	部位	口径	器高	底径	器色	観察事項	出土地点
第55図 図版54 1	不明	—	胴部～ 底部	—	—	14.2	表面—灰色(一部黒褐色) 内面—暗褐色	壺又は瓶の一部と思われる。龍の陽刻あり。 器表面の一部が顔料らしきものにより赤く彩 色されている。	龍淵殿地区 攪乱層
図版54 2	碗	—	口縁部～ 底部	11.4	7.0	5.0	表面—赤褐色と灰緑色の斑 内面—灰緑色	無紋、口縁部僅かに外反。 底部に窯印と思われる痕あり。 器表面に漆喰が付着。	表採
図版54 3	碗	—	口縁部 ～底部	14.4	5.8	4.6	表面—暗褐色、内面—赤色	口縁部に線刻あり。 胴部下方から高台外面にかけてヘラ調整による 痕が見られる。	庭園北地区 攪乱層
図版54 4	碗	—	口縁部 ～底部	14.0	6.6	5.6	表面—にぶい赤褐色 (底部付近) 内面—灰緑色	口縁部外面、にぶい黄色に変色。 高台から胴部にかけてヘラ調整。	龍淵殿地区 攪乱層
第56図 4 図版54 5	皿	—	口縁部 ～底部	9.8	—	—	表面—緑色と緑灰色の斑 内面—薄緑	浅底の皿か? 底部と思われる部分に1条の線 刻を確認。	獅子窟地区 攪乱層
第56図 5 図版54 6	皿	—	口縁部	—	—	—	表面—濃い緑色 内面—薄緑	口唇部やや内湾。	龍淵殿地区石 積み確認トレン チ第層
第56図 1 図版54 7	皿	I 類	口縁部 ～底部	16.8	4.6	3.2	表面、内面—赤褐色(口縁部～胴部) 赤色(胴部～底部)	無紋、口縁部に2条の線刻あり。 高台あり。	庫裡地区造 成層
第56図 3 図版54 8	皿	II 類	口縁部 ～底部	10.2	2.6	4.6	表面—灰緑色 内面—黒褐色	口縁部、緩やかに外反。 胴部下方ヘラ調整。ベタ底。	龍淵殿地区 集石遺構埋 土層
第56図 2 図版54 9	皿	—	口縁部	—	—	—	表面—緑褐色 内面—赤褐色	口縁部、やや尖り気味。浅底の皿か?	庫裡南地区 攪乱層
図版54 10	皿	II 類	口縁部 ～底部	10.2	2.8	4.7	表面、内面—赤褐色 (口縁部～胴部) 赤色(底部)	口縁部、緩やかに外反。 底部に痕あり。 一部漆喰が混入。ベタ底。	龍淵殿地区 攪乱層
図版54 11	皿	II 類	口縁部 ～底部	10.2	2.85	3.2	表面、内面—緑色と緑灰色の斑	口縁部、緩やかに外反。 底部に痕あり。	龍淵殿地区 攪乱層
図版54 12	皿	II 類	完形	9.5	3.1	5.6	表面、内面—黒褐色	無紋、厚手、内面がやや変色。 底部に僅かに高台が見られる。	鐘楼地区攪 乱層
図版54 13	皿	II 類	口縁部 ～底部	10.6	2.45	4.5	表面、内面—にぶい黄色 (口縁部～胴部) 緑灰色(底部)	無紋、口縁部が変色。ヘラ調整。 ベタ底。	井戸地区攪 乱層
図版54 14	大皿	—	完形	36.0	6.4 ? 7.4	18.0	表面、内面—赤色	口唇部が丸みを帯び、口唇上面に円盤を貼り 付ける。 内面全体に龍船などが陽刻されている。	龍淵殿地区 攪乱層
図版54 15	香炉か?	—	口縁部 ～底部	—	—	—	表面—薄緑、内面—赤褐色	口縁部は逆「L」字型。 獣面が後付けされる。唐草模様あり。	龍淵殿地区 攪乱層
図版54 16	香炉か?	—	完形	11.5 × 7.7	3.5 ? 4.0	10.9 × 7.0	表面、内面—赤色	箱形表面に唐草模様、脚部が破損。 脚の状態から香炉か火炉の部品と思われる。	表採
図版54 17	火炉	—	胴部	—	—	—	表面—にぶい黄色 内面—桃褐色	「く」の字に曲がる。方形把手を持つ。 3つ乃至は4つの穴を持つと思われる。	鐘楼地区攪 乱層 (攪乱K-24)
図版54 18	不明	—	底部(脚)	—	—	—	表面—灰緑色 内面—青灰色	器種不明、香炉又は火炉の脚と思われる。	井戸地区攪 乱層
図版54 19	急須	—	口縁部 ～胴部	5.2	—	—	表面—灰緑色 内面—赤褐色	胴部に2条の窪みあり。やや厚手。 内面に漆喰が付着。	表採
図版55 1	不明	—	口縁部	—	—	—	表面—茶褐色 内面—濃い緑色	口禿、内側口縁部は大きくくぼむ。	鐘楼地区攪 乱層 (L-22)
図版55 2	鉢	I 類 a	口縁部 ～胴部	—	—	—	表面—濃い緑色 内面—赤色	口唇上面に1条の線刻あり。口縁部に窪みが見 られる。	表採

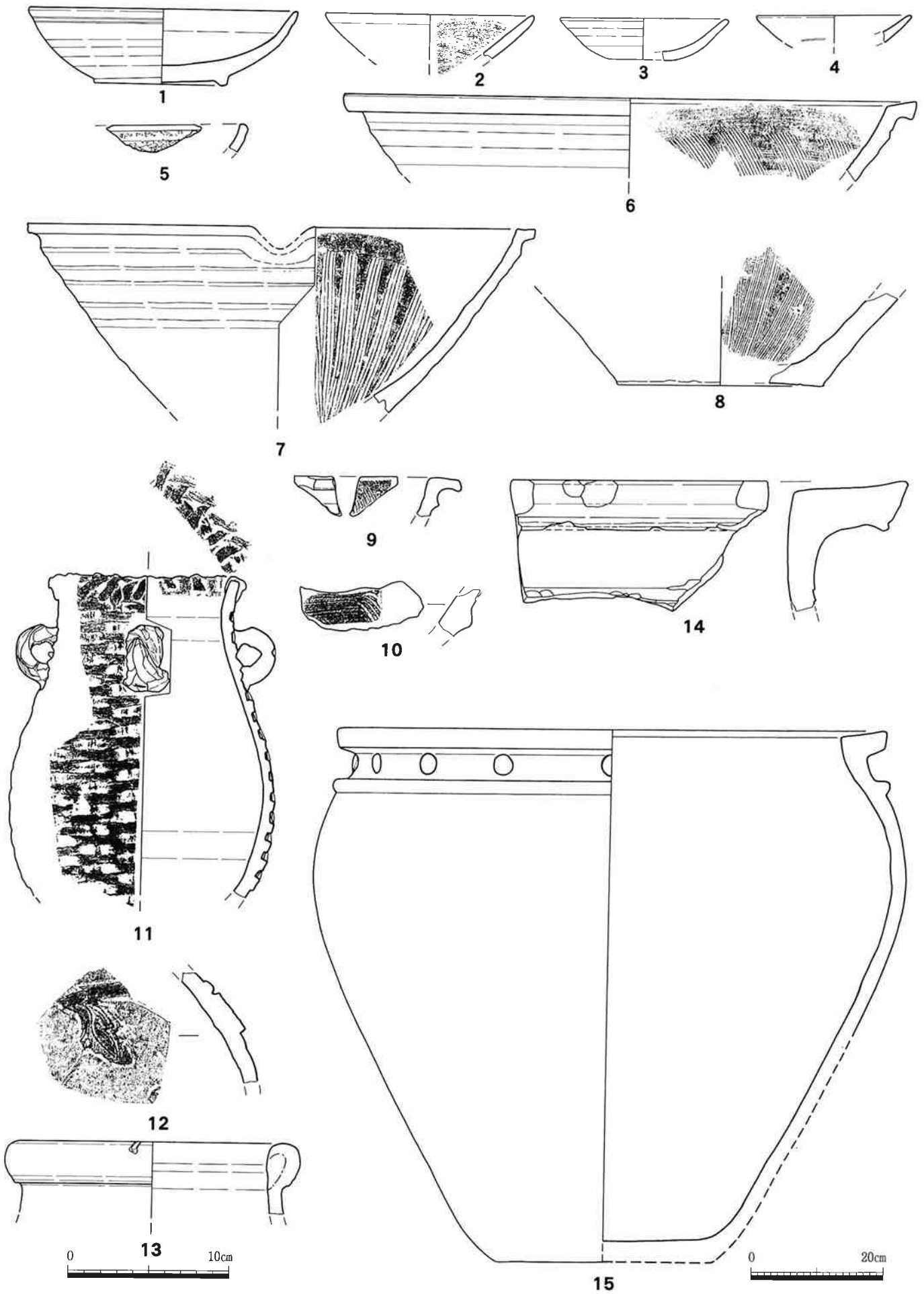
第31表 沖縄産無釉陶磁器遺物観察一覧 (2)

単位: cm () 復元値

挿図番号 図版番号	器種	分類	部位	口径	器高	底径	器色	観察事項	出土地点
図版55 3	鉢	Ⅱ類 a	口縁部	24.1	-	-	表面、内面-赤褐色	口唇上面端に1条の沈線あり。 口縁部は逆「L」字型。	龍淵殿地区 攪乱層
図版55 6	鉢	Ⅱ類 a	口縁部	-	-	-	表面-緑灰色と赤紫色の斑 内面-緑色と黒褐色の斑	口唇上面に1条の沈線あり。 口縁部は逆「L」字型。厚手。	御照堂地区 攪乱層
図版55 7	鉢	Ⅱ類 b	口縁部	48.2	-	-	表面-濃い緑色 内面-赤色	口唇部に縄目状の模様あり。 口縁部が逆「L」字型。器表面に漆喰が付着。	龍淵殿地区 攪乱層
図版55 5	鉢	Ⅱ類 c	口縁部	11.3	-	-	表面-赤褐色 内面-褐色(胴部)	口唇部に2条の沈線あり。 口縁部は緩やかに外反。薄手。	御照堂地区 攪乱層
図版55 4	鉢	Ⅰ類 b	口縁部	13.6	-	-	表面、内面-緑灰色	口縁部が丸みを帯びている。 胴部に2条の沈線らしき窪みを確認。	龍淵殿石積 み確認トレン チ第3層
図版55 8	鉢	-	底部	-	-	12.8	表面-赤緑色 内面-赤色	底面に2条の沈線あり。 内面に漆喰が付着。	獅子窟地区
第56図 6 図版55 9	擂鉢	-	口縁部	36.0	-	-	表面、内面-ぶい赤色	口縁部やや上向き。 櫛目は10本で粗、口縁部に向かって左斜めに 刻まれている。	三門北地区 基壇内攪乱層
第56図 7 図版55 10	擂鉢	-	口縁部	-	-	-	表面、内面-緑色	口縁部に窪みあり。 器形は逆「ハ」の字型と推測される。 櫛目は5本で粗。	三門地区基 壇内攪乱層
第56図 10 図版55 12	擂鉢	-	部位不明	-	-	-	表面、内面-薄緑色	口縁部の一部か。櫛目4本を確認。	龍淵殿地区石 積み確認トレン チ第2層
第56図 9 図版55 11	擂鉢	-	口縁部	-	-	-	表面、内面-灰緑色	口縁部で逆「L」字型。 口縁内部がカーブを描いている。 櫛目は7本以上。	庫裡地区造 成層
第56図 8 図版55 13	擂鉢	-	底部	-	-	13.0	表面-赤褐色 内面-赤色	櫛目は14本で粗。 器形は逆「ハ」の字型と推測される。	三門地区基 壇内攪乱層
図版55 14	擂鉢	-	口縁部	14.6	-	-	表面-赤緑色 内面-赤褐色	口唇上面に1条の沈線あり。 櫛目は6本で密。 器形は丸型と推測される。	仏殿地区攪 乱層
図版55 15	擂鉢	-	底部	-	-	4.7	表面、内面-緑色	高台を持つ。 逆「ハ」の字型と推測される。 櫛目は7本で密。	御照堂地区 攪乱層
図版55 16	蓋	-	口~頂部	-	-	-	表面、内面-緑色 緑褐色(装飾部分)	厨子甕の蓋と思われる。 器表面に牡丹と蓮の陽刻あり。	表採
第56図 11 図版56 1	不明	-	口縁部 ~胴部	12.3	-	-	表面、内面-緑色	戦後、アンダーガーマー(油壺)を モデルにして作ったものと思われる。 器表面にかご状の模様あり。	龍淵殿地区 攪乱層
図版56 2	瓶	-	口縁部	-	-	-	表面、内面-灰褐色	口縁部に4条の線刻あり。	鐘楼地区攪 乱層
図版56 3	瓶	-	底部	-	-	-	表面-灰色 内面-赤褐色	僅かに高台あり。	龍淵殿地区 攪乱層
図版56 4	小壺	-	口縁部か?	4.0	-	-	表面、内面-黄緑色	小壺の口縁部と思われる。	龍淵殿地区 攪乱層
図版56 6	壺	-	完形	12.4	45.5	15.9	表面-緑色 内面-赤褐色	肩に8条、胴部上方に1条の沈線あり。 肩に痕あり。 底部に漆喰が塗られている。 内面底部に瘤状の膨らみあり。	表採
第56図 13 図版56 5	甕	-	口縁部	18.5	-	-	表面、内面-赤色	口唇部が丸みを帯びている。 口唇下部に沈線と思われる窪みあり。	三門地区基 壇内攪乱層
図版56 7	甕	-	口縁部	17.1	-	-	表面-茶褐色 内面-緑色	口唇上面、口唇部、胴部にそれぞれ縄目状の 模様あり。	龍淵殿地区 攪乱層
第56図 14 図版56 10	甕	-	口縁部	-	-	-	表面-赤色 内面-赤色(口唇部) 灰緑色(胴部)	口唇部下方に1条の沈線あり。 口縁部が逆「L」字型。	三門地区基 壇内攪乱層
第56図 12 図版56 8	不明	-	胴部	-	-	-	表面-薄緑 内面-赤褐色	甕か壺の胴部と思われる。 器表面に唐草模様が陽刻されている。	龍淵殿地区石 積み確認トレン チ第3層
図版56 9	不明	-	底部	-	-	10.0	表面-緑色 内面-赤色	甕か壺の底部と思われる。 内面ヘラ調整。	御照堂地区 攪乱層
第56図 15 図版56 11	甕	-	口~ 底部	82.8	(81.6)	(32.4)	表面、内面-緑褐色	口縁部が逆「L」字型。 頸部に突帯を施し、口唇部で突帯の間に円盤 を貼り付ける。口縁部に痕あり。	三門地区南 側

第32表 沖縄産無釉陶器出土状況一覽

器種		出土地区											表採	合計
		御照堂地区	獅子窟地区	仏地地区	三地区	門地区	鐘楼地区	龍淵地区	庫裏地区	井戸地区	庭園地区	左脇門地区		
碗	口縁～底部						2			2		2	6	
	口縁部	1	1		1	2	1	3	7		1	6	23	
	胴部		2	1		4	3	3	2		1	1	17	
	底部		1	1	1	4	2	1			3	2	15	
皿	大						1						1	
	小	口縁～底部			1		4	3	1	2			3	14
		口縁部	2	1	1		3	7	1	3			10	28
		胴部								1				1
		底部				1	1	2		4			2	10
鉢	口縁部	4	2	1	2	1	5	1	3		2	6	27	
	胴部		2	3	1	1	3					5	15	
	底部		1									1	2	
挿鉢	口縁部	1		4	3		3	4	2		4	5	26	
	胴部	6	5	4		3	3	4	3		3	10	41	
	底部	3	1	4	2					1			11	
急須	口縁部											1	1	
香炉	口縁部						1				1	2	4	
	胴部					1							1	
火炉	口縁部					1	1		1		2	1	6	
瓶	口縁部					2	1						3	
	胴部	1	2						1		2		6	
	底部						1						1	
壺	大	口縁～底部										1	1	
		口縁部				1							1	
		胴部						1				27		28
		底部	1											1
	中	口縁部						2		1		4		7
		胴部	1		2	2		9	1	1			51	67
		底部											1	1
	小	口縁部		1				2					2	5
		胴部				5		4						9
		底部						1						1
外耳					1	2						3		
甕	口縁部	1			3		1					1	6	
	胴部				52		1				1	2	56	
蓋												1	1	
袋物	口縁部	1											1	
	胴部	4	1		1	4	2	1	4		5	8	30	
	底部				1		1				1	1	4	
器種不明	口縁部	1		1		1	1	1	1			5	11	
	胴部				1							1	2	
合計		27	20	23	77	33	66	21	36	3	57	131	494	



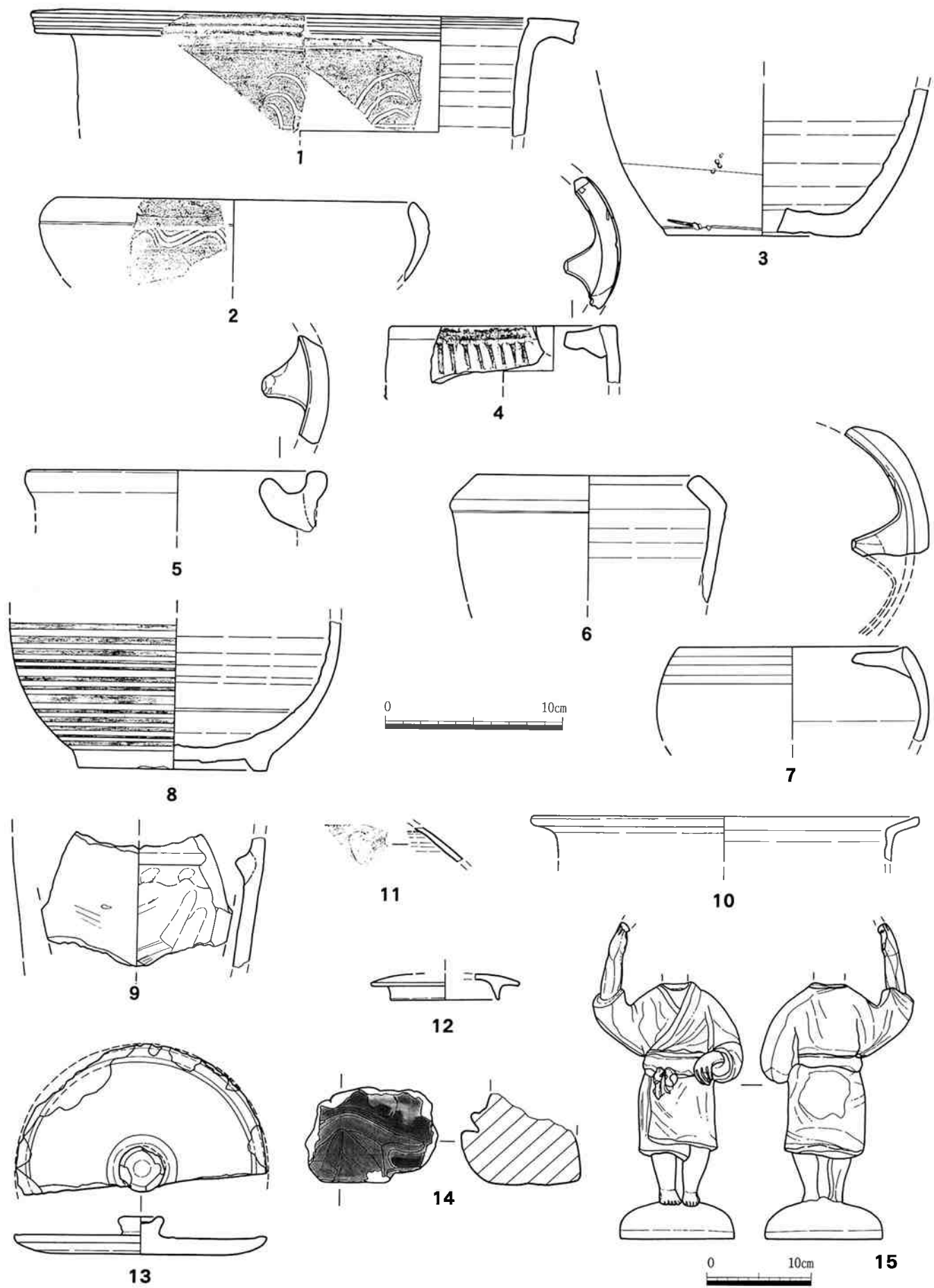
第56図 沖縄産無釉陶器 (2)

第11節 陶質土器 (第57図・図版57)

総数23点が出土し、器種は碗、皿、鉢、鍋、土瓶、火取、火炉、蓋類、形象物がある。器種別にみた器形は沖繩産無釉陶器とほぼ同様であることから、焼の質で無釉陶器と区別した。1～3に示すものは鉢類に属するものである。1は口縁が逆L字状の鐔を持ち、胴部に暗花文を施す。獅子窟地区基壇石牆間第2層出土。2は胴部が開きながら立ち上がり、口縁で肥厚しながら内彎し、口縁部に三条の波状文を廻らしている。獅子窟地区攪乱層出土。3は底面中央に1.8cmの孔を有し、植え木鉢の底部と思わる。4～9に示すものは火炉である。庫裏地区攪乱層出土。4は筒型の火炉で口唇は方形、口縁内に三角状の突起を有する。口縁外面に縦の刻線を横位に廻らす。御照堂地区攪乱層出土。5は胴部から筒状に伸び口縁がやや丸く肥厚する。口縁内に平面形が三角を成し、断面形がカギ爪状の突起を有する。左脇門地区攪乱層出土。6はやや開きながら真直ぐ立ちあがり、口縁でくの字に屈曲するものである。屈曲部の外面に二条の沈線を廻らしている。獅子窟地区攪乱層出土。7は胴部から口縁にかけ内彎し全体的に丸みを帯びたボール状の器形を示すものである。口唇は舌状を呈する。口縁内に三角の突起を有する。表採。8は大きめの高台を持ち腰部から胴部にかけ丸く立ちあがる。外体面に化粧土による幅0.4cmの横縞を充填している。他遺跡などでみる類例資料からおそらく7と同様な口縁形態を持つものと思われる。井戸地区攪乱層出土。9は窓を有する筒形のもので、内面に断面が三角形状となる突帯を廻らす。井戸地区攪乱層出土。10は鍋とおもわれる口縁部資料で口縁が外側に逆くの字状に屈曲する。仏殿地区南側浮道内造成層出土。11は土瓶の胴部が考えられるものであるが小破片のため詳細は不明、外面に「一良」の銘款がみられる。左脇門地区攪乱層出土。12、13は蓋類である。12は小型であることから土瓶、13は壺、甕類の可能性が高い。12・表採、13・庫裏地区トイレ状遺構内出土。14、15は形象物である。15は頭を欠くことから詳細は不明であるが琉球舞踊の「タンチャメー」などの庶民的な婦人の踊る像とおもわれる。龍淵殿地区攪乱層出土。14は人形の足の部分と思われるもので表面に彩色している。表採。

第33表 陶質土器出土状況一覧

品 種		出土地区											合 計	
		三門地区	仏殿地区	龍淵殿地区	御照堂地区	獅子窟地区	鐘樓地区	庭園地区	庫裏地区	井戸地区	左脇門地区	地区不明		
碗	無文							1					1	
灯明皿	胴部									2			2	
鉢	口縁部	1		2		3			2				8	
	胴部	2	1	2	2		3	1			1		12	
	底部				3						1	3	7	
植木鉢	胴部										1	4	5	
	底部								2		1		3	
壺	小型													
		1		1	1							1	3	
鍋	身	口縁部		1							1		2	
		胴部		6	4		4	1		1	3		19	
		底部		1	1						1		3	
		把手		1									1	
	蓋	縁部	1		2		1				1	2	1	8
		甲部	1	3		1							1	6
		甲頂部		2		1					1	1		5
火 取	口縁部			1								1		
火 炉	口縁部	2	1			2		1			1	2	9	
	胴部	2	1		1	1		1	2			2	10	
	底部				1				1				2	
	把手								1				1	
土 蓋	縁部～			1									1	
	甲頂部													
瓶	身	1										1		
形象物	破損			1								1	2	
器種不明	蓋								1				1	
器種不明	縁部～													
	甲頂部													
		1											1	
器種不明	口縁部	1											1	
	胴部	1		1	1						2		5	
	底部			1		1					1		3	
合 計		13	17	17	11	12	1	6	11	8	8	19	123	



第57図 陶質土器

第12節 瓦質土器 (第58、59図・図版58)

総数36点が出土し、完品の出土はなく総べて破損品であった。器種別には鉢、壺、香炉、火炉、形象物、蔵骨器がある。

鉢は6点が出土した。1は胴上部まで真っ直ぐ立ち上がり口縁で内彎、口唇を外に張り出すように肥厚させる。胴上部から口縁にかけ波状の帯文を二条廻らし直下に回転型押し施文具による草花文を帯状に施す。龍淵殿地区石積み3埋土層。2は1と同タイプの胴部資料である。獅子窟地区基壇・石牆間第2層出土。3は胴上部まで逆八の字に開き口縁で一旦内側に窄んだ後口唇部は外に開く。龍淵殿地区攪乱層出土。4は鉢の底部と思われる。御照堂地区攪乱層出土。5は胴部に透かし彫りを施す破片である。全体を窺うには残存部分が少なく、細詳は判然としないがおそらく香炉のようなものかと思われる。御照堂地区攪乱層出土。

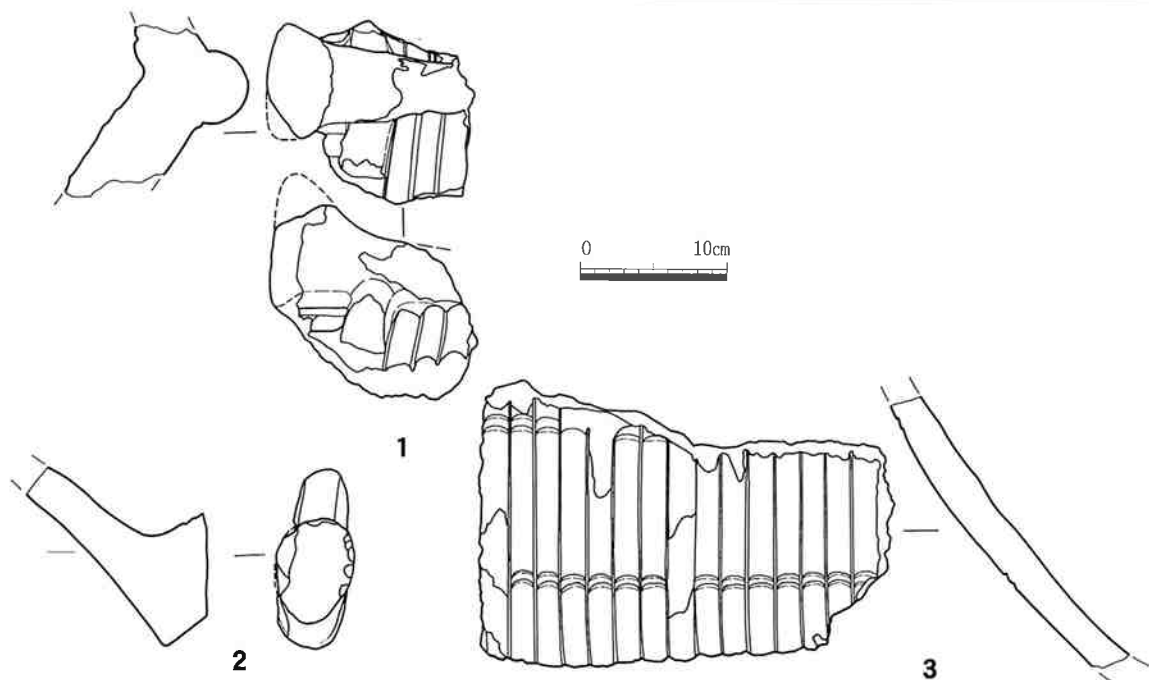
6、7、8は火炉の可能性の高いものであるが類例資料に乏しく判然としない。6は口縁部が受け口状を呈するもので、器表を丁寧に研磨し型押し雷文を廻している。庫裏地区攪乱層出土。7は胴部が南瓜型の器形を成し、器表に菊花状の型押し文を施された型作りと思われるものである。龍淵殿地区石積み埋土層出土。8は肩の張った短頸壺様の器形を成すものである。獅子窟地区攪乱層出土。9、10、11は火炉で6点が出土した。9は胴からやや八の字に窄まり口縁内を逆L字状に肥厚させる。獅子窟地区攪乱層出土。10は丸みを帯びた肥厚口縁を成し、器内部に爪状の突起を持つ。口縁下に孔が認められる。仏殿地区攪乱層出土。11は残存する部分が少ないので詳細は不明であるが他の遺跡で出土している類例資料を参考に残存部分を見る限り縁部が断面逆L字状に外に張り出す前円後方の火炉と思われる。御照堂地区攪乱層出土。第58図・図版58、12~14は家形蔵骨器の蓋部分である。蓋の形は切妻屋根を表現したと思われ、大棟、降棟、掛瓦、地部分に当たる部分が残っている。

<参考文献>

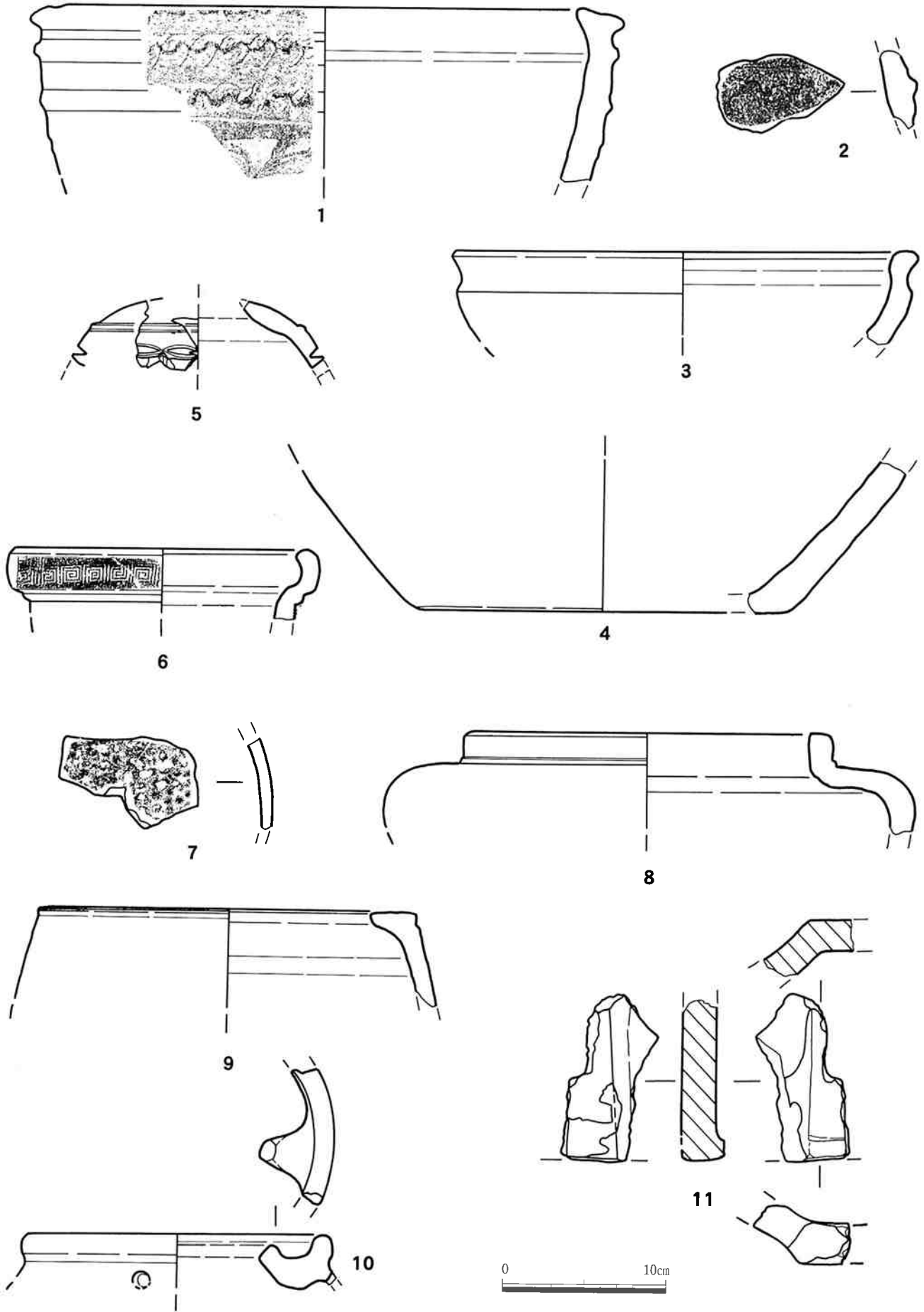
沖縄県教育委員会「天界寺跡 (I)」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第2集 2001

第34表 瓦質土器出土状況一覧

品 種		出土地区	仏殿地区	龍淵殿地区	御照堂地区	獅子窟地区	庭園地区	庫裏地区	地区不明	合 計
鉢	口縁部				1		2			3
	胴部				1	1				2
	底部				1					1
壺	中型					1				1
	底部					1				1
香 炉	胴部				1					1
火 炉	口縁部	1			2			1		4
	胴部			2						2
形 象 物	胴部			10						10
	底部	1								1
蔵骨器	蓋			1						1
品 種 不 明	胴部								9	9
合 計		2	13	6	3	2	1		9	36



第58図 瓦質土器 (1) 家型蔵骨器



第59図 瓦質土器 (2)

第13節 土器

土器は総数31点出土している。うち器形的特徴が窺える口縁部・頸部や底部資料を中心に図示した（第60図1～7）。当該資料は概ね「グスク(系)土器」と呼称されるグループに含まれるが、今回確認された器種は鉢・小型鉢である。以下、該資料について簡記する。なお、口径・底径・器高推算値や色調、胎土混和材、器面調整などについての観察所見は表記してある。

1は、該資料中で唯一、沖縄新石器時代後期（弥生時代～平安時代初頭並行期）の土器の範疇に含め得る資料で、胴部からほぼ直線的に開口する鉢形器種と類推される。口縁部がややいびつに膨らむが機能的・意識的な成形かは判断し難い。同部位には指頭圧痕が顕著に認められる。御照堂地区攪乱層出土。

2以下は、グスク(系)土器の一般的範疇におさまるもので、概して焼成良好で堅緻な泥胎質に近い土器が多い。2、3は、頸部以下が膨らみ最大径が胴に位置する鉢形に近い器形と目される。該資料は口縁部形態から、屈曲度合が明瞭な外反口縁部に頸部が縮まり、胴最大径部までは緩やかに移行する器形2と、胴最大径から口唇部まで緩やかに内傾する器形3の二者がある。2は仏殿地区基壇裏込め石内、3は鐘楼地区攪乱層出土。

4は明確な器種同定はできないが、鍋形か壺形と目される底部資料である。底面部は胴部器壁に比べ若干薄手で、底面際から胴部へストレート気味に移行する器形である。龍淵殿地区攪乱層より出土。

5、6は推算口径・器高値からサイズ・法量が小さな鉢器種（小型鉢）である。5は若干膨らむ胴部から口頸部が微弱に開く器形と目される。御照堂地区攪乱層出土。6は、胎土等の肉眼観察から今回報告のグスク(系)土器と画する印象を受け、留意される。器壁厚手（底部付近で約13mm）で赤味を強く帯びた褐色を呈し、石灰質粒等を比較的好く混入する。該期以降の宮古・八重山諸島で見られる土器（八重山外耳土器やパナリ焼き）に似通った印象を感じるが、当該地域から搬入された土器とは一概に言えない。6の類似例は過去にも阿波根古島遺跡^(註1)及び湧田古窯跡^(註2)で報告されているようである。龍淵殿地区攪乱層より出土。

7は小破片のため器種同定が困難な資料だが、意識的な穿孔が複数認められ、器内面（特に孔部周辺）には石灰に似た付着物があることから甑底部の可能性も考えられる。器壁は比較的厚手である。龍淵殿地区攪乱層。なお、隣接する首里城跡（奉神門跡）報告資料中にも底面部穿孔がみられる土器があるが、小破片で用途は不明^(註3)。

<註文献>

(註1) 沖縄県教育委員会「阿波根古島遺跡-那覇・糸満線道路改良工事に伴う緊急発掘調査報告-」『沖縄県文化財調査報告書』第96集 1990

(註2) 沖縄県教育委員会「湧田古窯跡(I)-県庁舎行政棟建設に係る発掘調査-」『沖縄県文化財調査報告書』第111集 1993

(註3) 沖縄県教育委員会「首里城跡-御庭跡・奉神門跡の遺構調査報告-」『沖縄県文化財調査報告書』第133集 1998

第35表 土器観察一覧

単位：cm

挿図番号 図版番号	器種	残存部 存位	口径	底径	器高	胎土・混和材	器面調整痕	焼成具合	色 ①器外面 ②器内面	備考等
第60図 図版59	1 鉢形	口縁部	20.4	—	—	砂泥質/赤色土粒・褐色土粒が少量混和	口縁部付近に指頭圧痕が集中	比較的良好	①明赤褐色 ②明赤褐色	粘土接合痕が認められる。
第60図 図版59	2 鉢形	口縁部	25.8	—	—	泥質/赤色土粒・褐色土粒・石灰質細粒を混入	器外面横位ナデ、内面に横位篋削りとナデ	良好で非常に堅緻	①鈍い黄褐色 ②褐色	底面部付近で器厚約13mm。
第60図 図版59	3 鉢形	口縁部	—	—	—	泥質/赤色土粒・石英細粒・石灰質細粒を混入	器外面には指頭痕集中、内面は横位ナデ	良好で堅緻	①鈍い赤褐色 ②灰褐色	器内面は多孔質。
第60図 図版59	4 壺形か	底部	—	—	—	泥質/赤色土粒・石英細粒・石灰質細粒を若干混入	器外面に横位篋削り痕とナデ調整、内面に指頭痕	良好で堅緻	①鈍い黄褐色 ②褐色	粘土接合痕あり。
第60図 図版59	5 小型鉢	口縁部	11.8	—	—	泥質/赤色土粒・石英細粒・石灰質細粒を混入	器面内外とも横位ナデ	良好で堅緻	①褐色 ②褐色	
第60図 図版59	6 小型鉢	口縁部 ～底部	10.2	10.0	6.8	砂泥質/石英粒・石灰質粒を比較的多く混入	器面内外とも横位ナデ	良好で堅緻	①明赤褐色 ②明赤褐色	一見、宮古諸島のパナリ焼に近似。
第60図 図版59	7 不詳 (甑?)	底面?	—	—	—	砂質 or 砂泥質/石英粒・細砂を比較的多く混入	器外面の孔部周辺に指頭痕か	比較的良好	①明赤褐色 ②鈍い褐色	甑の可能性（内面・孔部に石灰らしき付着物）

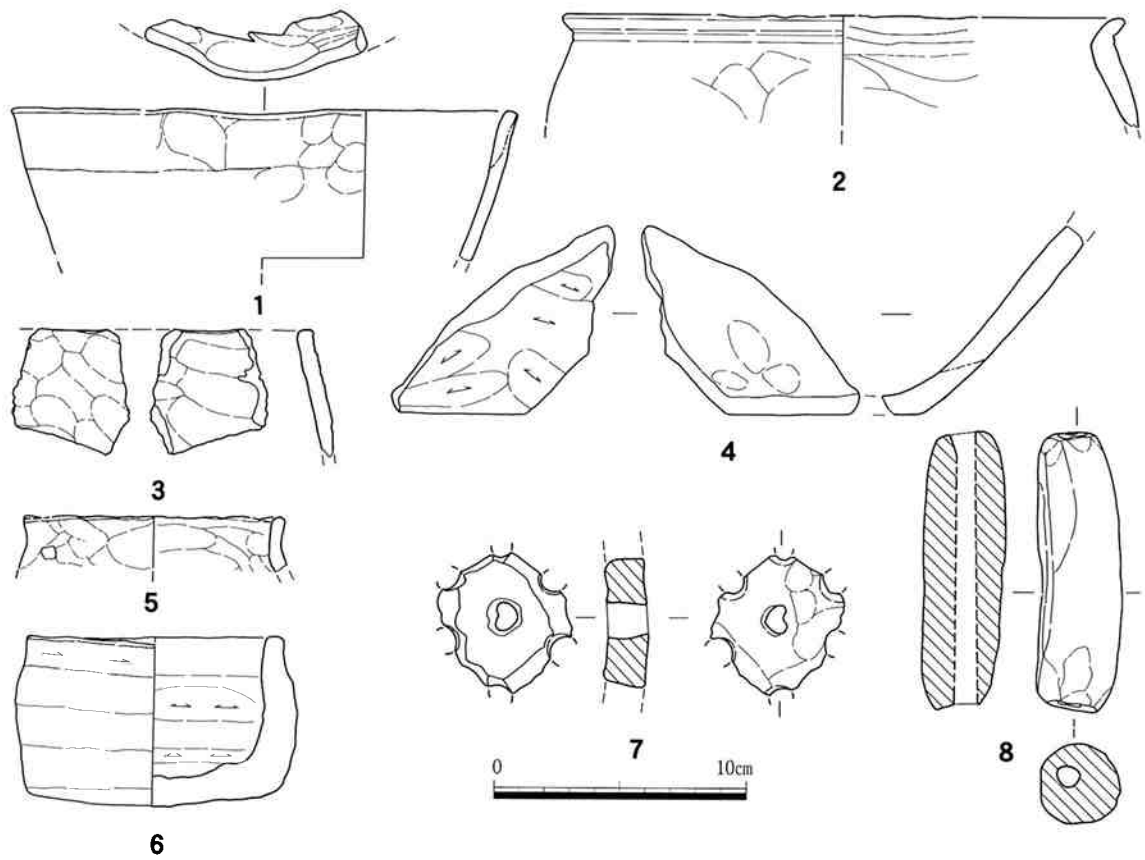
上記表中の色調については「標準土色帳」に基づき観察を行った。

第14節 土製品

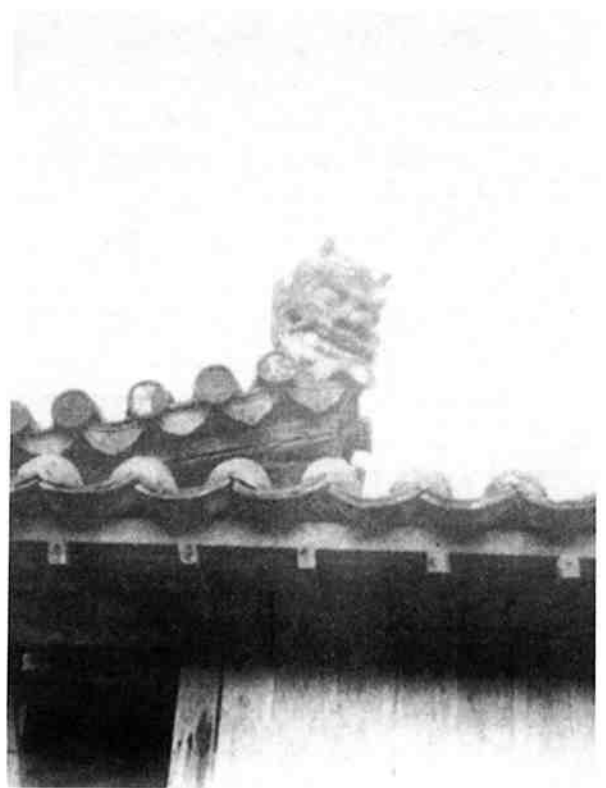
管状土錘とみられる土製品1点が出土している（第60図8）。全体にややいびつな形状で径約19mmの孔を長軸方向に貫通させる。長軸方向に明瞭な削り痕が残る。用途としては錘の蓋然性が高いが、両端部の孔部周辺に紐擦れ痕は見られない。計測重量は120g。同様な製品は首里城跡の過去報告資料や湧田古窯跡^(註1)などでも検出されている。井戸地区東側攪乱層出土。

<註文献>

(註1) 沖縄県教育委員会「湧田古窯跡(IV)-県民広場地下駐車場建設に係る発掘調査-」『沖縄県文化財調査報告書』第136集 1999



第60図 土器・土製品



図版1 龍淵殿鬼瓦 沖縄県教育委員会「旧円覚寺美術工芸関係資料調査報告書」1999

第15節 瓦

瓦は高麗系瓦、大和系瓦、明朝系瓦が得られた。種類は丸瓦、平瓦、軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦が確認されている。

1. 高麗系瓦

表採、左脇門地区、三門地区から小破片が各1点出土している。何れも淡灰色で凸面に綾杉状の叩き目痕が、第62図1、2は凹面には糸切り痕が見られる。

2. 大和系瓦

18世紀以降に搬入されたものが主体を占めるが、16世紀以前のものも僅かに見られた。第62図4は軒丸瓦で文様はやや頭部が尖る三ッ巴と珠文から構成される。文様形態から16世紀に比定できる^(註1)。瓦当裏面は横位のナデが見られ、丸瓦部の凹面には横位線が凸面には縦位のナデ成形痕が見られる。瓦径は13.2cmで御照堂地区攪乱。同図5は役瓦で両面に白砂を散りばめた離れ砂と斜め方向の断弧線が見られる。縁は斜めに面取りが成されている。表採。

3. 明朝系瓦

明朝系瓦は軒瓦と瓦があり、これらはそれぞれ丸瓦と平瓦に分けられる。調査区のはほぼ全域から出土しており、特に建物があつた地区から大量に出土している。軒瓦の丸・平は意匠から細分が可能である。

A. 軒丸瓦

完形に近いものと意匠が珍しいものを主に図化した。分類に関しては上原静編年試案^(註2)に準拠した。結果、16形式、不明8点を確認することができた。表36に示す。

B. 軒平瓦

完形に近いものと意匠が珍しいものを主に図化した。分類に関しては上原静編年試案に準拠した。結果、16形式、不明8点を確認することができた。各資料の所見は表37に示す。

C. 平・丸瓦

完形に近い資料としては平瓦は1点、丸瓦は2点、そして製作痕が明瞭に残る資料として3点、線刻、印款が見られる資料として平瓦4点、丸瓦3点、不明1点を紹介する。

第63図25は龍淵殿地区方形石積み内から大量の炭と混ざって出土している。出土状況から1721年に焼失した大殿に葺かれていた瓦と見られる。全長25.6cm、広幅長22.5cm、狭幅長18.4cmで凹面は全面に布目と桶巻きの際の接合痕並びに桶板留縄痕、桶板痕、割り痕が見られる。凸面は工具による縦位の成形痕が見られる。第63図14も龍淵殿地区方形石積み内から大量の炭と混じって出土している。出土状況から1721年に焼失した大殿に葺かれていた瓦と見られる。全長32.0cm、筒部長25.0cm、玉縁長7.0cmで凹面は全面に布目が見られる。凸面は工具による縦位の成形痕が、筒部端近くに段を有し、段より端は横位の成形痕が見られる。

D. 鬼瓦

鬼瓦片とされる資料が22点、確認された。うち仏殿地区攪乱層から出土した3片を接合することができたため第61図1のように図化し、下顎から額までの左半分の顔面を確認することができる。表面は丁寧なナデ成形されるが、裏面は不規則な篋削り成形が施され、全面に漆喰が付着する。他は額、鼻、牙、顎、左・右眉、右目、左・右頬の部分が確認されている。牙部分は鐘楼南溝内から出土しておりそれ以外は仏殿、龍淵殿、庭園、井戸地区の攪乱層から出土している。1とは若干、形状が異なる。かつて龍淵殿には10の鬼瓦が棟先に配置されていた。それらの形状から図版1^(註3)の古写真に見える龍淵殿の棟に配されていた鬼瓦に比定することができる。

E. 線刻・印款・墨書きの見られる瓦、製作痕が見られる瓦

線刻が見られる瓦は25点見られた。うち、灰瓦11点、褐色瓦は5点、赤瓦は15点となっている。全て攪乱層からの出土である。

印款がなされるものは丸に「大」の字の1点のみで三門地区攪乱層から出土した赤瓦である。第63図26。平瓦では凸面に楕円状の円内に文字か文様が見られる。

墨書きがなされるものは1点で龍淵殿地区攪乱層から出土した赤瓦である。第63図27。平瓦で凸面に直線状に1条の墨書き線が見られる。

製作痕が見られる瓦に関しては主に、割り痕や布目痕、吊り縄痕そして工具成形痕が見られるものは第63図15~24、28に示した。

<註文献>

(註1) 市本芳三「瓦」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 1995

(註2) 上原静「首里城跡西のアザナ地区出土の明朝系瓦とその推移」『南島考古』第14号 沖縄考古学会 1994

(註3) 沖縄県教育委員会「旧円覚寺美術工芸関係資料調査報告書」『沖縄県文化財調査報告書』第140集 1999

第36表 軒丸瓦観察一覧

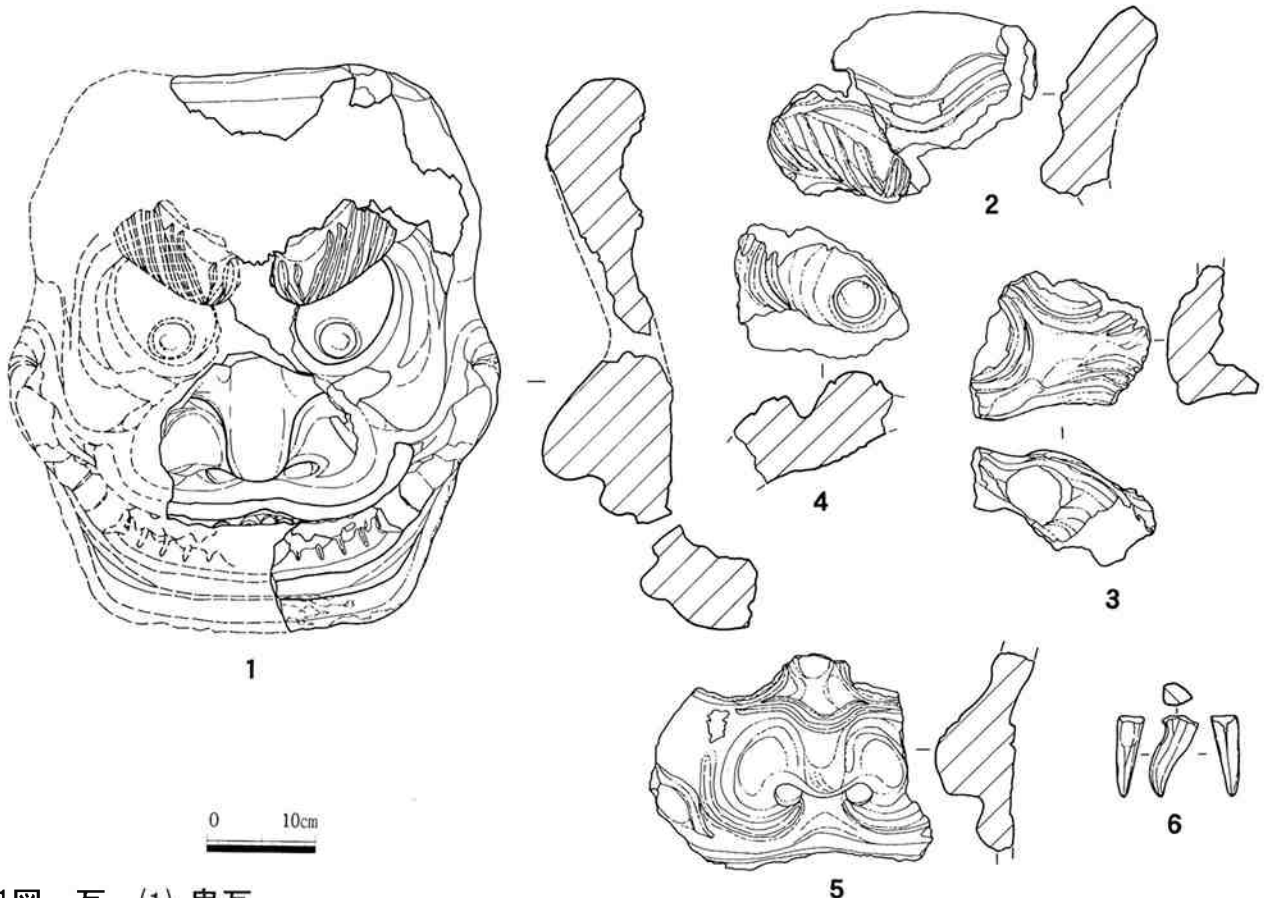
単位: cm

挿図番号 図版番号	類	瓦径 (cm)	文 様	製 作 痕	色 調	出 土 地 点
第62図 図版61 7	I A05	14.7 14.8	珠文は密に配され、横の花弁が粗く、蔓が強調される。	瓦当裏面には指圧痕が見られる。	灰色	裏庫地区攪乱
第62図 図版61 8	I A07	—	花弁は凹線状となり、花弁の区別がつかないほど抽象化される。	瓦当面と丸瓦部との角度は96°となり、接続部は段を有する。	灰色	裏庫地区攪乱
第62図 図版61 9	I A13	—	花弁は凹線状となり、中間部に左右対称の蔓が見られる。	瓦当裏面は凹凸が明瞭に見られる。	灰色	庭園地区攪乱
第62図 図版61 10	I A11	—	花弁は凹線状となり、細い蔓が見られる。下部の葉文は簡略化されている。	瓦当面と丸瓦部との接続部には段差が見られる。	黒色	龍淵殿西辺基壇裏込め石内
第62図 図版61 11	I B03	14.2 14.1	花心と上方に延びる花弁が強調されている。摩耗しているため花心より下部は不明瞭である。	瓦当裏面は中央部が弧を描くようにナデが施され、下部は粗いナデが不規則に施される。	浅黄色	龍淵殿地区石積み3埋土
第62図 図版61 12	III 01	—	花弁は凹線状、花心はジグザグ状の彫りが見られる。具象的意匠。	瓦当裏面端部は斜めに面取りが成されている。	灰褐色	仏殿地区攪乱
第62図 図版61 13	III 02	—	花心は無紋でその下側の花弁は簡略化される。	瓦当裏面端部は斜めに面取りがなされ、瓦当面と丸瓦部には横ナデ痕有り。	灰褐色	龍淵殿地区北辺基壇造成層
第62図 図版61 14	III 03	—	花弁とおしべが見られる。	—	褐色	龍淵殿地区攪乱層
第62図 図版61 15	III 04	—	花弁は凹線状となり、全体にまわる様に配置される。	瓦当裏面は縦位にナデ成形痕が明瞭に見ることができる。端部は丸みを帯びる。	灰色	龍淵殿地区攪乱層
第62図 図版61 16	III 04	—	文洋舞分は摩耗しており、花心とおしべの形態は不鮮明である。	瓦当裏面は縦位にナデ成形痕が明瞭に見ることができる。	灰褐色	御照堂地区攪乱層
第62図 図版61 17 18	III 07	—	花弁は簡略化され、全体にまわる様に配置される。花弁は凹線状となる。	瓦当面と丸瓦部との角度は約100°となる。接続部には横ナデ痕有り。	褐色	三門地区攪乱層
第62図 図版61 19	III 07	14.0 —	同図16と同範	瓦当裏面は不規則なナデ痕が見られる。端部は丸みを帯びる。	浅黄橙	仏殿地区攪乱層
第62図 図版61 20	III 08	15.0 15.0	格子文の入った花心が見られ、茎、葉文ははっきりと描かれていない。赤花様となる。	瓦当裏面の端部は縁に沿ってナデ成形痕が見られ、中央近くは横位のナデが見られる。	灰褐色	龍淵殿地区攪乱層
第62図 図版61 21	III 08	—	同図17と同範	瓦当裏面の端部は縁に沿ってナデ成形痕が見られ、中央近くは横位のナデが見られる。	灰褐色	庫裏地区攪乱層
第62図 図版61 22	A02	15.2 15.3	牡丹状で文様は凸線で描かれる。珠文の間隔は広く、横位の筋が6条見られる。	瓦当裏面は中央部が弧を描くようにナデが施され、下部は粗いナデが不規則に施される。	暗橙色	仏殿地区攪乱層
第62図 図版61 23	B01	15.0 15.2	牡丹状で花弁は凹線状で描かれる。珠文の間隔は広い。	完形品。瓦当裏面は同図10と同様で丸瓦部凹面に布目痕が全体的に見ることができる。	橙色	龍淵殿地区攪乱層
第62図 図版61 24	B02	16.0 14.8	牡丹状で花心には4本の陰刻線が見られる。下部の葉文は簡略化される。	瓦当裏面はナデ成形され、凹凸は見られない。	橙色	龍淵殿地区攪乱層
第62図 図版61 25	C01	15.0 15.3	牡丹状で花心は曲がり、左右の花弁は崩れ、左右対称を成さない。	完形品。瓦当面と丸瓦部との角度は約15°となる瓦当裏面は指圧痕が明瞭に見られる。	橙色	表採
第62図 図版61 26	C02	14.5 14.8	牡丹状で花心は曲がり、左右の花弁は崩れ、左右対称を成さない。花弁内の脈も簡略化。	瓦当裏面は丁寧なナデが見られる。丸瓦部凹面には横位の溝が見られる。	橙色	龍淵殿地区攪乱層
第62図 図版61 27	—	— 14.0	無文、上部に縁に沿って陰圏線が見られる。	瓦当裏面は丁寧にナデ消しが行われている。下部は縁に沿って陰圏線が見られる。	橙色	龍淵殿地区攪乱層
第62図 図版61 28	—	13.5 14.1	花弁、花心はかなり簡略化され、珠文の間隔もまちまちで粗雑な模様となっている。	瓦当裏面は丁寧にナデ消しが行われている。端部は稜を有し、端正なつくりとなっている。	橙色	龍淵殿地区攪乱層
第62図 図版61 30	—	—	上面から見た花文が中央に施される。花弁は8枚で花心は格子文。珠文の間隔は広い。	瓦当裏面はやや凹凸が見られる。端部は丸みを帯びる。	橙色	井戸地区攪乱層
第62図 図版61 31	—	—	同図4と同範	瓦当裏面はやや凹凸が見られる。端部は丸みを帯びる。中央近くに漆喰が付着する。	橙色	鐘楼南側溝内
第62図 図版61 32	—	—	簡略化された花弁が施される。珠文の間隔は広い。	瓦当裏面の端部は縁に沿ってナデ成形痕が見られる。	橙色	龍淵殿地区攪乱層
第62図 図版61 33	—	—	略三角形の簡略化された花弁が施される。珠文の間隔は広い。	瓦当裏面に不規則なナデ成形痕が見られる。	橙色	鐘楼南側溝内
第62図 図版61 28	—	—	花弁は簡略化されているものの、花弁の枚数は多い、珠文の間隔は広い。	瓦当裏面に不規則なナデ成形痕が見られる。	橙色	庫裏地区攪乱層
第62図 図版61 34	—	—	花心は隋円形を呈し、格子文で周囲に花弁が取り付く。	瓦当裏面に不規則なナデ成形痕が見られる。	橙色	三門地区攪乱層

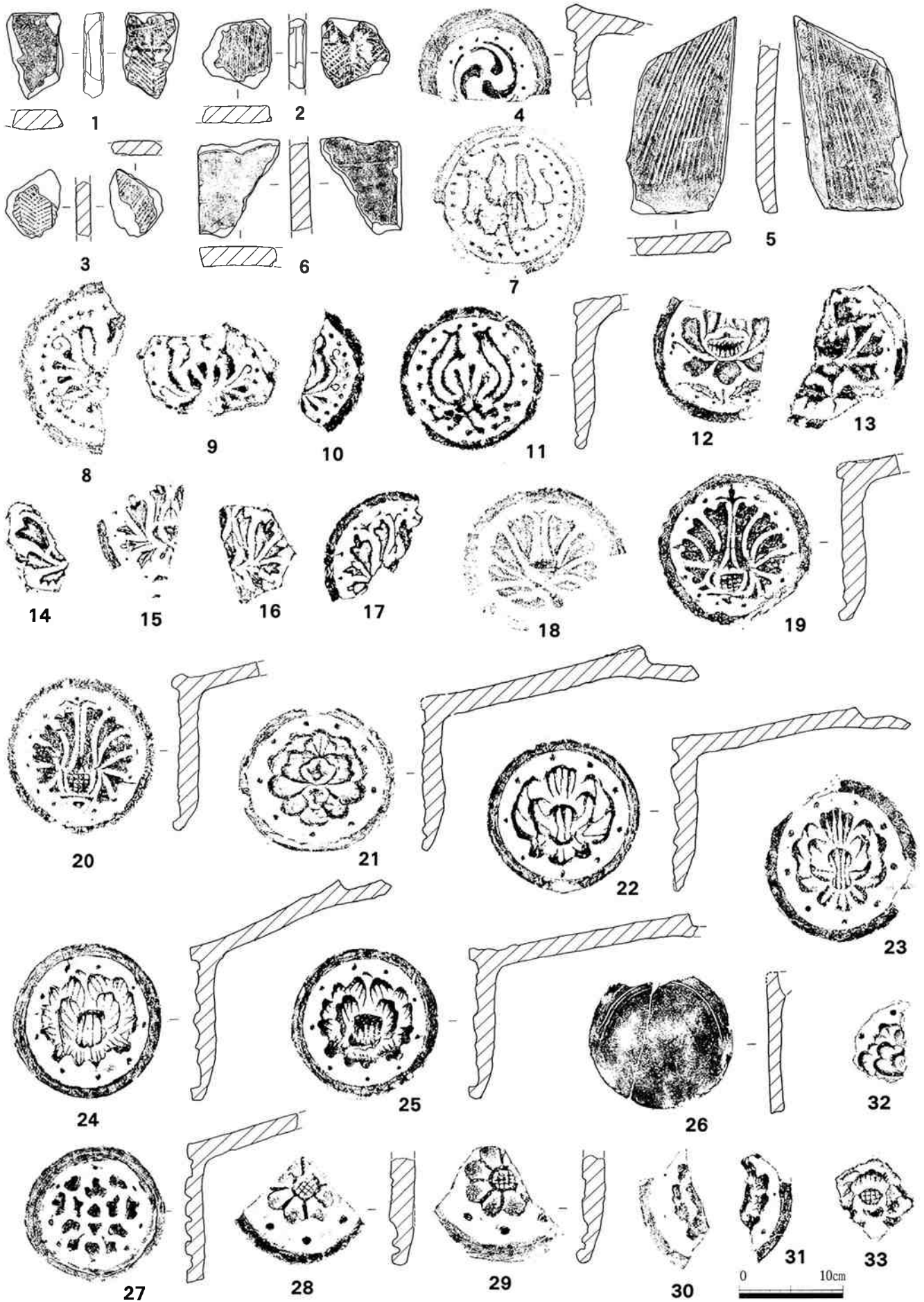
第37表 軒平瓦観察一覧

単位：cm

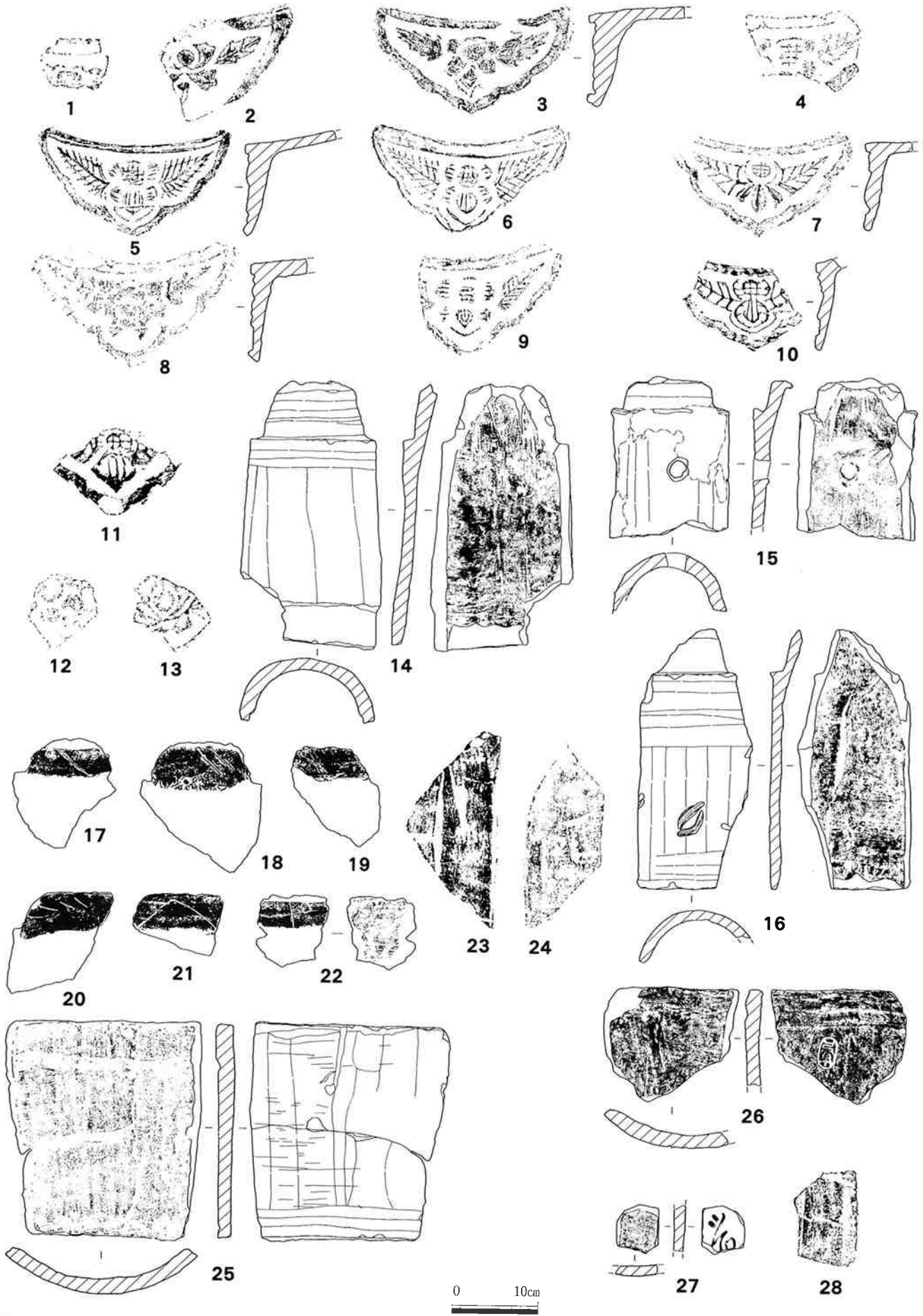
挿図番号 図版番号	類	弧高 弧垂長	幅 高 垂れ長	文 様	製 作 痕	色 調	出土地点
第63図 図版62 1	II A03	—	—	花心と上部に広がる幅広の花弁が見られる。彫りは浅い。	丁寧なナデが施されている。	浅黄色	左脇門地区攪乱層
第63図 図版62 2	II A01	—	—	中央花心が丸く、花弁が上、中、下に広がる。それぞれ花弁の先端は3つに分けられている。全体的に彫りが深い。	全体的に不規則なナデが、縁は丁寧なナデが施されている。	灰色	表採
第63図 図版62 3	III 01	21.6 13.9 10.9	—	花心を中心に花弁を5枚配し、茎とそれに伴う葉も描かれる具象的な文様。両側に広がる葉はささくれだつた様に描く。	瓦当裏面はナデ成形されている。横位と縁に沿ったナデが主体である。	浅黄色	庫裏地区攪乱層
第63図 図版62 4	III 04	—	—	中央上部に格子文を刻む花心と両側に広がる葉はささくれだつた様に描かれている。葉脈も見られることから具象的である。	全体的に不規則なナデが施されている。	浅黄色	仏殿地区攪乱層
第63図 図版62 5	III 07	22.5 13.4 10.8	—	5枚の花弁と上下に花心が見られる。両側の葉は輪郭が不鮮明となり、葉脈が強調して描かれている。	瓦当裏面は僅かに凹凸が見られるが、丁寧にナデ成形が施されている。	橙色	仏殿地区攪乱層
第63図 図版62 6	III 08	23.2 — —	—	4枚の葉弁と上下に花心が見られる。両側の葉は輪郭が不鮮明となり、葉脈が強調して描かれている。	瓦当裏面は横位のナデが施されている手い。縁部分は縁に沿ってナデが施されている。	橙色	龍淵地区攪乱層
第63図 図版62 7	VII 02-2	— — 10.3	—	中央上部に格子文を刻む楕円形の花心とその下部には放射線状に広がる房状の文様が見える。両側の葉は三角形の輪郭に葉脈を描いている。	比較的薄手で、小振りなつくり。瓦当裏面は横位のナデが施されている。縁部分は縁に沿ってナデが施されている。	明赤褐色	龍淵地区攪乱層
第63図 図版62 8	—	— — 11.6	—	楕円形の花心が中央に配され、9枚の花弁が描かれる。両側の葉はささくれ状となっているが葉脈は見られない。	全体的に不規則なナデが施されている。平瓦部の凹面は丁寧なナデが施されている。	明赤褐色	龍淵地区攪乱層
第63図 図版62 9	—	— — 11.2	—	III 07に類似するが両側に広がる葉の輪郭が明確であることと葉脈の形状が異なる。	中央部が顕著に厚みを増す。瓦当裏面は凹凸が見られる。混入物に貝が見られる。	浅黄色	庫裏地区攪乱層
第63図 図版62 10	VII 01	— — 10.4	—	中央上部に格子文を刻む楕円形の花心とその下部には縦位の楕円形でニンニクのような房が描かれている。さらに下部には蔓が見られる。	比較的薄手で、小振りなつくり。下部の輪郭に沿ってナデ痕が明瞭に見られる。	明赤褐色	庫裏地区攪乱層
第63図 図版62 11	—	— — —	—	VII 01に類似するが、下部の花心の形状がやや異なる。	比較的薄手で、瓦当裏面は横位のナデが施されている。縁部分は縁に沿ってナデが施されている。	明赤褐色	表採
第63図 図版62 12	—	— — —	—	花心と房、花弁が見られる。各々のパーツが丸みを帯びている。	不規則なナデが見られる。	灰色	三門地区攪乱層
第63図 図版62 13	—	— — —	—	真円に近い花心を中央に配し、下方の花弁は先端が3つに分けられている。	不規則なナデが見られる。	灰褐色	井戸地区攪乱層



第61図 瓦 (1) 鬼瓦



第62图 瓦 (2)



0 10cm

第63图 瓦 (3)

第16節 埴

埴は、破片資料も含めて54点得られており、その形態等から幾つかのタイプに分類できる。分類の基準は『首里城跡 欽会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる遺構確認調査』の分類に準じ、当該分類にない資料については新たに基準を設け分類を行った。形態的には、B・C・Eの3種類と新たに追加したJ・K・Lの3種類の計6種類が出土している。

分類基準を提示し資料を報告する。

Aタイプ 溝の蓋となる製品で、平面形が長方形、表裏面に抉りがつくられ使用の際噛合う。

Bタイプ Aタイプと組合せて使用されたもので、形態は長方形を呈し表面は平面となるが表面の短軸の両側面と裏面の長軸の両側面に抉りが造られる。裏面の抉りは、使用の際噛合うよう、互い違いに造られる。(第64図2)

Cタイプ 平面は長方形を呈し、裏面に脚が付けられ断面形態は下駄状を呈し、脚の短軸の表面・両側面には互い違いで抉りが造られる。Cタイプは脚端部の形状からa・bに細分できる。しかし、殆どが破片資料であり、脚部及び脚端部が破損している資料は全てaタイプとして扱った。

a 断面形態が下駄状を呈するもの。(第64図3～4)

b 脚端部が三角状を呈するもの。第64図5は脚端部に断面三角形状の粘土を貼付け、外面が鋭角となる脚端部を形成している。短軸の立ち上がりは斜めに整形されている。

この様な脚端部の差異が単に安定性を重視したものか、用途によるものか詳細は不明ある。

Dタイプ 平面形が長方形で長軸のみに抉りを造るものと両軸に抉りを造るものに細分できる。

Eタイプ 平面形が正方形を呈するもの。(第64図7)

Fタイプ 平面形が三角形を呈するもので、Eタイプと平面形態以外の諸特徴が一致する。(第64図8)

Hタイプ 平面形が長方形で抉りが見られないもの。

Iタイプ 形状を伺える資料が出土していないが、首里城北殿跡の調査において1点のみ出土している。

Jタイプ 溝の底になる製品で、平面形態は長方形、断面形態がL字状を呈し、使用の際、抉りの部分が噛合うよう、短軸の両側には互い違いで抉りが造られている。第64図6は長さ23.8cm・高さ8.6cm・厚さ3.4cmを測り灰色を呈する。Bタイプとセットで使用されていた可能性を有する。首里城跡管理用道路地区において類似する資料が出土しているが平面形態等が異なるため本報告では新タイプとして扱った。

Kタイプ 第64図9は上記何れのタイプにも属さないもので、長軸には抉りが造られ、短軸の側面は斜めに整形されている。破片資料のためその形状は不明である。

Lタイプ 有文及び印文が施された資料で、上記何れかのタイプに属すると考えられるが、破片資料のため本報告では新タイプとして扱った。平面に沈線が施された資料が3点(第64図10、13、14)表面及び側面に円形・八角形状のスタンプ文が列状に施されている資料が1点(第64図11)の計4点、平面に「大」の印文と側面に沈線が施された資料(第64図12)が1点の計5点出土している。有文及び印文の構成等は不明である。

<註文献>

沖縄県教育委員会「首里城跡 欽会門・久慶門内側地域復元整備事業にかかる遺構確認調査」『沖縄県文化財調査報告書』第88集 1988

沖縄県教育委員会「首里城跡 南殿・北殿遺構確認調査」『沖縄県文化財調査報告書』第120集 1995

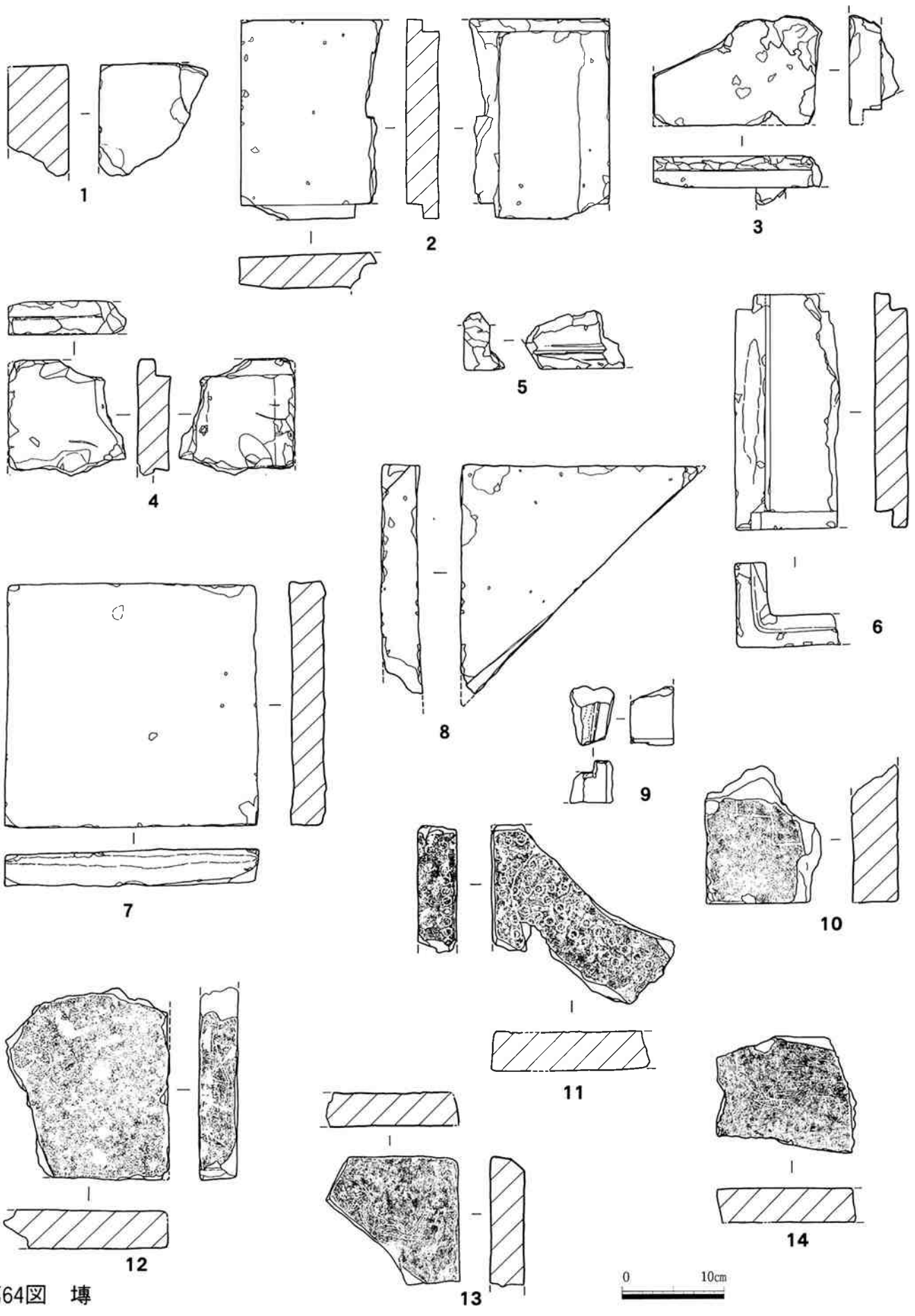
沖縄県立埋蔵文化財センター「首里城跡 管理用道路地区発掘調査報告書」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第1集 2001

第38表 磚出土狀況一覽

厚さ：小2.6cm～3.3cm、中3.5cm～4.6cm、大5.8cm～6.0cm

分類	出土地		御照堂地区		獅子窟地区		仏殿地区		三門地区		鐘楼地区		龍淵殿地区		井戸地区		庭園地区								
	厚さ	色	完成	1/2 1/3 破片	完成	1/2 1/3 破片	完成	1/2 1/3 破片	完成	1/2 1/3 破片	完成	1/2 1/3 破片	完成	1/2 1/3 破片	完成	1/2 1/3 破片	完成	1/2 1/3 破片							
C-a	小	赤																	1						
C-b	小	赤																	6						
C, D 不明	小	赤																	1						
	小	赤																	2						
	中	赤		1															1						
E	小	赤																	1						
	中	赤																	1						
	大	灰																							
B, E, H 不明	大	灰																							
E, H 不明	大	灰																							
F	中	赤																	1						
	中	灰																	1						
J	小	灰																							
K	小	灰																							
L	小	赤																							
	中	赤																	1						
	中	灰																							
合計			0	0	0	2	1	1	0	5	1	0	0	1	0	0	2	1	10	0	2	0	1	0	12

分類	出土地		左脇門地区		表		採		出土地不明		合計		総合計			
	厚さ	色	完成	1/2 1/3 破片	完成	1/2 1/3 破片	完成	1/2 1/3 破片	完成	1/2 1/3 破片	完成	1/2 1/3 破片				
C-a	小	赤											2			
	小	灰											20			
C-b	小	赤											1			
C, D 不明	小	赤											1			
	中	灰											3			
	中	赤											3			
	中	灰											3			
E	小	赤											1			
	中	赤											1			
	大	灰											1			
B, E, H 不明	大	灰											1			
E, H 不明	大	灰											1			
F	中	赤											3			
	中	灰											3			
J	小	灰											1			
K	小	灰											1			
L	小	赤											1			
	中	赤											2			
	中	赤											3			
	中	灰											3			
合計			0	0	0	4	0	0	4	0	0	2	5	2	45	54



第64图 博

第17節 円盤状製品

本製品は日常生活において使用したものを、円形に打割調整した二次利用品である。

円覚寺跡からは23点が出土し、うち遺構に伴って検出されたものは7点である。検出地点は左脇門地区攪乱層から4点、井戸地区攪乱層から2点、庭園地区攪乱層から1点である。そのほかの製品は琉球大学グラウンド建設に伴う地点からの出土である。

打割調整の方法は、出土した製品の半分が表面からの打割のみであり、その他の製品も表面からの打割回数が裏面の打割回数（2～4回）に比べ圧倒的に多い。

1 cm単位での大きさ別の状況は、第40表に示すとおり、4 cm以下の個体が総数全体の70%を占める。

図版64-2、4、9、10は接地面に磨耗が観察された製品である。

ここでは、遺構より検出した製品や代表的な製品を提示し、個々の特徴については第39表に観察一覧としてあつかった。

<参考文献>

上原 静「県内出土の円盤状製品について」『読谷歴史民俗博物館紀要』第10号 1986

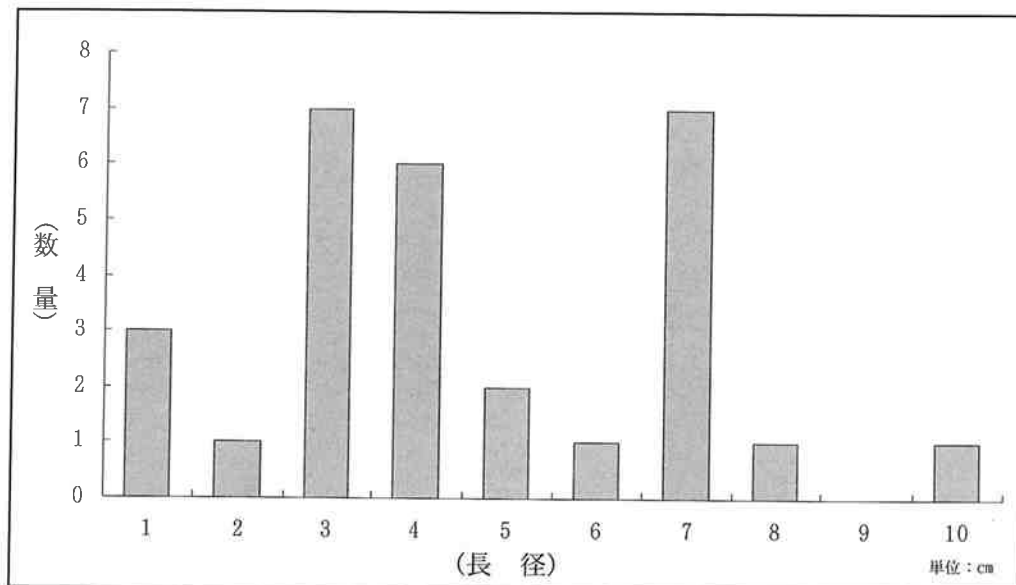
沖縄県教育委員会「湧田古窯跡(Ⅱ)」『沖縄県文化財調査報告書』第121集 1995

第39表 円盤状製品観察一覧

単位：mm, g

図版番号	長径	厚さ	重量	素 材	出 土 地 点	備 考
図版64 1	16	3	14.0	染 付	井戸地区攪乱層	表面の一部が摩耗。表面から13回、裏面から4回の打割調整。
図版64 2	17	4	1.7	染 付	龍淵殿地区攪乱層	表面の接地面が摩耗。表面から13回の打割調整。
図版64 3	22	5	5.3	沖縄産施釉陶器	表 採	灰釉碗。表面から21回、裏面から3回の打割調整。
図版64 4	36	10	18.4	沖縄産無釉陶器	左脇門地区攪乱層	円周の1/5が欠損。裏面の接地面がわずかに摩耗。
図版64 5	41	9	20.8	沖縄産無釉陶器	左脇門地区攪乱層	円周の1/3が欠損。
図版64 6	41	9	19.0	タイ産褐釉陶器	庭園地区攪乱層	表面から9回、裏面から3回の打割調整。
図版64 7	48	12	40.0	灰色瓦	表 採	表面から9回、裏面から2回の打割調整。
図版64 8	56	13	40.9	赤色瓦	左脇門地区攪乱層	円周の1/5が欠損。裏面全体が摩耗。
図版64 9	74	10	87.8	沖縄産無釉陶器	御照堂地区攪乱層	マンガン釉、表面から29回の打割調整。表面の接地面が摩耗、若干のこう打痕。
図版64 10	78	13	94.5	灰色瓦	左脇門地区攪乱層	表面の接地面が若干摩耗。表面から9回、裏面から3回の打割調整。
図版64 11	81	11	82.2	赤色瓦	左脇門地区攪乱層	円周の2/7が欠損。全体が著しく摩耗。
図版64 12	101	12	182.9	沖縄産無釉	龍淵殿地区攪乱層	表面から20回、裏面から3回の打割調整。

第40表 円盤状製品大きさ別出土状況



第18節 石器・石製品 (第65図・図版65・66)

本遺跡出土の石器・石製品は石球、磨石、砥石、硯、箱状製品、板状製品、位牌、基石、勾欄石柱、礎石がある。

石球は総数131点、その多くが龍淵殿地区・庭園地区からの出土であった。サンゴ製が僅かに出土したほかはほとんどが細粒砂岩製であり、形状は限りなく真球に近いものから歪な球状までみられる。サイズは大きいもので7～8cm台から小さいもので3cm前後がある。第65図1、2は直径が3cm前後と比較的小型で形状はやや真球に近い、いずれも器面全体に敲打調整し所々に研磨を施す。1はサンゴ製、2は細粒砂岩製。3～5は1、2とはやや様相が異なり、形態は球状を意識するものと思われるが、かなり作りが雑である。更に当該タイプが同石質の自然礫と共に龍淵殿地区において基壇造成土内から多量に出土した背景を鑑みるに従来考えられている石球、石弾とは一線を画ものかと思われる。図版19-4 参照

硯は4点得られ、完品はなく破損品のみの出土である。6は海部側の隅を残す資料であり、方形の硯であったと推察される。

7は端部の平面形態が屋根状をなし断面形は長方形を示す。端部平面中央に長方形の臍穴、上側面には円形の臍穴を穿孔している。身は扁平な方形をなすものである。表面は被熱のため詳細は不明。図版2と同様な位牌の上下端のいずれかの部分かと思われる^(註)。

8、9は勾欄の柱及勾欄の一部と考えられる。8は二面が正方形で、四面が長方形、二つの側面が正方形の六面体である。長方形の一面を挟む両側の角を彫刻するが断面形態は花びら状になる。また一つの側面はボール状にくり抜きノミ痕を多く残すことから他の部材と咬み合わせるものと思われる。9は四角柱の側面に突帯と蓮弁の浮き彫りを施す。柱上部の獅子像と基下部は欠落しているが、放生橋の勾欄の親柱とほぼ同一なものである^(註)。現在残される放生橋、勾欄の親柱には彫刻の作りなどに明らかな違いが見られるものが幾つか認められる。これを製作の違いと考えるか、過去において補修が行われた可能性を考えるか判断の分かれるところと思われるが、今回出土した親柱は放生橋勾欄の親柱と殆ど同じ作りであることをふまえると補修時の廃棄遺物である可能性は高まると考えられる。

礎石は3点出土し総て遺構の元位置から動いているものであった。第65図10及び図版66、1～3に示すものはいずれの形態も上面観が真円形で縁部に丸状の抉りを廻らし、断面形は半円形状をなすものである。上面に円形の臍穴が認められる。

<註文献>

(註) 沖縄県教育委員会「旧円覚寺美術工芸関係資料調査報告書」『沖縄県文化財調査報告書』第140集 1999

第41表 石器・石製品観察一覧

単位：cm、g（ ）は残存長

挿図番号	器種	石質	長さ 直径	厚	幅	孔径	重さ	出土地点
第65図 図版65 1	石球	サンゴ	3	2.9	3.1	—	18	表採
第65図 図版65 2	石球	細粒砂岩	3.5	(1.6)	3.5	—	(24)	龍淵殿地区 攪乱層
第65図 図版65 3	石球	細粒砂岩	4.7	4.1	5.4	—	130	獅子窟地区 攪乱層
第65図 図版65 4	石球	細粒砂岩	6.2	5.3	6.8	—	280	庭園地区 攪乱層
第65図 図版65 5	石球	細粒砂岩	8.7	7.0	8.5	—	650	庭園地区 攪乱層
第65図 図版65 6	硯	—	(3.1)	1.4	(4.4)	—	(34)	仏殿地区 攪乱層
第65図 図版65 7	位牌	—	(5.1)	1.5	5.1	0.6	(36)	龍淵殿地区 攪乱層
第65図 図版65 8	石造製品	輝緑岩	(14.5)	11.4	(11.2)	—	(1750)	井戸地区 攪乱層
第65図 図版66 9	石造製品	輝緑岩	(15.1)	—	18.7	—	(9000)	庫裏地区 攪乱層
第65図 図版66 10	礎石	輝緑岩	38.3	16.2	—	6.55	39000	獅子窟地区 攪乱層
図版66 2	礎石	輝緑岩	40	20.7	—	6.2	56000	仏殿地区 攪乱層
図版66 3	礎石	輝緑岩	37.3	15.9	—	6.1	37500	庭園地区 攪乱層

第42表 石器・石製品出土一覽

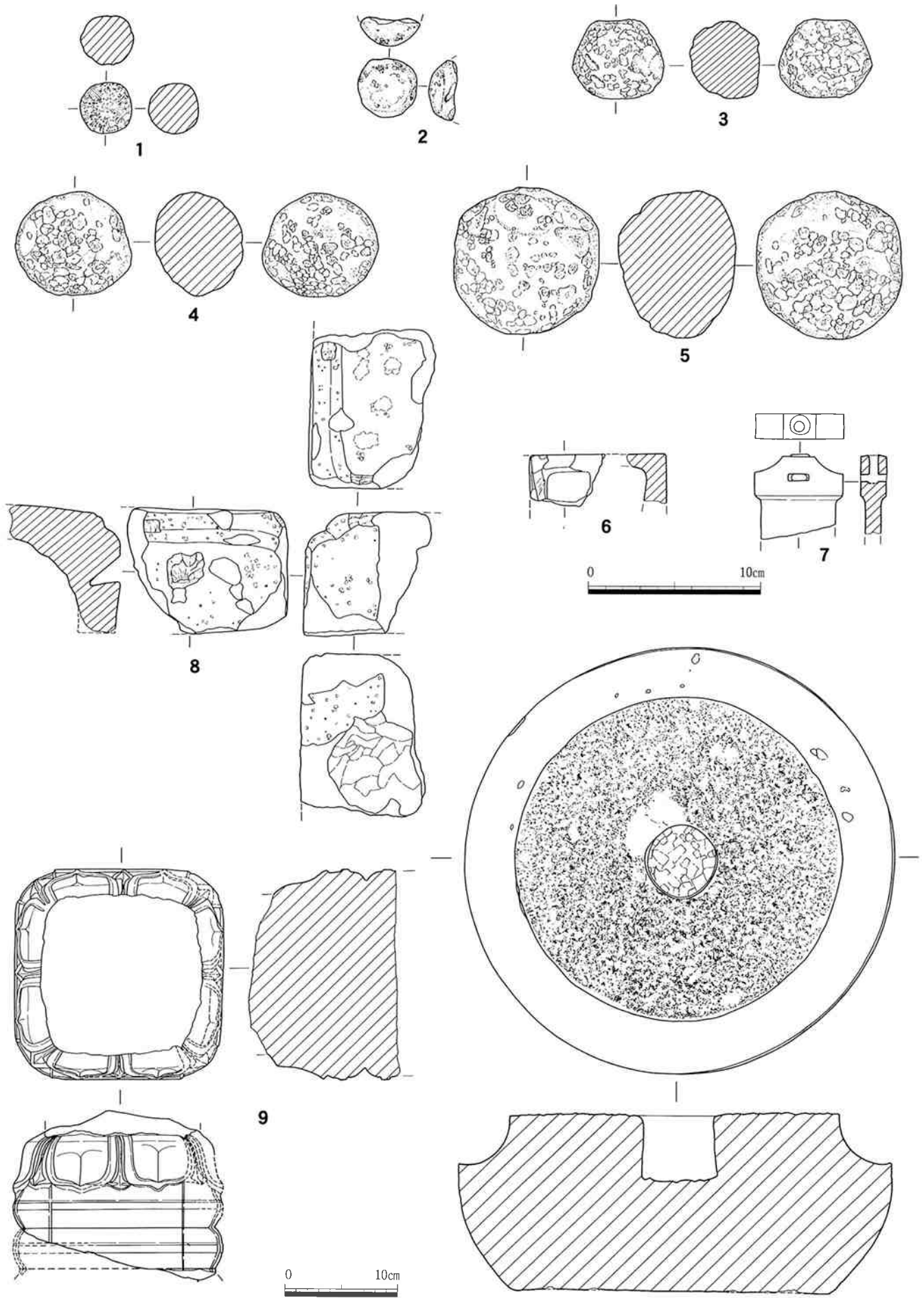
器種	出土地区										表 採	出土地不明	合 計
	御照堂地区	獅子窟地区	仏 殿地区	三 門地区	龍淵殿地区	庫 裏地区	井 戸地区	庭 園地区	左脇門地区				
石 球	4	12	1		63	1		43		5	2	131	
磨 石					1							1	
砥 石									1			1	
硯			3	1								4	
箱 状 製 品	1											1	
板 状 製 品										1		1	
碁 石	1	1			1	1				1		5	
位 牌					2				1			3	
欄 干				5		1	1			1		8	
礎 石		1	1					1				3	
石製品不明	1						1					2	
合 計	7	14	5	6	67	3	2	44	2	8	2	160	



図版2 円覚寺 開山芥隱和尚大禪師位牌
 沖縄県教育委員会「旧円覚寺美術工芸関係資料
 調査報告書」1999



図版3 円覚寺 放生池 石橋柱頭
 沖縄県教育委員会「旧円覚寺美術工芸関係資料
 調査報告書」1999



第65図 石器・石製品

第19節 玉 (第66図1~5・図版67-1~9)

総数57点のガラス製玉類が出土した。遺構に伴うものは一点も含まれていない。

一般的に寺院において玉類は仏像などの荘嚴具や地鎮などの用具として使用されることが多いようである。本遺跡で出土した玉は外径5mm弱~2mm代の丸玉が殆どであり、コイル状になった管玉様も一点得られた。

第66図1~4に示したものはいずれも丸玉に属する玉類である。

これらの形状は、球状ものから三角錐状に変形したものまでさまざまであり、どれも紐状のガラスが重なるように巻かれていることから、一旦、細い紐状に伸ばしたガラスを心棒となるものに巻き付け製作したものと考えられる。後は一様に表面に磨きをかけて仕上げている。

孔は殆どが玉の中心に穿たれているが中心より外れるものも幾つかあった。

孔径は外径と必ずしも比例しない様である。

5に示すものはコイル状(管玉)の玉である。これも丸玉同様、紐状に伸ばしたガラスを心棒となるものに螺旋状に巻き付け製作したと思われる。

出土した、玉類のガラスの色は赤、青、黄、緑、紫、白、黒が基本で濃淡のバリエーションが加わる。また透明であるものと不透明な物があった。

<参考文献>

潮見浩『技術の考古学』有斐閣 1988

第43表 玉出土法量一覽

単位: mm, g

種類	形	色	透明度	完破	法量				挿図番号	図版番号	出土地点
					外径	内径	高さ	重量			
1	丸玉	丸	赤色	透明	完	4.27	2.15	2.94	0.2		表 採
2	丸玉	丸	緑色	透明	完	4.83	1.26	3.96	0.2		龍淵殿地区攪乱層
3	丸玉	螺旋状	トルコ青色	不透明	完	3.93	1.7	3.09	0.1		井戸地区攪乱層
4	丸玉	丸	濃紺色	不透明	完	5.45	0.91	4.92	0.3	第66図1	表 採
5	丸玉	丸	緑色	透明	完	3.96	1.41	2.87	0.1		庫裏地区攪乱層
6	丸玉	丸	緑色	透明	完	3.8	1.15	3.07	0.1		獅子窟地区攪乱層
7	管玉?	螺旋状	水色	透明	完	6.44	2.45	4.83	0.3	第66図2	図版67 2
8	丸玉	丸	黒色	不透明	完	4.88	1.8	4.09	0.3		仏殿地区攪乱層
9	丸玉	変形	赤色	透明	完	5.2	1.33	4.34	0.2	第66図3	図版67 3
10	丸玉	丸	白色	不透明	完	3.81	1.29	3.23	0.1		仏殿地区攪乱層
11	丸玉	丸	緑色	透明	完	4.74	1.69	3.29	0.1		図版67 6
12	丸玉	やや変形	黄色	不透明	完	4.26	1.43	3.34	0.1		図版67 7
13	丸玉	丸	紺	透明	完	4.98	0.93	3.99	0.1		仏殿地区攪乱層
14	丸玉	丸	緑色	透明	完	4.38	1.27	3.08	0.1		仏殿地区攪乱層
15	丸玉	変形	濃緑色	不透明	完	4.31	1.21	3.57	0.1		仏殿地区攪乱層
16	丸玉	やや変形	褐色	透明	完	4.71	1.81	3.77	0.1		仏殿地区攪乱層
17	丸玉	丸	水色	透明	完	4.26	1.64	3.61	0.1		仏殿地区攪乱層
18	丸玉	丸	白色	不透明	完	4.79	1.51	3.86	0.1		図版67 8
19	丸玉	やや変形	黒色	不透明	完	4.59	1.07	3.65	0.1	第66図4	図版67 4
20	丸玉	丸	緑色	透明	完	4.22	1.31	2.78	0.1		仏殿地区攪乱層
21	丸玉	丸	紫色	透明	完	4.63	1.45	3.25	0.1		図版67 9
22	丸玉	丸	赤色	透明	完	3.22	1.03	2.11	-		仏殿地区攪乱層
23	丸玉	丸	緑色	透明	完	3.92	1.18	3.28	0.1		仏殿地区攪乱層
24	丸玉	丸(偏平)	水色	透明	破	-	1.89	-	-		仏殿地区攪乱層
25	丸玉	丸	水色	透明	完	4.37	1.45	3.22	0.1	第66図5	図版67 5
26	丸玉	丸	濃紺色	透明	完	4.5	1.34	2.94	0.1		仏殿地区攪乱層
27	丸玉	丸	水色	透明	完	4.35	1.31	3.88	0.1		仏殿地区攪乱層
28	丸玉	丸	黄色	不透明	完	4.18	1.35	2.82	0.1		仏殿地区攪乱層
29	丸玉	一	緑色	透明	破	-	-	-	-		仏殿地区攪乱層
30	丸玉	丸	黄色	不透明	破	4.21	-	3.22	-		仏殿地区攪乱層
31	丸玉	丸	黄色	不透明	完	3.82	1.18	2.9	0.1		仏殿地区攪乱層
32	丸玉	丸	紫色	透明	完	3.49	1.14	2.49	-		仏殿地区攪乱層
33	丸玉	丸	水色	不透明	完	3.7	1.08	3.2	0.1		仏殿地区攪乱層
34	丸玉	丸	紫色	透明	完	4.26	1.72	3.11	0.1		仏殿地区攪乱層
35	丸玉	丸	紫色	透明	完	3.62	1.56	1.92	-		仏殿地区攪乱層
36	丸玉	丸	白色	透明	完	4.25	1.73	2.48	0.1		仏殿地区攪乱層
37	丸玉	丸	白色	透明	完	4.18	1.75	2.63	0.1		仏殿地区攪乱層
38	丸玉	丸	白色	透明	完	4	1.23	3.13	0.1		仏殿地区攪乱層
39	丸玉	丸	緑色	透明	完	4.2	1.6	3.2	0.1		表 採
40	丸玉	丸	白色	透明	完	3.96	2.12	2.63	0.1		仏殿地区攪乱層
41	丸玉	丸	水色	透明	完	2.01	1.51	2.03	-		仏殿地区攪乱層
42	丸玉	丸	白色	透明	完	-	1.93	-	-		仏殿地区攪乱層
43	丸玉	丸	水色	透明	完	3.59	1.07	2.25	0.1		庫裏地区攪乱層
44	丸玉	丸	水色	不透明	完	3.81	1.3	3.4	0.1		表 採
45	丸玉	丸	緑色	透明	完	4.06	1.26	3.5	0.1		龍淵殿中央教員宿舎跡清掃
46	丸玉	丸	水色	不透明	完	4.05	1.04	3	0.1		龍淵殿北側1,庭園北御城壁
47	丸玉	丸	水色	不透明	完	3.49	1.01	3.02	0.1		表 採
48	丸玉	丸	水色	透明	完	4.18	1.27	3.52	0.1		龍淵殿地区攪乱層
49	丸玉	丸	緑色	透明	完	4.05	1.75	2.24	0.1		龍淵殿地区攪乱層
50	丸玉	丸	水色	不透明	完	4.12	1.17	3	0.1		龍淵殿地区攪乱層
51	丸玉	丸	緑色	透明	完	3.99	1.67	2.87	0.1		井戸地区攪乱層
52	丸玉	丸	緑色	透明	完	3.35	1.59	2.56	-		井戸地区攪乱層
53	丸玉	丸	水色	透明	完	3.68	1.29	3.3	0.1		表 採
54	丸玉	丸	水色	不透明	完	4.8	1.3	4.22	0.2		庫裏地区攪乱層
55	丸玉	丸	水色	透明	完	3.58	0.99	3.33	-		庫裏地区攪乱層
56	丸玉	丸	緑色	透明	完	3.91	1.12	2.88	0.1		表 採
57	丸玉	丸	緑色	透明	完	-	2.16	-	0.1		表 採

第20節 骨製品 (第66図6～10・図版67-10～14)

6、7は先端に向けて漸次細くなる四角柱状の製品である。器面は入念な研磨により自然面の痕跡を殆ど留めず側面は平坦に面取りしている。いずれも欠損品であるが形態はほぼ箸の様な製品と思われる。6は柄部分のみ残す資料で先端部は欠損している。全面に研磨が行き届き断面形は柄端部で長方形、先端に行くにしたがい略正方形になる。7は箸先部分と思われる破損品である。断面形は柄に近い部分が四角く、箸先に向かい丸くなる。8～10に示すハブラシ様製品が3点出土した。いずれも柄部のみ残す破損資料である。8、9は頸部から柄尻にかけてやや開きながら緩やかな直線状を示し、柄尻は舌状を呈する。柄部上面は中央で膨らみを持たせ、裏面は平坦に仕上げる。断面形はカマボコ状を成し、柄尻の中央に直径2mmの小孔が穿たれている。10は頸部から柄尻にかけて一旦開き直線状を成しながら柄尻に至る。柄部上面は中央で膨らみを持たせ、裏面は平坦に仕上げる。断面形は楕円形状を呈する。柄尻先端は破損のため不明。

第44表 骨製品法量一覧

単位：cm, g ()は残存長

挿図番号	図版番号	器種	完/破	長さ	最大幅	最大厚	重さ	孔径	出土地点
第66図 6	図版67 10	箸様製品	破	(10.8)	0.7	0.5	(5.4)	—	井戸地区攪乱層
第66図 7	図版67 11	箸様製品	破	(7.0)	0.6	0.4	(1.9)	—	井戸地区攪乱層
第66図 8	図版67 12	歯ブラシ様製品	破	(8.5)	1.1	0.7	(8.3)	0.28	表採
第66図 9	図版67 13	歯ブラシ様製品	破	(8.1)	1.1	0.7	(6.4)	0.97	井戸地区攪乱層
第66図 10	図版67 14	歯ブラシ様製品	破	(6.9)	1.1	0.6	(5.2)	—	井戸地区攪乱層

第21節 貝製品 (第66図11・図版67-15～17)

貝製品は総数3点出土し内2点は未製品の可能性が大きい。

第66図11図版67-15に示すものはホラガイの殻頂部を打割穿孔し、殻表及び水管溝の縁部を僅かに研磨、殻頂部分に金属製の吹き口を取り付け成形するものである。吹き口部分の金具は一旦板状にのばした金属先端を紙織り様に尖らせ殻頂部を取り除いた部分に、捻じ込み更に螺頭部を筒状に巻き装着したと思われる。吹き口縁部は僅かに膨らみ、水平を成す。密教宗教などに使用される法螺と思われる。長さ21.6cm、幅9.1cm、重さ195.0g、出土地：表採。

図版67-16、17は夜光貝製品の破片もしくは漆製品で使用される螺鈿の素材と思われる。16は側面に擦り切様の加工が認められる。長さ2.3cm、幅1.5cm、重さ1.2g、出土地：三門地区基壇内攪乱層、17は側面を敲打により成形している。長さ3cm、幅2.5cm、重さ6.9g出土地：御照堂地区攪乱

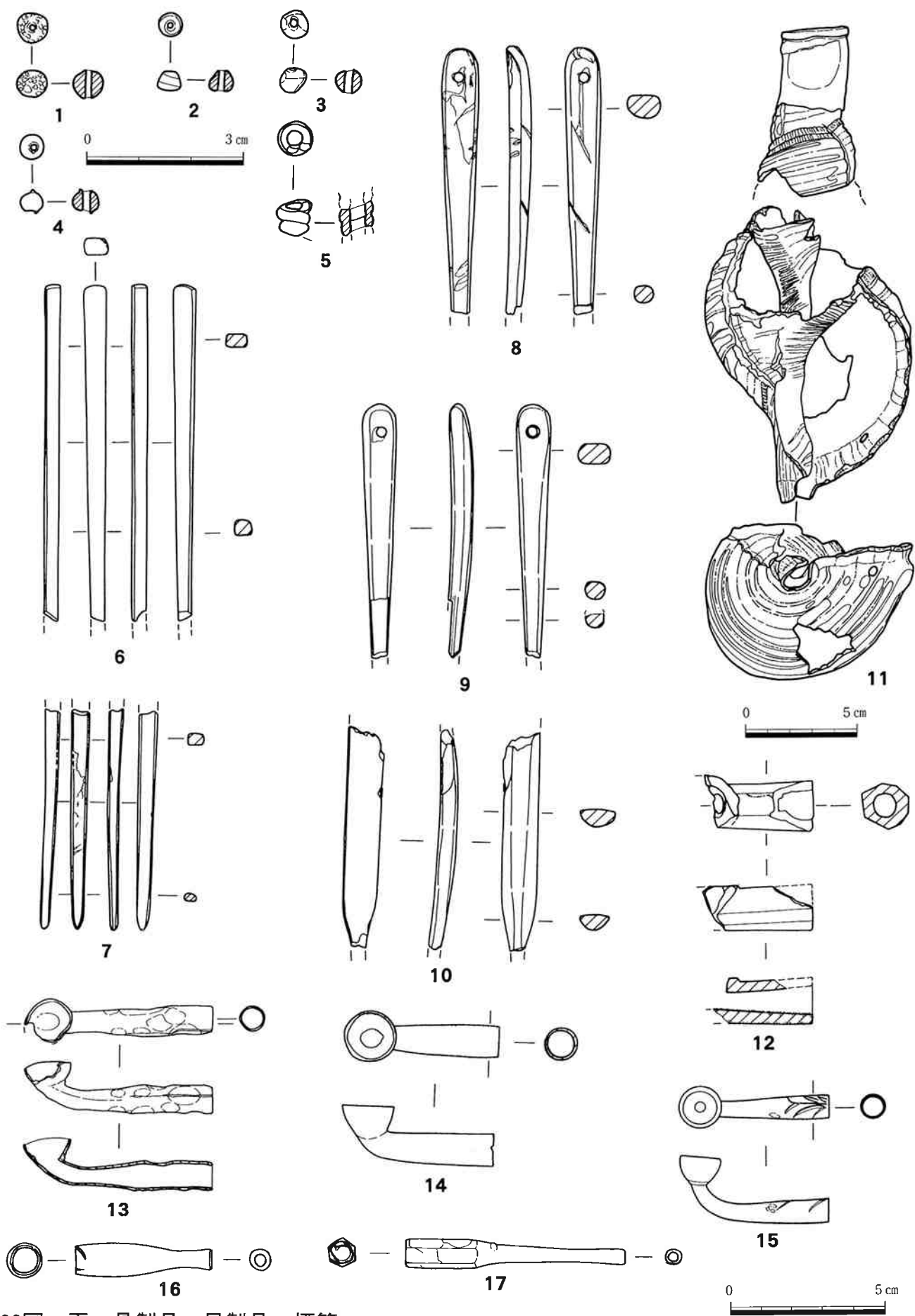
第22節 煙管 (第66図12～17・図版67-18～23)

陶製の雁首1点に銅製の雁首1点、真鍮製の雁首2点吸い口2点の計6点が出土した。遺構からの出土は無く総て攪乱層よりの出土であった。12は沖繩産施釉陶器製の雁首で、火皿と小口の一部を欠いている。胴表面は八面体に面取りをし内孔は円筒状になる。13は銅製の雁首である。火皿の一部が破損し胴部も変形している。火皿下に補強体の突起を廻らし、胴部側面に接合面が直線状に認められるが、14、15は真鍮製の雁首である。15は火皿下に補強体の環状の突起を持ち火皿の孔が比較的小さい、筒部上面に草花と思われる刻文が見られる。16、17は真鍮製の吸い口である。17は胴部が六面体に面取りされ口付側は徐々に細くなる円筒状を成す。

第45表 煙管法量一覧

単位：cm, g

挿図番号 図版番号	部位	完/破	材質	法 量							出土地点
				火皿・吸 口 外 径	火皿・吸 口 内 径	小口外径	小口内径	長さ	高さ	重さ	
第66図 12 図版67 18	雁首	破	陶質	—	—	—	—	—	—	7.3	御照堂地区攪乱層
第66図 13 図版67 19	雁首	破	銅製	—	—	8.35	7.26	59.60	6.82	7.8	龍淵殿地区攪乱層
第66図 14 図版67 20	雁首	完	真鍮	16.74	14.48	10.73	8.97	48.51	11.14	7.9	三門地区攪乱層
第66図 15 図版67 21	雁首	完	真鍮	13.19	10.35	7.74	6.39	47.30	7.68	5.4	表採
第66図 16 図版67 22	吸口	完	真鍮	6.71	3.37	9.39	8.14	43.76	—	4.7	御照堂地区攪乱層
第66図 17 図版67 23	吸口	完	真鍮	5.10	2.97	8.24	6.74	69.78	—	8.2	仏殿地区攪乱層



第66图 玉·骨製品·貝製品·煙管

第23節 金属製品

1 飾り金具

飾り金具類は総数8点出土した。これらの出土資料は厨子や櫃などの調度品の飾り金具である。線彫りで唐草や牡丹、菊花が描かれ、背景には魚々子を配する。これらは文様の全体構成と魚々子の打ち方によって3種類に大別できる。

I 類：魚々子がまばらに打たれる。そのため僅かな空白部が見られる。

II 類：魚々子が列を成して整然と打たれる。空白部は全く見られない。この種類には魚々子を打ってから線彫りを施すものと線彫りを先に施してから、それにあわせて魚々子を打つものが見られる。

III 類：魚々子が見られない

I 類

第67図1 雲形に象った飾り金具。左右の長さは1.7cm、上下は19cm、厚さは0.2mm、残存量12.1g。銅板に金メッキがなされ、その大きさから厨子若しくは建物高欄の飾り金具と考えられる。文様は輪郭に沿った線彫りの枠内に唐草のみが配される。唐草を描く線彫りは輪郭が太く、内部の葉脈と思われる線は細いといった手法が見られる。魚々子はやや密に打たれるが、規則的ではなく、魚々子同士が切り合う部分も見られる。また、唐草の線彫りによって魚々子が切られる部分も見られる。金具を留めるための鉸の孔が3箇所見られ、うち一方の端部に鉸が打たれた状態で残る。庭園地区攪乱層。

第67図2 銅板製の飾り金具。左右の長さは13.6cm、上下は15.9cm、厚さは0.4mm、残存量79.6gで大きさから厨子の飾り金具と考えられる。牡丹の草花を線彫りで描いており、それに対応するように魚々子が打たれている。金具を留めるための鉸の孔が12箇所見られる。龍淵殿地区攪乱層。

第26図3 銅板製の飾り金具。左側の縦は7.9cm、横は15.7cm、厚さは0.4mm、残存量69.7gで上部が折れ曲がり欠損する。牡丹の草花を線彫りで描いており、それに対応するように大きめの魚々子が打たれている。それらは比較的密に打たれており、一部分において切り合っている魚々子も見られる。側面は部材の角を覆うように折れており、列点唐草文が施される。正面に3箇所、側面に3箇所、金具を留めるための鉸の孔が見られる。龍淵殿地区攪乱層。

II 類

第26図4 雲文を象った飾り金具。左右の長さは13.2cm、上下は33.2cm、厚さは1mm、残存量165.1g。銅板に金メッキがなされ、形状は中国で見られる如意頭形とは異なる独特の如意頭が中央下部に象られる。文様は輪郭に沿った線彫りの枠内に唐草のみが配され、魚々子に関しては唐草によって切られる部分が各所に見られる。金具を留めるための鉸の孔が6箇所見られる。また、上部中央やや右よりに大型の鉸が打たれている。この鉸は芯の一部にも鍍金されていることから、完全に金具表面に打たれるのではなく約1cmほど突出していたと考えられる。このことから後部に残る漆塗りの木材に留めるための鉸ではなく、別の金具を引っかけるための突起であったと考えることができる。また、鉸を打ってある位置から、製品若しくは建物部材の上下に取り付く金具ではなく、左右に取り付くものであるとも推測できる。仮にその用途で使用されていたのであれば調度品の飾り金具以外にその大きさから厨子を飾る正面扉の飾り金具であった可能性を指摘できる。金具を留めてある木材もあわせて残存している。両面に漆が塗られており、背面には金箔が残る。金箔が施されている範囲から草花の蒔絵が施されていたと考えられる。木材の縁は残っていないため、本来の形状は不明である。厚さは12mm。大型の鉸は木材を固定するように先端部は曲げられている。因みに鑿の幅、強度は京都で作られる金工品に類似する。庭園地区攪乱層。

第26図5 両端に如意頭文を象った飾り金具。左右の長さは18.6cm、上下は12.6cm、厚さは0.4mm、銅板に金メッキがなされる。厨子の飾り金具か。文様は線彫りの唐草が配され、魚々子は線彫りによって切られる。金具を留めるための鉸の孔が3箇所、見られる。龍淵殿地区攪乱層。

第26図6 蝶番。上下の最大長は8.5cm、左右の最大長は7.1cm、厚さは芯の部分で4.8cmそれ以外は0.4mm、残存量は37.4g。銅板に金メッキがなされ、文様は輪郭に沿った線彫りの枠内に唐草のみが配され、魚々子に関しては唐草によって切られる部分が各所に見られる。金具を留めるための鉸の孔が6箇所が配置される。形状は木瓜状に近い形と言える。残存量37.6g 庭園地区東西トレンチ第1層。

図版68-5 片端に如意頭文を象った飾り金具。銅製で如意頭を象った部分にのみ文様が施されており、下部には文様は全く見られない。線彫りの唐草が配され、魚々子は線彫りによって切られる。片側は破損している

がその形状から左右対称の金具であったと思われる。推測左右金具を留めるための鉾の孔が2個所見ることができる。厚さ0.7mm、残存量7.5g 表採資料。

III 類

第67図7半裁された菊花が交互に線刻された飾り金具。縦は1.1cm、厚さは0.6mm、残存量3.8g。御照堂地区攪乱層。

2 簪

簪は総数8点出土した。その内、残存状況が良好な資料を以下に記す。

第26図8花、首、ムデイ、竿のからなる。首は6面、竿は4面取りされ、ムデイは螺旋状の陽刻線が見られる。長さ9.9cm、重量17.8g、花卉の最大長2.3cm、最小長1.5cm。龍淵殿地区埴敷き溝内。

第26図9花、首、ムデイ、竿のからなる。首の断面形は不明、ムデイはやや抉りが見られ、竿は4面取りされる。長さ9.4cm、残存量17.7g、花卉の最大長2.5cm、最小長1.4cm。龍淵殿地区埴敷き溝内。

第26図10カブ、首、竿からなる。カブは耳搔き状となり、首の断面は円形になる。竿の断面は長方形となり、同様の断面を呈する長方形で銅製の板が鉾留めされて取り付け。残存量3.4g 鐘楼地区攪乱層。

第26図11カブ、首のみ残存。カブは耳搔き状となるが先端部は破損しているためその全形は伺えない。

首の稜は見られず、断面は正円形に近い形となる。残存長5.8cm、残存量40g。南側門廊基壇造成層。

3 釘

釘は全て鉄製で総数129点出土した。完形品が少なく錆が全体を覆っているため、全形を伺える資料は僅かであった。形態は長いもので25cm以上、短いもので4.8cmと幅が見られた。また頭頂部においては第26図12、13に見られるような平行に成形するもの、同図14、15の斜めに成形するもの、同図16、17のL字状に曲げるもの、同図18のような特殊なものに分類できる。又、先端部が楔状ものと四角錐状のものが見られた。

遺構に伴うものは龍淵殿地区埴敷き溝内、三門地区基壇造成土内から各2点、庭園南北トレンチ第1層、同西側石牆トレンチ第1層、鐘楼地区南側溝内、仏殿地区南側浮道内造成層、龍淵殿地区石積み裏込め石内3、獅子窟地区基壇・石牆間トレンチ第3層から各1点出土している。何れも小破片であったため図化は行わなかった。

4 その他の金属製品

第68図19銅製の伏鉦。鉦鼓の下縁に三脚を付け、その上面を撞木で叩いて鳴らす仏具。表面は2本の陽刻の圏線があり、中央部は凸状にやや盛り上がりが見られる。上面観は直径9.9cmの正円形となり、胴部両側には厚さ2mmの魚型の耳が取り付け、下面に径9mmの三足が溶接されている。類例資料としては首里城跡北殿において出土している。残存量は320g。龍淵殿地区埴敷き溝内。

第68図20環状、真円形の青銅製品。松・竹・梅が陽刻で表裏面に施されている。接合痕と思われる切れ目が一筋、見られる。類例資料が首里城跡廣福門で出土している。残存量13.8g 庫裏地区攪乱層。

第68図21環状の青銅製品。半分が欠損しているが推定直径約4.6cmと考えられ、第68図20とほぼ同じ大きさである。表裏面に陽刻で文様が施されている。残存量は3.1g。鐘楼地区攪乱層。

第68図22環状の青銅製品。断面は直径2.4mmの正円形で全形は3.2cmの正円形を呈する。直径5mmで環を留める金具が付属する。付属する金具は銅製の板を環状にしたものである。残存量は5.5g。鐘楼地区溝1埋土層。

第68図・図版70-5環状の青銅製品。断面は正円形に近く、全形は楕円形を呈する。厚さは3.7mm、端部は0.6mm、残存量は6.4g。庫裏地区攪乱層。

第68図23銅製の釣灯笼の一部。遺品が沖縄県立博物館に所蔵されている(図版4)。亀甲状の透かし彫りをモチーフにした窓飾りの一部であり、象られた亀甲の上下は12.6cm、左右は9.4cm、残存量は0.7g。表採資料。

第68図24扁額を固定した金具(参考資料、図版5)、残存長は15.4cm、幅4.0cm、厚さ1.7mm、残存量は112.6g。蓮葉を象った部分と柄とに分かれ、その接続部は「く」の字状に折れる。柄には孔が一つ穿たれる。柄の先端部は欠損する。崇元寺で同様の資料が確認されている。仏殿-鐘楼浮道遺構埋土。



図版4 円覚寺 釣灯笼 沖縄県教育委員会
「旧円覚寺美術工芸関係資料調査報告書」1999

第68図25蛇行状の鉄製短剣。先端部は欠損するがほぼ完形に近い。身は無文であるが、関から身にかけて両面に稜が見られる。残存長28.7cm、幅は6.5mm、残存量は112.6gで、身は25.7cm、茎は3cmほどで細い。関近くの棟に孔が穿たれている。インドネシアで祭祀の際に使用される「クリス」と呼ばれる短剣に類似する。龍淵殿地区埴敷き溝内。

第68図26引手。上下7.5cm、左右2.3cm、残存量3.8g。表面は燻べ仕上げが成されていると考えられる。龍淵殿地区埴敷き溝内。

第68図27引手。留金部には漆が付着した木片が残っている。留金を隠すための金具は菊葉と菊花があしらわれている。キャビネット状の製品に付属する引手か。残存量は41.9g。井戸地区攪乱層。

第68図28錫製の小杯か。口縁部は外反し、胴下部に突起が見られる。突起は約1cmほどで左右に付属している。錫板を環状にしたものを本体に溶接して高台としている。残存量59.1g 龍淵殿地区埴敷き溝内。

図版70-8 用途不明の銅製板。端部が欠損してその全形を伺うことはできないが、もう一方の端部は魚尾状となっている。その大きさと形状から扉等に付属する入八双金具か。残存量は41.9g。仏殿地区攪乱層。(参考資料、図版6)

図版70-9 青銅製板状製品の小片。長方形の板状製品と思われるが欠損しているためその全形を伺うことはできない。取り付けるための孔が4つ穿たれている。残存量は11.6g。仏殿地区攪乱層。

図版70-1 座金具。厚みは1.1mm、直径は2.5cmで中央には一辺5mmの孔が見られ、片面のみ縁には刻みが見られる。残存量は3.4g。井戸地区攪乱層。

図版70-7 鍋や薬缶の鈎部か。全体的に大きな弧を描き、両端部分はU字状に湾曲している。残存量は62.1g。庭園地区攪乱層。

図版70-6 青銅製の把手。断面形が方形の青銅製の棒を雲文状に象っている。両端には留め釘が付属している。調度品の把手か。残存量は8.5g。表採資料。

第68図29 把手の付く円形青銅製板。直径5.0cm、厚さ0.4mmの銅板に円弧状の把手が付く。蓋か。残存量は8.5g。石積み3埋土層。

第68図30 鉄製の錠。断面形は方形で全形はコの字を呈する。残存端部から約3.5cmの所に厚さ2mmの板状鉄製品が付属する。残存量は3.8g。井戸地区攪乱層。

第68図31 鉄製の錠。断面形は長方形で端部から3.6cmの所を90°に屈曲させる。仏殿地区攪乱層。

第68図32 青銅製の錠。木材に留めるためか端部に3回の折り返しが見られる。両端部は緩やかに幅が狭まり尖る。断面形は長方形となる。残存量は3.0g。獅子窟地区攪乱層。

図版70-4 青銅製板状製品。両端部は丸みを帯び、小釘が打たれている。幅1mm裏面が縁に沿って陰刻線が走る以外には文様は見られない。残存量は、27.5g。庫裏地区攪乱層。

第68図33 青銅製板状製品の小片。口唇部が面取りされた縁が見られるが小片のため、全形を伺うことはできない。最大厚6mmで、文様等は見られない。井戸地区攪乱層。

図版70-2 切子頭。青銅製で青錆に覆われるが、金箔が頭部分に僅かに残る。全長2.9cm。井戸地区攪乱層。

第68図34 軍配の青銅製装飾品。縁起物とされる、宝尽くしを構成する装飾品の一部と考えられる。裏側は空洞となる。残存量は6.5g。鐘楼地区攪乱層。

図版70-3 青銅製の鈎。全長約2.4cmで断面形は方形を呈する。頭部分には、金箔が残る。御照堂地区攪乱層。

第68図35 木片に青銅製の鈎が2つ取り付く。頭は円形で丸みを帯びながら大きく盛り上がる。残存量は7.7g。龍淵殿地区方形石積み内出土。

第68図36 青銅製の鑿子。口径31.1cm、高さ22cm、ベタ底で口縁部は直口する。全体に青錆が覆い、底部が一部欠損するが、ほぼ完形である。内面に一辺約2~3cm画で「天界寺」と陽刻される以外は文様は見られない。残存量は約740g。表採資料。

第68図37 青銅製の鈎の頭部分。一部欠損しているものの、上面観は直径1cm正円形に近く、金箔が頭部分に僅かに残る。芯の部分が一部残存する。残存量は1.1g。鐘楼南側溝内。

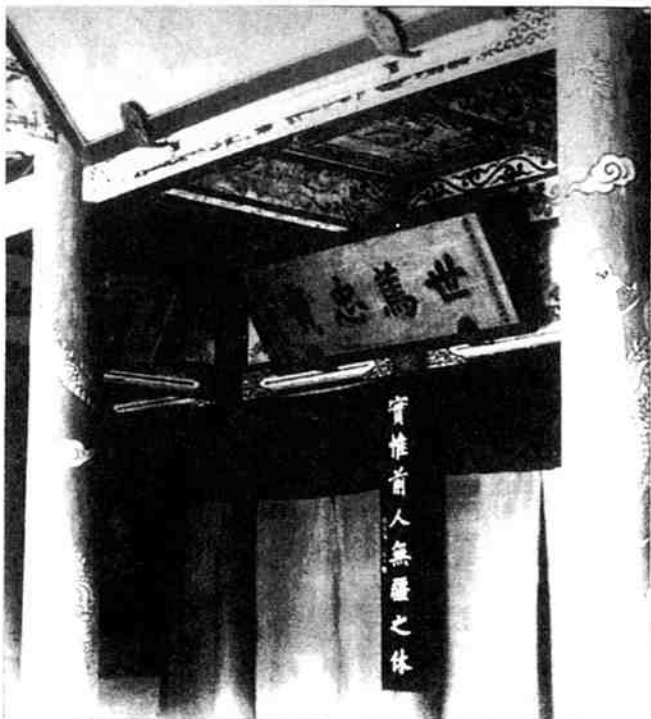
第68図38 青銅製の座と思われるが、詳細は不明。上面観は直径1.8cmの正円形に近く、中央に直径4mmの円形の孔が見られる。残存量は0.9g。鐘楼南側溝内。

第68図39 鉄製の錠。残存長23.1cmで、断面形は長方形で端部から約7cmの所を約70°に屈曲させる。残存量は2.9g。鐘楼南側溝内。

第68図40青銅製の針状製品。残存長は4.4cmで、一方の端部は尖り、もう一方の端部は厚さ0.9mmの板状となる。残存量は0.7g。東西トレンチ第1層。

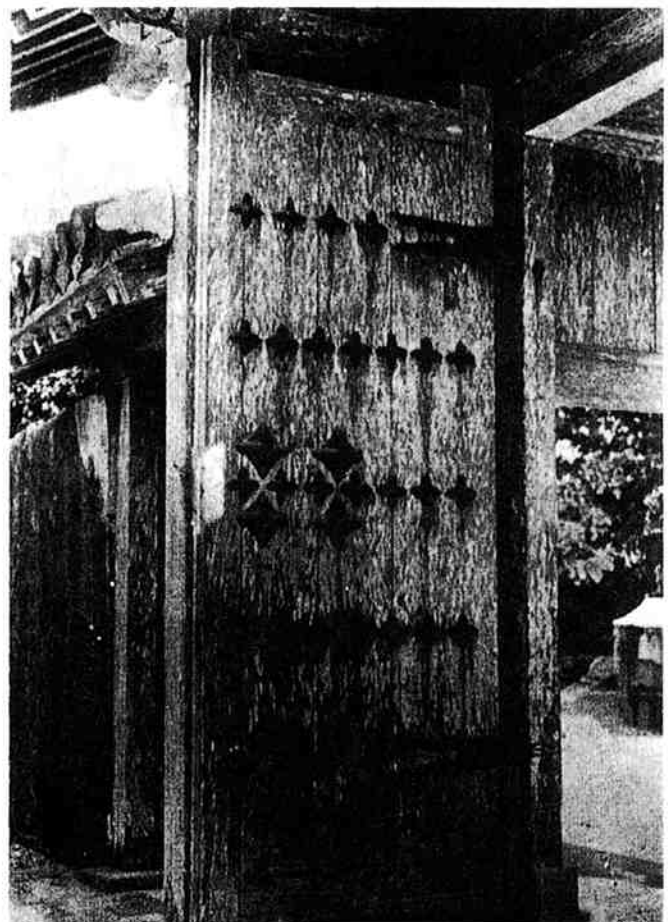
第46表 釘出土状況一覧

種類	断面形	出土地区	御照堂 地区	獅子窟 地区	仏殿 地区	三門 地区	鐘楼 地区	龍淵殿 地区	庫裏 地区	井戸 地区	庭園 地区	左脇門 地区	表探	地区 不明	合計
		器種													
角釘	長方形	鉄	7	7	18		1	7		4			3		47
	長方形	銅						2							2
	正方形	鉄		3	1			2	1	1			2		10
丸釘 (近代)	丸形	鉄						1			2				3
笠釘	正方形	銅	1												1
合計			8	10	19	0	1	12	1	5	2	0	5	0	63



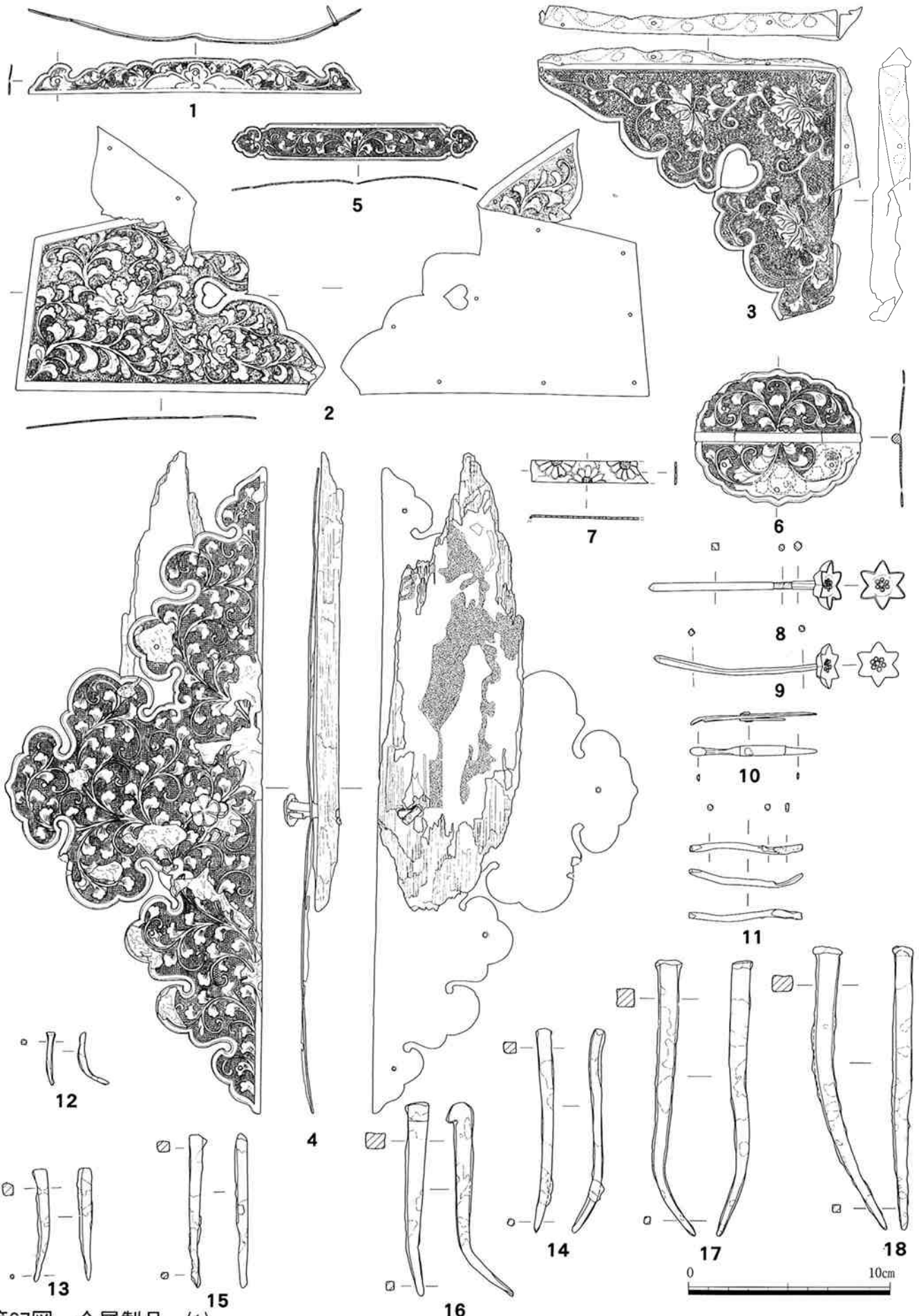
図版5 崇元寺正廟（本殿）内部

『写真集 沖縄』那覇出版社 1996

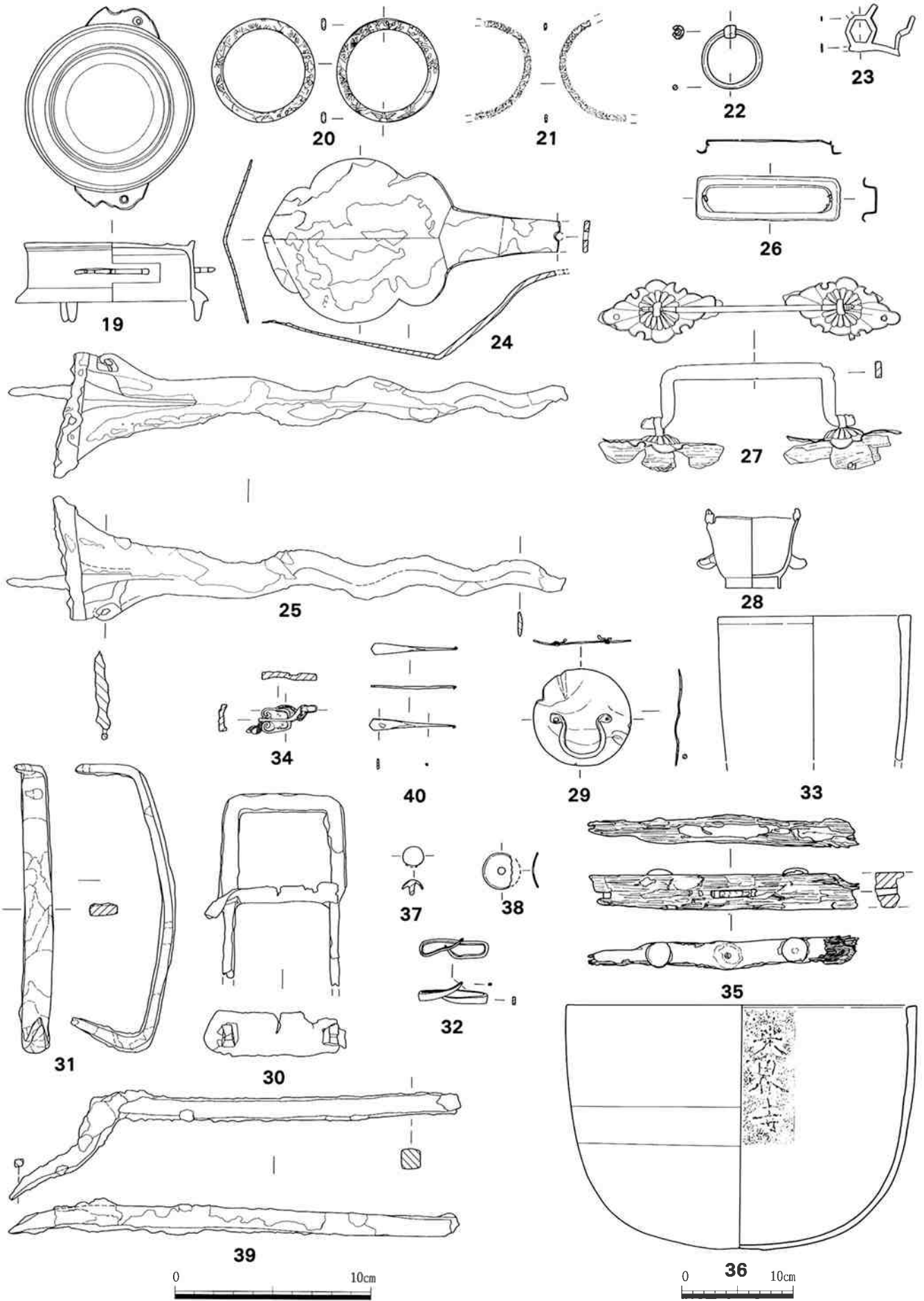


図版6 表門・扉・尚候爵邸

『琉球遺宝史』成章館 1972



第67図 金属製品 (1)



第68図 金属製品 (2)

第24節 錢貨

錢貨は総計104点が出土している。内訳は近世以前の有文銭が28点、無文銭が21点、近・現代銭が33点、不明が22点であった。最も古いものは開元通寶（初鑄960年）で新しいものでは近現代銭が確認された。全体の約8割は攪乱層並びに表採資料である。遺構に伴うものでは龍淵殿西側基壇裏込め内からは開元通寶、洪武通寶各1枚、寛永通寶（I期寛永銭）2枚、無文銭4枚、判読不明2枚と特に多く出土している。

第47表 錢貨法量一覧 (1)

(mm, g)

挿 番 号	図 号	計測 番号	貨幣名	時代	初鑄年	書体	法 量				背 文	残存率 (%)	出 土 地 点	備 考
							外径	内径	厚さ	重さ				
第69図 図版71	1	1	開元通寶	五代	960	真書	23.9	6.6	1.5	3.6	—	90	龍淵殿地区東側基壇造成土内	
第69図 図版71	2	90	嘉裕通寶	北宋	1056	篆書	24.6	7.1	1.0	2.7		100	庭園東西トレンチ第1層	
第69図 図版71	3	2	熙寧元寶	北宋	1068	真書	23.8	6.5	1.2	2.9	—	100	表採	
第69図 図版71	4	3	熙寧元寶	北宋	1068	篆書	23.6	6.4	1.3	3.5	—	100	獅子窟地区基壇石牆間第3層	
第69図 図版71	5	4	紹聖通寶	北宋	1094	行書	24.3	6.2	1.1	2.7	—	100	表採	
第69図 図版71	6	5	紹定通寶	南宋	1228	真書	23.5	6.6	1.4	2.9		100	鐘楼地区溝1埋土層	
第69図 図版71	7	6	洪武通寶	明	1368	真書	23.5	5.7	1.6	3.2	六	100	龍淵殿地区西側基壇裏込め石内	
第69図 図版71	8	7	永樂通寶	明	1408	真書	26.4	5.9	1.6	4.4	治?	100	鐘楼地区攪乱層	加治木銭か
第69図 図版71	9	89	乾隆通寶	清	1736	楷書	18.5	5.3	0.7	0.9		95	三門地区攪乱層	
第69図 図版71	10	8	道光通寶	清	1821	真書	21.8	6.3	1.9	3.1	満文有り	90	龍淵殿地区埵敷溝内	工部鑄
第69図 図版71	12	9	寛永通寶	江戸	1636~59	楷書	24.2	24.0	5.5	3.6	—	100	龍淵殿地区西側基壇裏込め石内	I期寛永銭
第69図 図版71	12	10	寛永通寶	江戸	1636~59	楷書	24.1	5.4	1.5	2.6	—	100	龍淵殿地区西側基壇裏込め石内	I期寛永銭
第69図 図版71	13	11	寛永通寶	江戸	1636~59	楷書	24.6	5.5	1.1	2.9	—	90	表採	I期寛永銭
第69図 図版71	14	12	寛永通寶	江戸	1636~59	楷書	24.5	6.1	1.3	3.5	—	100	三門地区基壇造成層	I期寛永銭
第69図 図版71	15	13	寛永通寶	江戸	1668~83	楷書	25.3	5.6	1.2	3.5	文	100	表採	II期寛永銭
第69図 図版71	16	14	寛永通寶	江戸	1697~1781	楷書	23.3	6.2	1.4	2.3	—	100	三門地区基壇造成層	III期寛永銭
第69図 図版71	17	15	寛永通寶	江戸	1697~1781	楷書	23.7	6.2	1.1	1.9	—	100	龍淵殿地区トイレ状遺構内埋土層	III期寛永銭
第69図 図版71	18	16	寛永通寶	江戸	1697~1781	楷書	—	—	1.3	1.8	—	100	三門地区基壇造成層	III期寛永銭
第69図 図版71	19	21	無文銭	—	—	—	21.0	8.4	1.4	1.8	—	100	龍淵殿地区埵敷溝内	
第69図 図版71	20	54	無文銭	—	—	—	19.9	8.5	0.7	1.2	—	100	龍淵殿地区西側基壇裏込め石内	
第69図 図版71	21	17	無文銭	—	—	—	21.3	7.6	0.7	1.0	—	100	龍淵殿地区西側基壇裏込め石内	
第69図 図版71	22	52	無文銭	—	—	—	15.9	7.1	0.8	0.6	—	100	表採	
第69図 図版71	23	97	輪 銭	—	—	—	10.3	6.6	0.4	0.1	—	100	龍淵殿地区石積み4確認トレンチ第7層	
第69図 図版71	24	98	輪 銭	—	—	—	7.5	5.3	0.4	0.1	—	100	龍淵殿地区攪乱層	
第69図 図版71	25	99	輪 銭	—	—	—	10.0	6.9	0.6	0.1	—	100	龍淵殿地区攪乱層	
第69図 図版71	26	100	輪 銭	—	—	—	11.1	5.2	0.7	0.4	—	100	鐘楼地区攪乱層	
図版71	27	23	五 銭	明治21	—	—	20.5	—	1.9	4.3		100	御照堂地区攪乱層	銅貨
図版71	28	24	十 銭	明治28	—	—	18.2	—	1.2	2.5		100	御照堂地区攪乱層	銅貨
図版71	29	25	十 銭	大正	—	—	22.1	4.4	1.5	3.5		100	鐘楼地区攪乱層	ニッケル貨
図版71	30	26	一 銭	大正13	—	—	23.0	—	1.3	3.6		100	御照堂地区攪乱層	銅貨
図版71	31	27	十 銭	昭和15	—	—	21.9	—	1.8	1.6		100	仏殿地区攪乱層	アルミ貨、熱で変形
図版71	32	28	一 銭	昭和16	—	—	16.0	—	1.5	0.7		100	表採	アルミ貨
—	—	75	洪武通寶	明	—	楷書	—	—	—	2.0		50	鐘楼地区攪乱層	
—	—	42	寛永通寶	—	1697~1781	—	—	—	0.9	0.9		70	表採	III期寛永銭
—	—	43	寛永通寶	—	1697~1781	楷書	24.3	6.3	1.3	3.3		100	井戸地区攪乱層	III期寛永銭
—	—	44	寛永通寶	—	1697~1781	楷書	—	—	1.3	1.5		50	龍淵殿地区攪乱層	III期寛永銭

第48表 錢貨法量一覽 (2)

(cm, g)

挿 番 号	計測 番号	貨幣名	時代	初 鑄 年	書体	法 量				背 文	残存率 (%)	出 土 地 点	備 考
						外径	内径	厚さ	重さ				
-	45	寛永通寶	-	1636~59	楷書	25.3	5.8	1.0	2.8		100	仏殿地区攪乱層	I期寛永銭
-	46	寛永通寶	-	1636~59	楷書	24.4	5.5	1.3	3.5		100	井戸地区攪乱層	I期寛永銭
-	47	寛永通寶	-	1697~1781	楷書	23.4	6.3	1.0	2.0		100	龍淵殿地区攪乱層	III期寛永銭
-	48	寛永通寶	-	1697~1781	楷書	24.4	6.1	1.1	2.9		100	龍淵殿地区石列4埋土層	III期寛永銭
-	49	寛永通寶	-	1636~59	楷書	24.6	5.7	1.3	2.7		100	御照堂地区攪乱層	I期寛永銭
-	50	寛永通寶	-	1636~59	楷書	24.0	5.7	1.2	3.3		100	仏殿地区攪乱層	I期寛永銭
-	65	寛永通寶	明治18	-	-	22.2	-	1.3	3.3		100	龍淵殿地区西側基壇裏込め石埋土層	銅貨
-	66	半 銭	昭和16	-	-	16.0	-	1.6	0.7		100	御照堂地区攪乱層	アルミ貨
-	36	一 銭	大正5	-	-	23.1	-	1.2	3.6		100	表採	銅貨
-	32	一 銭	大正7	-	-	23.0	-	1.2	3.5		100	獅子窟地区攪乱層	銅貨
-	30	一 銭	大正8	-	-	23.2	-	1.3	3.7		100	表採	アルミ貨、熱で変形
-	76	一 銭	大正9	-	-	23.2	-	1.2	3.4		100	御照銅地区攪乱層	銅貨
-	61	一 銭	大正11	-	-	23.2	-	1.3	3.5		100	龍淵殿地区攪乱層	銅貨
-	64	一 銭	大正11	-	-	23.0	-	1.3	3.7		100	龍淵殿地区攪乱層	銅貨
-	72	一 銭	大正11	-	-	23.3	-	1.5	3.7		100	獅子窟地区攪乱層	銅貨
-	62	一 銭	大正12	-	-	23.1	-	1.4	3.7		100	獅子窟地区石列5埋土層	銅貨
-	63	一 銭	大正12	-	-	23.4	-	1.7	3.8		100	獅子窟地区石列5埋土層	銅貨
-	35	一 銭	大正12	-	-	22.9	-	1.3	3.5		100	表採	銅貨
-	33	一 銭	昭和7	-	-	23.1	-	1.4	3.6		100	庫裏内埋土	銅貨
-	29	一 銭	昭和9	-	-	23.1	-	1.4	3.6		100	獅子窟地区攪乱層	銅貨
-	58	一 銭	昭和10	-	-	23.1	-	1.4	3.6		100	御照堂地区攪乱層	銅貨
-	70	一 銭	昭和11	-	-	22.9	-	1.3	3.6		100	獅子窟地区攪乱層	銅貨
-	37	一 銭	昭和13	-	-	23.0	-	1.3	3.6		100	獅子窟地区攪乱層	銅貨
-	34	五 銭	昭和14	-	-	19.0	3.8	1.4	2.7		100	表採	黄銅貨
-	31	十 銭	昭和15	-	-	21.9	-	1.8	1.5		100	鐘楼地区溝1埋土層	アルミ貨
-	68	一 銭	昭和	-	-	16.0	-	1.5	0.6		100	獅子窟地区攪乱層	アルミ貨
-	38	十 円	昭和48	-	-	23.5	-	1.5	4.4		100	三門地区攪乱層	銅貨
-	39	十 円	昭和60	-	-	23.5	-	1.5	4.4		100	三門地区攪乱層	銅貨
-	40	一 銭	-	-	-	23.3	-	1.3	3.7		100	庫裏トイレ状遺構内埋土	銅貨
-	41	一 銭	-	-	-	23.2	-	1.5	3.7		100	庫裏トイレ状遺構内埋土	銅貨
-	69	判読不明	-	-	-	17.5	-	1.5	0.8		100	獅子窟地区攪乱層	アルミ貨、近代銭
-	22	無文銭	-	-	-	18.0	8.6	0.5	0.6	-	100	龍淵殿地区攪乱層	
-	18	無文銭	-	-	-	21.6	8.0	1.2	2.3	-	100	攪乱層	
-	19	無文銭	-	-	-	20.0	7.2	.7	0.9	-	100	攪乱層	
-	20	無文銭	-	-	-	20.1	7.2	0.6	1.1	-	100	攪乱層	
-	51	無文銭	-	-	-	20.7	7.5	0.7	1.0	-	100	表採	
-	53	無文銭	-	-	-	17.3	7.9	0.7	0.9	-	100	仏殿地区攪乱層	
-	55	無文銭	-	-	-	18.9	7.3	0.6	1.0	-	100	龍淵殿地区西側基壇裏込め石内	
-	56	無文銭	-	-	-	20.1	8.7	1.1	1.3	-	100	井戸地区攪乱層	
-	57	無文銭	-	-	-	-	-	0.3	0.3	-	70	龍淵殿地区西側基壇裏込め石内	
-	88	無文銭	-	-	-	-	-	0.9	0.7	-	70	表採	
-	101	輪 銭	-	-	-	11.6	6.4	0.4	0.1	-		表採	
-	86	輪 銭	-	-	-	-	-	1.0	0.5	-	50	御照堂地区攪乱層	
-	59	判読不明	-	-	-	22.3	-	1.0	3.0		100	表採	判読不明、銅貨
-	60	判読不明	-	-	-	21.8	-	1.1	3.1		100	鐘楼地区溝1埋土層	解読不明、銅貨
-	67	判読不明	-	-	-	22.0	-	1.1	3.1		100	御照堂地区攪乱層	判読不明
-	71	判読不明	-	-	-	23.5	-	1.8	3.8		100	獅子窟地区攪乱層	
-	73	判読不明	-	-	-	27.7	-	1.4	6.1		100	獅子窟地区攪乱層	判読不明
-	74	判読不明	-	-	-	19.1	-	1.5	3.0		100	表採	セント貨か
-	77	判読不明	-	-	-	18.9	-	1.0	1.8		100	御照堂地区攪乱層	
-	78	判読不明	-	-	-	-	-	1.6	1.3		50	仏殿地区攪乱層	
-	79	判読不明	-	-	-	-	-	0.9	1.1		50	表採	
-	80	判読不明	-	-	-	-	-	0.9	1.6		90	獅子窟地区基壇・石牆間第2層	
-	81	判読不明	-	-	-	-	-	1.4	0.8		25	龍淵殿地区西側基壇裏込め石内	
-	82	判読不明	-	-	-	-	-	0.8	0.5		50	表採	
-	83	判読不明	-	-	-	-	-	1.1	0.4		100	獅子窟地区攪乱層	
-	84	判読不明	-	-	-	-	-	0.6	0.2		20	龍淵殿地区西側基壇裏込め石内	
-	85	判読不明	-	-	-	-	-	1.0	1.1		70	表採	
-	87	判読不明	-	-	-	-	-	1.0	1.7		80	龍淵殿南側基壇埋土	
-	91	判読不明	-	-	-	-	-	7.3	1.0		95	龍淵殿地区攪乱層	
-	92	判読不明	-	-	-	21.4	7.1	1.0	1.7		100	井戸地区攪乱層	
-	93	判読不明	-	-	-	21.8	-	1.0	1.5		90	御照堂地区攪乱層	
-	94	判読不明	-	-	-	20.2	6.7	0.8	1.3		100	御照堂地区攪乱層	
-	95	判読不明	-	-	-	21.0	-	0.9	1.6		10	表採	
-	96	判読不明	-	-	-	-	-	0.9	1.6		100	獅子窟攪乱層	
-	102	無文銭	-	-	-	21.0	7.0	0.5	2.1		100	井戸地区攪乱層	
-	103	十 円	-	-	-	23.5	-	1.5	4.4		100	井戸地区攪乱層	
-	104	1セント	-	-	-	19.0	-	1.5	3.1		100	井戸地区攪乱層	

第25節 木製品・漆製品 (第70図・図版72)

木彫製品、建築装飾部材片、建材片、漆製品が48点出土している。第70図6は蓮のつぼみを彫刻した常花である。金色に彩色されている。1～3、5に示したものは透かしの木彫片であるが戦前の古写真資料から龍淵殿扉透彫の一部と思われる。1、2は唐草、3は牡丹の花びらの一部と思われる。5は花文が彫刻され表面に彩色している。裏面が剥離するなど残存状態が悪いことからどのような性質の製品であったかは不明。4はくり貫きで作られた、小型な箱形状の製品である。材質が炭化している上ひびなどで器表面状態が悪く、本来なんらかの塗りがされていたものか、不明である。

巻首図版6-6～8に示した漆製品は素地である木製部分を殆ど残さず、漆部分のみが剥落し残ったものである。製品の形態など詳細は不明。7は黒漆で盆及び櫃などの内面に施されていたものと考えられ、円形の底面から筒状に立ち上がっている。8は黒漆に金箔を施し、6は赤茶の漆に金箔を施している。いずれも残存状態が悪く文様など詳細は不明である。また6は器の頸部様の立ち上がりが認められる。図版72-9は朱漆に七宝繫の沈金を施すものである。同図版10は黒漆に草文の箔絵を施したものと考えられる。

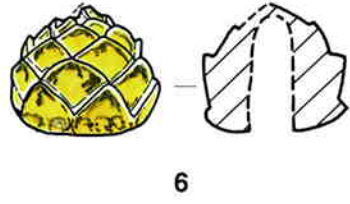
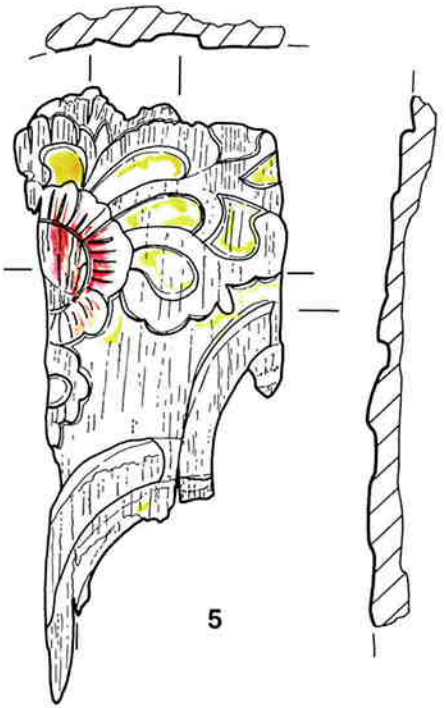
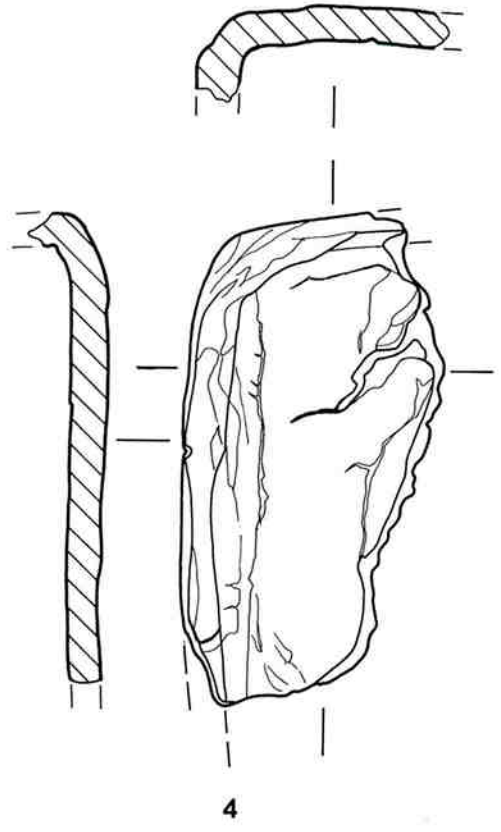
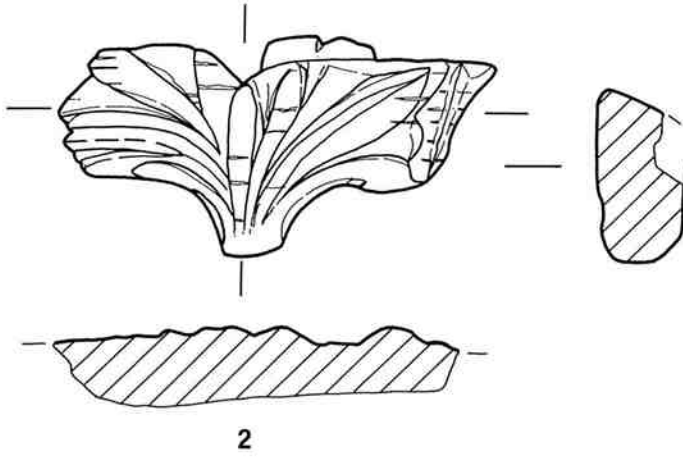
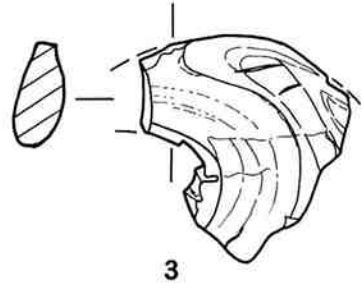
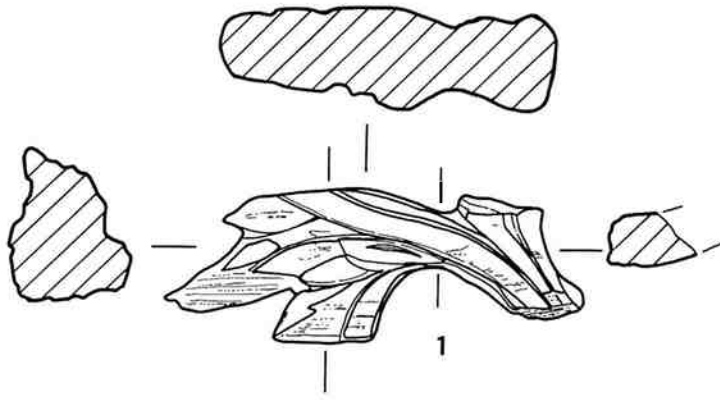
<参考文献>

沖縄県教育委員会「旧円覚寺美術工芸関係資料調査報告」『沖縄県文化財調査報告書』第140集 1999

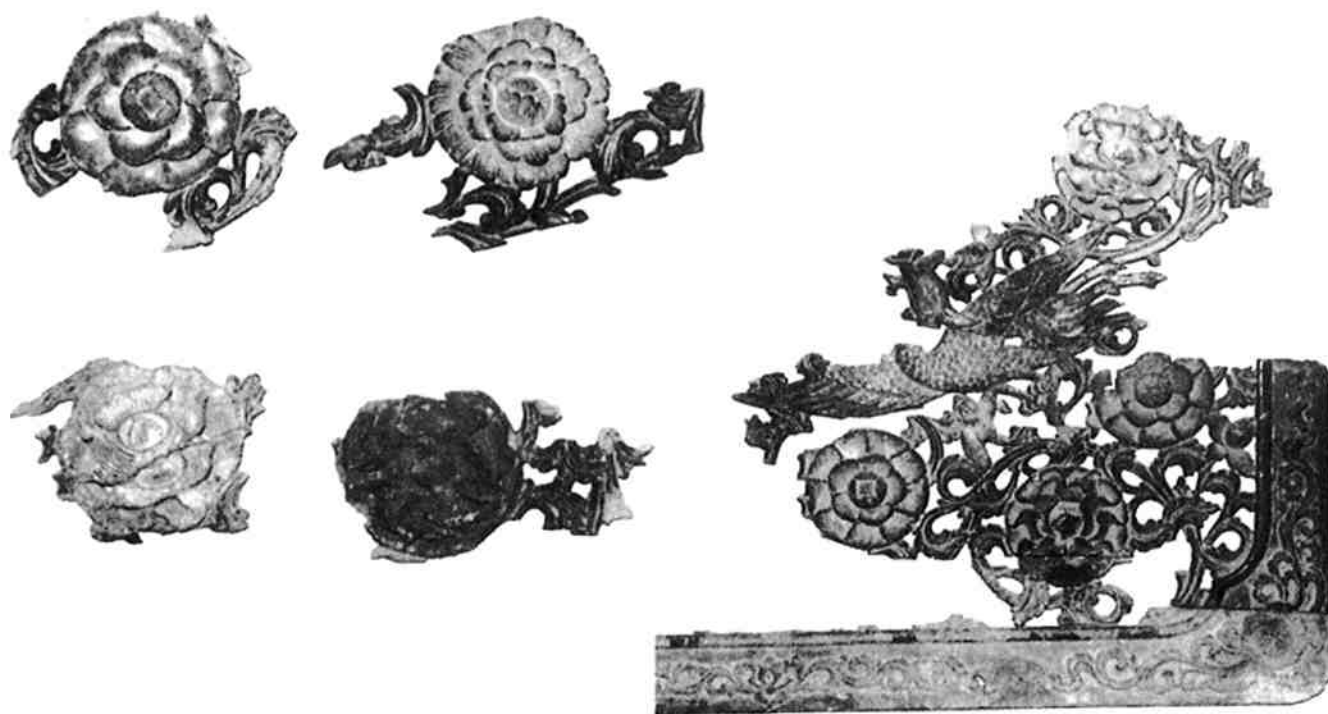
第49表 木製品・漆製品観察一覧

挿図番号 図版番号	器種	備考	出土地点
第70図 図版72 1	木彫	透彫	表採
第70図 図版72 2	木彫	透彫	井戸地区攪乱層
第70図 図版72 3	木彫	透彫	表採
第70図 図版72 5	木彫	色彩	井戸地区攪乱層
第70図 図版72 6	木彫	常花	表採
第70図 図版72 4	箱型製品	炭化	左脇門地区攪乱層
—	木片	炭化 建材?	御照堂地区攪乱層
—	木片	炭化 自然物か加工品か不明	龍淵殿地区攪乱層
—	木片		御照堂地区攪乱層
—	木片	被熱	獅子窟地区攪乱層
—	木片	炭化	庫裏地区攪乱層
—	木片	炭化	龍淵殿地区攪乱層
—	木片	炭化	龍淵殿地区攪乱層
—	木片	炭化	龍淵殿地区攪乱層
—	木片	被熱	龍淵殿地区攪乱層
—	木片	(建材?) 表面炭化	御照堂地区攪乱層
—	木片	炭化	庫裏地区攪乱層
—	木片	建材? 角あり	御照堂地区攪乱層
—	木片	炭化	井戸地区攪乱層
—	木片	炭化	左脇門地区攪乱層
—	木片	炭化	御照堂地区攪乱層
—	木片	建材?	仏殿地区攪乱層
—	木片		龍淵殿地区攪乱層
図版72 7	木片	飾り金具が取り付けられた痕跡を残す	龍北側庭園攪乱層

挿図番号	器種	備考	出土地点
—	板片	被熱	井戸地区攪乱層
—	木片	炭化	表採
—	木片	炭化	井戸地区攪乱層
—	板片	調度品	龍淵殿地区攪乱層
—	木片	笠鉾2有り	龍淵殿地区攪乱層
—	漆製品	両面漆	龍淵殿地区攪乱層
—	漆製品	片面漆	龍淵殿地区攪乱層
—	木片	笠鉾2有り	龍淵殿地区攪乱層
—	漆製品	笠鉾2有り	龍淵殿地区攪乱層
—	漆製品	角有り、金箔有	龍淵殿地区攪乱層
—	漆製品	ゆるやかに曲がる	龍淵殿地区攪乱層
—	漆製品	片面漆	龍淵殿地区攪乱層
—	木片		庫裏地区攪乱層
—	木片	鉾足2本有り	庫裏地区攪乱層
—	漆製品	両面漆	庫裏地区攪乱層
—	漆製品	4面に漆	庫裏地区攪乱層
—	漆製品	4面に漆	庫裏地区攪乱層
—	木片	鉾足2本有り	庫裏地区攪乱層
—	漆製品	片面漆	庫裏地区攪乱層
—	漆製品	片面漆	庫裏地区攪乱層
—	漆製品	両面漆	庫裏地区攪乱層
—	木片	笠鉾5、柄穴2	庫裏地区攪乱層
図版72 8	木片	笠鉾3有り	井戸地区攪乱層
図版72 9	漆製品	両面漆	龍淵殿地区方形石積み埋土層



第70図 木製品



図版 7 上：龍淵殿扉透彫『琉球遺宝史』成章館 1972
 下：左・牡丹文透彫 右・羽目板杵（牡丹鳳凰文）部分
 沖縄県教育委員会「旧円覚寺美術工芸関係資料調査報告書」1999

第26節 貝類遺存体

第50表 貝類出土状況 (巻貝)

番号	科名	種名	出土地区			御照堂地区			獅子窟地区			仏殿地区			三門地区			鐘楼地区			龍淵殿地区			庫裏地区			井戸地区			庭園地区			左脇門地区			表 採			出土地不明			合 計							
			完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片	完形	殻頂	破片								
1	ニシキウズ科	ニシキウズ																1																						0	0	1							
2		サラサバテイラ														5																									0	0	10						
3		ギンタカハマ																																								0	0	1					
4	リュウテン科	ヤコウガイ		1	8			8				1	27			2					1	2							2	14			3			1			0	5	65								
5		ヤコウガイ (蓋)			3			1				3	1					1	1	2			1				1	8	1		3	1	2							3	8	18							
6		チョウセンサザエ										1	4								1							3	4	2											4	9	2						
7		チョウセンサザエ (蓋)	2					1												2												2									6	1	0						
8	オニツツノガイ科	オニツツノガイ																																								0	0	1					
9		クワノミカニモリ	1																																								1	0	1				
10	スイショウガイ科	スイジガイ																																										0	0	1			
11		スイショウガイ						2																																				1	0	3			
12	ソデボラ科	オハグロガイ	1									1																																3	0	0			
13		マガキガイ	1								1	1	1																															2	5	1			
14		クモガイ													4																														0	0	5		
15		ソデボラ科不明		1																																									0	1	0		
16	タカラガイ科	ホンサバダカラ																																											1	0	0		
17		ホソヤクシマダカラ																																												1	0	0	
18		コモンダカラ																																											1	0	0		
19		ハナマルユキ	3									1																																	9	0	0		
20		ハナビラダカラ																																												2	0	0	
21		ホシキヌタ																																												1	0	0	
22		タカラガイ科不明																																												0	0	1	
23	タマガイ科	リスガイ																																												1	0	0	
24	フジツガイ科	ホラガイ																																												0	0	2	
25	アクキガイ科	ツノレイシガイ										1																																		1	0	0	
26		ホネガイの一種			1			1																																						0	0	2	
27	イモガイ科	ヤキイモ						1																																						1	0	0	
28		カバミナシガイ																																													1	0	1
29		ヤナギシボリイモガイ																																													0	0	1
30		アジロイモ																																													1	1	0
31	ヤマタニシ科	オキナワヤマタニシ																																												1	0	0	
32	アフリカマイマイ科	アフリカマイマイ																																													1	1	2
33	オナジマイマイ科	オキナワウスカワマイマイ																																													1	0	1
34	巻貝科不明																																														0	0	2
合 計			8	2	12	1	2	13	1	1	2	7	9	38	1	0	4	7	1	3	4	3	6	1	0	1	0	1	9	6	10	25	6	2	7	0	0	1	42	31	121								

第27節 節足・脊椎動物遺存体

第52表 サカナ出土一覧

科、部位		出土地区		不明	合計		
		仏殿地区	三門地区		右	左	不明
	脊椎	1		1	0	0	2
ハマフェフキ	口蓋		1		0	1	0
合計		1	1	1	0	1	2

第54表 イヌ出土一覧

部位	出土地区	個数
中手骨	御照堂地区	1

第56表 ヤギ出土一覧

部位		御照堂地区		仏殿地区		三門地区	鐘楼地区	出土不明	合計		
		右	左	左	不明				右	左	不明
上顎骨	M2			1					0	1	0
下顎骨	M1						1		0	1	0
尺骨	骨体							1	0	0	1
脛骨	骨体	1							1	0	0
	遠位部					1	1		1	1	0
寛骨	坐骨		1						0	1	0
中足骨	遠位部(幼)				1				0	0	1
合計		1	1	1	1	1	2	1	2	4	2

第57表 ブタ出土一覧

部位		御照堂地区		獅子窟地区		仏殿地区			鐘楼地区	龍淵殿地区		井戸地区	合計		
		右	左	右	左	右	左	不明	右	右	不明	左	右	左	不明
頭蓋骨	頬骨突起		1										0	1	0
椎体	胸椎									1			0	0	1
上腕骨	骨体～遠位部			1									1	0	0
橈骨	近位部											1	0	1	0
尺骨	近位部～骨体					1							1	0	0
中手骨	Ⅲ						1						0	1	0
寛骨	臼部～坐骨			1									0	1	0
大腿骨	骨体片									1			0	0	1
	遠位骨端のみ									1			1	0	0
脛骨	近位部～遠位部 骨端はずれ						1						0	0	1
	骨体	1											1	0	0
	骨体(キズあり)								1				1	0	0
	遠位骨端はずれ					1							0	1	0
中足骨	Ⅳ						1						0	1	0
合計		1	1	1	1	1	3	1	1	1	2	1	5	6	3

第58表 種不明(イノシシ or ブタ) 出土一覧

部位		御照堂地区	獅子窟地区	仏殿地区	鐘楼地区	龍淵殿地区	庫裏地区	井戸地区	左脇門地区		出土不明	合計		
		不明	右	不明	左	不明	右	左	左	不明	左	右	左	不明
助骨	破片	1		1		4				1		0	0	7
上腕骨	骨体片							1				0	1	0
	破片			1								0	0	1
橈骨	骨体						1					1	0	0
脛骨	骨体		1		1							1	1	0
	破片								1		1	0	2	0
合計		1	1	2	1	4	1	1	1	1	1	2	4	8

第53表 ニワトリ・トリ出土一覧

種類	部位		右/左	出土地区	個数
	中手骨	完形			
ニワトリ	大腿骨	近位部	右	御照堂地区	1
	大腿骨	遠位部	右	仏殿地区	1
	脛骨	近位部～遠位端	右	左脇門地区	1
トリ	脛骨	骨体	左	龍淵殿地区	1
		破片		御照堂地区	3

第55表 ネコ出土一覧

部位	出土地区	右/左	個数
尺骨	井戸地区	左	1

第59表 ウマ出土一覧

科、部位		出土地区		三門地区			龍淵殿地区			庫裏地区			左脇門地区			表採			出土不明			合計		
		獅子窟地区	仏殿地区	不明	右	右	左	不明	右	左	不明	右	左	不明	不明	不明	右	左	不明	右	左	不明		
上顎骨	M1 or 2		1																1	0	0			
	M1 or 2														1				0	1	0			
下顎骨	P3														1				1	0	0			
上顎骨	破片															1			0	1	0			
椎体	頸椎			<1>															0	0	1			
	頸椎破片			1															0	0	1			
	胸椎															1			0	0	1			
	尾椎							1											0	0	1			
	棘突起			1															0	0	1			
肋骨	破片												3						0	0	3			
肩甲骨	遠位端		1																1	0	0			
上腕骨	骨体破片				1														1	0	0			
橈骨	完形		1																1	0	0			
橈側手根骨																		1	0	0	1			
中手骨	近位端破片														1				1	0	0			
小中手骨				1									4						0	0	5			
大腿骨	骨体～遠位端		1																1	0	0			
脛骨	完形		1																1	0	0			
	骨体					2		1											3	0	0			
踵骨	完形						1												0	1	0			
	破片								1										0	1	0			
中足骨	完形	1					1	1											2	1	0			
	近位端～骨体											1		1					1	1	0			
	骨体								1										0	1	0			
基節骨								1	1										1	1	0			
中節骨												2							0	0	2			
末節骨												2							0	0	2			
種子骨												1							0	0	1			
合計		1	5	4	1	2	2	1	3	3	12	1	2	3	1	1			15	8	19			

凡例< >: 切痕有り

第VI章 総括

平成9年度から5カ年計画で開始された発掘調査に関しては前章まで層序、遺構、遺物に分けて解説した。今までに沖縄県内における寺院跡の発掘事例は少なく、また、境内全域に調査範囲が及んでいることも全国的に見ても稀な調査である。また、仏教寺院と深い関わりを有する多くの遺構、遺物が確認された点においても沖縄県内では初めての事例と言える。ここでは先の報告を軸にして、円覚寺の変遷について歴史的経緯を踏まえながら総括していきたい。

創建以前：創建（1494年）以前の円覚寺敷地は龍潭、円鑑池、蓮小堀（現在跡地に首里公民館が建つ）のような首里城北側に点在する池、湿地帯の一つであったことを想定することができる。その理由の一つとして天界寺、首里城、上の毛と東西に展開する石灰岩丘陵から流れ込む天水のほとんどがその北側に点在する池並びに円覚寺敷地に流れ込み、首里赤田町からも先の石灰岩丘陵の地下を通して天水が流れ込む。これは円覚寺周辺の地山が不透性の細粒砂岩であり^(註1)、首里城の立地する石灰岩丘陵はこの地山上に載っていることにより（図71）、石灰岩丘陵に含まれた天水は全て細粒砂岩を伝い、円覚寺方向へ流れ込むことによる。加えて首里赤田町の地山も不透性の泥岩層であることから地形的に下位となる円覚寺方向へ首里城が載る石灰岩層の下部を通して地下水は流れ込む。これらから円覚寺には大量の水が流れ込む様相を呈していることが言える。また、このことを裏付けるように聞き取り調査では戦前の首里城北側にある「城の下」から円覚寺までの斜面には椎茸が多く生えており、円覚寺の建物の屋根は苔で覆われていたとあることからこの一帯は湿気を多く含む場所であったことが伺える。

そして次に、円覚寺松尾に見られるように首里城の北側はかつて幾筋かの小尾根があったと想定されることがそれを理由付けることとして挙げられる。円覚寺松尾は首里城北東部の城壁の輪郭に対応しており、久慶門から東側に続く城壁の輪郭も北側に膨らみを有することから同様の小尾根が城壁の輪郭に対応する形で北に伸びていたと想定される。阪谷良之進作製の首里城平面図を見るとこの膨らみに沿って等高線が北側に伸びているのが見える（第72図円内）。この等高線の「伸び」こそがかつて北側へ伸びていた小尾根の基部であったものと思われる。これらの小尾根の1つが総門方向へ伸びることから現在の円鑑池と円覚寺三門との間を遮る形で現在の沖縄県立芸術大学までかつて尾根は続き、それが円覚寺へ流れ込む水を溜め込む自然堤防的な役割を果たしていたものと考えられる。それを示唆する記録として放生池が創建から4年の期間を経て1498年に完成していることが挙げられ、これは小尾根を開削するという大造営のため工期に遅れを取ってしまったものと解される。また巨視的に見れば、円覚寺創建以前は首里城北側に連なる池や湿地帯は自然水濠の機能を有し、首里城北側における防御的機能を担っていたと考えられる。

想定に想定を重ねたが、出土遺物を概観してみても14世紀前半以前の遺物はほとんど見られないことや、近世段階の遺構ではあるが排水のための石造りの溝が縦横に見られることがそれを裏付けていると言える。因みに調査中においても幾度となく調査区及び総門、放生池周辺は冠水し、地区によっては渇水期にも水が引かない場所もあった。

創建当初：1492年から3年がかりで造営された円覚寺の伽藍は荒神堂、寝室、方丈、仏殿、法堂、三門、両廊及び僧房、厨庫、浴室が創建当初の建物として『球陽』（1743～45年）に記載されている。当時の伽藍配置に関しては全く史料が残っていないため、その詳細については今回の発掘調査成果に依るところが大きい。しかし創建以後に増改築された円覚寺の遺構や戦後の旧琉球大学教員官舎等による破壊が大きく、更に上層遺構に係らない地区のみの確認調査に止まったため、その可能性を指摘できる範囲での遺構を確認したに過ぎない。

創建当初に構築されたとされる遺構は仏殿地区の石列12と龍淵殿地区の石積み6、石列1、2、庫裏地区の石積み2、庭園地区石積み1、石列7、8を挙げることができる。

石列12は戦前までの仏殿南辺基壇に対して内側に配置されることから完全に基壇内に埋められた遺構として位置付けることができる。基壇造成事例として、このように面を有する石積みを裏込め石で埋めて基壇を構築するといった事例が見られないこと及び石列内側の基壇造成上内出土造物から、石列12は1596年における改修以前の仏殿に伴う遺構と考えられる。

龍淵殿地区の西辺基壇の基壇造成土から抉り高台の白磁皿が出土しており、その基壇造成を15世紀後半～16世

紀前半に比定することができる。また、龍淵殿地区の石列1、2、庫裏地区の石積み2、庭園地区石積み1、石列7、8遺構軸としてそれぞれ結ぶことができる。石材の大きさ、加工状況、何れも地山に直接据えられていることから、これら一連の遺構は創建当初において東南北を画していた石牆ラインであったものと考えられる。

創建当初における円覚寺の主要伽藍が立ち並ぶ空間は戦前の古写真で見ることのできる空間よりやや狭小で、後の仏殿、龍淵殿が建っていた場所には礎石、基壇を有した建物が既に配置されていたと想定することができる。

この時期に相当する遺物としては青磁、白磁、中国産染付が得られており、仏前具や仏花器として使用することができる青磁瓶や香炉、皿、盤、染付の香炉、合子の蓋、皿、白磁の皿、盤、翡翠釉の皿、高麗系、大和系瓦がある。

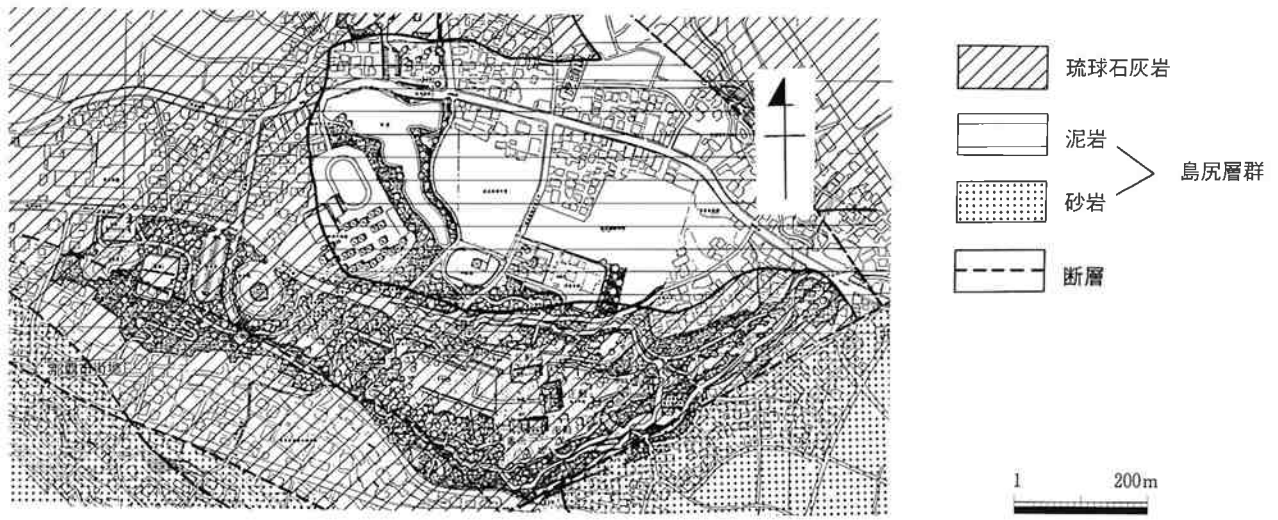
16世紀後半～18世紀初め：1571年に下御照堂が創建、1588年に方丈、大殿、三門といった建物の修復が行われた結果、旧制のように整えられ、1596年にも仏殿が修復されるといった伽藍の整備が文献史料において見ることができる。主に16世紀後半から各建物の改修や増設が立て続けに行われており、これに伴うとされる遺構も各地区で確認されている。

まず石牆が北側と東側に拡張されたと考えられる。戦前まで残存する庭園地区の北側石牆が地山上に構築され、石積み1へと繋がる石牆と更に東に延びて弧を有しながら戦前まで残存する東側石牆へ繋がる石牆とに分岐する。石積み1は龍淵殿の基壇北辺まで延び庭園の東側を画する石牆として機能し、反対側の石積み2は上面が完全に破壊を受けており、石積み2の破壊状況と異なることから当該期から近世にかけて埋没したものと考えられる。

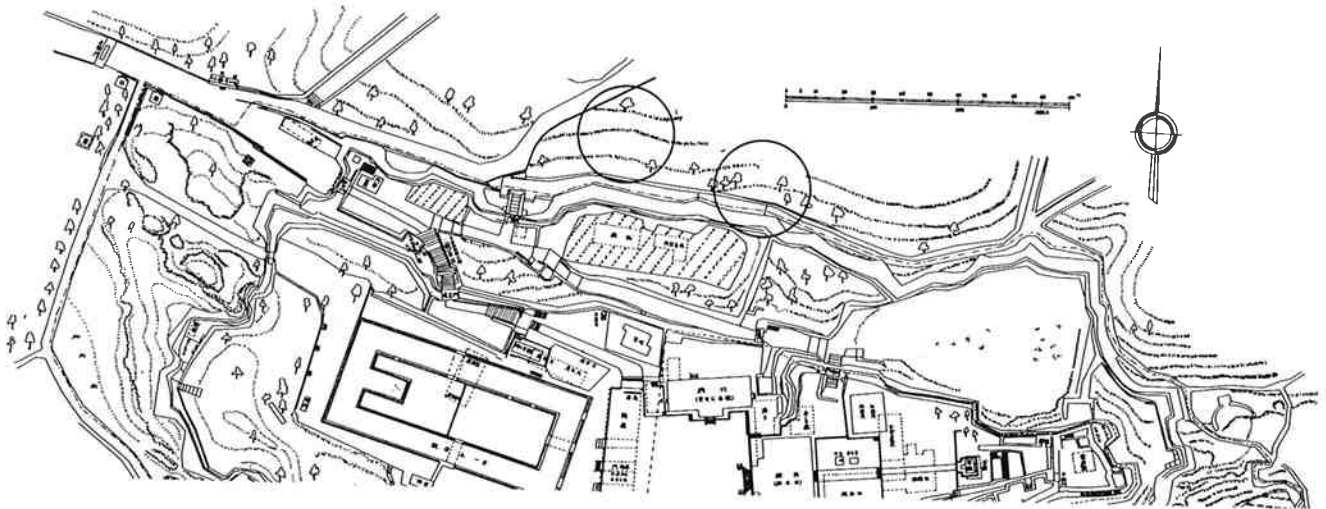
また北側石牆と石積み1に沿って石列5、6も構築される。北側石牆と石列5との時期的な関係は押さえることができなかつたが、遺構の方向が同軸であることから時期的な差異はそれほど無いものと考えられる。創建当初の遺構と考えられる石列7、8は石列5によって破壊されていることが遺構の切り合い関係から把握することができた。石列5は獅子窟地区へと延びており、裏込め石も見られることからある程度の高さを有した基壇状の遺構の可能性を指摘できる。これらから16世紀後半に見られる上・下御照堂に関係する遺構と考えられる。龍淵殿地区の石列3、4もこの時期の遺構に相当するものと思われる。その理由は石列3、4に使われている石材には「口」や「△」といった刻印が見られることによる。首里城の城壁にも同様の刻印が見られ、その上限を16世紀とし^(註2)、日本本土では主に16世紀第四半期頃から刻印石が見られるようになる。これらのことから石列3、4は1588年の大殿改修の際に設置された基壇根石と考えられる。方形石組みは石組内から大量の炭と灰瓦が出土している。おそらく1721年に焼失した大殿の部材であると考えられるが、その構築年代については裏込め石内から遺物を得ることができなかつたため不明である。但し、創建当初の石牆の外側（東側）にあることからその構築年代は16世紀後半以降であることを想定でき、先の出土状況から廃棄年代は1721年とされることから、構築年代は16世紀後半～18世紀初めと幅を持たせて考えたい。集石1～12も遺物を得ることができなかつたためにその構築年代については不明であるが、遺構レベルから石列3、4や方形石組みに伴うものと想定される。よってその構築年代は16世紀後半～18世紀初めに位置付けておく。尚、三門地区に関してはこの時期の改修に伴う遺構は確認されていない。

この時期に相当する遺物としては創建時のものに加えて、大和系の軒丸瓦、明朝系瓦、そして蛇行剣も当時の琉球王国の背景を踏まえればこの時期に相当すると考えられる。

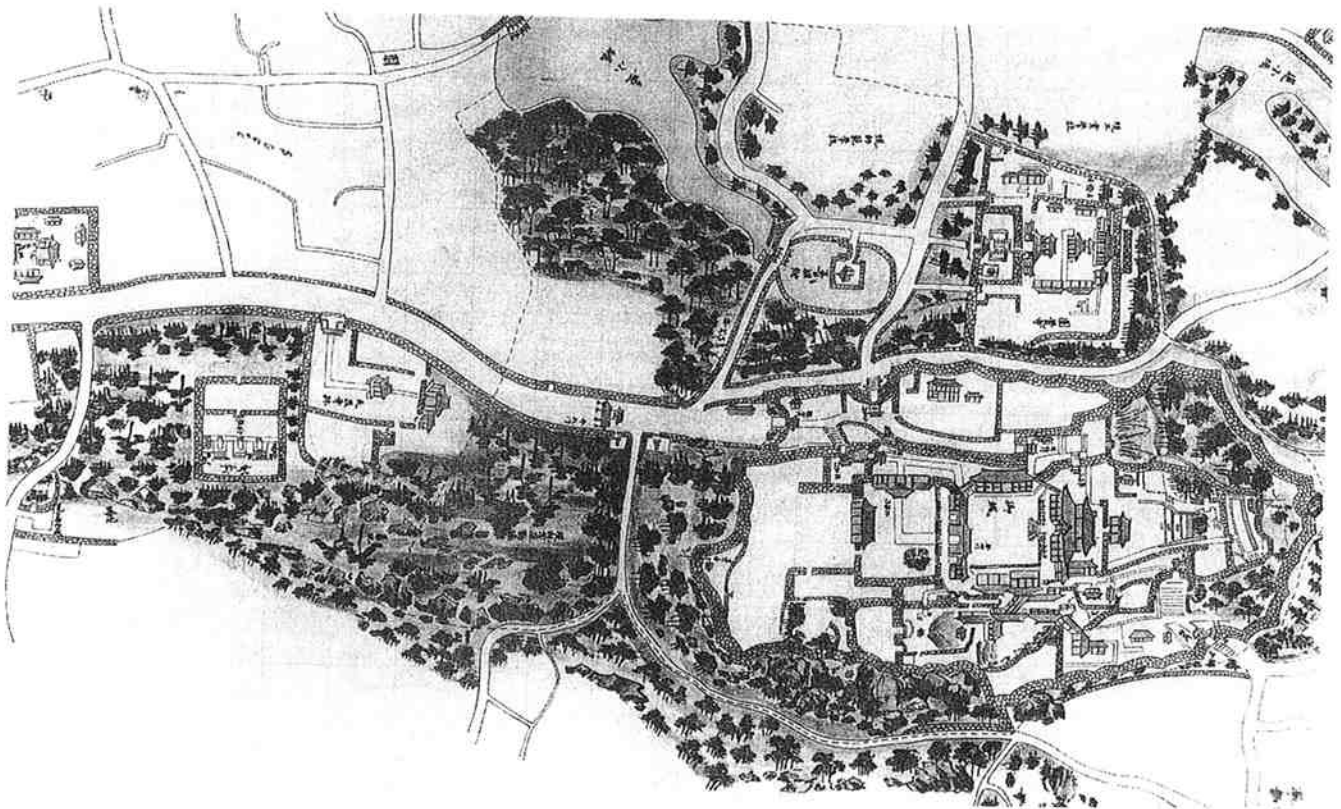
18世紀前半～沖繩戦：1721年の大殿焼失に伴って、同年に龍淵殿の建設、1722年には井戸の西側に行堂を創建、1728年に国王の位牌は上・下御照堂から龍淵殿に移し、両建物は小堂に改修、1744年に三門の南側にあったとされる亭寮、照堂寮を境内の南側に移築し、その場所に鐘楼を移築するといった伽藍の変遷が見られる^(註3)。これらから主に18世紀前半において円覚寺の主要建物は改修や移築が行われており、基本的にこれらの改修によって戦前まで残っていた円覚寺伽藍群が成立したと言える。この18世紀前半の改修直前の姿を『首里古地図』（1700年頃）において見ることができる（図73）。これには総門、三門、仏殿、大殿が一直線上に並び、北側に上・下御照堂が配置される状況と18世紀前半以降のそれとは大差ないが、仏殿、大殿の南側に亭寮、照堂寮と見られる建物が東西に並んでいる様子を看取することができる。また、大殿の南・北側にはそれに付属するような建物が、井戸も亭寮、照堂寮の南側に描かれ18世紀初めには既にこの場所に井戸が配置されていたことを物語っている。この改修以前の遺構としては16世紀後半に改修された建物に伴う遺構が主となるが、近世期に入って以降も部分的な改修は行われているものと想定される。まず、龍淵殿地区の石積み3の裏込め石内から沖繩産無釉陶器が出



第71図 地質図（首里城公園基本設計 沖縄県土木建築部）



第72図 首里城平面図（阪谷良之進原図、県立図書館蔵昭和6年頃）



第73図 「首里城付近ノ図」首里古地図を1931年に模写

土していることから、おそらく17世紀～18世紀前半に構築された大殿基壇に伴う石積みと考えられる。龍淵殿南辺の基壇に相当する石積み4に伴う基壇造成土内から沖縄産無釉陶器が出土していることから近世期に構築されたと考えられる。但し、1721年焼失の大殿に伴う遺構か否かは不明である。因みに石積み4に取り付く石積み6の構築時期に関しては切り合い関係から石積み4の構築以降と考えられる。亭寮、照堂寮の基壇と思われる遺構として石積み5、溝1、集石13を掲げることができる。しかし調査区の関係でその全容を把握することができなかったため、厳密な形態、構築時期の分析に関しては今後の課題とされるところである。18世紀前半の改修直後の姿は『琉球国志略』（1757年）において何うことができる。この記載においてはほとんど戦前まであった円覚寺伽藍の様子と変わりはないが唯一、龍淵殿の南側に「蓬萊庭」と呼称される庭があった点のみ異なる。今回の調査においてこれに伴う遺構を確認することができなかったが、おそらく庫裏地区周辺に位置していたと思われる。そして庫裏の構築年代に関しては文献史料からは何うことはできないが、庫裏造成層の出土遺物からおそらく19世紀以降に構築されたものと考えられる。三門の基壇遺構はその造成層の出土遺物から近世段階のものであり、とくにそれより下層で遺構が確認されるということにはなかった。鐘楼の基壇は1744年の移築時の遺構であると思われる。尚、総門、放生池、三門そして鐘楼の建物軸に対して仏殿、龍淵殿の建物軸は北に2° 5′振れていることが確認された。この方向軸の振れについては今後、更なる検証の必要がある。庭園の立石は『琉球国志略』に記載される「奇石」に相当すると思われることから18世紀中頃には既に存在していたものと考えられる。また、石積み1、石列5は近世期には埋没し、石積み5の部分には戦前の古写真に見られる築山風の地脈を造営している。

今回の調査ではこの時期に相当すると思われる瓦、磚、沖縄産陶器といった遺物が全体の出土遺物量の約9割を占めた。因みにこれらの遺物の全てが円覚寺に伴うものとは限らない^(註4)。

最後に掲げる図74は今回の調査成果を軸にして、不明な点は主に田辺泰氏作成の『琉球建築』円覚寺平面圖と聞き取り調査の成果を参考にして推定作製した、戦前まで残存していた円覚寺の建物の平面復元図である。

戦後：去る沖縄戦によって円覚寺の伽藍及び遺構は各建物の基壇、周囲を圍繞する石牆等を残して全焼し、円覚寺とその周辺は焼け野原となった。円覚寺の建物に使用されていた木材は周辺住民によって薪に利用するために持ち運ばれ、暫くの間は空き地として放置されていた。1950（昭和25）年の琉球大学開学に伴って円覚寺の敷地に教員官舎が建設された。建物基壇は破壊され、円覚寺松尾は切り崩されてしまう。庭園は殆ど完全に残っていたが、旧琉球大学教員官舎建設の際にブルドーザーで敷き成らされてしまったとされる^(註5)。この教員官舎建設時に据えられた建物6棟の基礎コンクリート、据え石と官舎の井戸が検出されている。柱基礎となっている据え石には円覚寺の建物の礎石と見られる方形に加工された細粒砂岩を確認することができる。おそらく教員官舎の柱基礎として現地にあった円覚寺の建物礎石を再利用したものと考えられる。教員官舎が移築された後はかさ上げがなされ、琉球大学並びに沖縄県立芸術大学のグラウンドとして再造成がなされる。これによって完全に円覚寺の中心部は地中に埋蔵されるに至った。

<註文献>

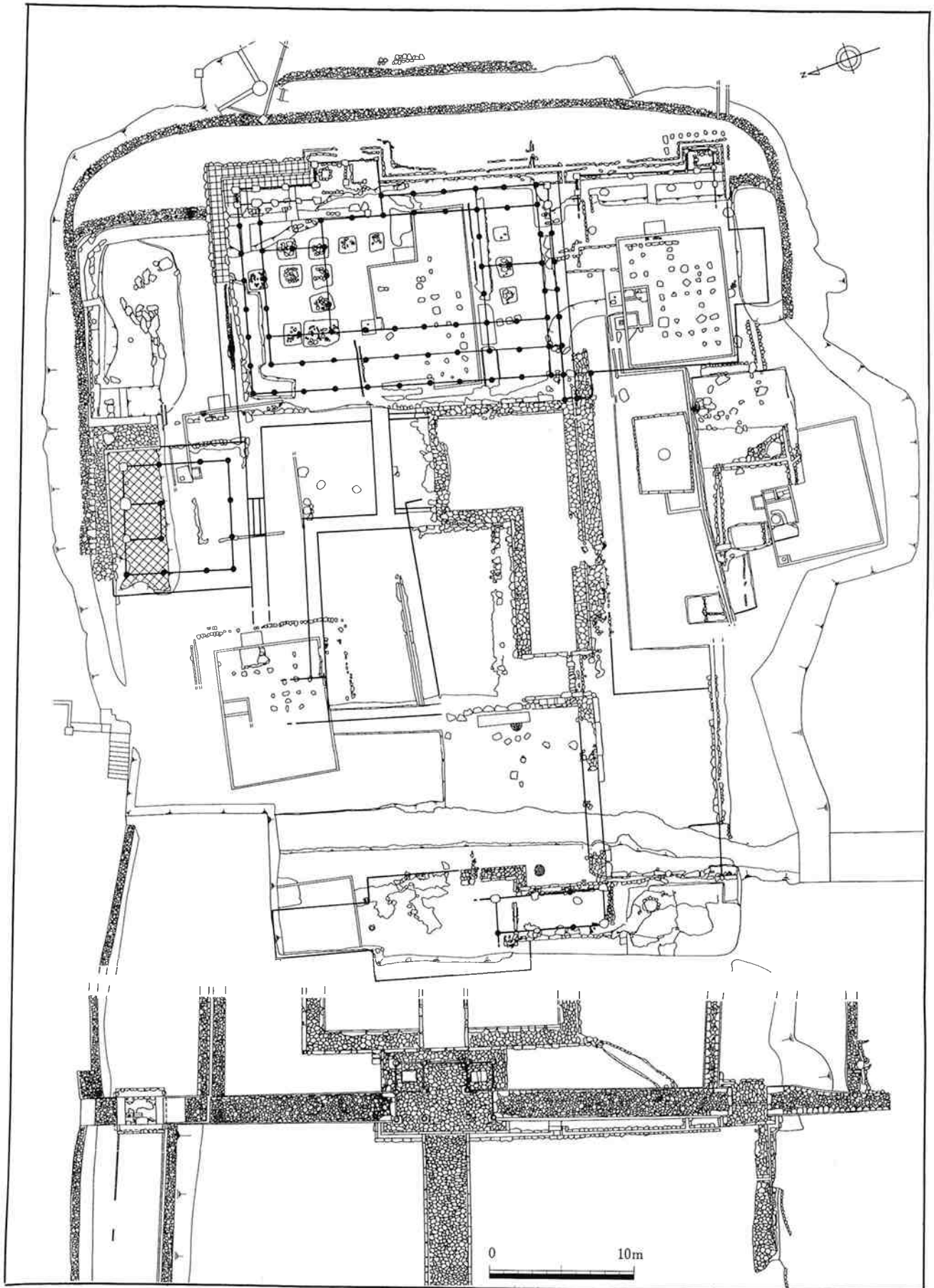
(註1) 古川博恭、高良良政「地形・地質」『那覇市歴史地図』那覇市教育委員会 1984

(註2) 上地克哉、上原静「首里城城郭検出の『刻印石』」『文化課紀要』第9号 沖縄県教育庁文化課 1993

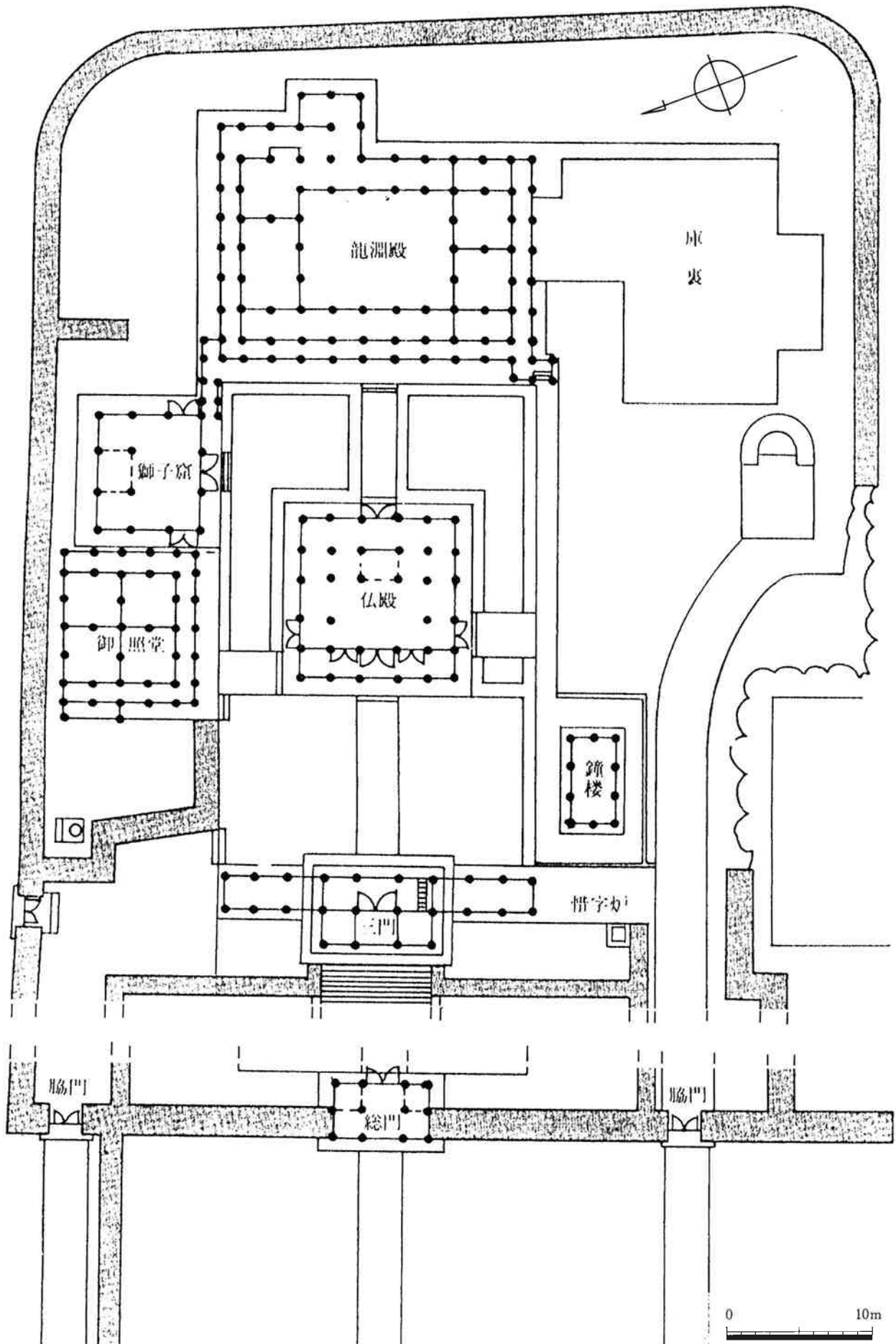
(註3) 真栄平房敬「円覚寺」『角川日本地名辞典 47 沖縄県』角川書店 1986

(註4) 真栄平房敬氏によると近代以降に廃寺となった県内諸寺の宝物を龍淵殿内に位牌が置かれている部屋の裏側に納めていたとの御教示が得られた。

(註5) 山里栄吉『壺中天地』光有社 1963

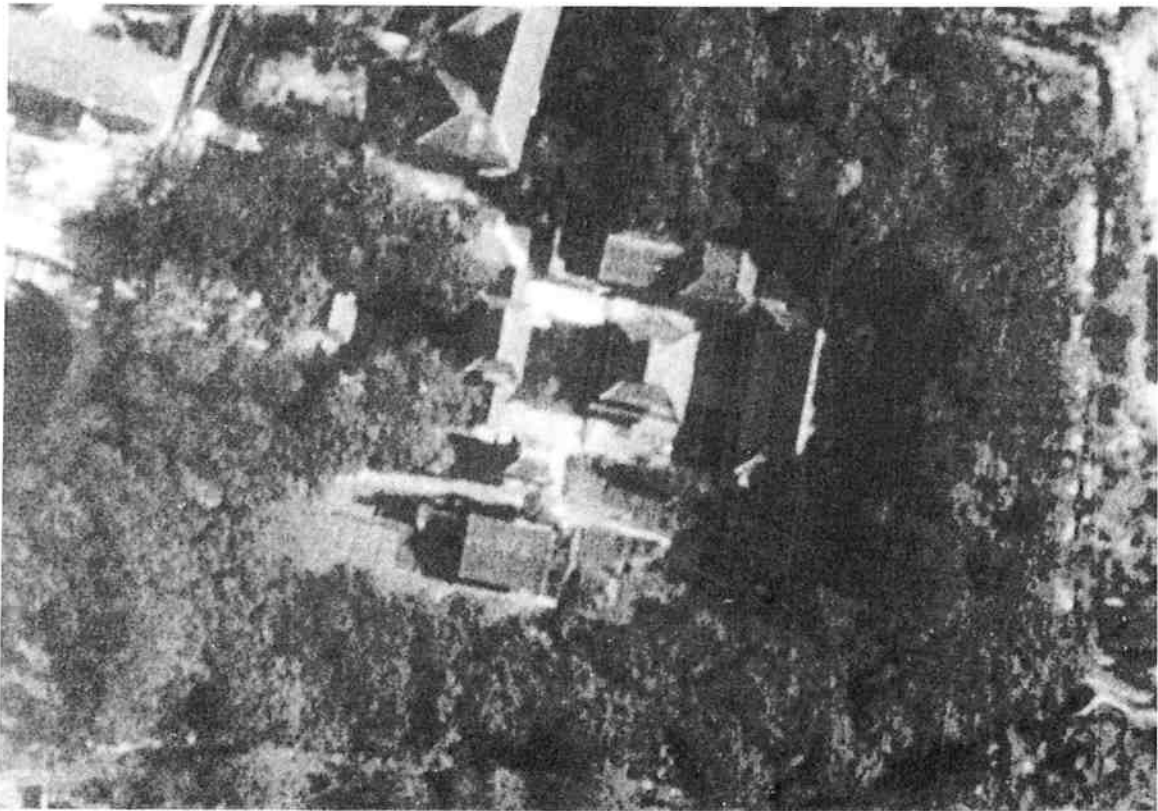


第74図 円覚寺旧状想定図

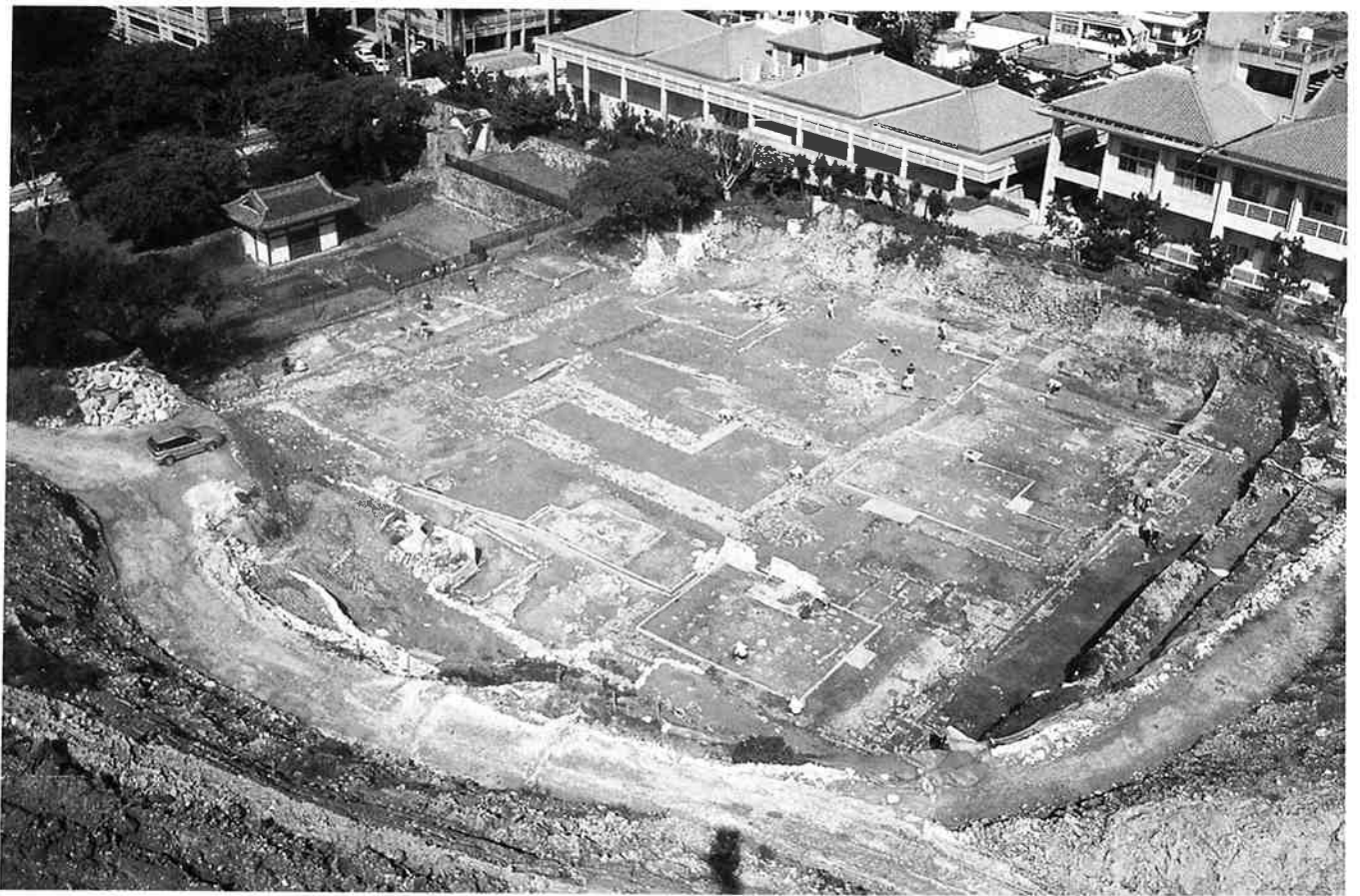


第75図 円覚寺平面図 (田辺泰「琉球建築」1937)

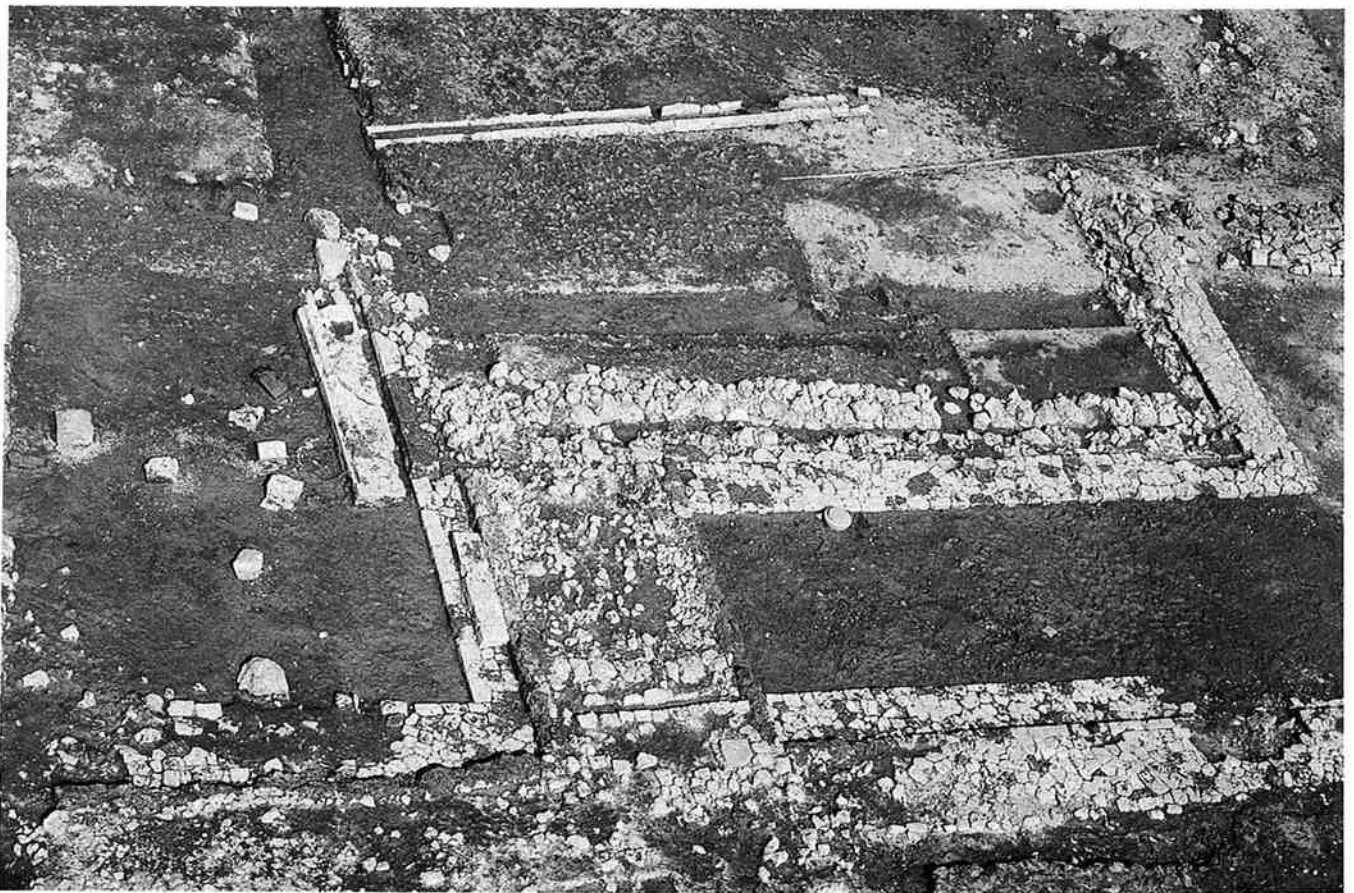
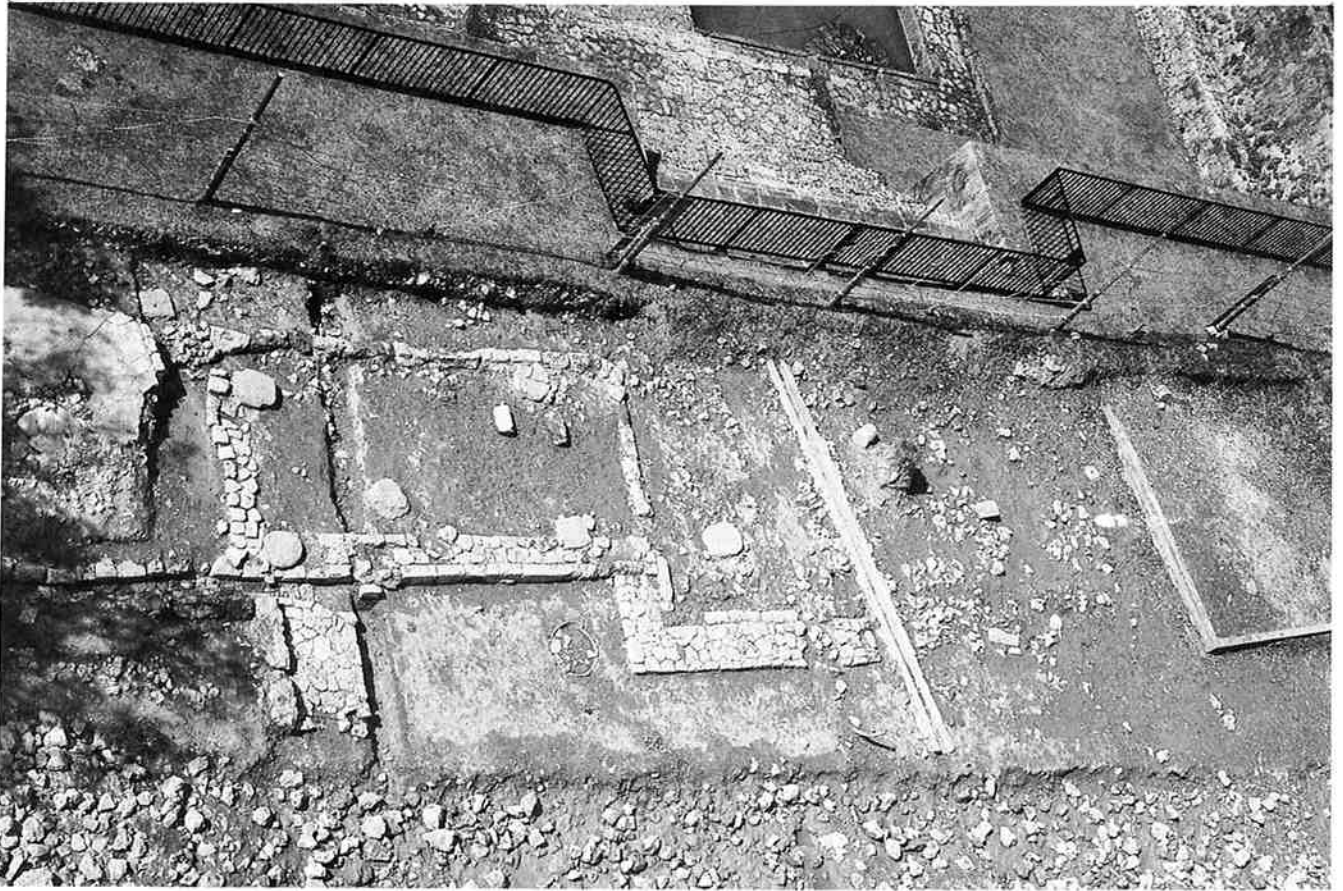
圖 版



図版 8 沖縄戦焼失直前の円覚寺周辺
(昭和20年4月2日米軍撮影、県公文書館蔵) 上掲写真の円覚寺・「城の下」石畳道・部分拡大



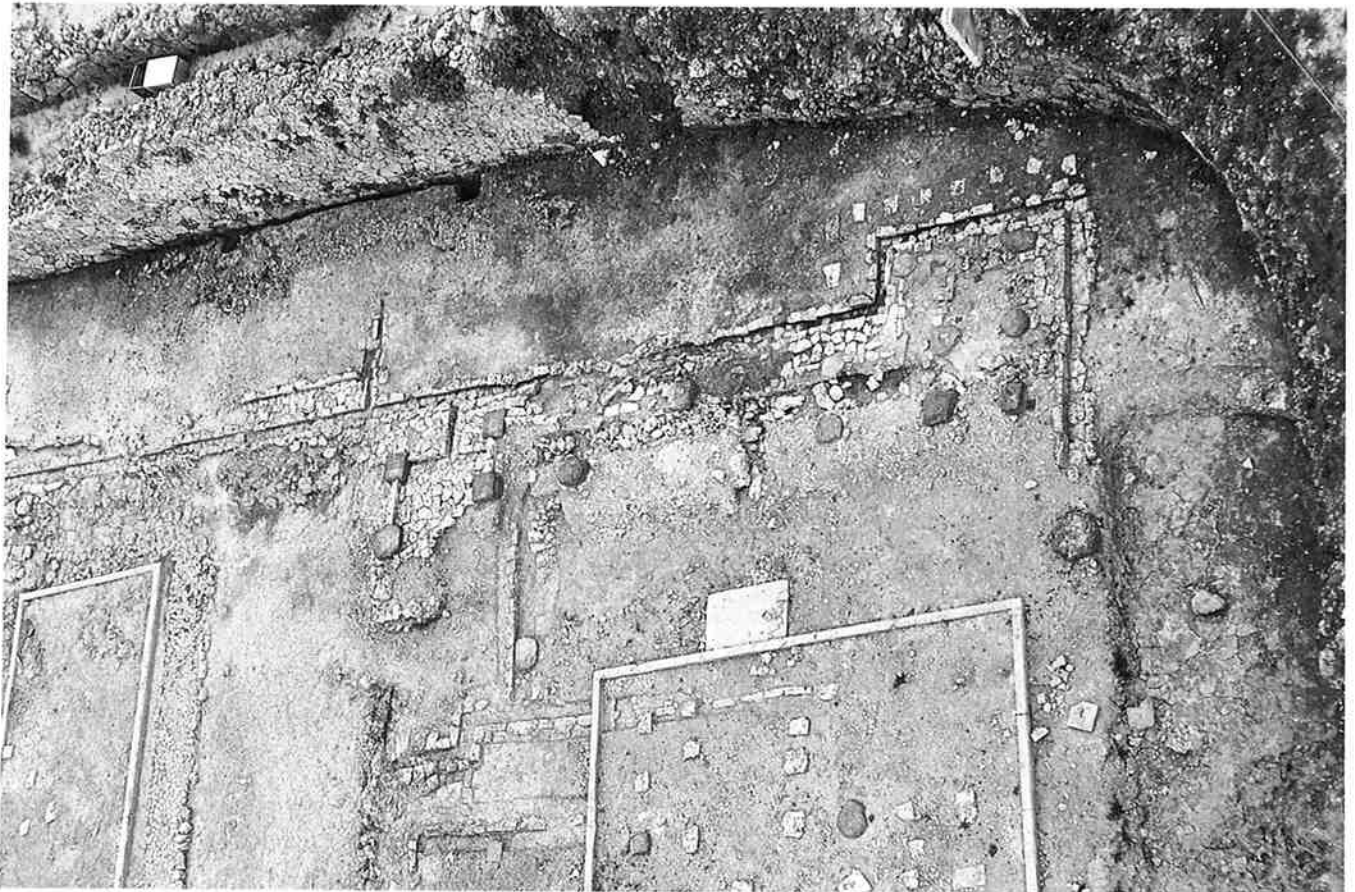
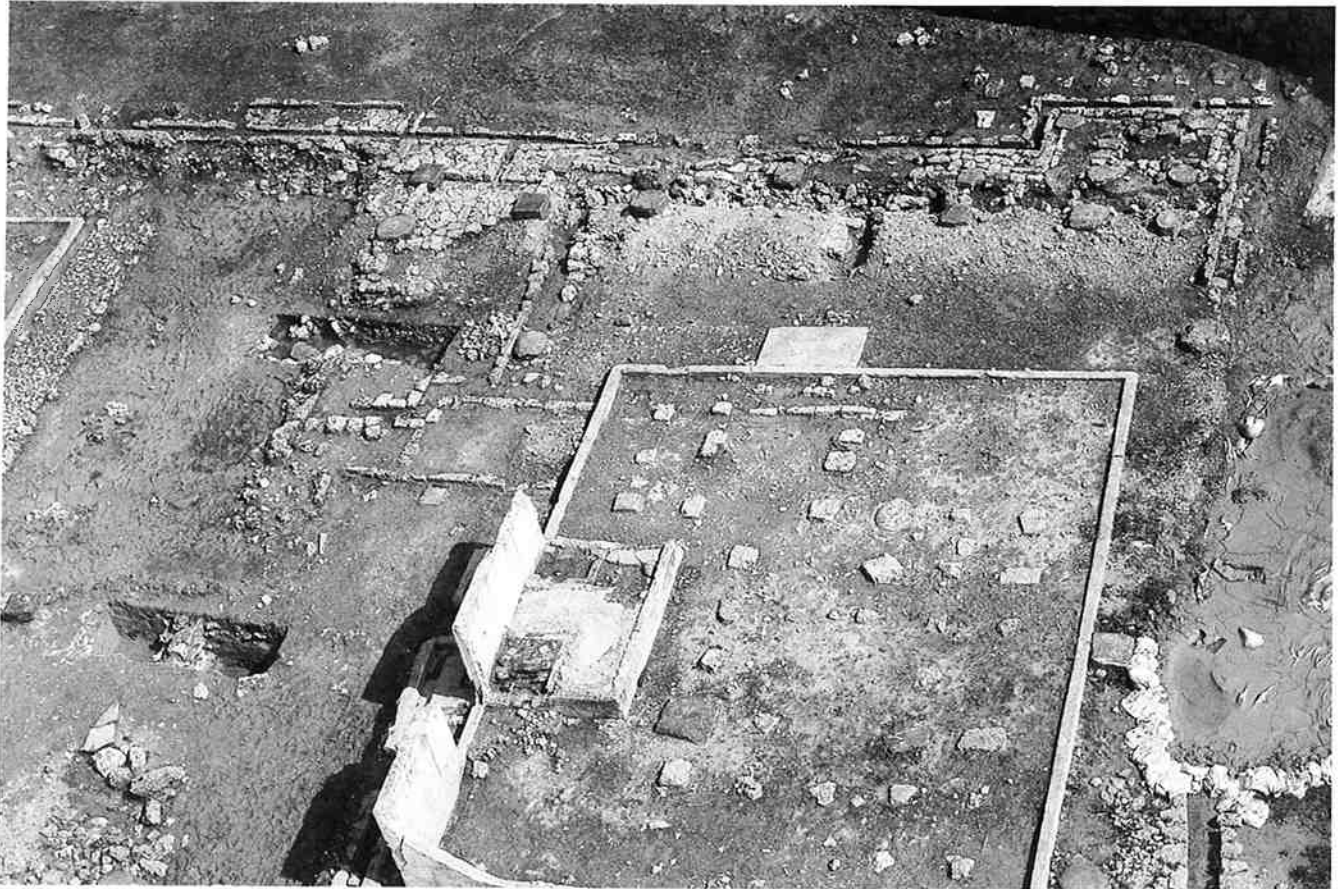
図版9 上：発掘調査前（南東から） 下：調査区全景（東から）



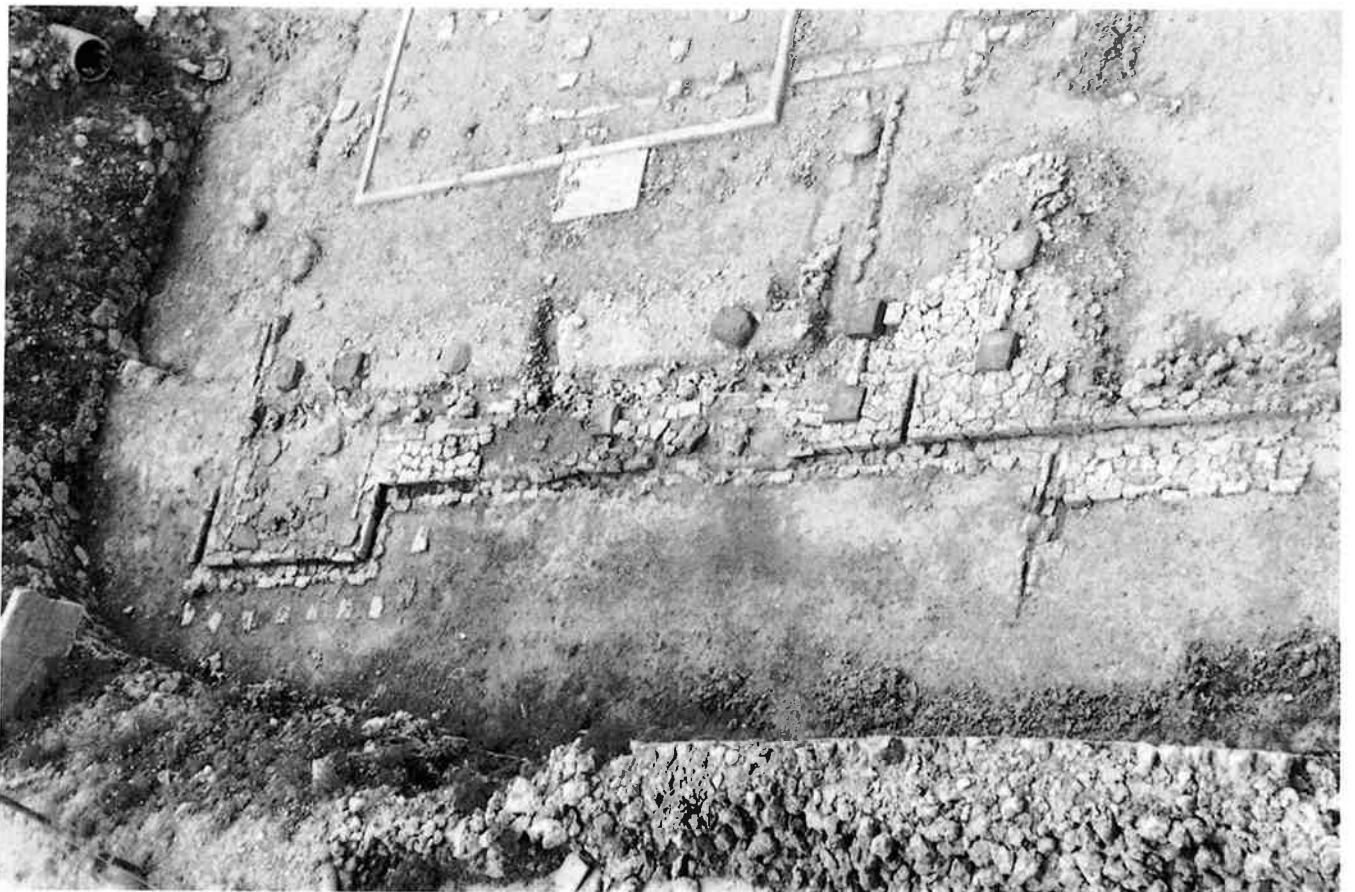
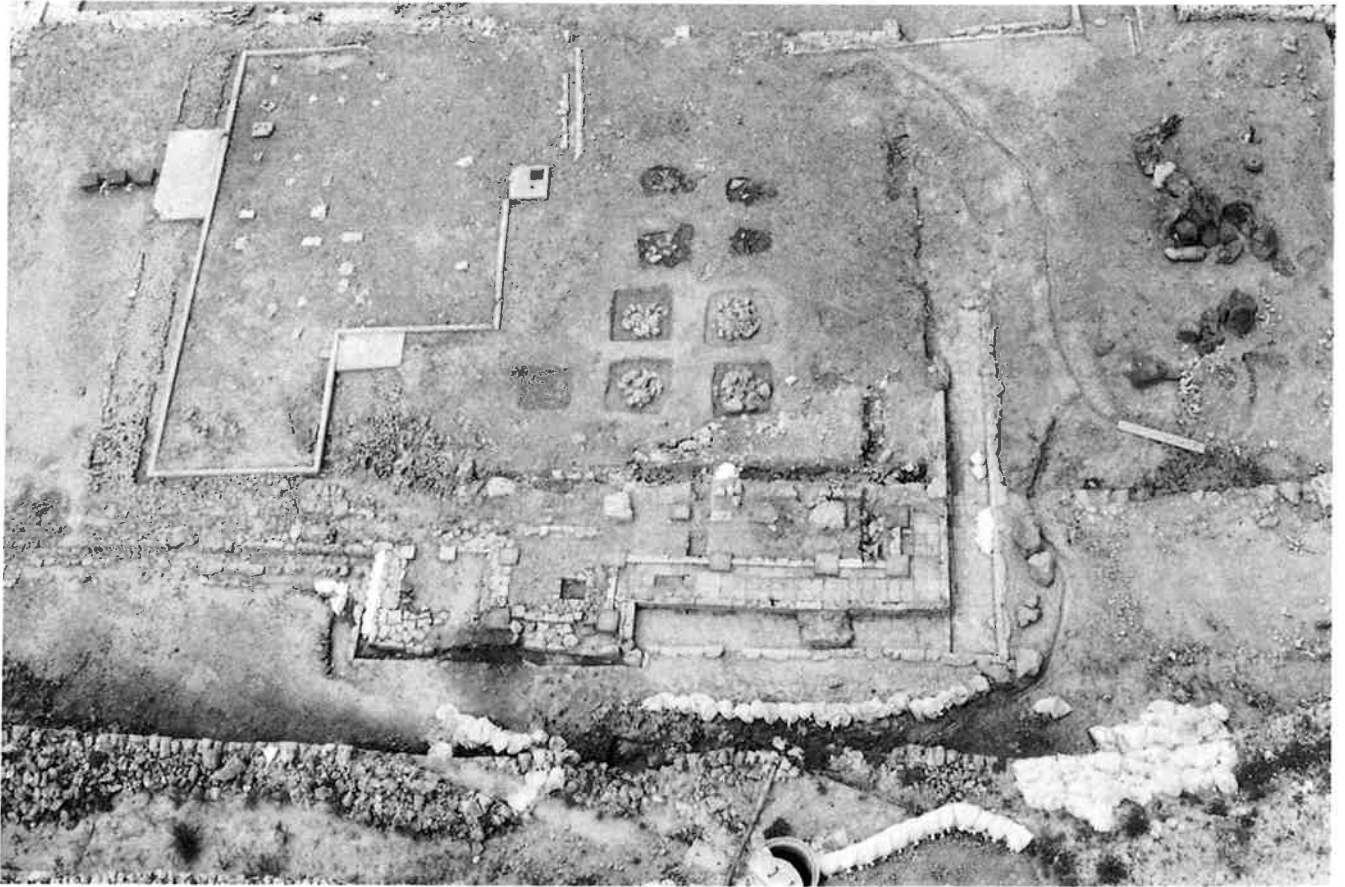
図版10 遺構 (1) 上：三門地区地区 (南から) 下：仏殿地区 (南から)



図版11 遺構 (2) 上：龍淵殿、庭園地区 (南から) 下：東側石牆 (南西から)



図版12 遺構 (3) 上：庫裏地区 (南西から) 下：庫裏地区 (西から)



図版13 遺構 (4) 上：龍淵殿地区（東から）下：庫裏地区（北東から）



図版14 遺構 (5) 上：石積み4確認トレンチ (南西から) 下：井戸地区 (西から)



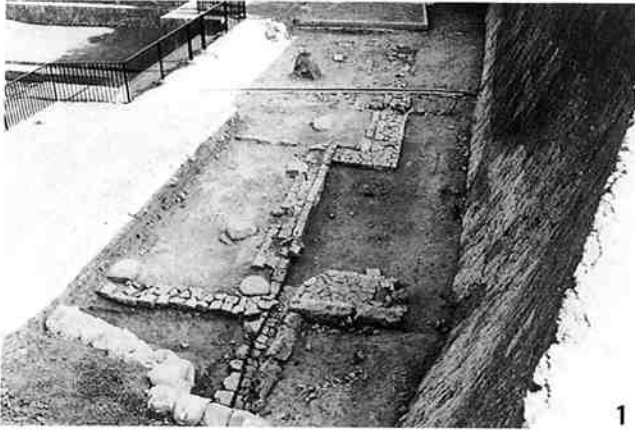
図版15 遺構 (6) 上：御照堂地区、獅子窟地区（南から）下：鐘楼地区（南から）



図版16 各地区土層 (1) 1. 2石列4造成状況(西から) 3. 4石積み4確認トレンチ①西壁(東側)
5. 6石積み4確認トレンチ②東壁 7. 龍淵殿西辺基壇裏込め状況(東から) 8. 石列5埋土状況



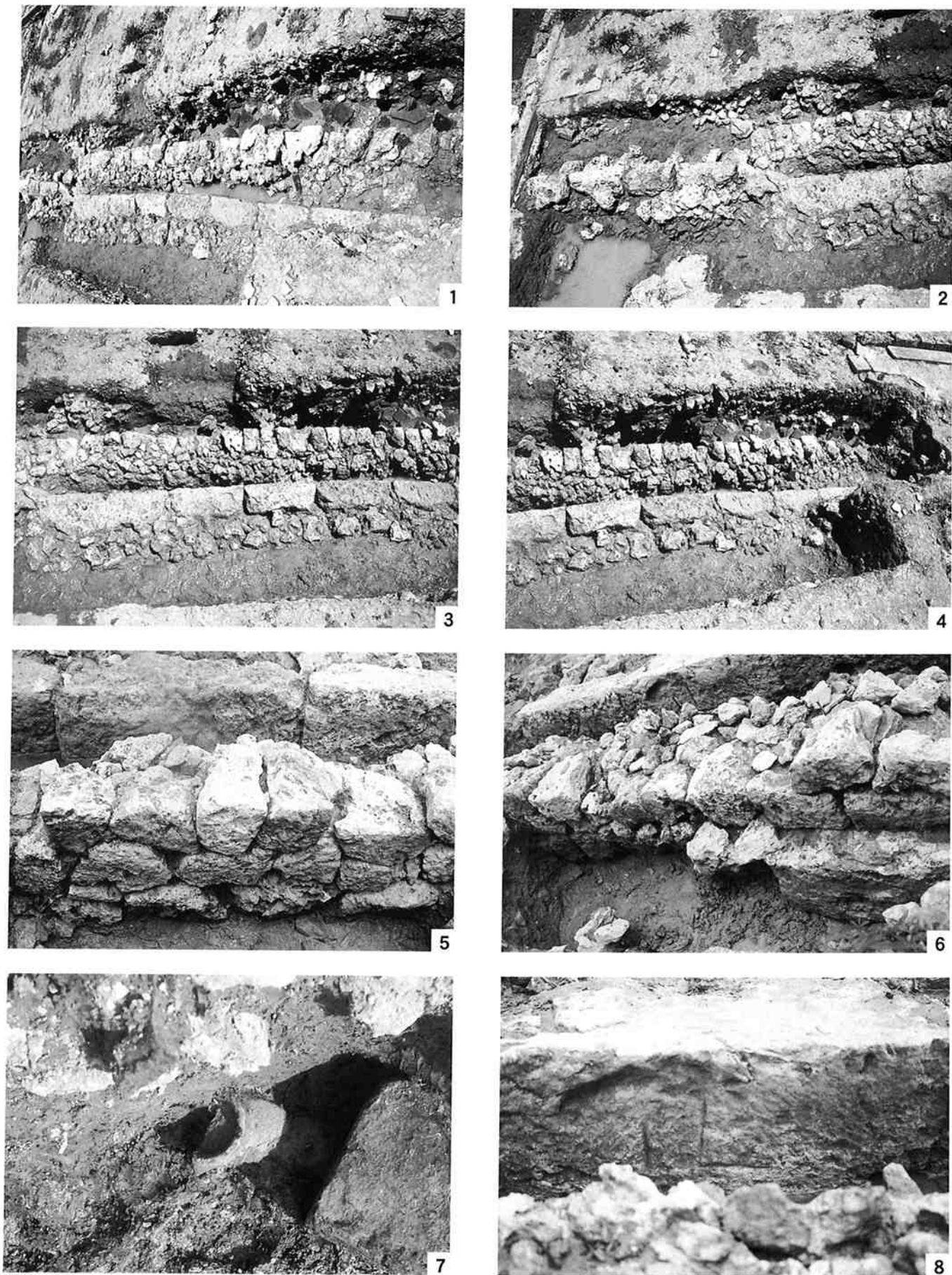
図版17 各地区土層 (2) 1. 庭園・石牆間トレンチ (北西から) 2. 同畦 (北から) 3. 4 同東壁 5. 獅子窟基壇東西断面 (東部分)
6. 同 (南西から) 7. 同南北断面 (北西から) 8. 獅子窟東側石敷埋土状況 (北から)



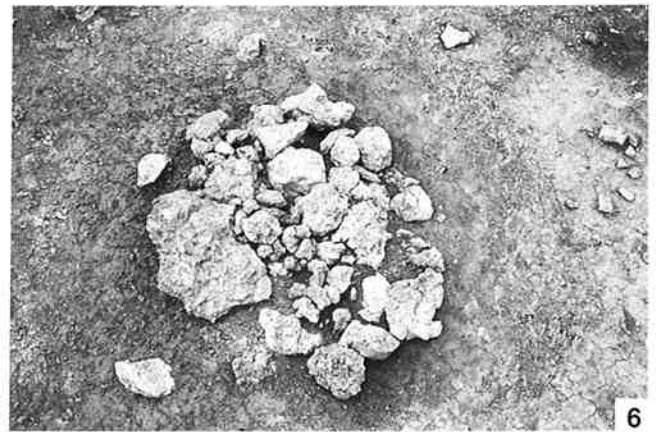
図版18 遺構検出状況 (1) 1. 三門地区全景 (南から) 2. 三門北側検出状況 (南から) 3. 三門埋壘検出状況
4. 5. 6. 7. 仏殿地区 (西から) 8. 仏殿基壇根石石列12 (西から)



図版19 遺構検出状況 (2) 1. 香炉出土状況 2. 仏殿埋壙検出状況 3. 龍淵殿東辺基壇 (北から) 4. 龍淵殿礎石下部集石 (西から)
5. 石列1 (西から) 6. 龍淵殿地区石牆根石 (北から) 7. 8. 方形石積み (東から)



図版20 遺構検出状況 (3) 1. 石列4、石積み3全景(東から) 2. 3. 4. 石列4、石積み3(南から) 5. 6. 石積み3(北から)
7. 石積み3基部出土青磁 8. 石列4刻印(北から)



図版21 遺構検出状況 (4) 1. 2. 3石列4刻印(北から) 4. 石列3刻印(西から) 5. 石列4面石控え部分(南から) 6. 集石8
7. 集石5 8. 集石6



図版22 遺構検出状況 (5) 1. 石積み4 (南から) 2. 石積み4 (北西から) 3. 石積み6 (南東から) 4. 石積み4 基部近く出土獣骨片
5. 庫裏トイレ状遺構 (東から) 6. 同基堆積状況 (東から) 7. 石積み2 (東から) 8. 石積み2 (北から)



図版23 遺構検出状況 (6) 1. 2. 3. 石積み2 (東から) 4. 鐘楼南辺基壇 (北から) 5. 鐘楼西辺基壇と側溝 (北から)
6. 7. 同 (南から) 8. 鐘楼南側溝 (西から)



1



2



3



4



5



6

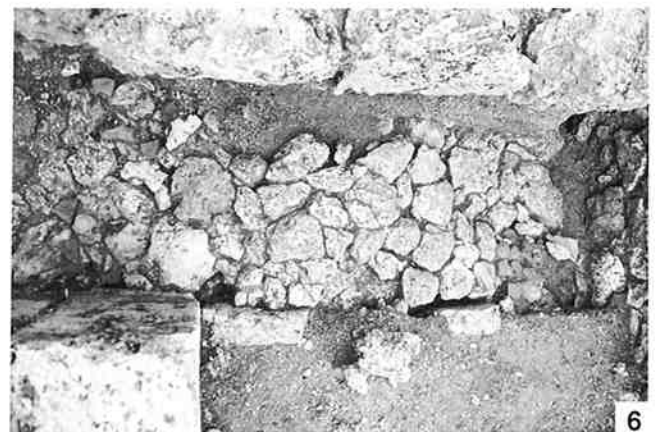


7



8

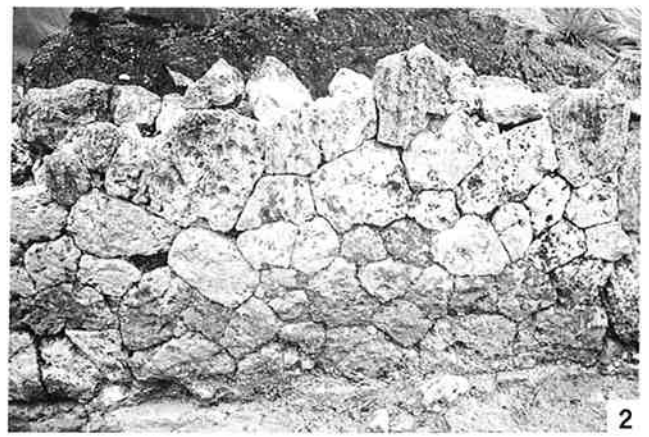
図版24 遺構検出状況 (7) 1. 石積み5 (南から) 2. 獅子窟基壇 (北東から) 3. 同 (北西から) 4. 同 (南西から)
5. 6. 7. 8. 基壇・石牆間第3層検出状況



図版25 遺構検出状況 (8) 1. 2. 3. 4. 5. 6. 獅子窟石敷き (基壇北辺周辺)
7. 獅子窟石敷き (基壇北辺周辺) 及び石列7 (北から) 8. 獅子窟・庭園間石牆 (西から)



1



2



3



4



5



6



7

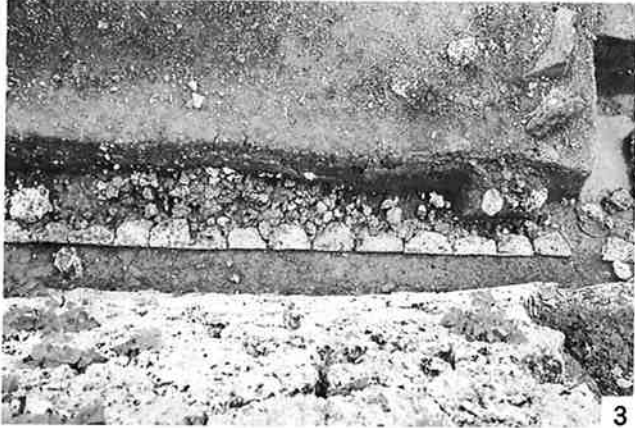


8

図版26 遺構検出状況 (9)

1. 2. 獅子窟・庭園間石牆 (西から) 3. 獅子窟・庭園間石牆及び石列7 (北東から)

4. 5. 獅子窟・庭園間石牆 (西から) 6. 庭園出土状況 (南から) 7. 同 (東から) 8. 石列5 検出状況 (東から)

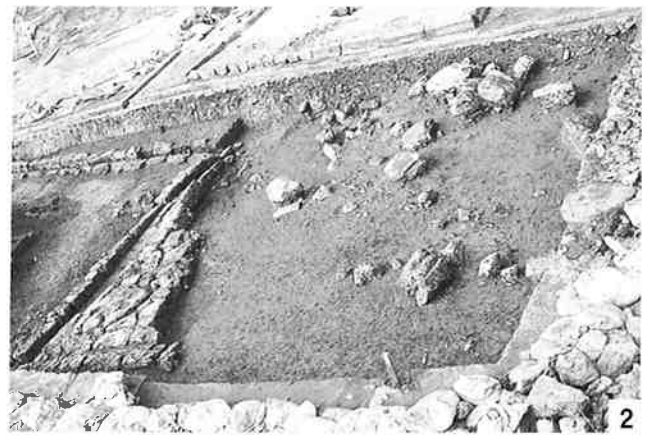


図版27 遺構検出状況 (10) 1. 石列5検出状況(東から) 2. 3. 4. 同(北から) 5. 北側石牆根石部分(南から)
6. 7. 石列5、8、石積み1(東から) 8. 石列5北端(東から)



図版28 遺構検出状況 (11)

1. 石列5 (南西から) 2. 石列5、6、石積み1 (北から)
 3. 石列6 (東から) 4. 5. 6. 7. 石積み1 (西から) 8. 石列7



図版29 遺構検出状況 (12)

1. 溝3 (南西から) 2. 井戸全景 (北東から) 3. 井戸石畳 (西から) 4. 伊万里焼大型鉢出土状況
 5. 井戸北側構 (東から) 6. 井戸北側構 7. 石列9 (南から) 8. 石列10 (南西から)



図版30 遺構検出状況 (13)

1. 石積み5、溝5、集石13(南から) 2. 3. 同(北から) 4. 石積み5(南から)
5. 左脇門前石畳(西から) 6. 同(東から) 7. 同(北東から) 8. 同北側構暗渠(北西から)



1



2



3



4



5



6

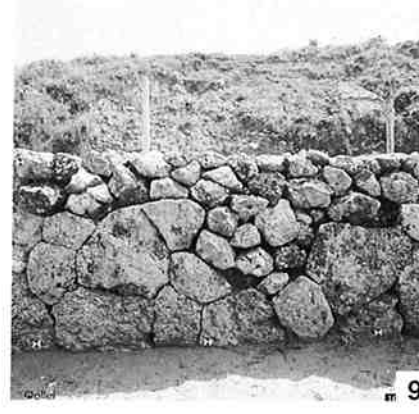
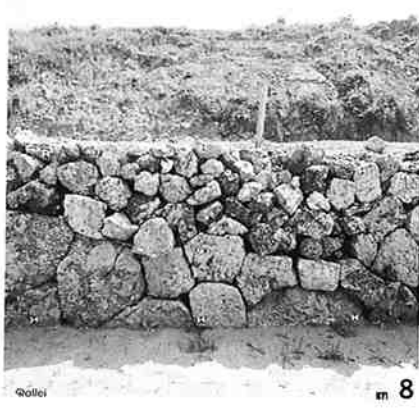
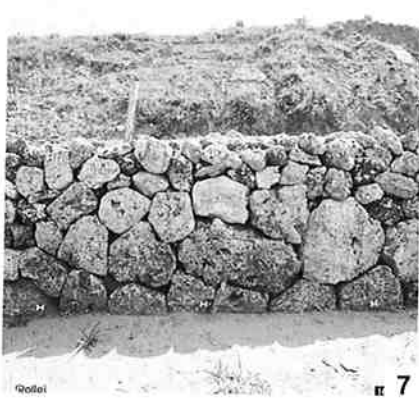
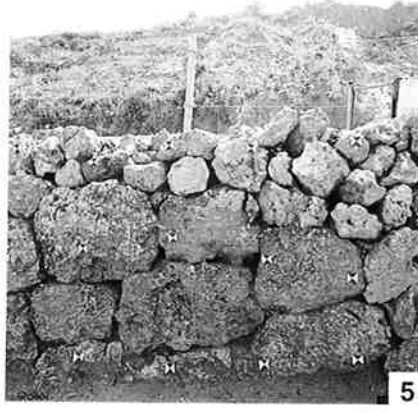
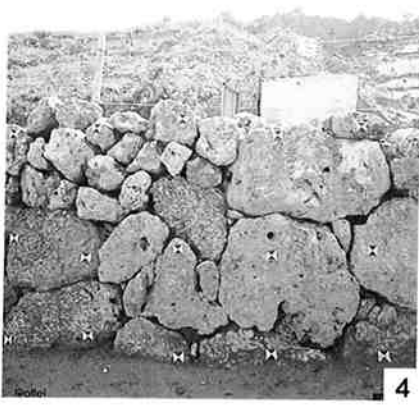
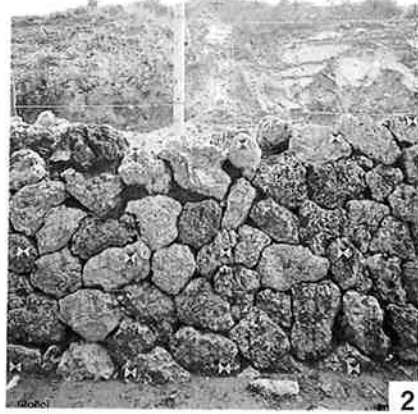


7



8

図版31 遺構検出状況 (14) 1. 左脇門水樋 2. 左脇門下石畳 3. 4. 5. 6. 遺構発掘・記録作業
7. 学生対象の現地見学会 8. 円覚寺跡から首里城正殿を望む



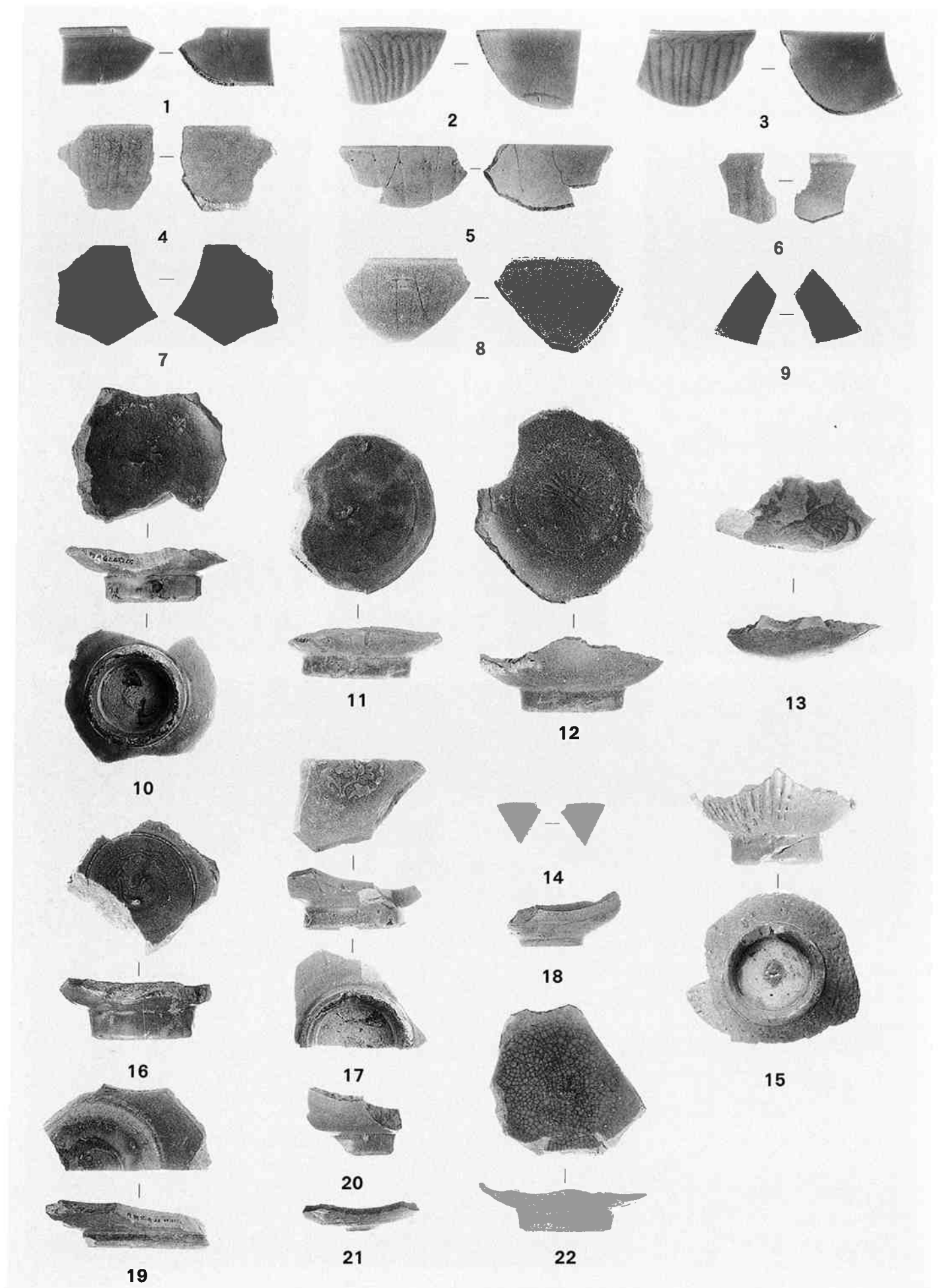
図版32 遺構検出状況 (15) 1. 2. 3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. 11. 12. 東外側石牆



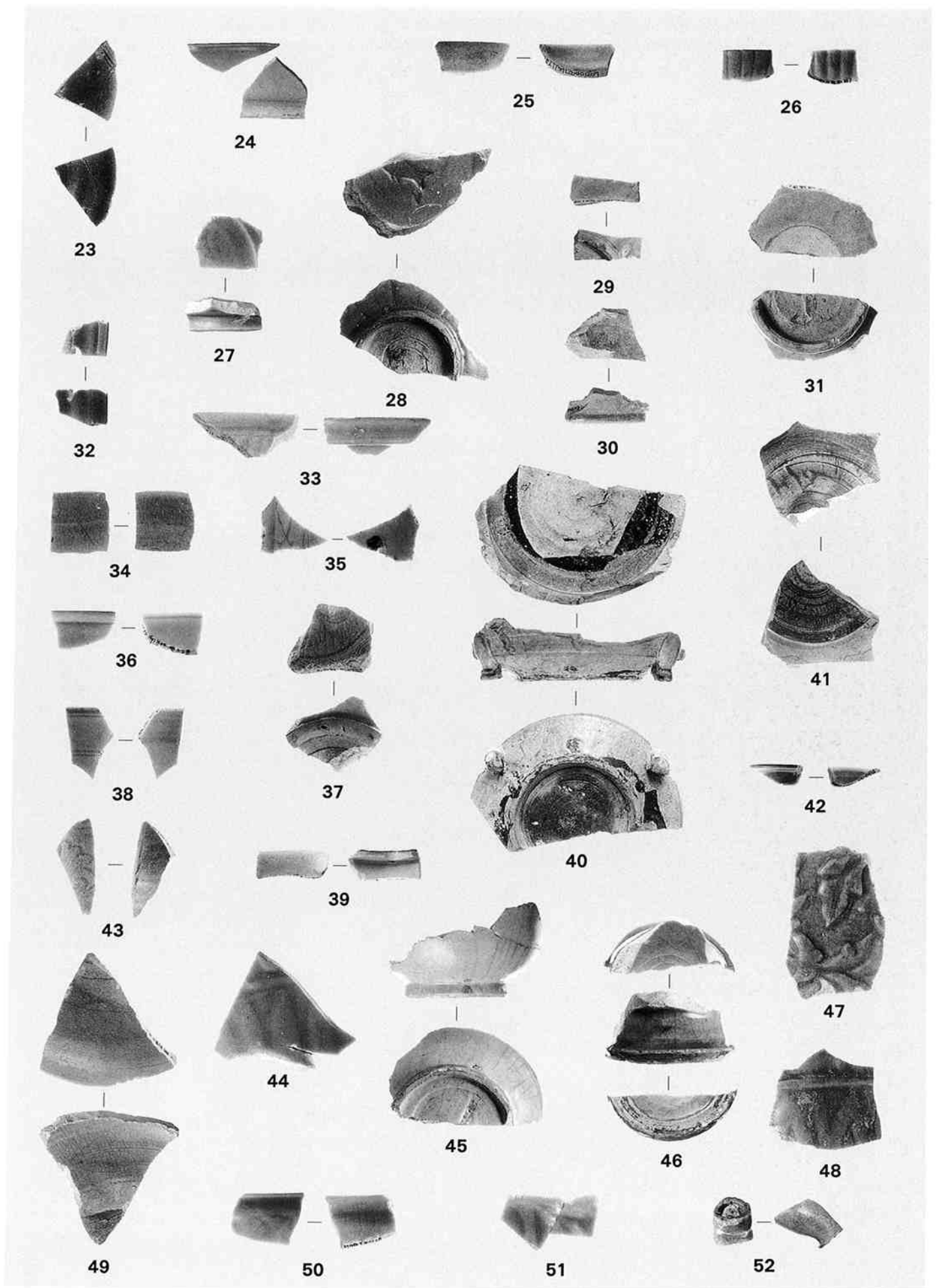
図版33 遺構検出状況 (16) 13. 14. 15. 16. 17. 18. 19. 20. 21. 22. 北側石牆 23. 24. 東内側石牆



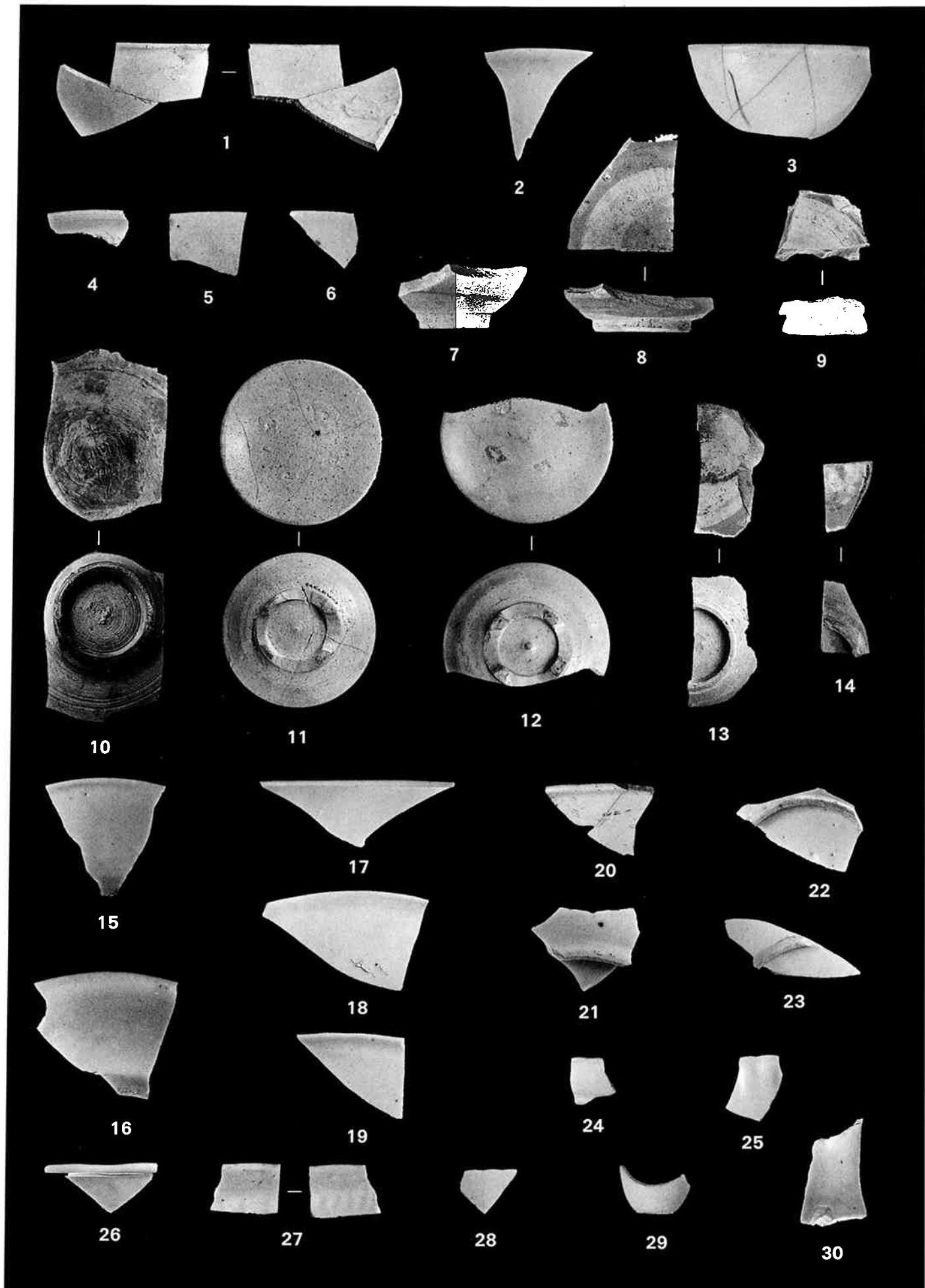
図版34 遺構検出状況 (17) 25. 26. 27. 東内側石牆 28. 29. 30. 南側石牆 31. 東、南側石牆全景 (北西から)



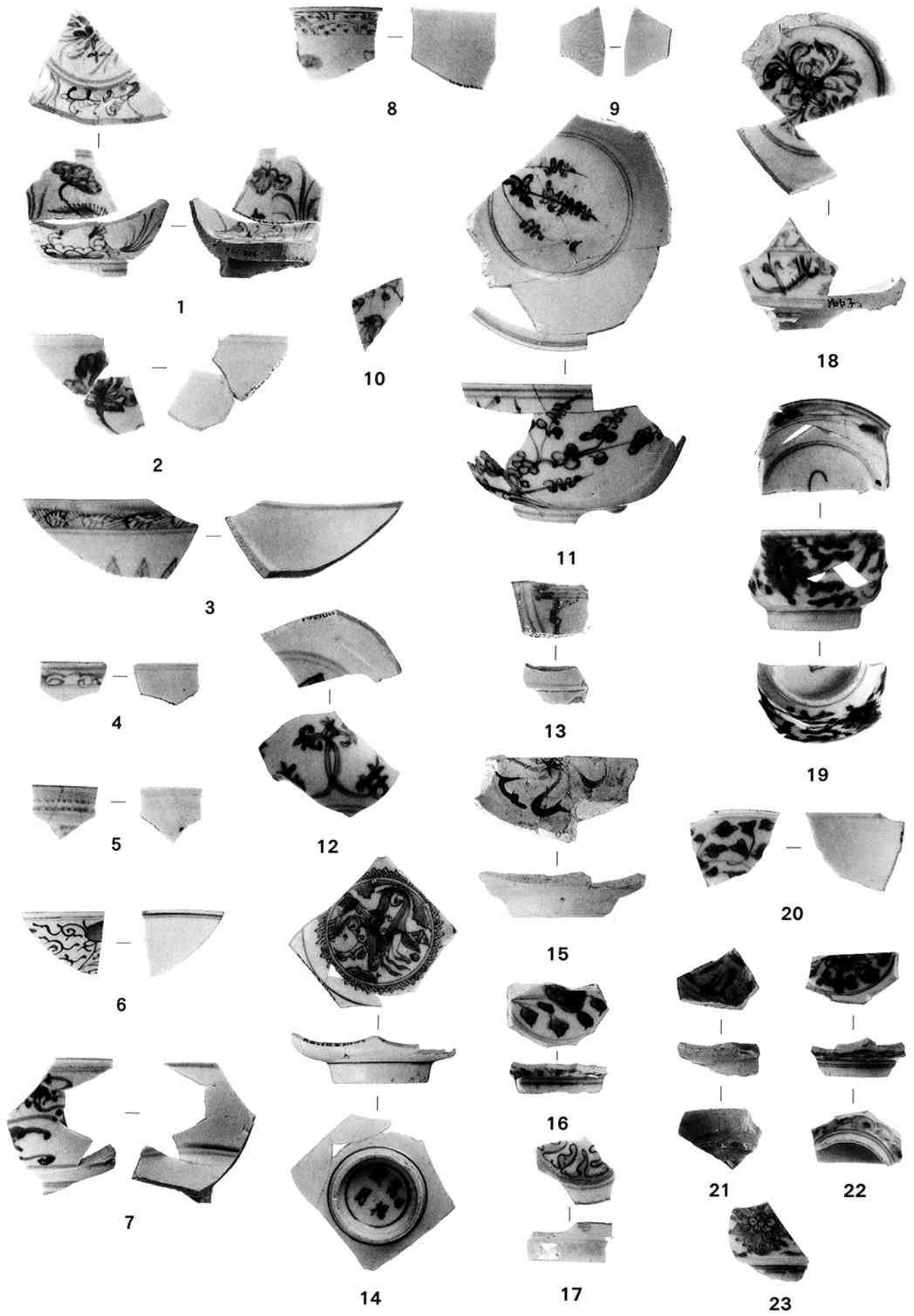
图版35 青磁 (1)



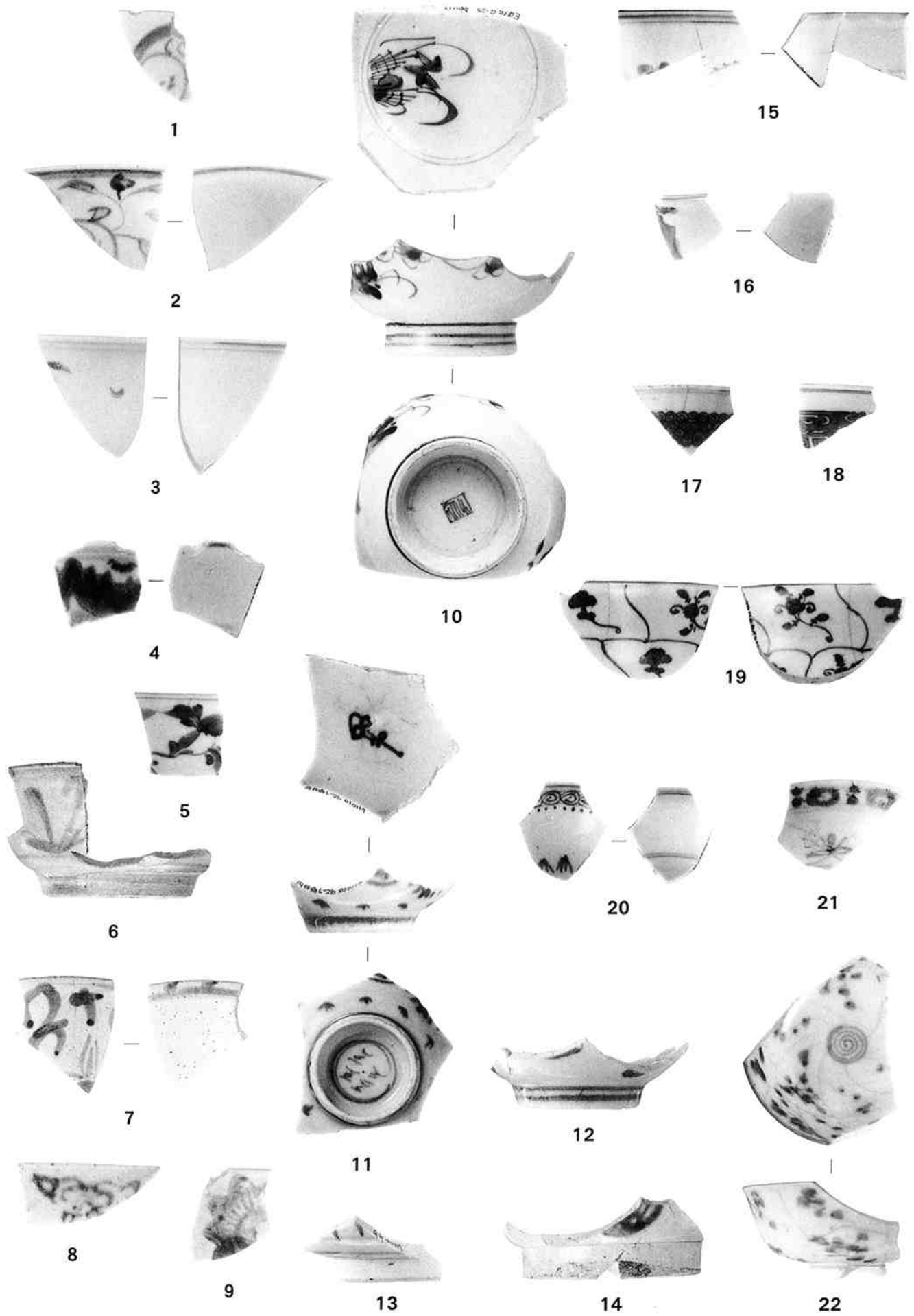
图版36 青磁 (2)



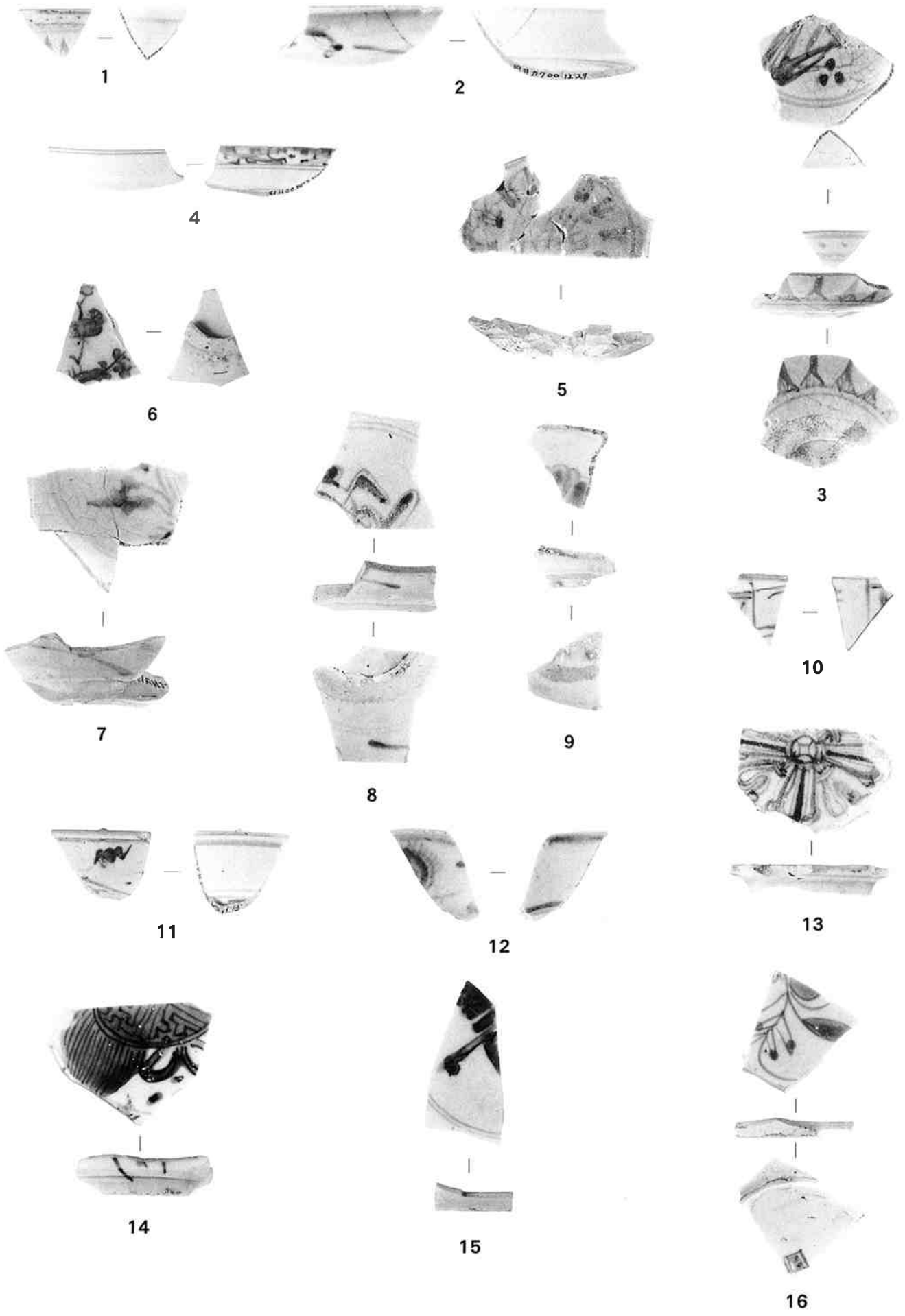
图版37 白磁



图版38 染付 (1)



图版39 染付 (2)



图版40 染付 (3)



17



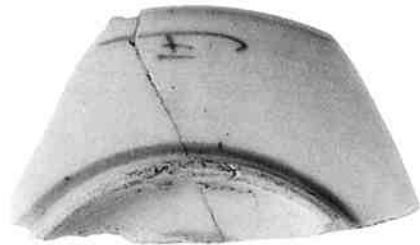
18



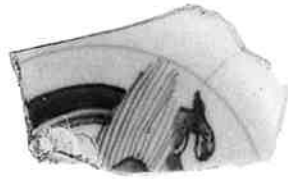
19



18



21



20



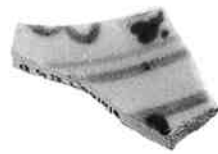
22



23



24

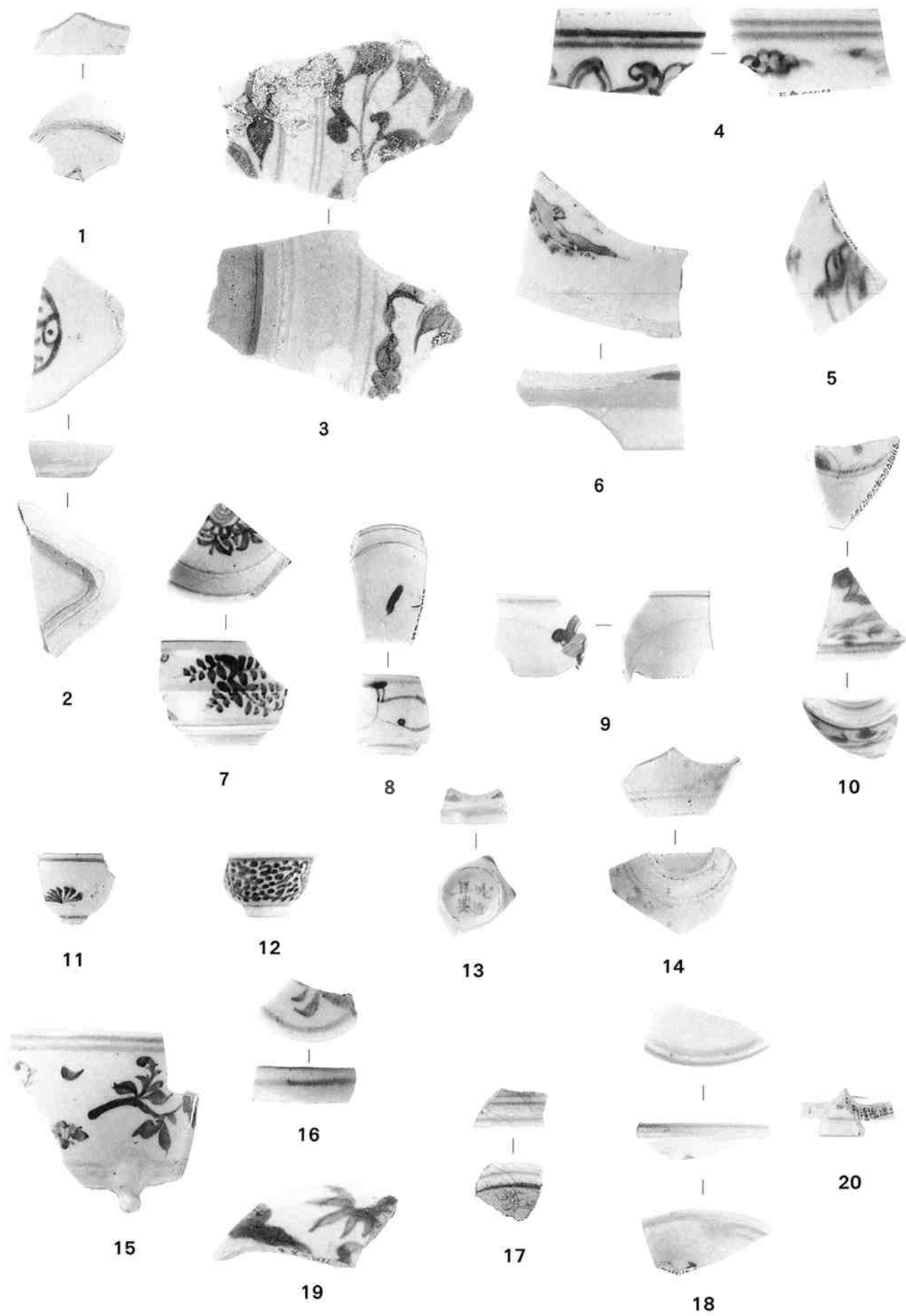


25

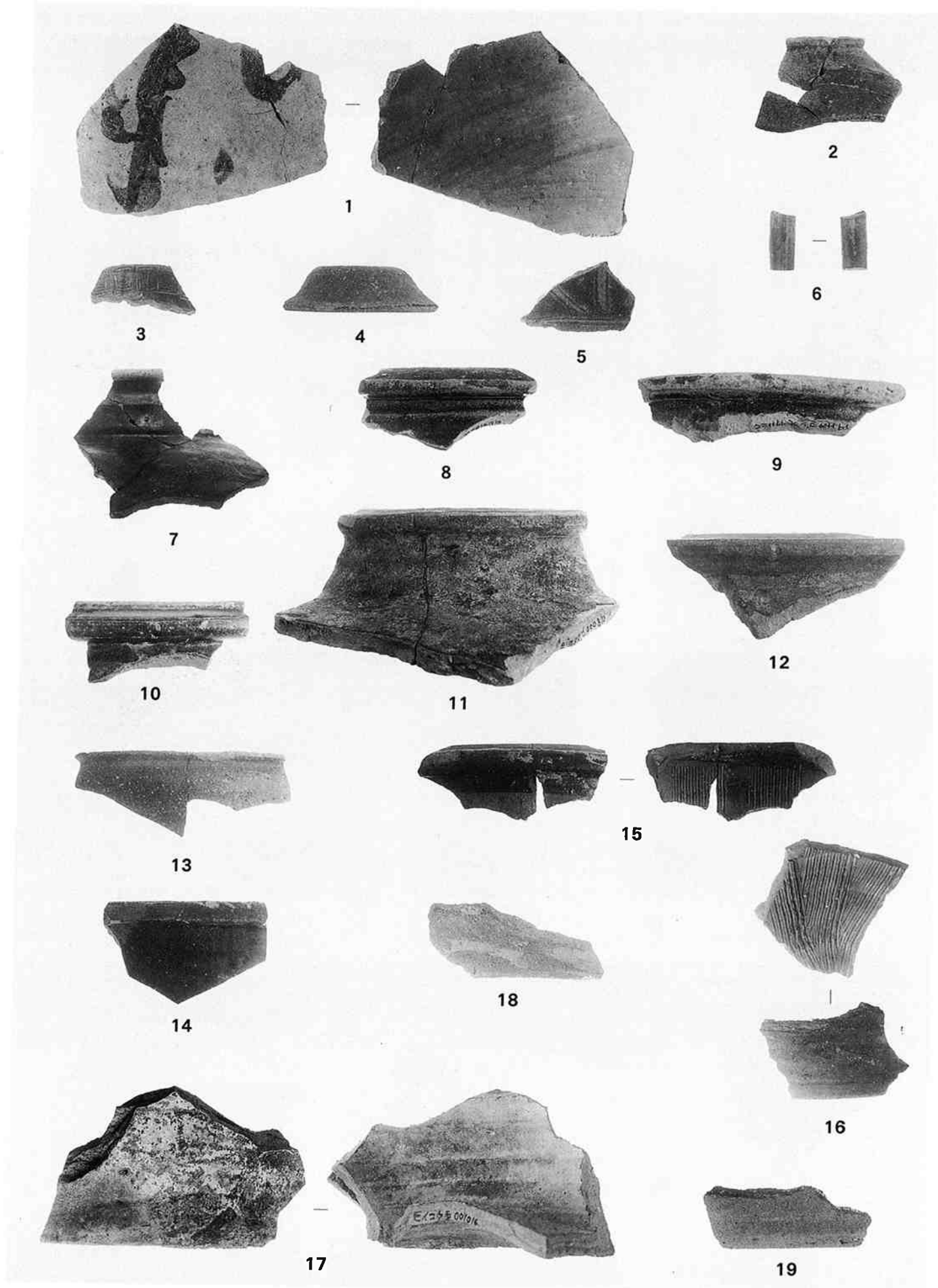


26

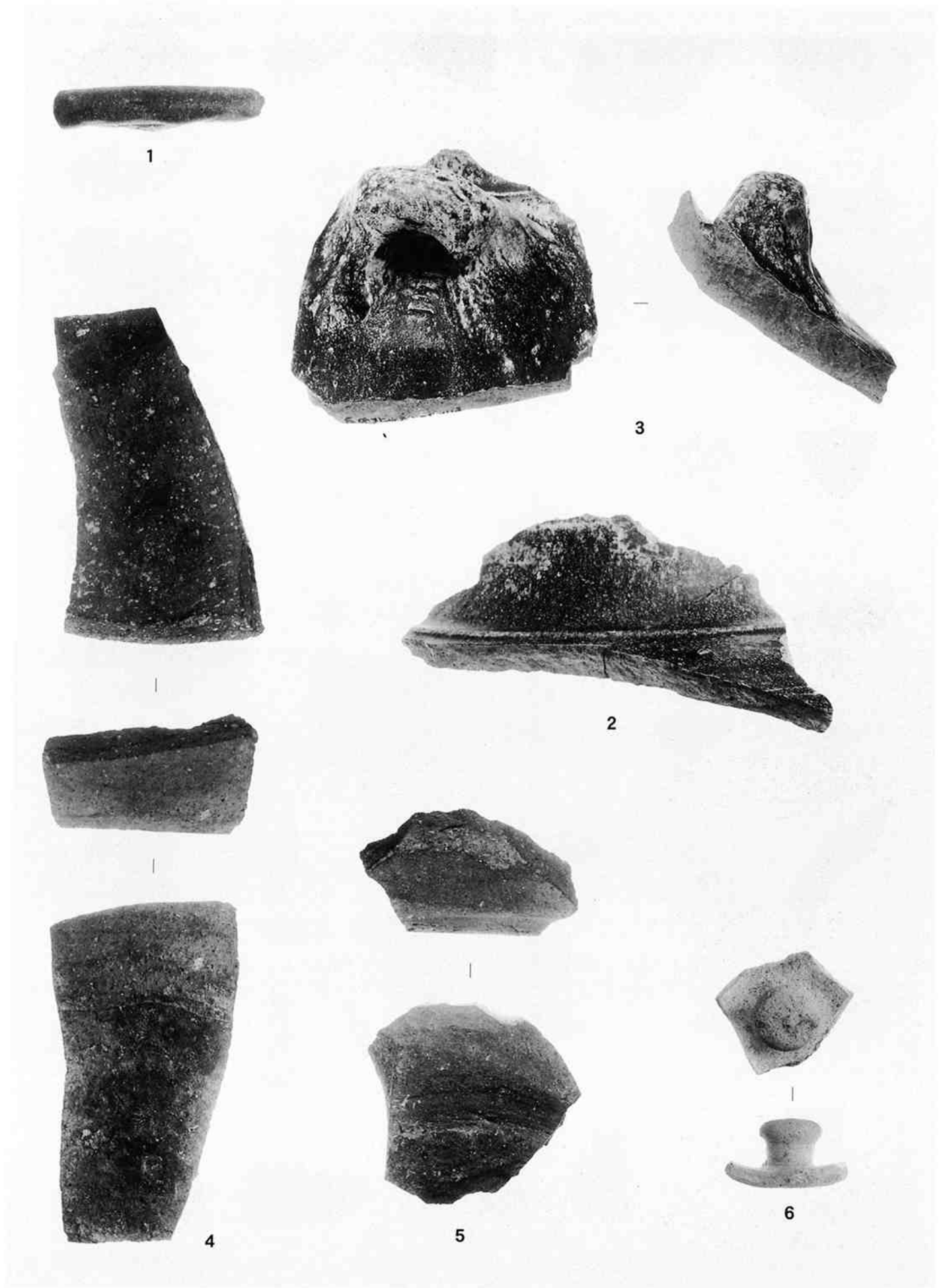
图版41 染付 (4)



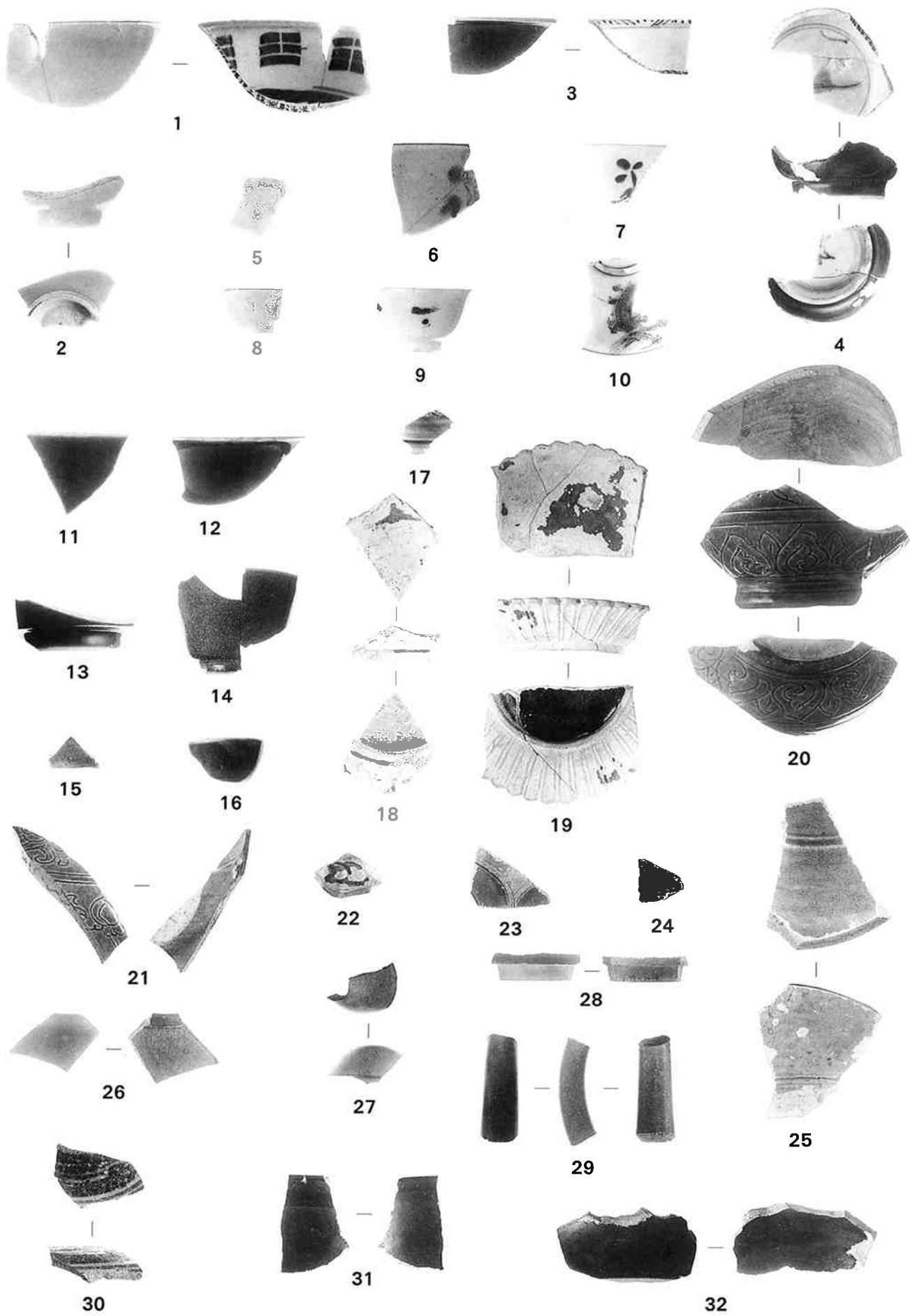
图版42 染付 (5)



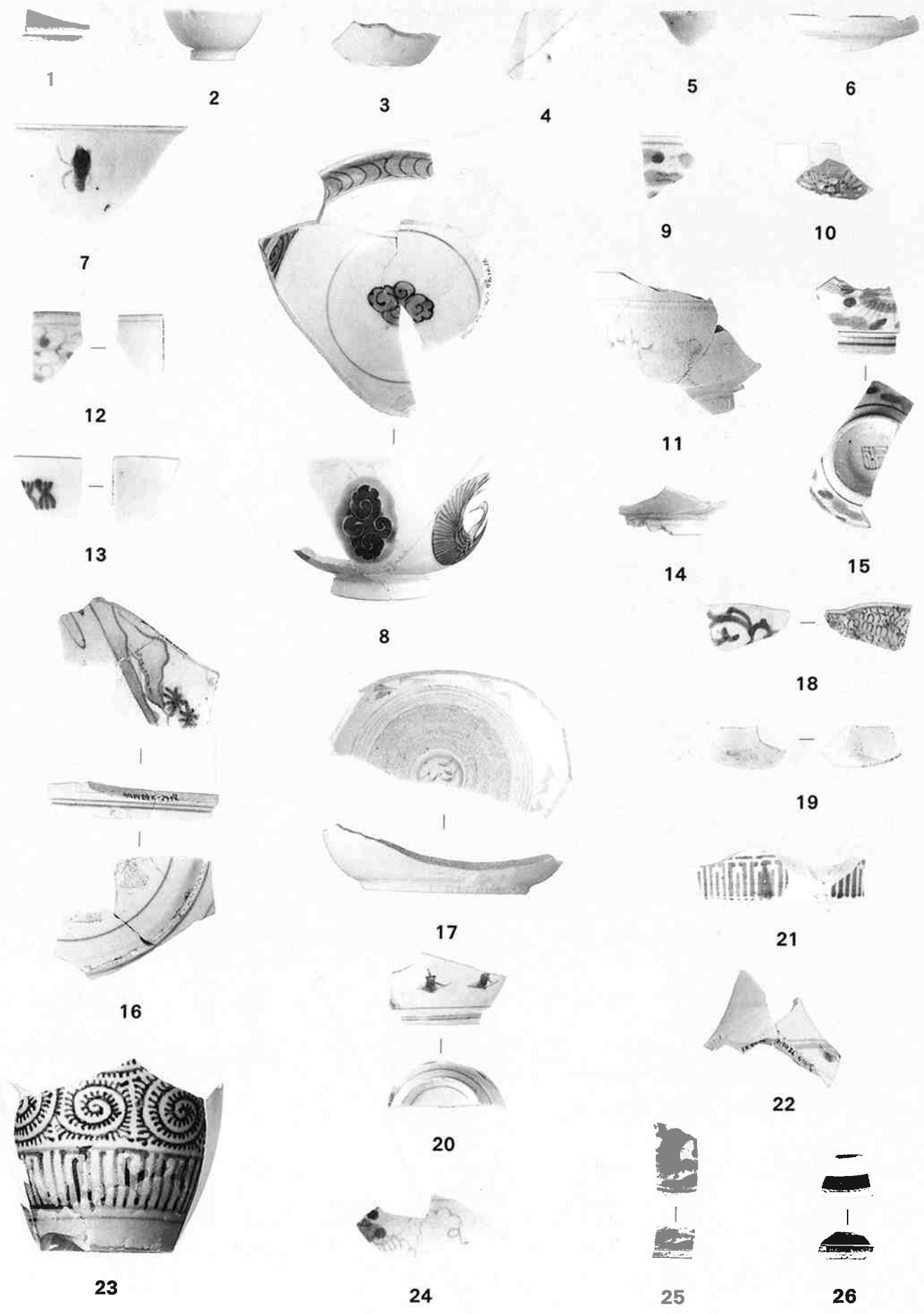
图版43 中国産白地鉄絵・中国産褐釉陶器



図版44 タイ産褐釉陶器・タイ産半練



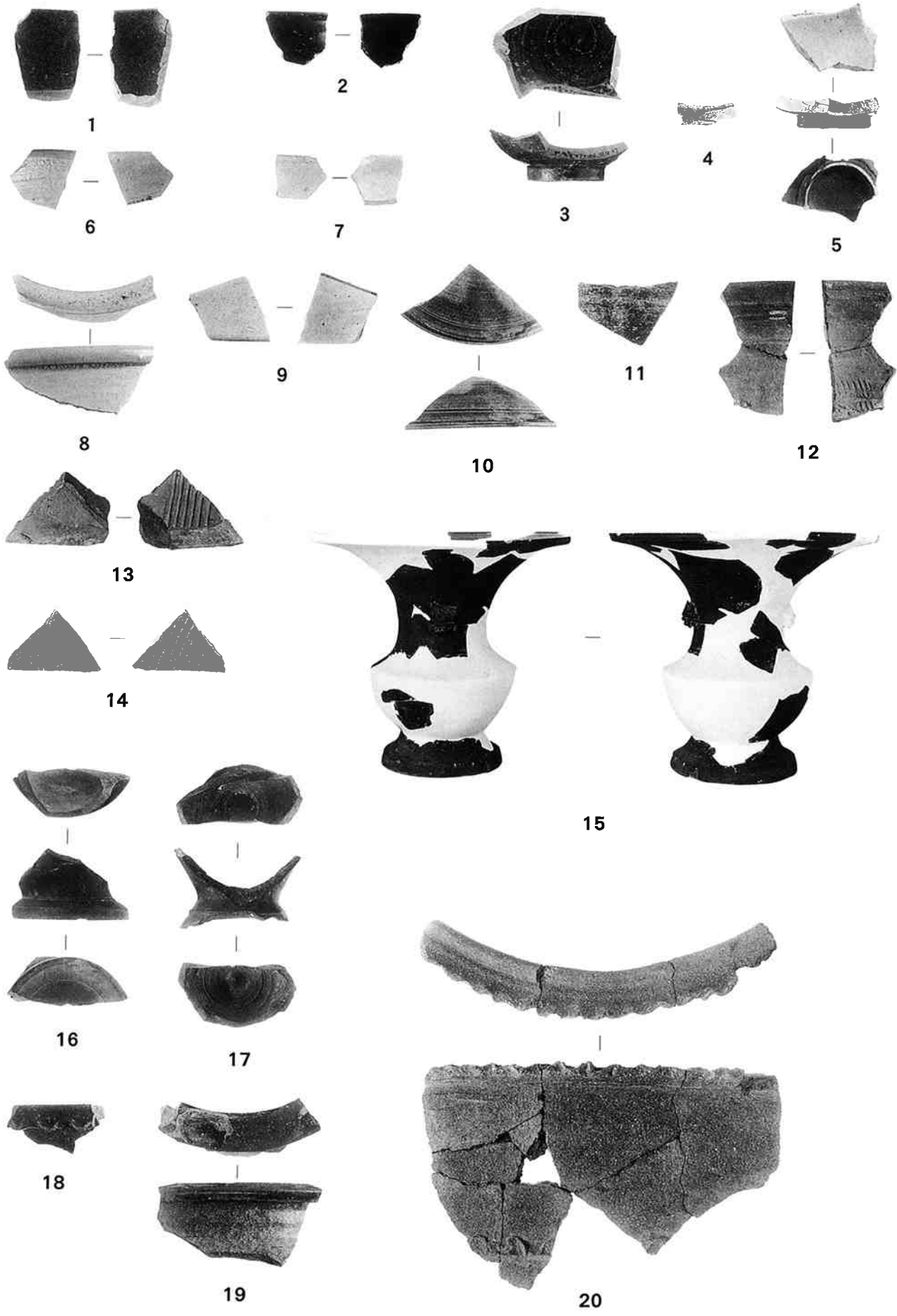
図版45 その他の輸入陶磁器



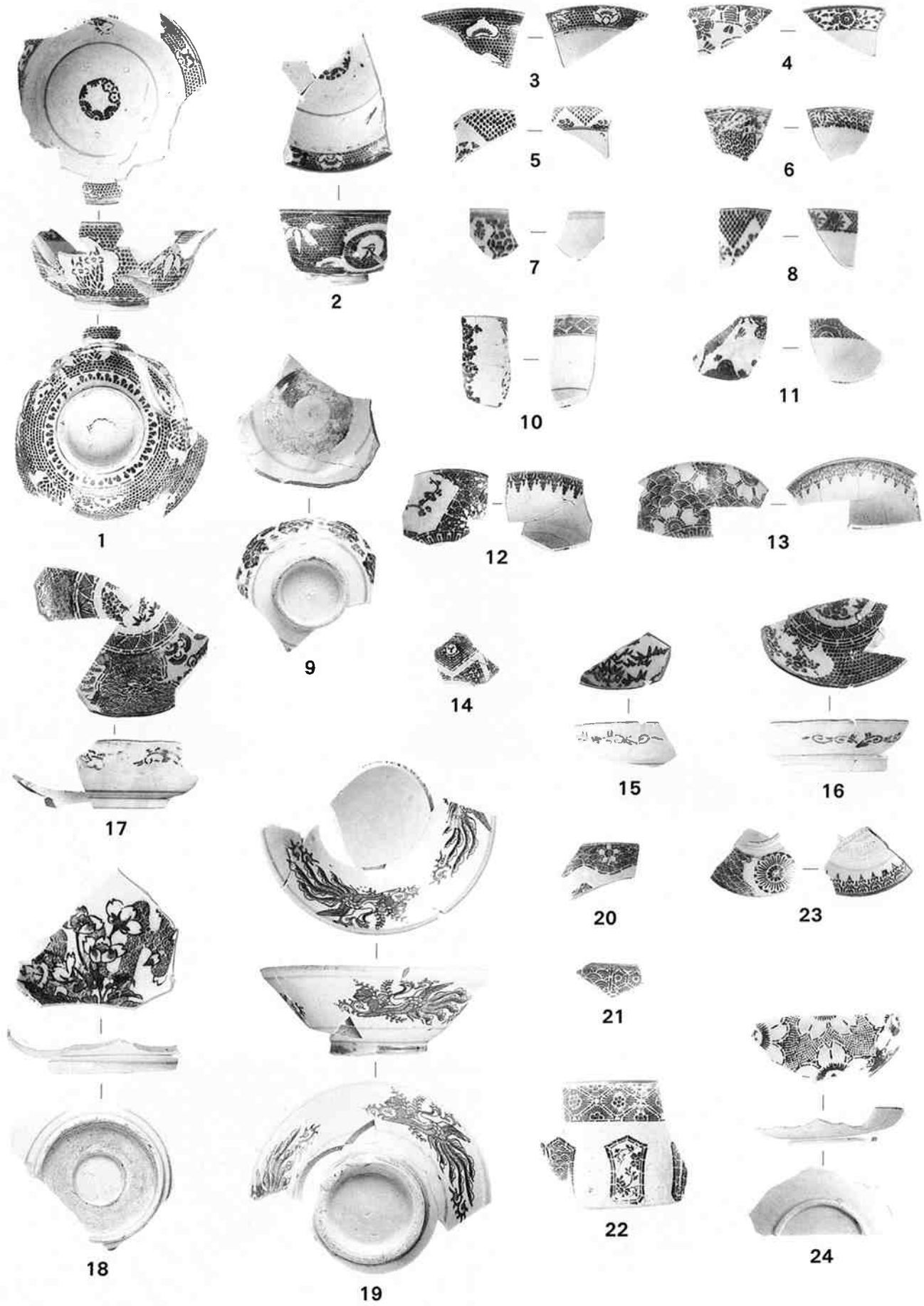
图版46 本土産陶磁器 (1)



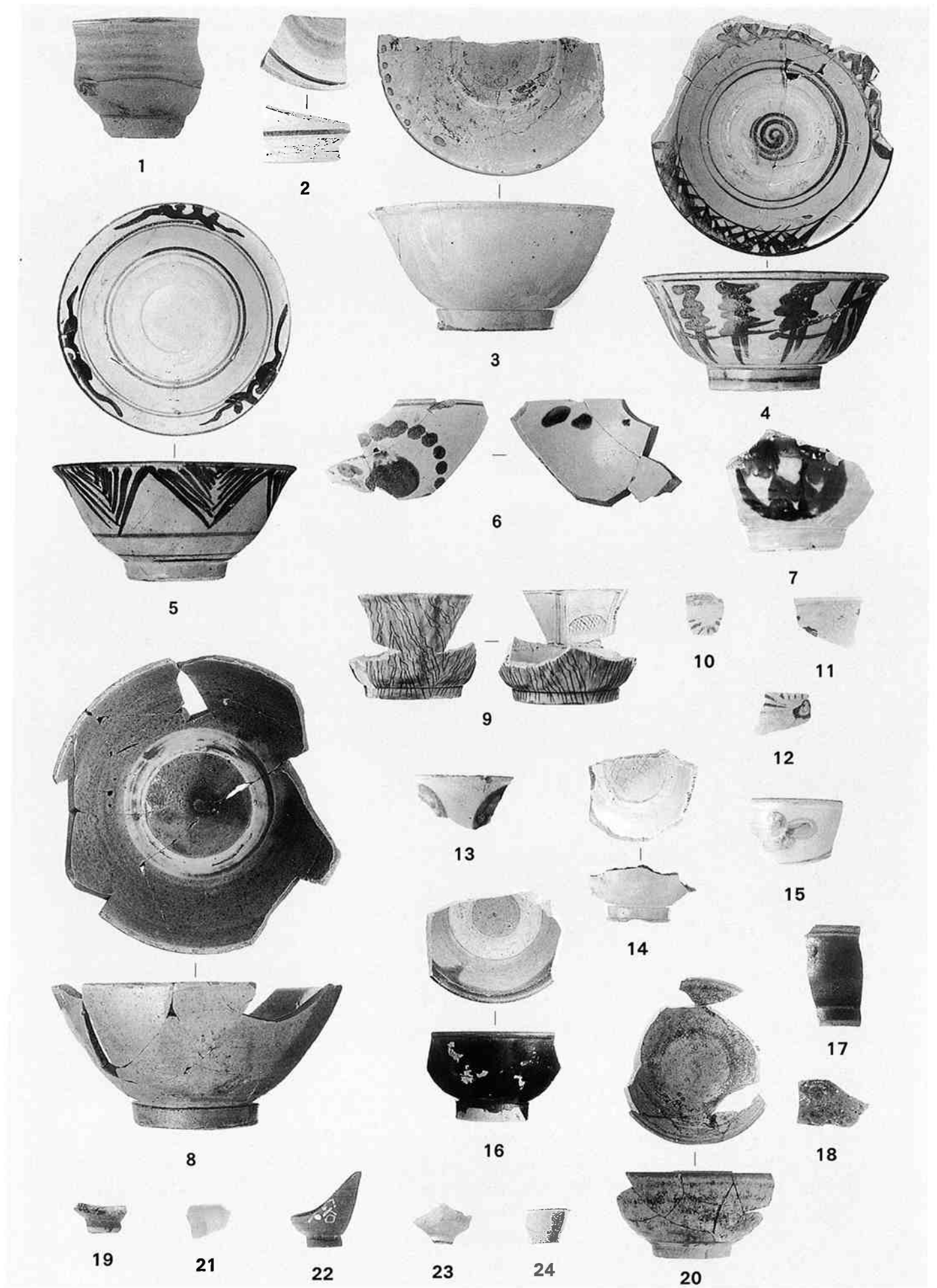
図版47 本土産陶磁器 (2)



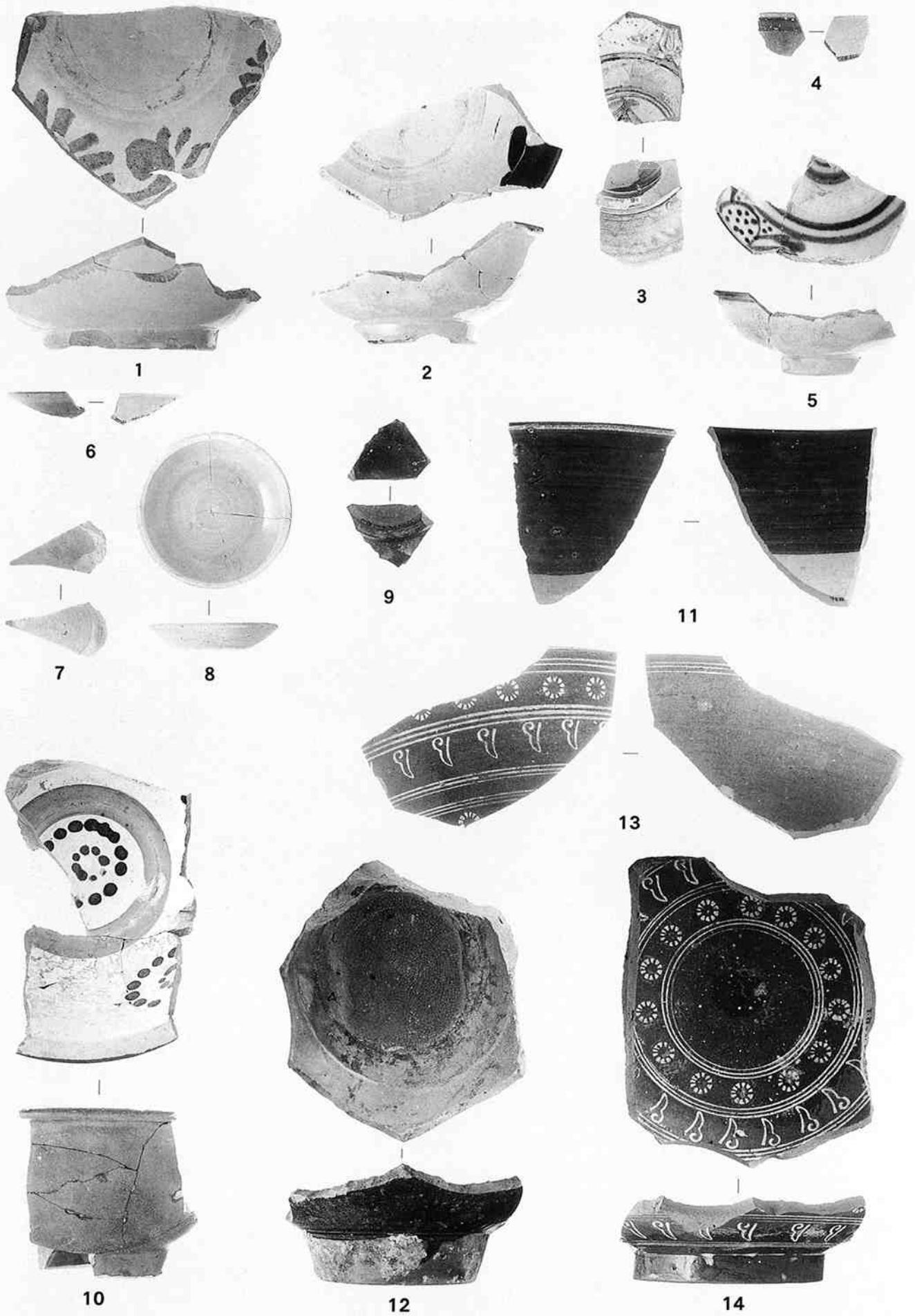
图版48 本土産陶磁器 (3)



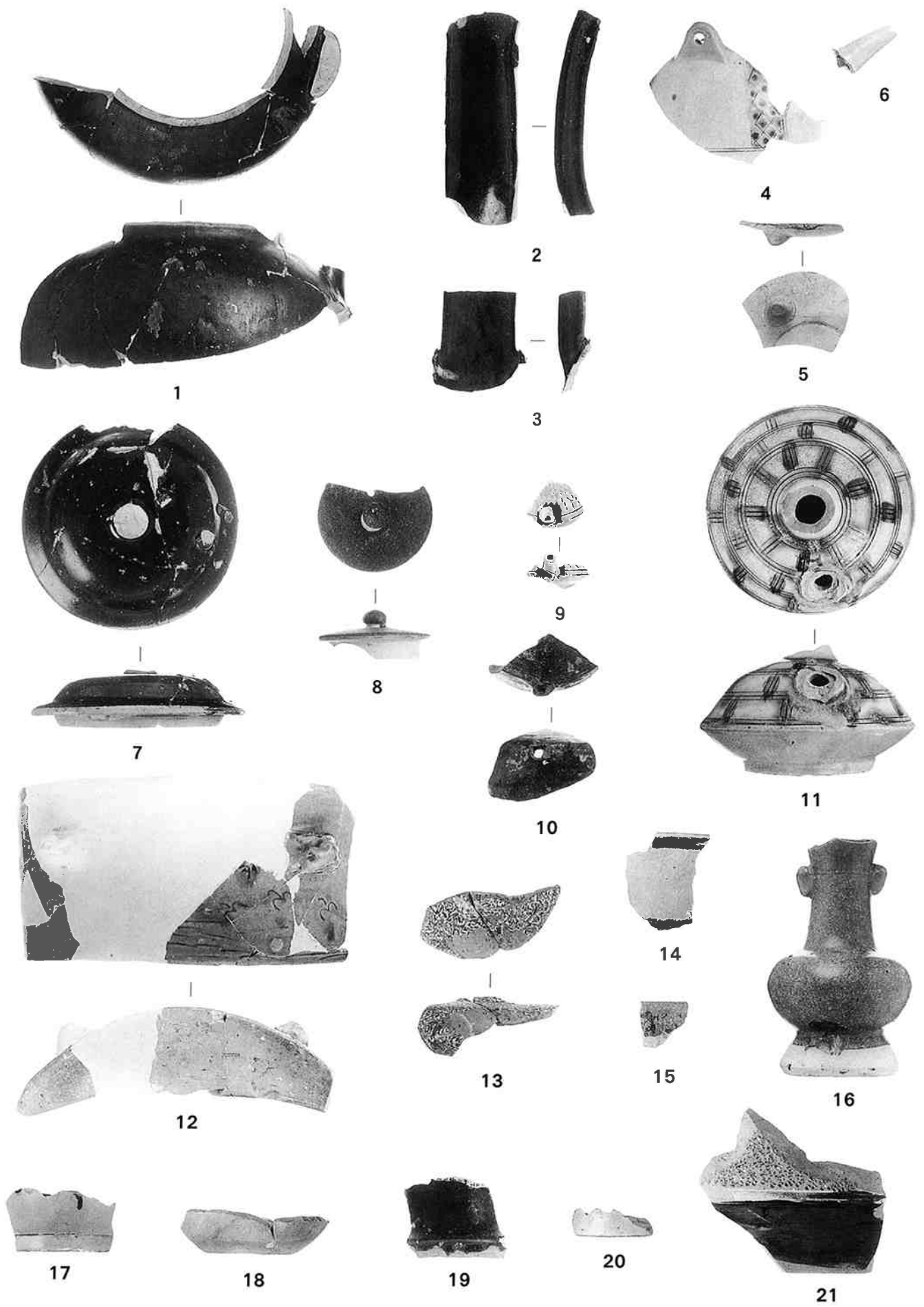
图版49 本土産陶磁器 (4)



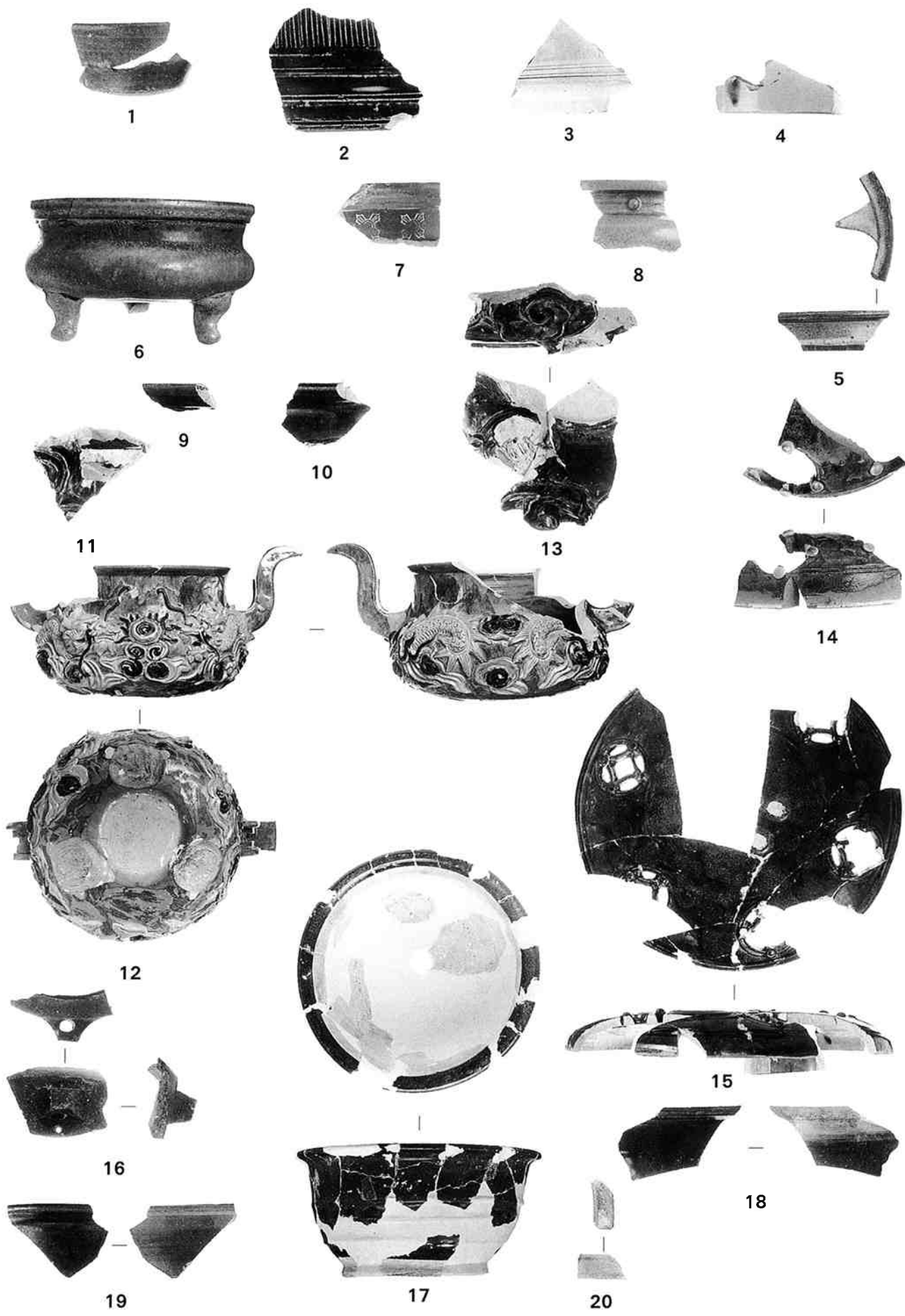
図版50 沖縄産施釉陶器 (1)



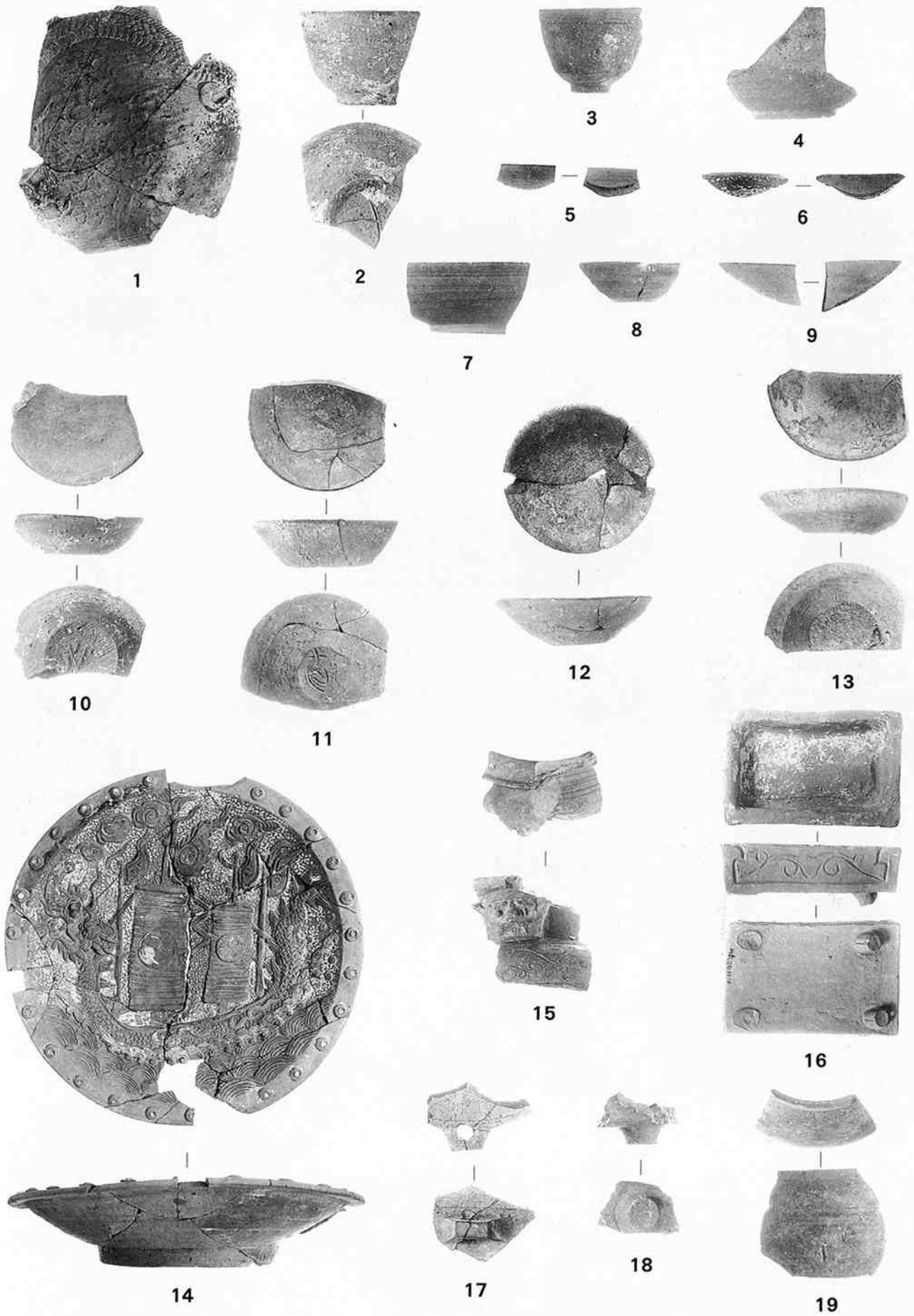
図版51 沖縄産施釉陶器 (2)



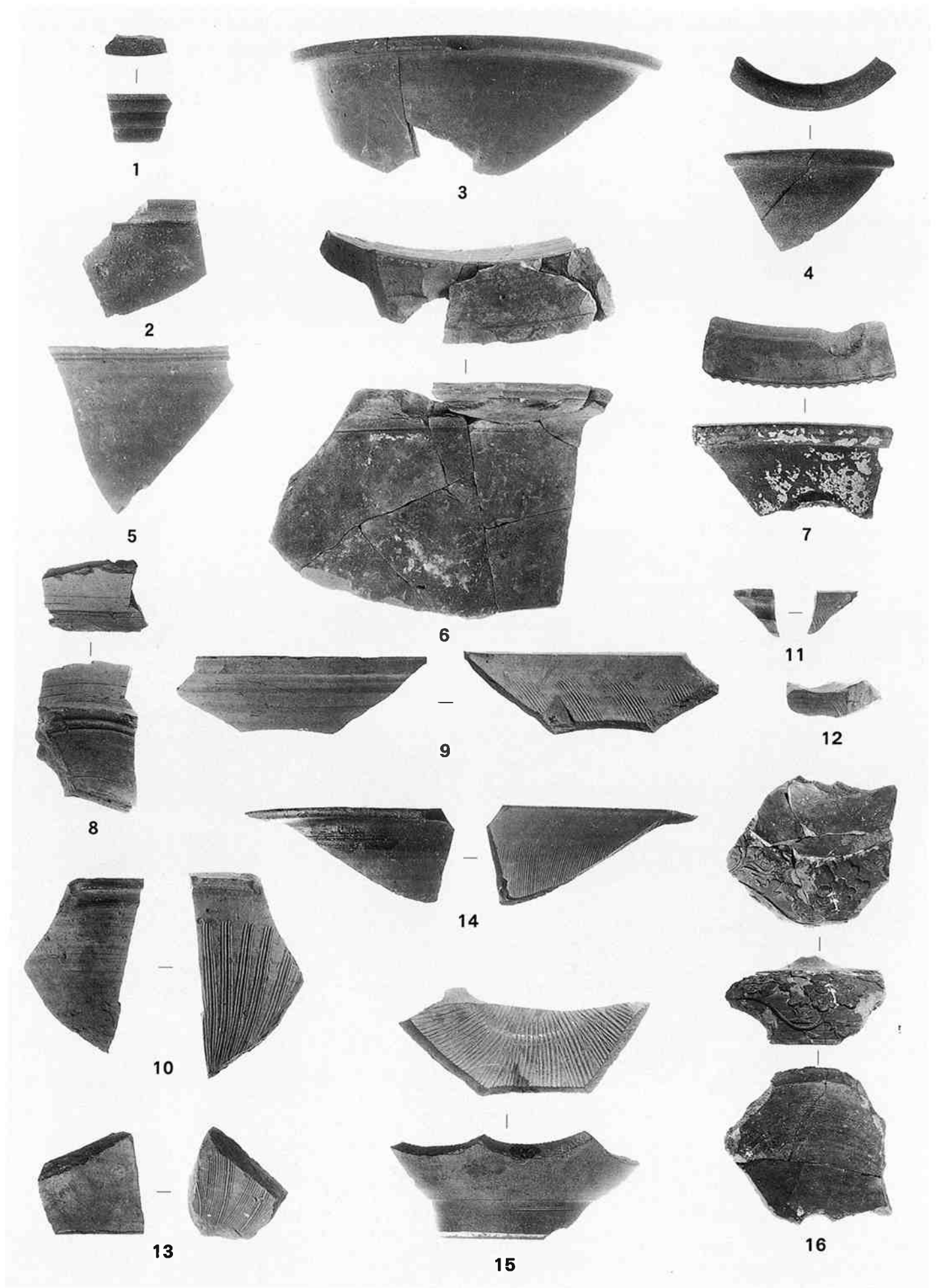
図版52 沖縄産施釉陶器 (3)



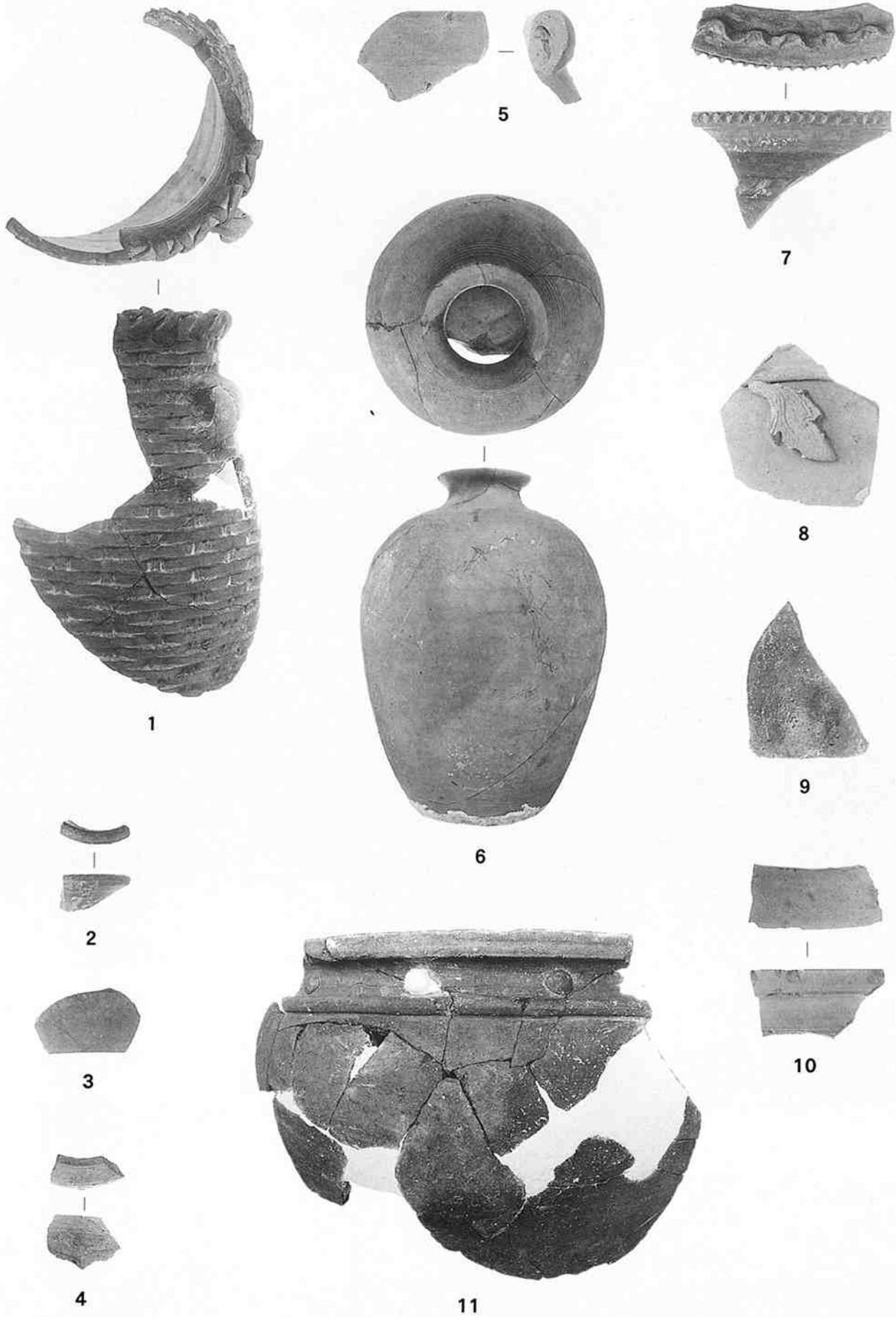
図版53 沖縄産施釉陶器 (4)



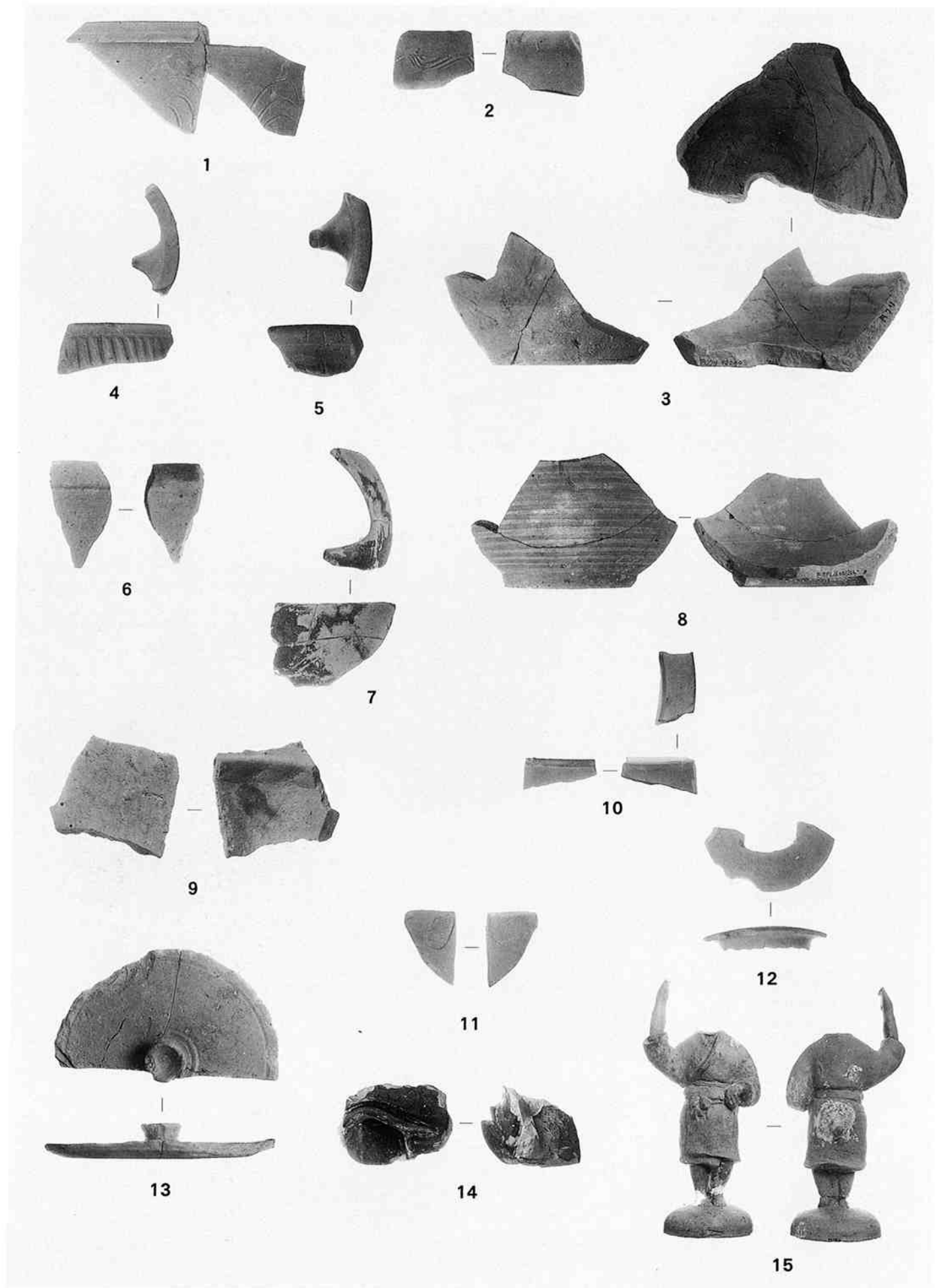
図版54 沖縄産無釉陶器 (1)



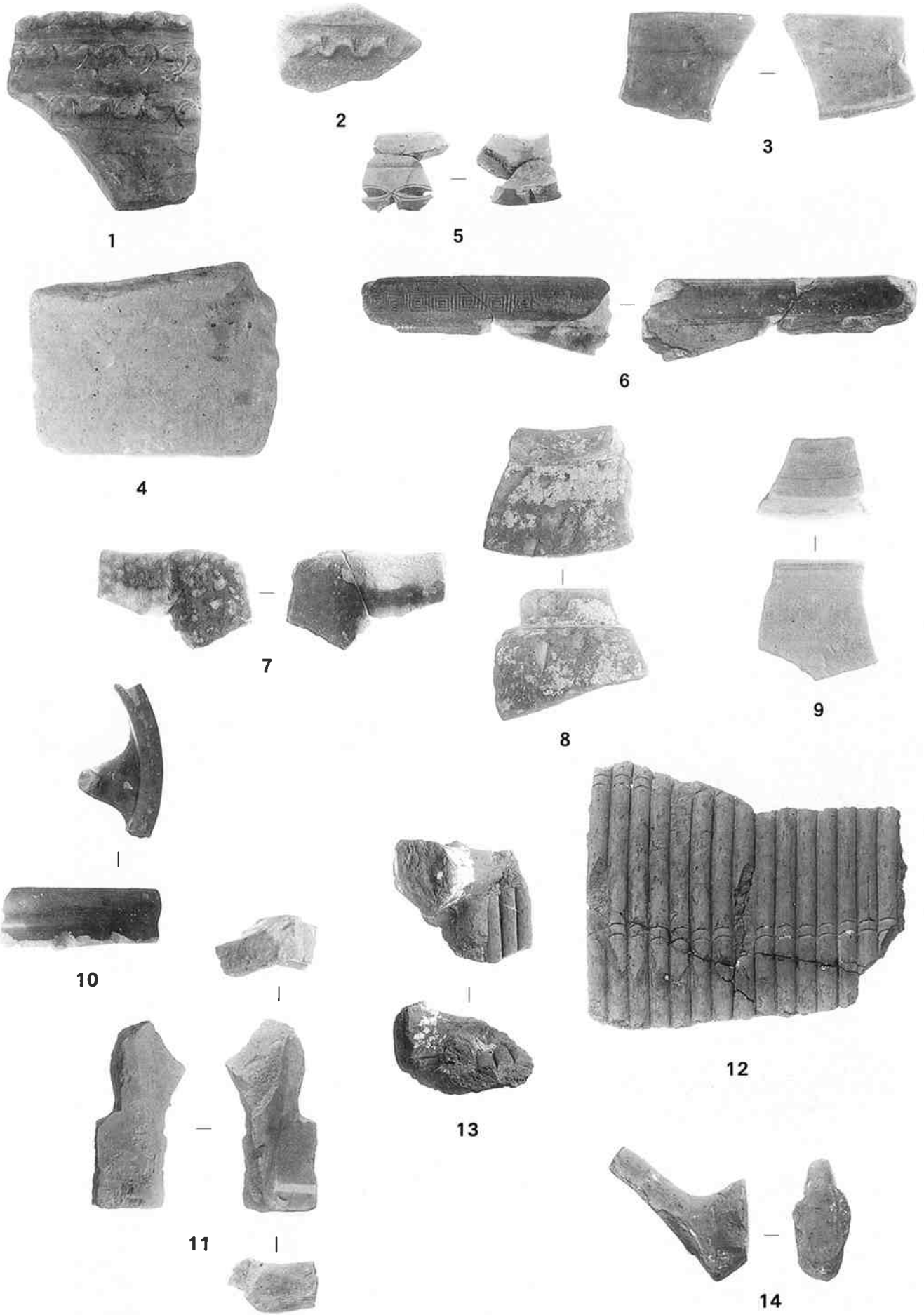
図版55 沖縄産無釉陶器 (2)



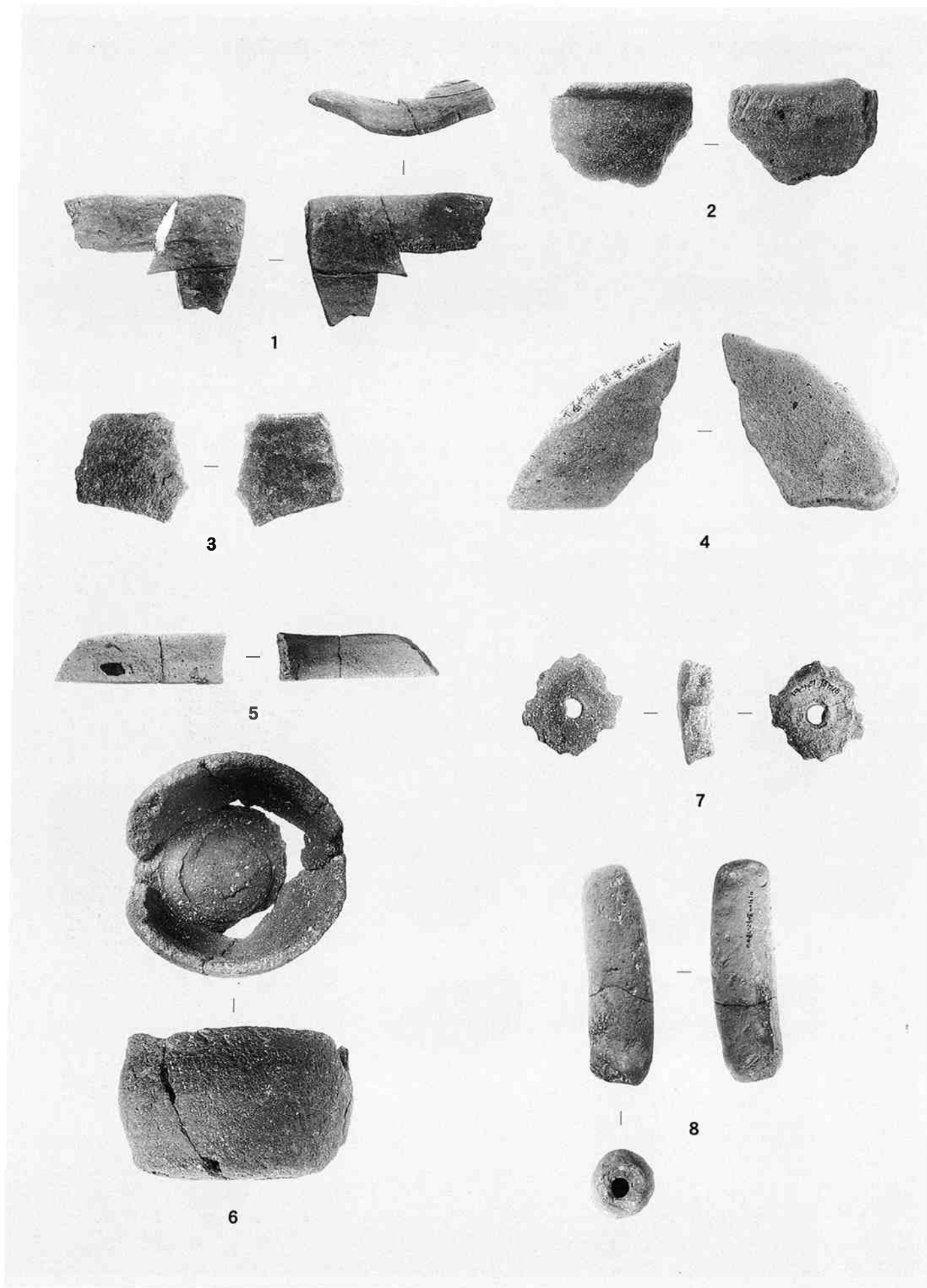
図版56 沖縄産無釉陶器 (3)



図版57 陶質土器



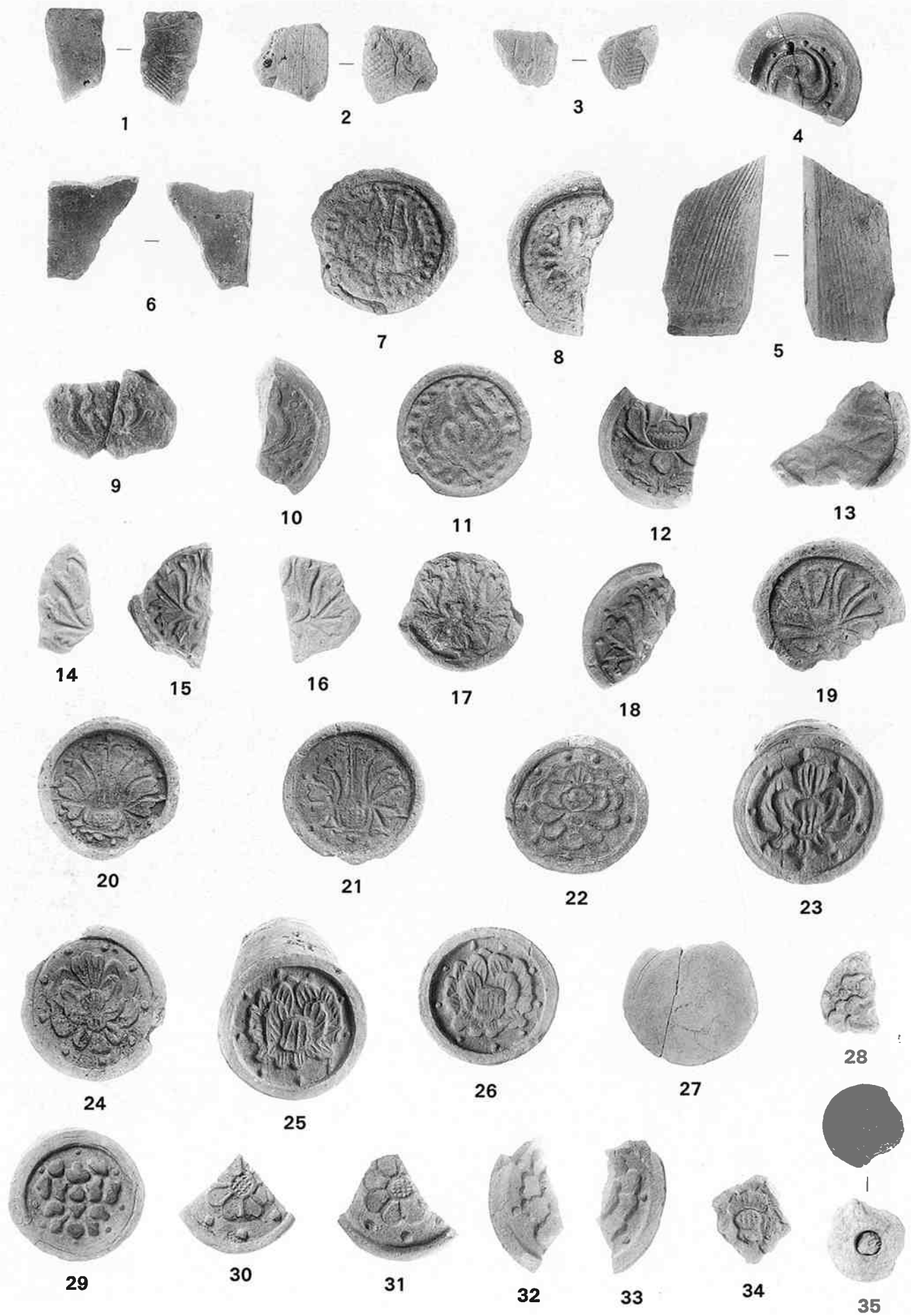
図版58 瓦質土器



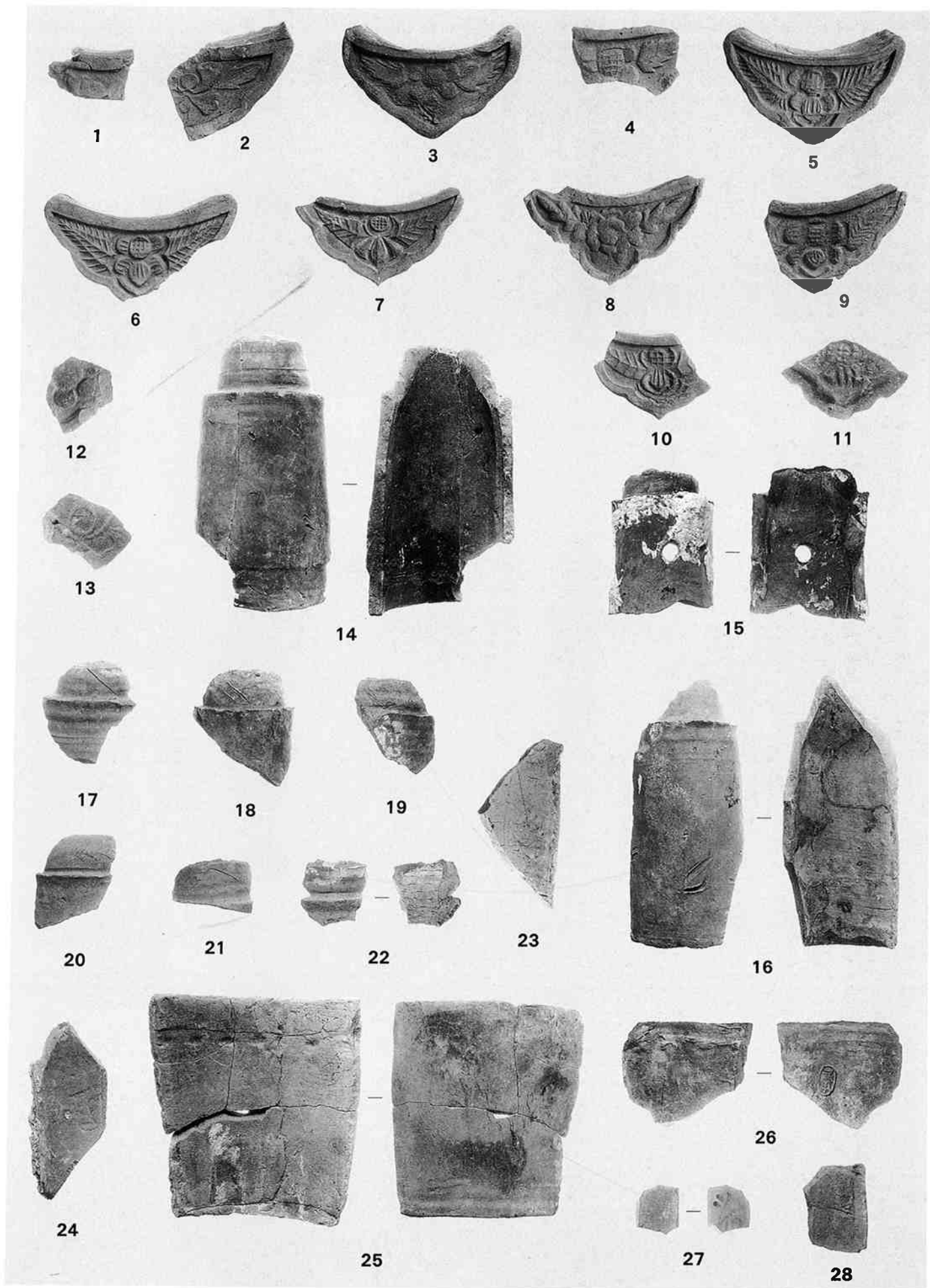
図版59 土器・土製品



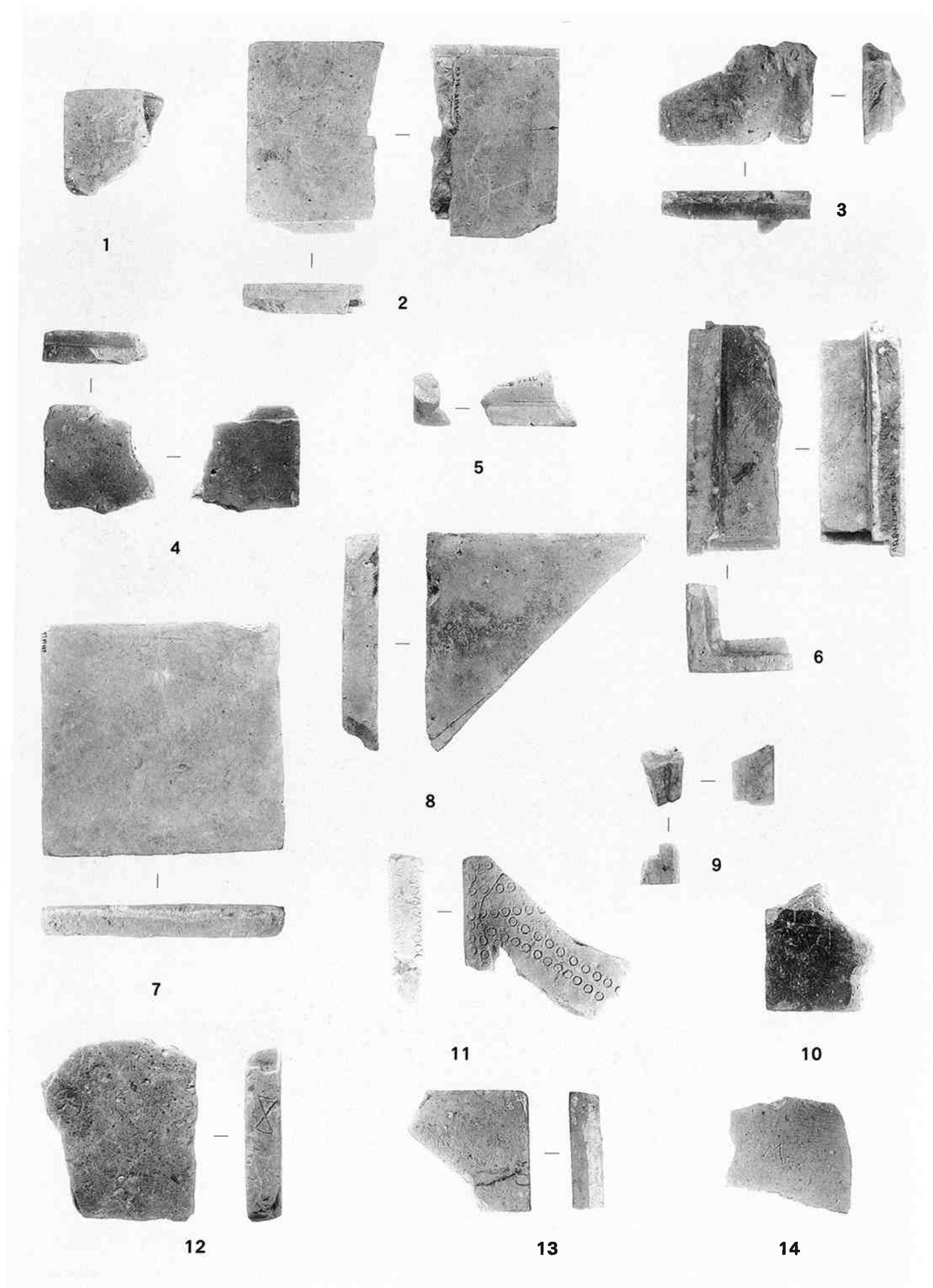
图版60 瓦 (1) 鬼瓦



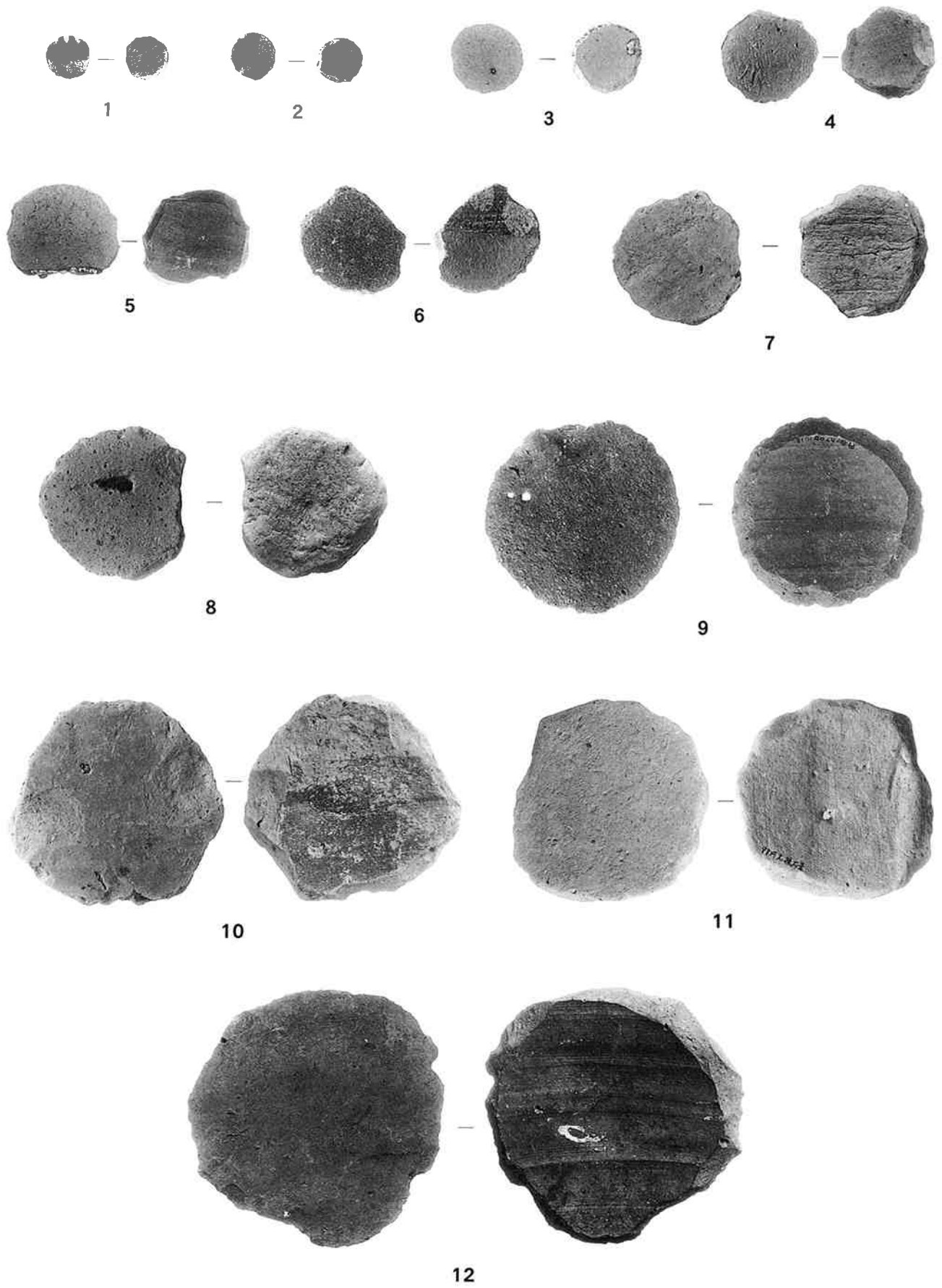
图版61 瓦 (2)



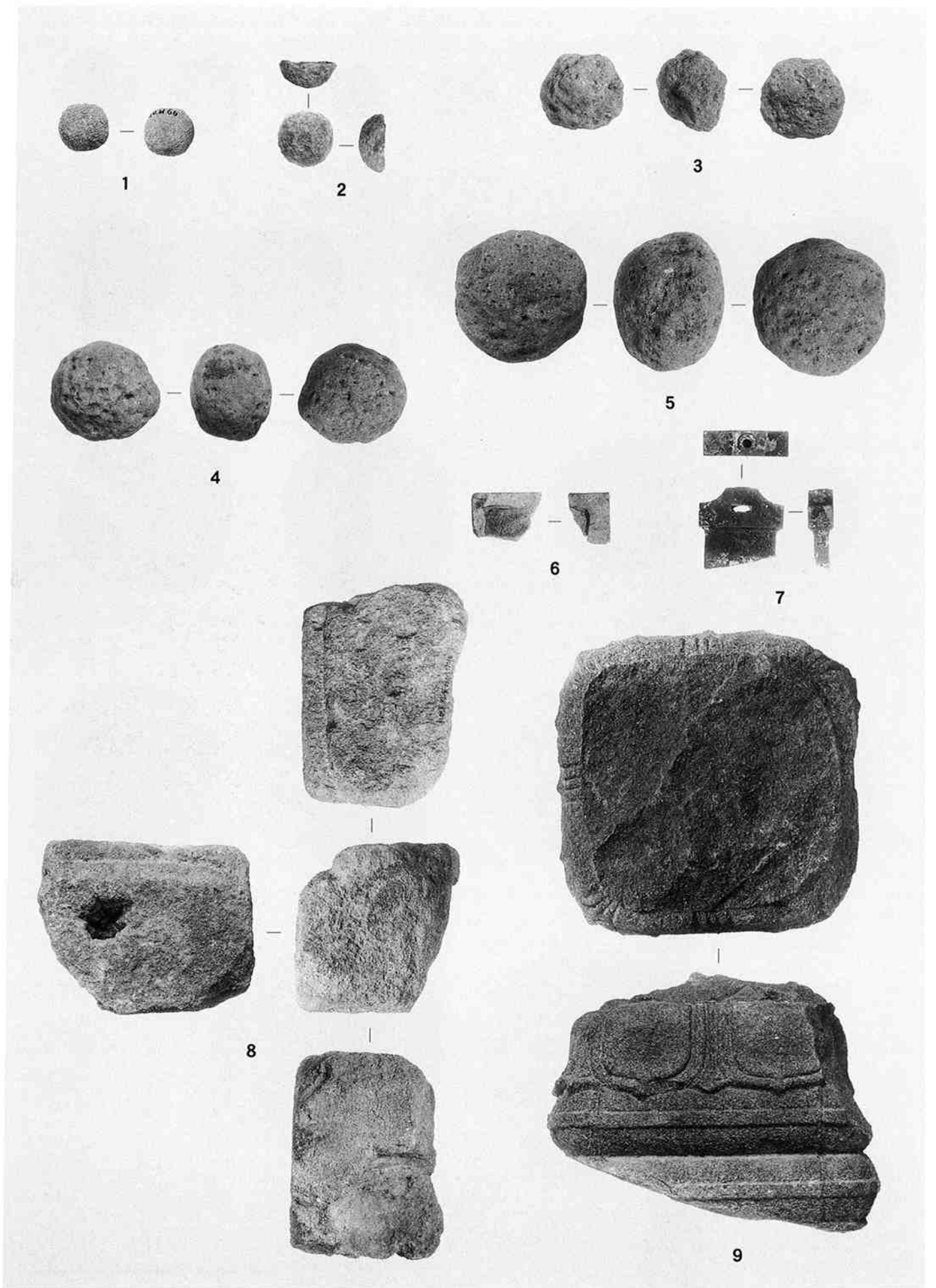
图版62 瓦 (3)



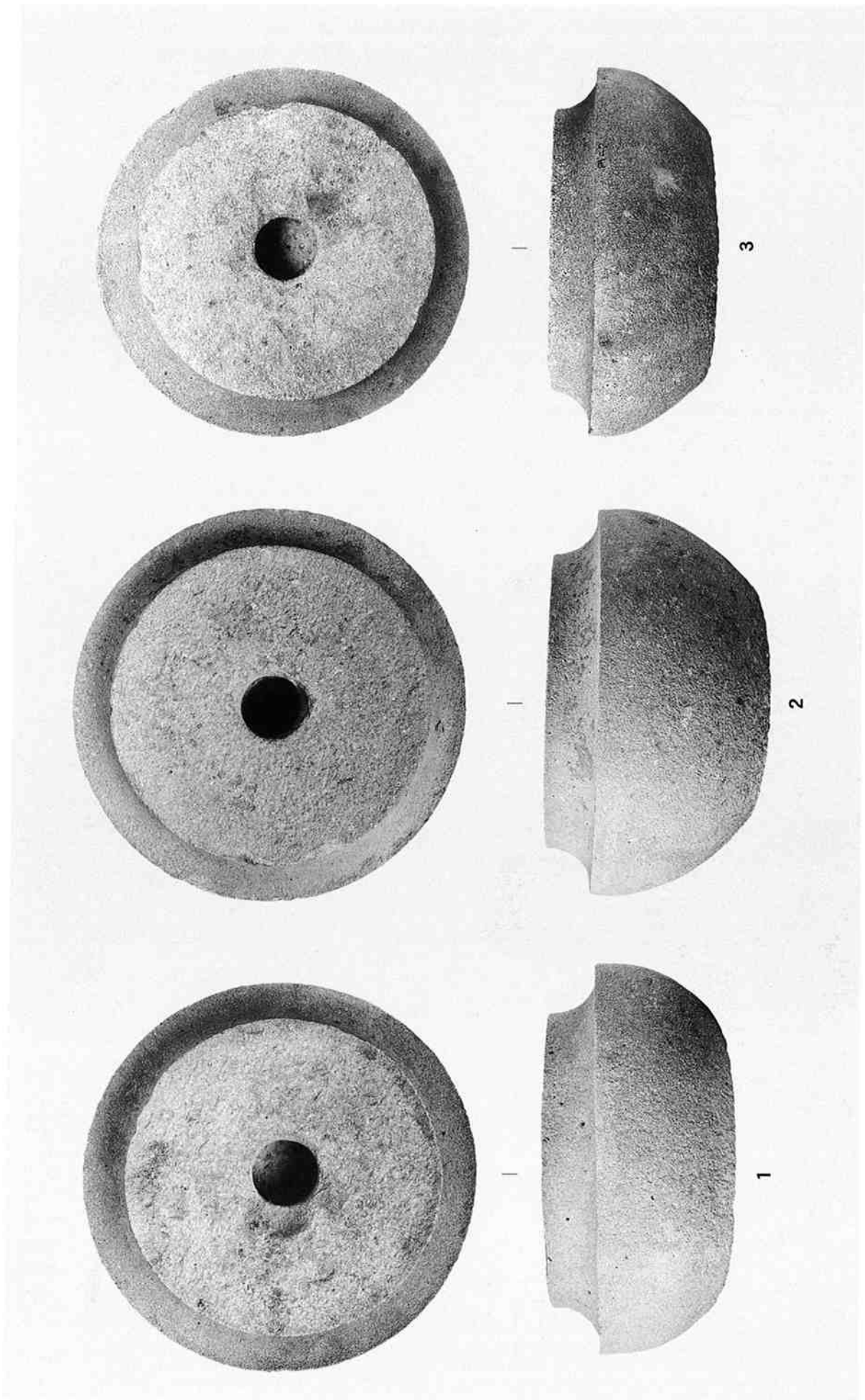
图版63 埴



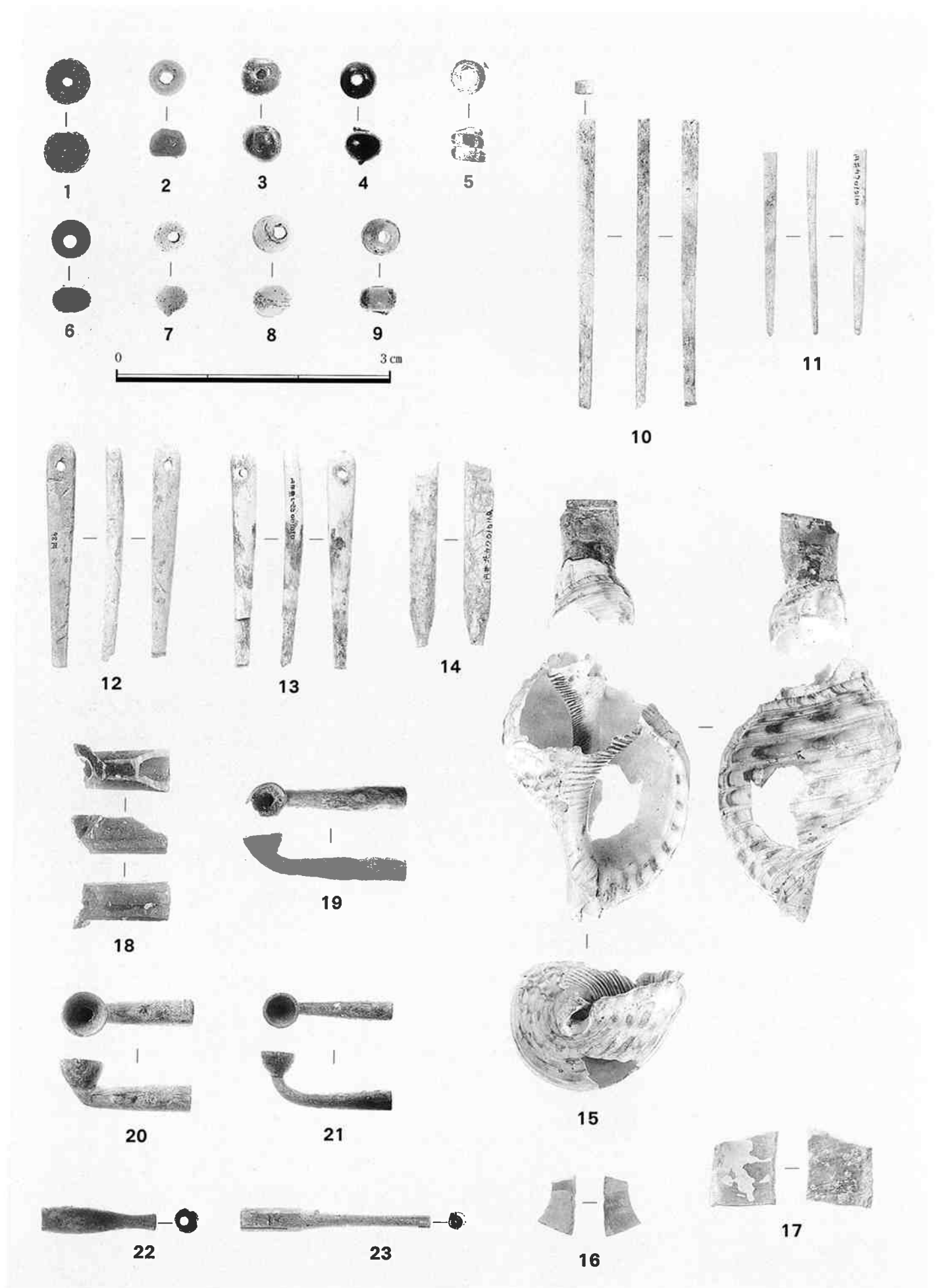
図版64 円盤状製品



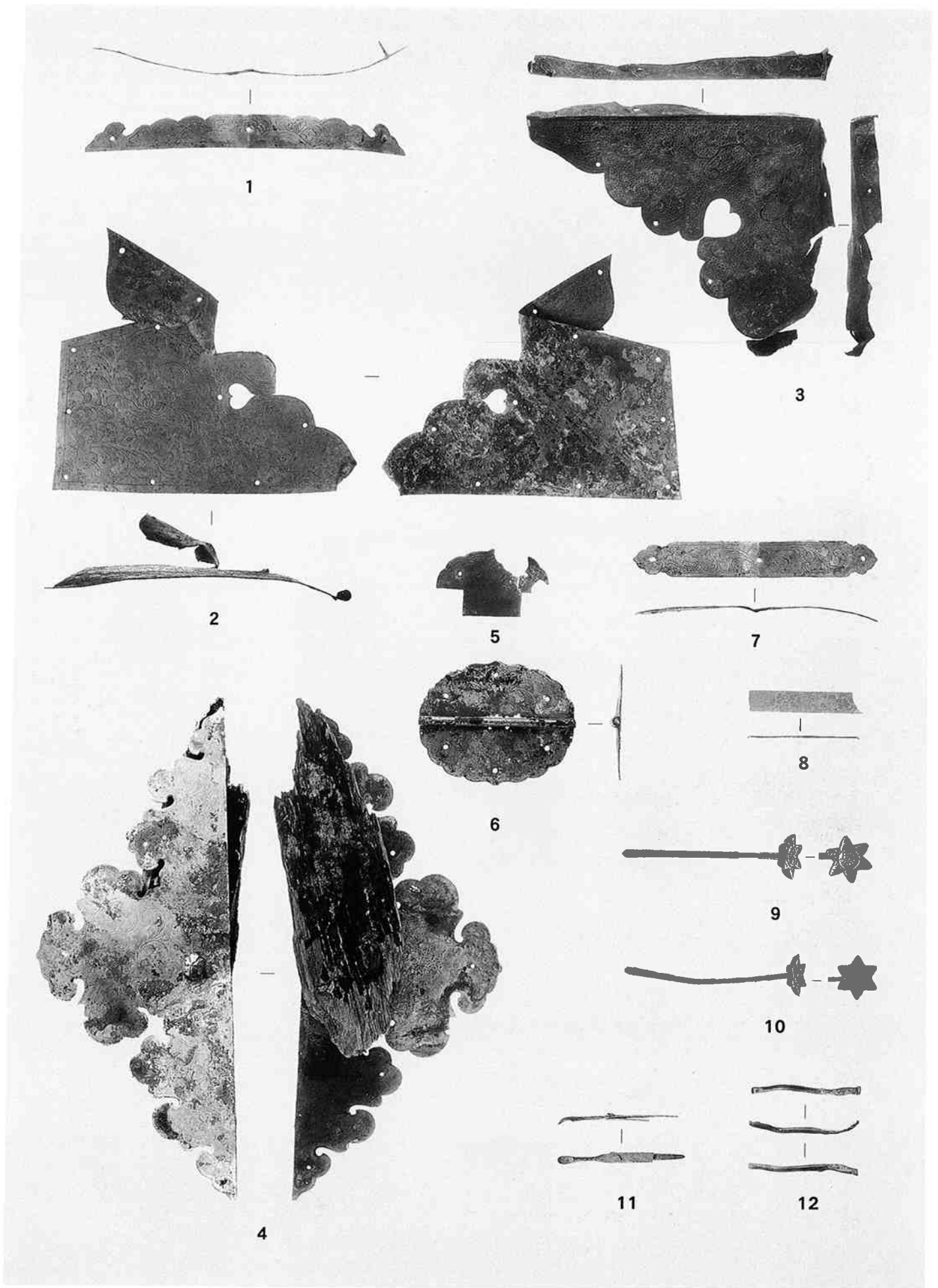
图版65 硯・石器・石造製品



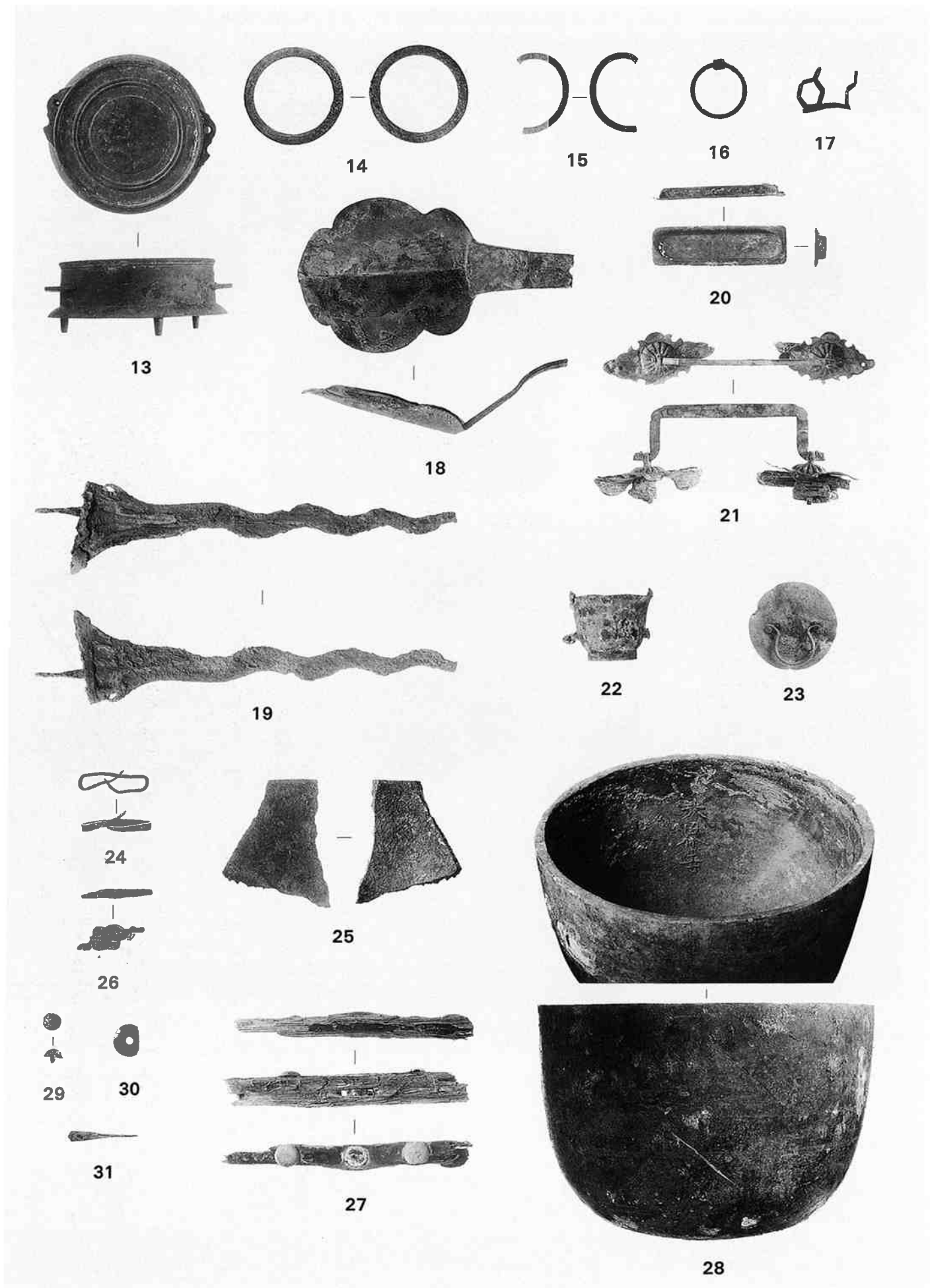
図版66 石製品 (礎石)



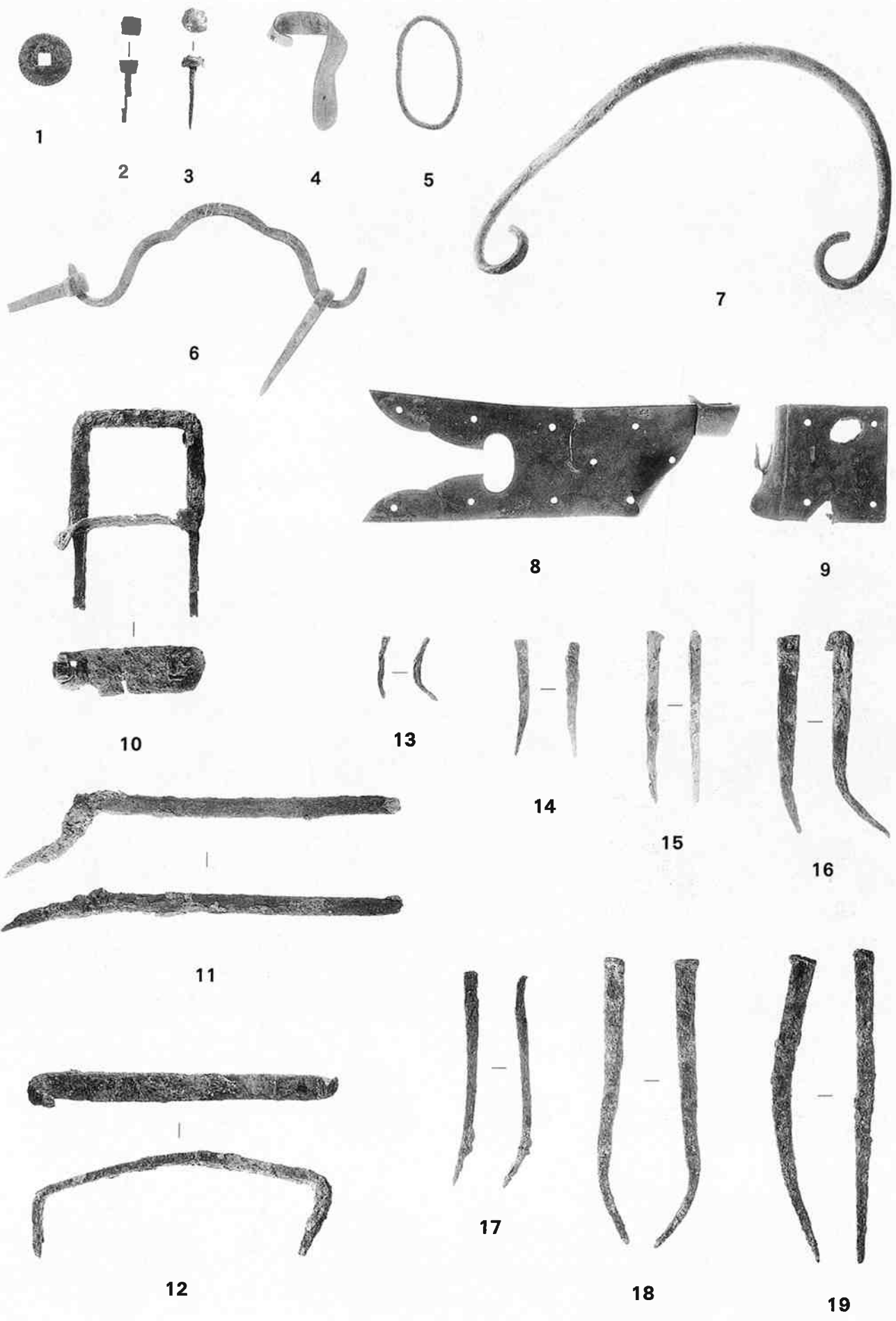
図版67 玉・骨製品・貝製品・煙管



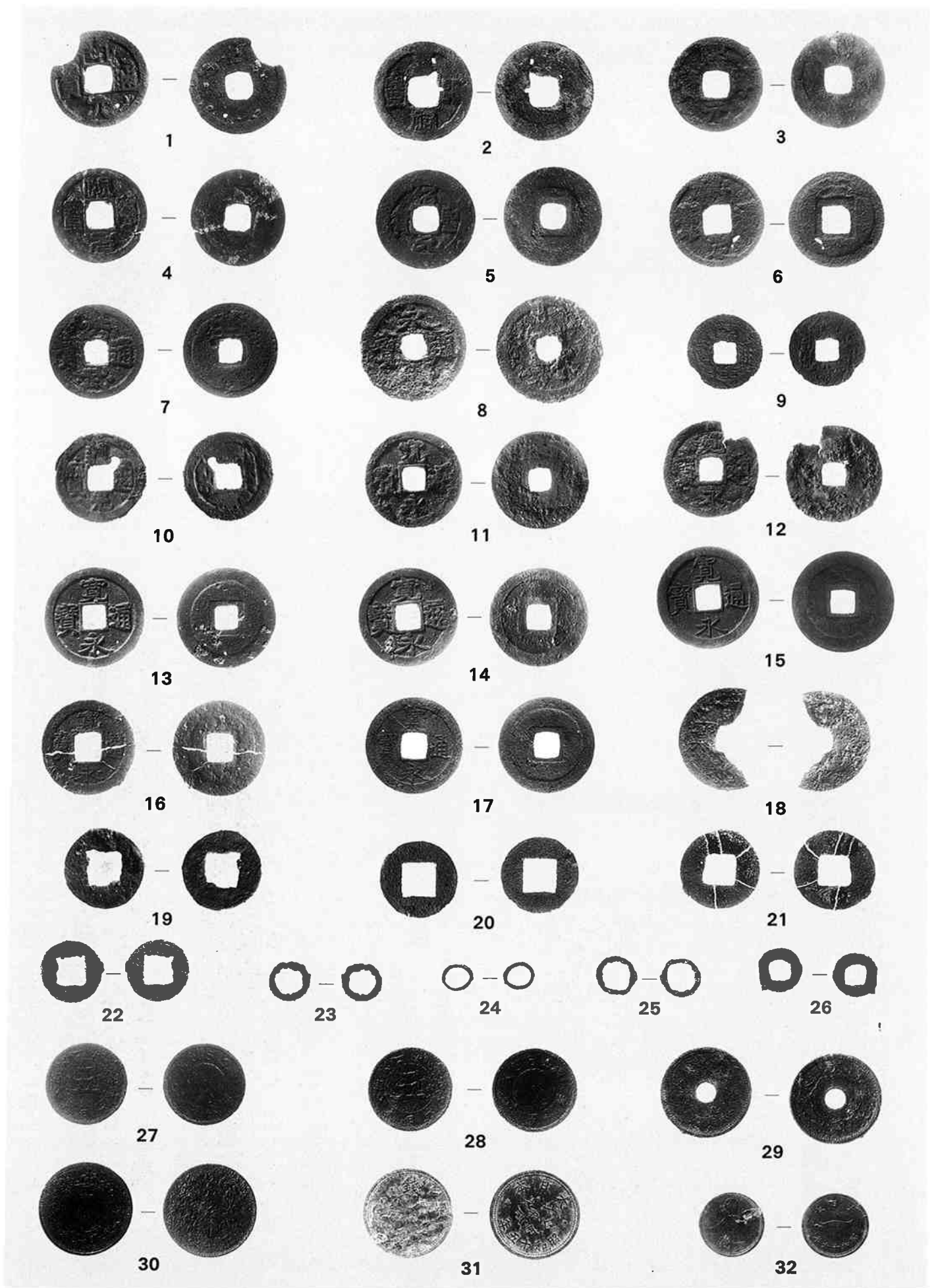
图版68 金属製品 (1)



图版69 金属製品 (2)



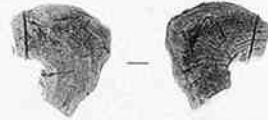
图版70 金属製品 (3)



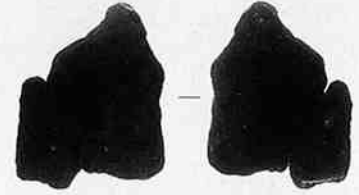
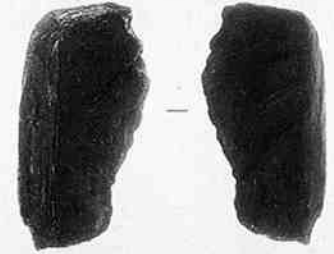
圖版71 錢貨



1



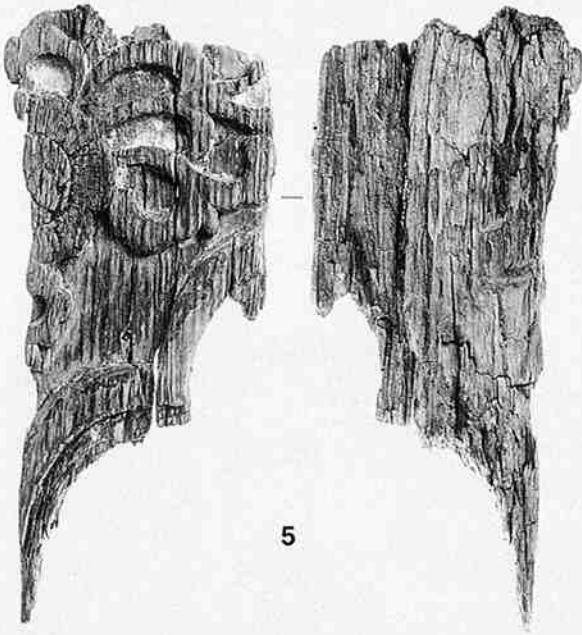
3



4



2



5



6



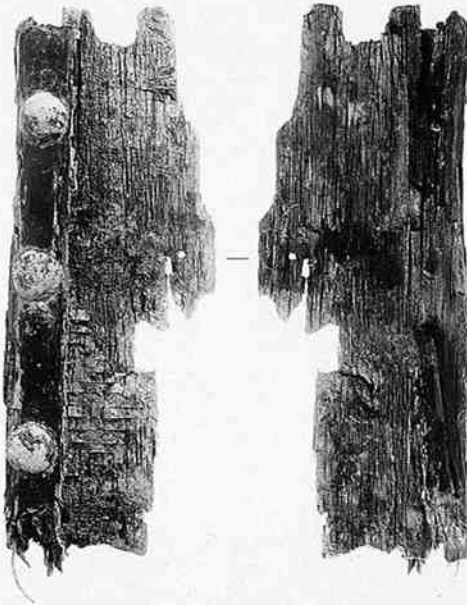
9



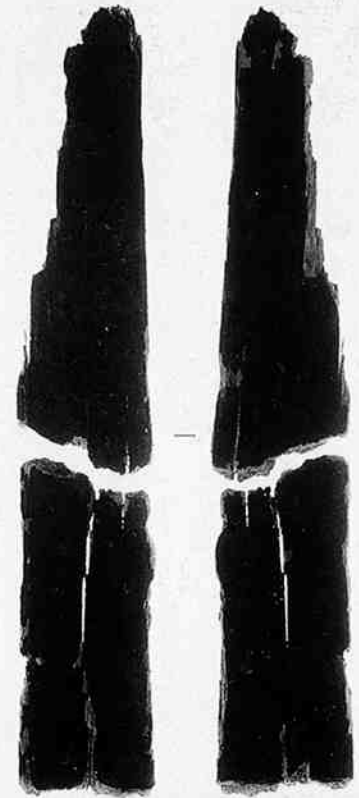
10



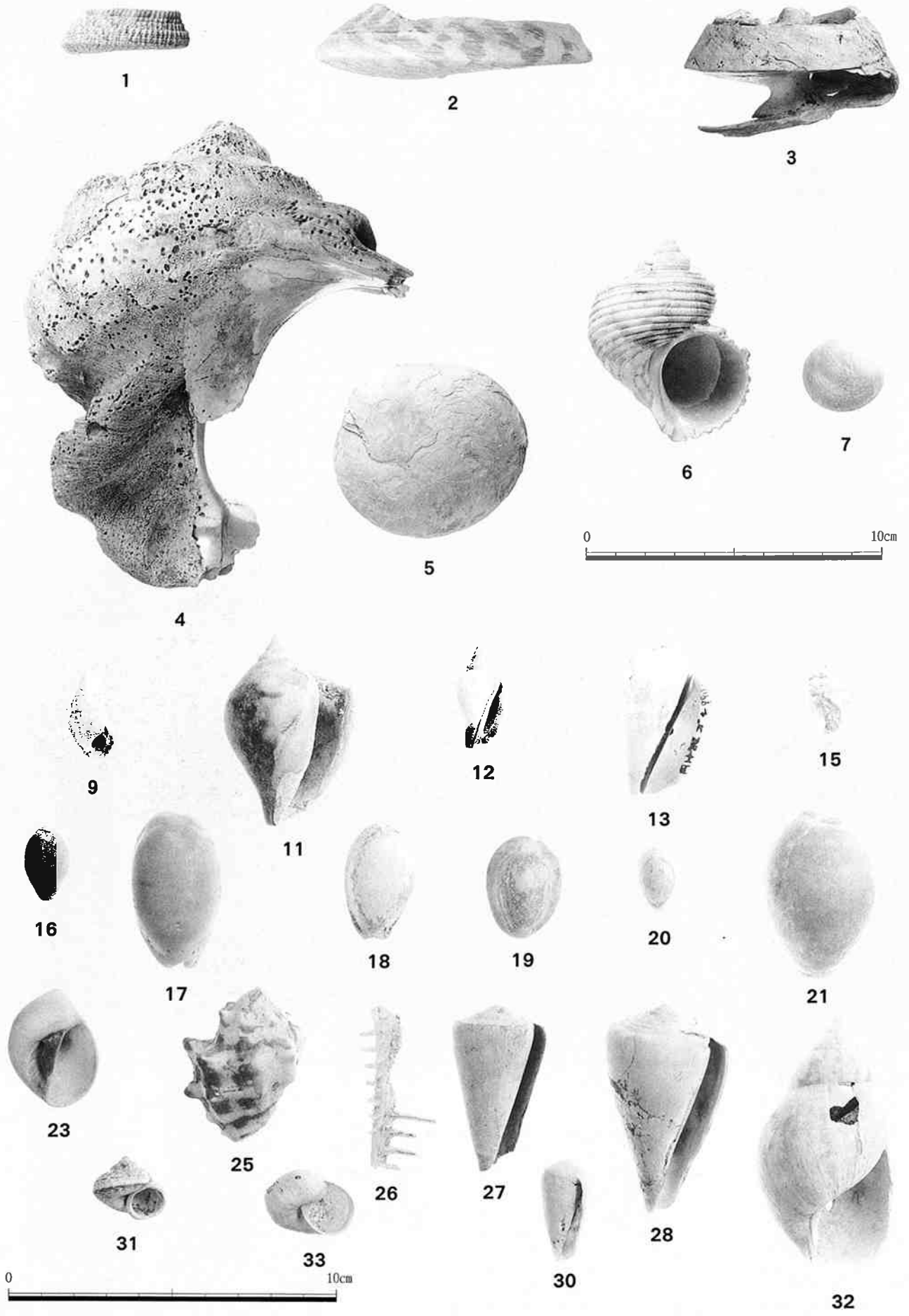
7



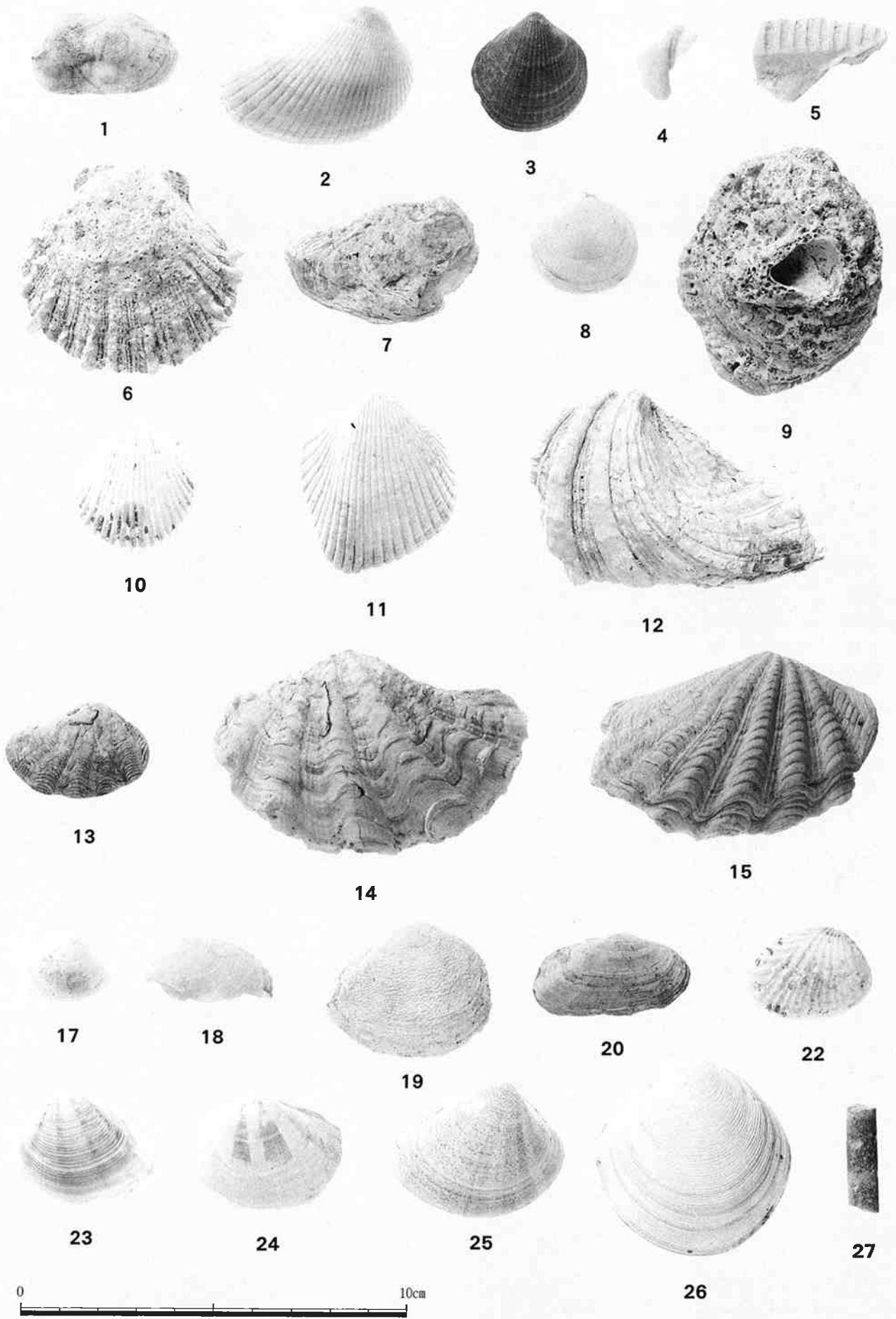
8



11



図版73 貝類遺存体（巻貝）番号は表と一致



図版74 貝類遺存体 (二枚貝) 番号は表と一致

図版75 上

1. サカナ脊椎
2. フエフキダイ科ハマフエフキ (左) 口蓋骨
3. ニワトリ中手骨
4. ニワトリ大腿骨 近位端 (左)
5. ニワトリ大腿骨 遠位端 (右)
6. トリ 脛骨 近位部~遠位端 (左)
7. イヌ 中手骨
8. ネコ 尺骨 近位部~骨体 (左)
9. ヤギ 上顎骨 M2 (左)
10. ヤギ 下顎骨 M1 (左)
11. ヤギ 寛骨 坐骨 (右)
12. ヤギ 脛骨 遠位部 (右)
13. ヤギ 中足骨 遠位部 (幼)

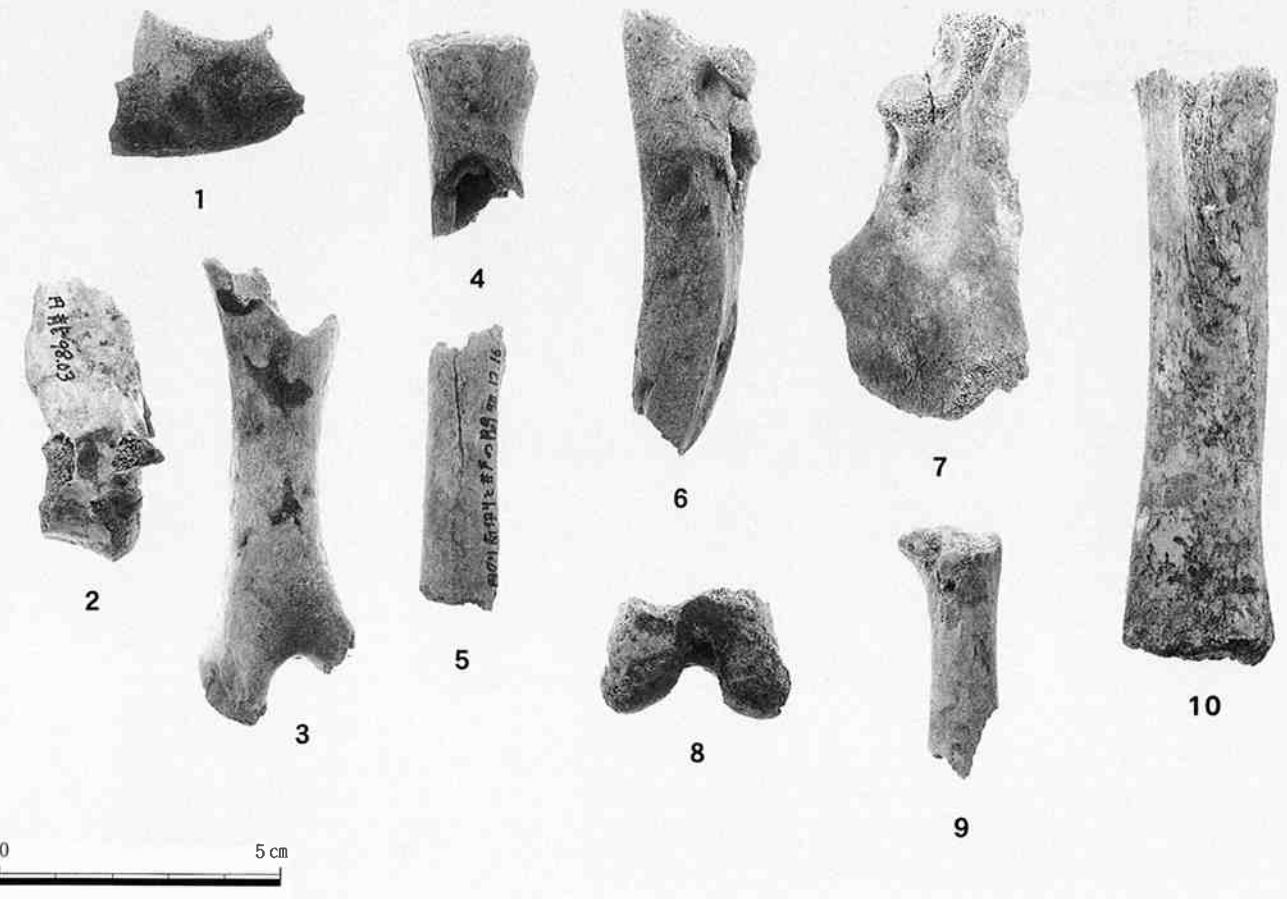
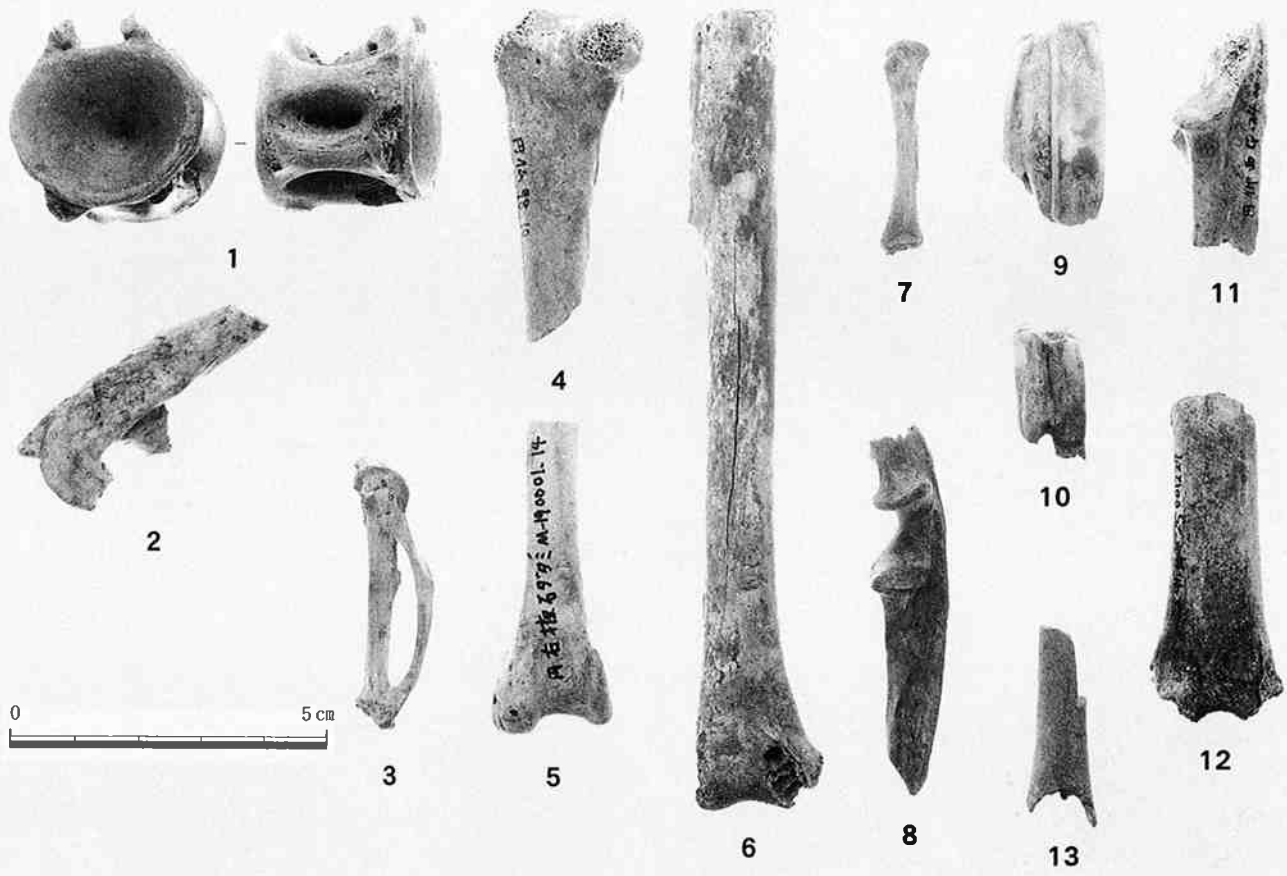
下 ブタ

1. 頬骨突起 (左)
2. 胸骨
3. 上腕骨 骨体~遠位部 (右)
4. 橈骨 近位部 (右)
5. 橈骨 骨体 (右) イノシシ or ブタ?
6. 尺骨 骨体 (右)
7. 寛骨 臼部~坐骨
8. 大腿骨 遠位骨端のみ (右)
9. 中足骨Ⅲ (左)
10. 脛骨 近位部~遠位骨端はずれ (右)

図版76

ウマ

1. 上顎骨 M1 or 2 (右)
2. 下顎骨 P3? (右)
3. 脛椎 (切痕有)
4. 胸椎
5. 肩甲骨遠位端片 (右)
6. 橈骨 (右)
7. 橈側手根骨 (右)
8. 小中手骨
9. 大腿骨 (右)
10. 脛骨 (右)
11. 中足骨 (左)
12. 踵骨 (左)
13. 基節骨 (右)
14. 中節骨
15. 末節骨



図版75 骨 (1) 上：サカナ・ニワトリ・トリ・イヌ・ネコ・ヤギ
下：ブタ



図版76 骨 (2) ウマ

附 編

末吉幸太郎氏所蔵円覚寺跡仏具資料について

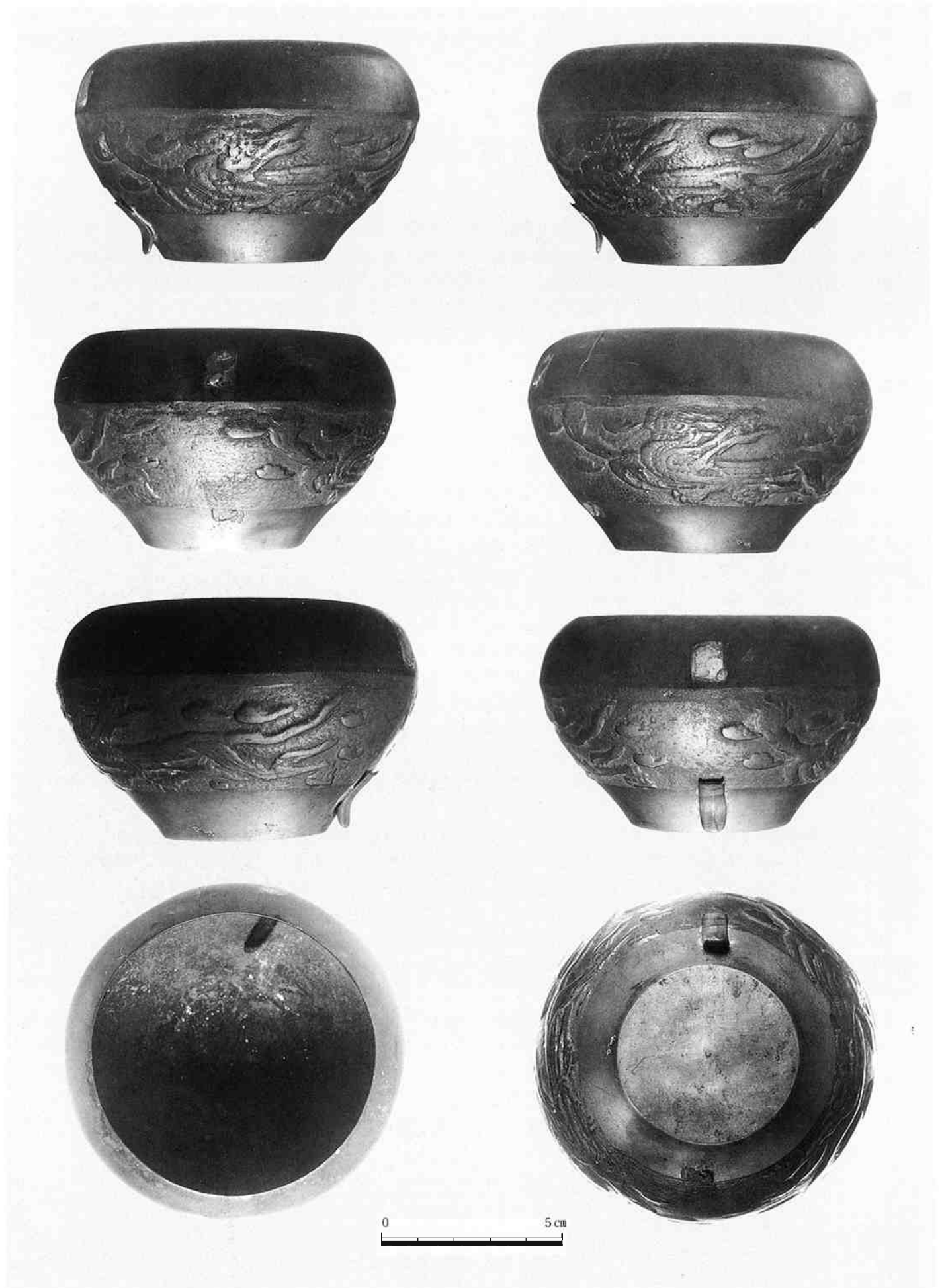
1945（昭和20）年に円覚寺は一堂も残さずに灰燼に帰して以降、旧琉球大学教員官舎が建てられるまで、円覚寺境内には焼失した建物の部材や金属製品、瓦が散在していた。その中には幸いにも沖縄県立博物館所蔵されるに至った資料も多く見られるが、大半は生活財として周辺住民によって拾われ持ち帰られ、生活の材として利用された。周辺に住む首里の住民からは円覚寺跡や首里城跡から様々な材をかき集めてバラックを建て、そこに住んだという聞き取りが多く得られた。その中には円覚寺に関わる仏具資料も採集されているとの情報もいくつか得ることができた。本編では当時において採集された資料の一部、末吉幸太郎氏所蔵の仏具資料2点についての報告を行う。

まずは胴部に文様が見られる黄銅製の鉢（図版1）である。法量は口径9.2cm、底径2.0cm、器高9.1cm、器壁は0.4mmで残存量は26.7gとなっている。口縁部は内彎し、底部は平底、最大胴径は胴上部にくる。胴下部と口縁下部には金属片の一部並びにそれを取り付けた痕跡が見られることから、かつて、金属板を成形した左右対称の把手が取り付けられていたと見られる。文様は胴部において帯状に枠取りを行い、その内部には陽刻で龍文とその周囲に雲文を配する。龍は前後に1匹ずつ、計2匹配され、共に顔は左向きで四つ爪である。雲文は各龍文の周囲に8つ見られ、計16見られる。これらは文様は相当、摩耗しており龍や雲の輪郭をわずかに伺えるに過ぎない。内面の胴上部には煤が付着している。

もう一点は仏前の両脇に配される銅製の花立てである（図版2）。一部、欠損しているがほぼ関係に近い資料である。口縁部の径は最大で10.1cm、最小で9.2cm、最大器壁0.6mm、最小器壁0.3mm外反口縁で口縁下部に左右対称となるように孔が2カ所、見られる。胴部は蓮弁をモチーフとした文様が浮き彫りで施されている。蓮弁の長さはそれぞれ9.2cmで12個見られる。最大器壁2mm、最小器壁1mmである。胴下部近くに縦1.9cm、横は欠損して不明であるが蓮弁の中央に縦長方形の孔が穿たれている。脚部は高さ4.2cm、胴下部、中央部と底面でそれぞれすぼまる。文様は半円状の枠取りがなされ更にその内部は曲線で文様を構成するがその詳細は不明である。底面中央には径1.6cmの孔が見られる。恐らく別の金属若しくは木製の脚が付するものと考えられる。底径は3.9cm。製作痕としては内面の口縁部、胴部を接続した溶接痕が見られる。器高は16.2cm、残存量は54.6g。

これら2点は共に仏具であり、沖縄本島において出土する金属製品の資料としてはあまり類例を見ない。黄銅製の鉢に関しては内面胴上部に煤が付着していることから香を焚く容器であると思われる一方で、胴部の文様が摩耗していることから托鉢に使用される鉢の可能性も挙げるができる。何れにしても沖縄における仏具資料としては遺存例も含めて極めて残存例の少ない資料と言える。銅製の花立てについては仏前において、燭台と共に配される五具足の一つである。2基で1対となり仏前の両脇を飾る。因みに花立てには「常花」と呼ばれる金属製の花が生けられる。底面には孔が穿たれていることからいくつかのパーツに分かれていたものと思われ、この花生けは上部の花指し部分に相当する。

今回の報告は末吉幸太郎氏の御厚意により先の資料を拝見できる機会を得た。この場を借りて記して厚く感謝したい。また、氏から焼失後の円覚寺には廃材となった木材に紛れて多くの金属製品が散乱していたとの聞き取りが得られた。首里当蔵周辺の住民がそれらを拾い持ち帰ったとのことであるが、現在その詳しい所在は明らかにされていない。今後、円覚寺跡が史跡公園として整備されていく上でこれらの資料が整備に向けて大きく寄与することは明白であり、今回の報告を機に散逸している円覚寺資料の行方が明らかになれば幸いと思うところである。そのことを願って本小報を締めたい。



図版1 末吉氏所蔵仏具資料



図版 2 末吉氏所蔵仏具資料

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第10集

円覚寺跡

—遺構確認調査報告書—

発行年 平成14(2002)年3月
発行 沖縄県立埋蔵文化財センター
編集 沖縄県立埋蔵文化財センター
〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7
TEL 098(835)8752
e-mail <http://www.maizou-okinawa.gr.jp/>
印刷 株式会社 国際印刷
〒901-0147 沖縄県那覇市宮城1丁目13-9
TEL 098(857)3385

© 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002 Printed in Japan
許可無く本書の無断複製、転載、複写を禁ずる

